
空の境界 二次創作

ジャック・O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の境界 二次創作

【Nコード】

N4201M

【作者名】

ジャック・O

【あらすじ】

今まで数多の魔術師や他のモノが『へたどり着こうとするために手段を選ばない行為を繰り返してきたせいで』は次第に“意思”のようなモノを持ち始めた。

そしてそれは、『にある女性が繋がり、その女性に“感情”を抱く事によって、遂に、覚醒した――』。

ちなみにこの作品は『』と根源の渦を同一のモノとして扱っております。本当は違うモノらしいのに作者がそれを知らず混同してしまつて……、

えーっと、なんかついつい衝動で書いてしまいました。だから何かとおかしい所や、何言つてんのこいつと思う所があるかもしれませんが、更には恐らく不定期更新に。ですが！

まあこの作品は基本的に作者の自己満足で出来ておりますのでどちらにせよおかしい所はあると思います、なのでそういうのでも平気という心の広い方、見て行ってください。出来れば

Prologue (前書き)

あらすじにも書いてある通り、ちゃんとネギまの方も続けますので
ご安心を

それではプロローグだけですが、お楽しみ下さい

Prologue

本来なら、『は何の色も無い、ただの純粹無色な力である筈だった。

だが、度重なる聖杯戦争や、根源へと到達するために干渉しようとする魔術師の行動で、『には次第に人の持つ“意思”のような物が出来上がり始めていた。

そしてそれは、ある一人の女性の意識が根源へと繋がる事によって、そして、その一人の女性にある感情を抱くことによって遂に、誕生した。

“アイツ、綺麗だな”

その根源に來た女性、名を《両儀 織》という。

彼女（彼？）はある事故が切っ掛けで、本来の主人格である《両儀 式》が死にそうになるのをその身代わりとなつて死んだという経緯を持つ、そして死んだ者は何であれ起源があり、その起源は『へと辿り着き、そこからまた新たな肉体を持って違う存在となって世界へといくのだ。

『は女性に対して今まで何も考え無かった、いや、そもそも考ええるという事すらない筈の『が、何故急に綺麗だなどと考え始めたのか？

それは先程も言ったように、幾多の魔術師、英霊が参加する聖杯戦争や、更にそれに参加する魔術師たちよりも遥かに多くの魔術師がここ、『』を指指してありとあらゆる手段を持って向かってくるからだ。

そのような行為を何度も何度も受けつづけた『』はいっしか、それらの人に近い“感情”を持ち始め、そして誕生した今、自分の中に取り込まれていこうとする《織》をこのまま取り込んで違う存在にしてしまうのは勿体ないと考え始めた。
もしかしたらそれは、人で言うところの“恋”だったのかもしれない、初恋というヤツだ。

“どうする　あのままじゃあいつ取り込まれちゃうけど、それ
つて勿体ねえよなあ”

そしてそんな事を考えている『』のすぐ近くにもう既に《織》は迫っていた。

“やべっ、このままじゃ取り込みまうよ。
ん？待てよ？そう言えばこいつって確か”

そう言うとかか思いついたのか『』は沈黙し、そして思い出したかのように音を発した。

“ああそうそう、こいつ確か《両儀》って名前の二重人格者が生まれてくる家系の奴が、しかも何か知らないけど俺の一部もこいつの身体の中にいるみたいだな。

んでこいつはどうやら主人格じゃあなかったらしいな、大方
主人格の代わりになって死んだんだろ、可哀想に”

そして、『はもう触れる直前まで来ていた《織》にこう言った。

“はあくいストップストップ、貴女はまだ俺の中に入らないでくださいねえ”

貴女を俺はまだ取り込みたくないんですよ。ね？《織》さん？”

『がそう言うのと、今ではもう何の意思もない元《織》であり、後はもう』に取込まれるだけになっていた《織》が存在を持ち始め、そして人のカタチを取り戻したとき、そこには人間だった頃の《両儀 式》と同じ体を持った《織》が居た。

“ここは”

そして《織》は当然の事ながら、自分がどこにいるのか分からない。

“どういう事だ？オレは確か死んだはず”

“そうなんだよねーお前死んじゃったからさー、本来は俺が取り込まないといけないのよ、これが。”

“っ！？”

突然頭の中に響いてきた『の声に、訳が分からず、咄嗟に戦闘態勢に移る《織》。

“いやいや、驚かないでよー、君達の中にも俺の一部居たでしょー？それなのに俺だけそんな風に扱われたらそのうち俺グレちゃいますよ？イヤもうほんとに”。

“何を言っている？それに誰だお前は？”

そつ頭の中に響いてくる軽薄な声に《織》は問うが、

“え？俺が誰だつて？そんなの”としか言いようがないぜ？何しろおれはお前がここに来るまでタダの力の塊だったからな。

まったくさ、何で俺にだけそんなに警戒心剥き出しなんだ？

ん？ああそうか、そう言えばお前達つて身体とかいう器があったな、じゃあ俺も今からその器に入ってくるからちよつと待つててくれない？そしたら警戒しないでくれよ？

お、この身体いいんじゃない？うん、良さげ良さげ。”

その《声》は問いに対して飄々と返す。

そしてそんな声を聞いて、未だに警戒心の解けない《織》の目の前に次の瞬間、浅黒い肌のいかにも悪ガキそうな存在が立っていた。

“ねえねえ、この身体いいと思わない？俺としては中々の出来だと自分では思う訳ですね、ハイ。”

“誰だお前は”

その目の前にいる存在に《織》は答えるが、返ってくるのは先程と同じ言葉。

“いやさ、さっきも言っただじゃん？俺は”だつてさ。

まったくさあ、ついさっき言っただ名前なのに忘れられちゃうなんて悲しすぎるぜ

ん？

ハッ、そうか！そういう事だったのか！！”

“？”

先程と同じ事を答え、自分の名前とも言えないような名前が憶えられていない事を悲しんでいたと思つたら、今度は急に何かに納得してその《織》の目の前にいる少年は《織》に対してこんな事を言っ

てきた。

“ あんたさ、俺の名前を決めてくれないか？ ”

“ は？ ”

当然いきなり言われても《織》が咄嗟に答えられるはずもなく、思わず呆けた声を出してしまう。

“ は？ じゃないって、あんたは俺の名である ” 『 が分からないんだろ？ ”

というか理解は出来てもそれはあんた達の居た所では意味を成さないだけか。

だからさ、俺はあんたに名付け親になってもらおうと思うんだよね ”

“ 待て、頭痛がしてきた ”

そして答えられない《織》を尻目に、更に話を広げようとしている目の前の存在に対して、《織》は取り合えずその続きそんな話を断ち切るべく待つてくれと言う。

“ えゝ、だってあんたら俺の名である ” 『 を表すものが無いんだろ？ ”

だったら折角だし、俺が初めて興味を持った女性のあんたに名前付けてもらっても良くね？ ”

“ 何だその意味の分からない理論は ” 『 、それにさっきから ” 『 、

《織》のその台詞を聞き、目の前にいる少年は驚いたような顔をして《織》を見つめていた。

“ え〜っと、まさかあんた 、 『 をご存じない？ ”

“ ああ、まったくな。 ”

《織》がそう答えると、少年は頭を抱えて“ え〜？そりやないぜ《織》さんよ ” と言っていた。

どうやら曲がりなりにも 『 』として数多の魔術師や英霊が辿り着こうとした自分を全く知らないと言われてショックを受けたらしい。そして少年は一通り頭を抱えてウンウン唸った後、気を取り直したように立ち上がって《織》の方に寄ってきた。

ちなみにそれに対して《織》の方は先程からのやりとりですっかり毒気を抜かれてしまい、今では大して目の前にいる少年を警戒してはいなかった。

、 殺意は抱いているかもしれないが 、

“ じゃあさ〜、簡単に俺の事教えるからさ、ちょっと話聞いてくれない？ ”

“ ああ、 ”

そう言つて、《織》に話を聞いてくれと言った 『 』の少年は自分の事を話した。

自分が元はどういう存在であったのかを、そしてどうして本来なら意思を持たないはずのそれがどのように意思を持つに至ったのかを。そして、今の《織》がどういう状態なのかを。

“ と、まあつまりそういう事なワケなんだなあ、コレが。 ”

“ そうか、それで？オレをお前は どうするつもりなんだ？お前は死んだものは起源に従って転生するために皆一旦 『 』へ来てお前に取り込まれるといったよな？ ”

“ だとしたら私もお前に取り込まれるのか？ ”

自分が死んで、今日の前にいるこの小さな悪ガキのような少年に取り込まれるのかと聞いた《織》に対して、しかし『』である少年はこう返す。

“ いやさゝあんた人の話聞いてましたか？俺はあんたを取り込みたくないからさつきあんたに対して《織》という意味を持たせたんだぜ？このまま取り込むわけじゃないじゃん？”

“ それなら私をどうする気だ？このまま永遠にこんな所に居るとでも言うのか？”

死んだら一度取り込まれないと転生はしない、だが目の前の少年は《織》を取り込んで転生させる気は無いという。

《織》が自分を永遠にここに居させる気かと聞いたのも無理は無かったかもしれない。

“ そんなわけですねゝ、ハイ。貴女には俺に名前を付けた後、そのまま姉になってもらいますんで。”

“ は？”

しかし《織》に返ってきた少年の返答はまたしても予想外のものだった。

まあ普通に考えていきなり見知らぬ女性に少年が、『貴女に名前を付けてもらったら貴女には姉になってもらいます』、なんて言うのは聞いたこともないだろうから、その反応は無理からぬ事かもしれない。

だがそんな《織》の思いや常識を知らない目の前の少年は《織》に対して更に言ってきた。

“ いやさ、俺の今いるここって予想外に魔術師やら何やらが俺に辿

り着こうと躍起になってさあ、正直ここにいるよりあんたの元居た世界の方が気楽に過ごせるんですよ。

でも俺って今こんな子供の身体じゃん？別にその気になればジジイにも超イケメンにもロリっ娘にもグラマラスな美人のオネーサンにもなれるけどさあ、俺は今のこの身体を大変気に入ってしまったワケだ。

だからその場合、身元保証人兼保護者としてあんたの存在がいるワケですよ。

大丈夫、安心してよ。住む場所はこっちで用意するし、あんたのその身体は本来の身体の持ち主である《式》のとは別の身体だから、それ。それに俺達が行くのはあんたの住んでいた街だから知り合いも沢山居るだろうけど、それは同時に《コクトー》にも会えるって事なんだからさ。

どうよ？たかだか俺の姉をやるだけでこれだけの特典がつくんだけ？これは乗っておいた方がいいと思うよ？戸籍上の名字は一応二人共両儀でいいよな？

というかぶっちゃけた話俺、あんたの住んでた場所見てみたいんだよね、何か面白そうな事沢山ありそうだし。”

もう一度と会える、それは《織》が夢にも思わなかった希望だった。だが、と《織》は考え直す。

このまま仮に今の私が《コクトー》に会いに行った所で、それは《式》と《コクトー》の仲に無駄な波紋をもたらす事にしかないだろうという事は目に見えていた。

“いや、オレは《コクトー》にはもう会わなくていい。”

その返答に、絶対に《コクトー》の名前を出せば乗ってくれると思っていた少年の顔が悲しそうな表情になる。

“でも、お前がオレの住んでいた街にいつてみたい、というならオレもついていってもいい。”

そう言った《織》を見て先程まで悲しそうな表情をしていた目の前の少年はすぐに元の軽い感じの表情になっていた。

“マジか！ありがとうだぜ姉ちゃんよおっ！！”

ばふっ、

そしていきなりそう言ったかと思ったら次の瞬間には少年は《織》に全力で抱きついていた。

しかもどこにそんな力があるのか、その少年の抱きつく力は半端じゃないほど強く、《織》が思わず窒息するかと思っただった。

“おい、苦しいからやめろ。”

“おっと、わりいわりい。嬉しかったんでついな。

そんじゃま、俺と一緒に行ってくれるっていうなら俺に名前を付けてくれよ。”

少年はわりいわりいと言って《織》に抱きついていた腕を離しながらも、キチンと自分の名を催促するのを忘れない。

そしてそれに対して《織》は少し悩んだ後、名前が決まったように少年にこう言った。

“それじゃあお前の名は《永》、《両儀 永》でどうだ？”

“《永》 ね、なんで《永》なんだ？”

“まあ、お前を最も簡単に表してると思っただよ。”

そう答える《織》に《織》から《永》という名を貰った少年は、

“それもそうだな、何しろ俺って滅びないからね。”

と言って笑っていた。
そして、

“じゃあまあ、姉ちゃんに名前も貰ったことだし、そろそろ姉ちゃんの消えた世界に行きますか。”

“ああ。だが少し待ってくれ、行きたい所がある。正確には行ってきたもらいたい所だな。”

“ん？なに、どこだ？”

これから《織》の元居た世界に帰ろうとする所で、《織》に待ったをかけられた《永》は不思議そうに《織》に聞く。
すると《織》は、こんな事を言ってきた。

“オレが消えた後、《式》がどうなったか気になるから最初に病院に行ってくれないか？あと、その時はオレは姿を隠していたいから《永》だけで行ってみてくれないか？”

それに対し《永》は、

“了解したよ、姉ちゃん。

じゃ、行こうか。”

といって周りの空間に穴を開けて、そこから《織》の手を掴んで穴の外へと引っ張って行った。

|

P r o l o g u e (後書き)

プロローグはこんな感じです、おかしい所（特に織の口調）等があったら教えてください、是非とも知りたいです。

空の境界 二次創作 第一話（前書き）

この作品は、原作になるべく沿った展開にするつもりですので、

まあ永は結構好きに生きていきますけどね。

空の境界 二次創作 第一話

SIDE：式

いつも通りの朝の診察が終わって、今日が二十日だと知らされた。私が目覚めてから七日経ったという事だ。

身体の方も順調に回復しつつある私は、明日退院する事になる。両目の包帯も、明日の朝には解けるという話だった。

七日……一週間。

その間に私が得たものは、そう多くはない。

失ったものが多すぎて、何を無くしてしまったのかさえ曖昧だ。

両親も秋隆も、たぶん以前のままで変わっていない。

けれど私が捉える彼らは別人だ。

両儀式という私でさえ変わってしまったのだから、私をとりまいていた全ての事柄が無くなってしまうのは、きっと仕方のない事なのだ。

SIDE：永

んでさ、前回（ぷろろーぐ、ってヤツ？）、俺は織の姉ちゃんに永という名前を貰い、元々の身体の持ち主であった式の方を見てきて

くれって言われたからとりあえず織の姉ちゃんには、俺の用意したアパートに先に向かってもらうことにして、式の姉ちゃんのいる病室に空間転移してきたんだけど、

『おいおい、この人ダイジョブですか？何かかなり追い詰められてるように見えるんだけど？』

それに何かこの人、俺と繋がってない？

……ああ、直死の魔眼ね、おお、お可哀想に。あんなのを目が覚めていきなり見たら確かにこの人みたいな人間なら躊躇わないで自分の目を潰そうとするだろうな、うん。』

「もうすぐ——目が、治るのか」

俺が考え事をしている間に何かどんどんこの才姉サン自分の世界に入ろうとしてるんだけど。

ねえ、止めてくんない？俺の目の前でそう言う声出すのはさ、ねえ？さっきから何だか知らないけど俺の事を凄く目で睨みまくっている蒼崎橙子サン？

んで、そうこうしているうちにいつの間にかまた自分の目を破壊しようとしている式の才姉サン、

「待て待て。思い切りが良すぎるよ、お前は」

うん、そこは俺も全面同意、諸手を上げて賛成しますよ。

折角の美人なのに自分から目を潰してしまうなんて勿体ない。

まあ俺の本命は織の姉ちゃんの方だけどな、こちらにいる式の才姉サンはどうやら黒桐幹也って奴に心底惚れ込んでいるようなので、一切手出しは致しません、ちょっかいは掛けるけどな？面白そうだ

から。

「直死の魔眼か。それをなくすのはもったいないぞ式。

第一、潰したところで視えてしまうものは視えてしまうんだ。

呪詛の類はな、捨ててしまっても戻ってくるものなんだから」

はい、どうやら橙子サンは俺がいることを完全に無視して式の才姉サンとの話を進めるようです。

でも、それだと俺はまゝたく楽しくないんですよ。

「ねえねえ。あのさ、人の事無視して勝手に話進めようとするのやめてくれない？」

まあ確かに？俺は今回その姉ちゃんがダイジョブかどうか見てきてくれたって言われただけですし？

ぶっちゃけあんまダイジョブじゃなさそうだけど、もう言われた事はやったからね？帰ってもいいんですよ。俺。

でもさあ、そんな風に存在無視すんのかって酷くね？酷いよね？ねえ、式の才姉サンもそう思うでしょ？」

俺がそんな感じで言ったところ、橙子サンは、

「はいはい、ボクはどうしてこんな所にいるのかな？迷子になってもなったのかい？」

こんな風にも言っただけだったのか？少年」

「お前の他にも、誰がいるのか？」

こんな風に凄く嫌な言い方をしてきました。ハイ。

式の才姉サンには居た事すら認識してもらえていなかったようです。

「二人とも酷いよね、その態度。俺って空気なのかな？」

ええ居ますよ式の才姉サン、で、聞きたいんだけど、二年間俺に触れてた感想はどうだった？ 苦しい？ 気持ち良い？ 冷たい？ 温かい？ 暗い？ 明るい？」

「お前は——人間、なのか？」

えー、織の姉ちゃんも鈍かった気がしたけど式の才姉サンも随分鈍いなあ

「だから違うつて、二年も才姉サン俺に触れてたじゃん。だからその感想を聞こうと思って」

「二年間、まさか」

「そそ、橙子サンの方は俺の事わかる？ というかわかるよね？ じゃないと魔術師なんか辞めた方が良いよ」

「そうだな、確かにお前の言う事を信じるならこれは世紀の大発見だろうな」

おや？ これひょつとして俺信じられてない？

式の才姉サンの方は何でか知らないけど俺の事を認識してくれたみたいだな。勘かな？

「まあ、とりあえず橙子サンには別に信じてもらえなくていいや、で？ 式の才姉サン、感想は？」

そう言つて俺が式の才姉サンの所に近付いていくと、橙子サンから声をかけられた。

「待て。仮にお前が“それ”だとして、何故意思がある？ あれはただの純粹無垢な単なる“モノ”だった筈だ。」

それに対して、俺はこう答え…、

「それはさ、あんた達魔術師が、何百何千という年月をかけて俺に辿り着こうとするからさ、段々あんた達人間の感情みたいな“意思”が形作られていったワケさ。」

まあそれでも俺の“意思”は完成しなかったんだけど、織の姉ちゃん、……ああ、そっちにいる式の才姉サンじゃない方のね、が俺の所にk「おい!!」……へ?げふっ!??」

…ようとしたら、今までベツトの上に居た式の才姉サンが急に立ち上がって多分見えてはいないと思うんだが、勘か何かは知らないけど俺の方に向かって来て、そしてやっぱ見えてなかったらしく、俺にタツクルしてきたような感じになってぶつかった。

しかも、それで俺の場所を特定したらしくて、今度は俺の上に馬乗りになって胸倉を掴んで揺すってきた、

ガン!ガン!

んで、当然の事ながらすぐ下に床があるため、俺の頭も何度もそこに激突するわけだ。

「イタイ、イタイ。ちょ、いきなりそれは俺傷ついちゃうって、何ですか?いきなりさ」

「織をどこにやった!??」

ハイ全くこちらの話を聞く気ないですね、てか結構頭イタイな、これ。

「おい、もうその辺にしてやったらどうだ?

その子供、頭何度も打ち付けてるから結構やばいかもしれんぞ?」

「そう思うなら助けてくれてもよくね？別に誰も怒らないよ？寧ろ褒めるって。」

だからヘルプミー、橙子サン」

「そんな事言えるならまだ平気だろ。」

酷っ、

おお橙子サン、貴女はいつからそんなに酷い人になってしまったのですか？

昔は…、そう、おしめのまだ取れていない頃はあんなに愛ら…、

「余りふざけていると、潰すぞ？」

「おっと、すみませんね、まあでもほら、式の才姉サンも落ち着いてくれたみたいだし、結果オーライでよくね？」

うん、いいね。これでいい筈だ」

そして何とか落ち着いてくれた式の才姉サンをまたベットのの上に運んで、と。

「落ち着いたよね？式の才姉サン？」

「……ああ、まあな」

「ちっ、あのままやられていれば面白かったのにな」

「ねえねえ？橙子サンさっきから初対面の男の子に対して凄い扱い悪いよね？」

俺何かしましたかね？」

そついう俺を鼻で笑って、橙子サンは、

「それで？さっき言っていた事の続きを話したらどうだ？」

と言ってきました。

「ん？……ああはいはい、あれね。」

そう、それで式の才姉サンじゃない方の織の姉ちゃんか俺の所に来たんだよ。んで、その時まで“意思”が未完成だった俺は織の姉ちゃんを認識した時に“感情”を抱く事によってやっと“意思”が完成したんだよな。」

そしてその後、織の姉ちゃんに永って名前を『。』だった俺は貰って、『。』は“意思”を持つ力として覚醒したワケですね、ハイ。どうでもいいけど覚醒って言うとか何かイタイよね？何て言えばいいんだろうね？起きましたとも言えはいいのかな？」

「……織はどうなった？」

俺の説明が終わると、消えた織の姉ちゃんの事が気になるのか、真っ先に式の才姉サンが聞いてきた。

それにしても俺の質問には一切答えてくれないね、才姉サンさ。でもこうして式の才姉サンの前に姿を見せないって事はここはごまかした方が良くもな。

「それがですね、俺の所に来た存在って、生きてればそのまま俺から力借りてトンスラする奴や、貴女みたいに俺とリンクして取り込まれずに済むんだけどさ、基本。

でも織の姉ちゃんって何があったか知らないけど死んでたじゃん？死んだ存在って原則俺に取り込まれて、その魂の起源に従ってた俺が“存在”っていう意味を与えて世界に返すんだよね。

だからひょっとしたら今頃違う生物になっつて「ふざけるな！！」……え！？ちょ！？」

俺が適当にごまかしながら返事をしていたらいきなり式の才姉サンに今度は首根っこ掴まれて首を締められた。

てかこれ、さつきも似たような事あったよね？

「ちよつ、苦しいです、ギブギブ。」

……まあとにかく伝える事は伝えましたんで、俺はこれにて御免」
「逃がすと思ってるのか？こんな魔術師にとって天佑とも言える機会を？」

俺が首を締めている式の才姉サンと橙子サンにトンズラの意志を伝えると、橙子サンは俺を逃がさない台詞言ってきたけど、甘いぜ。

「何言ってるんですか橙子サン、俺を捕まえることが出来るモノなんて、どこを探してもいないし、探さなくても存在しないよ？」

俺は最後にそう言い残して、式の才姉サンの病室から織の姉ちゃんを先に待たせているアパートへと空間転移した。

「というワケなんですけど、どうですか？」

と、織の姉ちゃんを待たせておいたアパート（中身は極普通のアパートだぞ。場所は何かこう、ね？黒桐サン住んでるアパートの適当な部屋に適当に不法占拠させてもらったんだけどさ、気付かれないように結界張つといたからダイジョブでしょ）に着いて、俺が先程まで式の才姉サンの病室で起こった事をありのままに話したところ、

「どうですかじゃねえよ、おまえ何て事してくれてんの？」

どうやら何か不満な事があつたらしい、

「何か不満でも？」

「あるに決まつてる。」

おまえ、よりによつて人の存在ごまかす時に『今頃は違う生物に転生してるかも』、何て言われて落ち着いていられると思ってるのか？オレだってそんな事言われたらお前を壊すぞ」

おお怖い怖い。

「や、でもですね、咄嗟に思いつかなかつたんだから一応これいいと思うわけよ俺は、うん。」

実際問題姉ちゃん存在をごまかす事さえ出来れば俺としては及第点だったワケだし？

まあちよつとボロ出そうになったからこうして転移してきたワケなんだけどね？」

俺がそう弁解とも呼べないような弁解をすると、織の姉ちゃんはま
だ少し怒っているようだけど、一応は許してくれたらしく、

「ふん、まあいいさ」

と言ってくれた。

……あ、そう言えばまだ伝えていない事あったな。

「そういえばさ、姉ちゃん」

「なんだ？永」

「今の姉ちゃん、不老不死になってるから」

「……………は？」

よし、これで伝えたな。

我ながら何て完結で要点をまとめた説明、これなら理解できないな
んて奴いないでしょ？何かすげえ驚愕してるみたいな顔でこっち見
てんのが気になるけど、あと沈黙してるのも、

ガン！

そんな事を考えていたら織の姉ちゃんに頭殴られました。イタイで
す。

「いきなり何だよ姉ちゃん。イタイでしょ？」

「おまえ……、何でそんな大事な事黙ってたんだよ、ていうか何でそ
んな事になってんだよ」

あら？そう言えばそこ説明してなかったな、ごめんな姉ちゃん。
あと、俺が家に用意したナイフいつの間に取ってきたんですか？や

っぱ姉ちゃんにも刃物の収集癖があるのか？

「ごめんなさい、とりあえず説明はしますのでその手に持つてるナイフを仕舞ってくださいお願いします」

「納得のいく説明をしたらな」

そう言いつつも俺の首筋から離れないナイフ、やめてくれませんか？確かに俺死なないけどさ、イタイからね？一応。

「はいはい、んで何でそんな事になってんのかというと。

えっと、織の姉ちゃん死んでたじゃん？」

「ああ、そうだな」

「それでな？その死んでる姉ちゃんには本来身体があつた筈なんだよ」

「だろうな」

「だけどその身体には最初から主人格であるシキ、つまり式の才姉サンが居たワケですよ」

「確かにそうだが、そんなものの式の身体にオレを入れればいいだけじゃないのか？今までそれでやってきたんだから平気だろ？」

まあ普通そう考えるよね、

「それがですね、その場合だと不都合な事がありました」

「不都合な事？」

「そうそう、いやね？今の織の姉ちゃんレベルで一つの人間として出来上がっている人格をもう人格の出来上がっている身体に新しく無理やり入れるとするとね？」

身体の方が拒否反応起こして、両方の人格を抹消しにかかるワケよ、流石にそんな事になったらマズいでしょ？」

そう言つて俺は説明を終r y、

「それはわかった。

だがそれじゃオレの質問の答えになつていないぞ」

忘れてました。

そう言えばまだ残つてましたね、説明の内容。

「ああうん。で、不老不死になつた理由なんだけど。

……………ぶっちゃけますと、蘇生させるときに俺が新しい器を用意するんだけど、その時に俺は織の姉ちゃんにはもう二度と死んでほしくないと思つて、勝手だけど俺と存在をリンク、つまり俺と同位の存在にしたんだよ。

で、俺は当然ながら『なワケだから死ぬ事なんてありえないし、老いる事もありえない。

だから俺と同位の存在である姉ちゃんも俺と連動して必然的に不老不死になつちまうというワケよ。

以上、説明終わり。納得してもらえた？」

説明が終わつて、俺が姉ちゃんの反応を待っていると、

「まあ、その理由なら納得してやるよ」

ハア……、という溜息と共に納得の返事をもらつた。

うーん、それにしても、

「やつぱ基本的に姉ちゃんって優しいんだな」

「はあ？オレのどこが優しいってんだ？オレは式の中の破壊衝動だぞ？」

「いやいや、そんな事言ってるけどさ、破壊衝動と優しさは別物だって。」

あと、付け加えて言うならその破壊衝動だって元はと言えばシキの身体に宿ってる俺の一部から流れ出てるモノだから」

俺が破壊衝動と優しさは別物、そして長くなるので略すけど、式の肉体に宿る式でも織でもないもう一人の《シキ》の事をかい摘まんで説明した。

「まあこれで分かってもらえたと思うんだけど？」

「そうだな、理解はした。」

だが、ならどうしてオレはおまえに殺人衝動を抱けない？《シキ》は無意識下で生命の大切さを知っているから衝動的に無差別殺戮する事はないと言ったよな？」

「ああまあね、言ったね。」

でもさ、考えてみくれよ、俺はいうなれば織の姉ちゃんと同じ存在だ、リンクしてるからね。

そんな存在に殺人衝動を抱けるワケもないでしょ？同一の存在を破壊するって事は無理って事だね、要するに。

なにしろ自分殺しだから」

俺がそう説明したらやっとな織の姉ちゃんは納得してくれたようで、首筋に触れるか触れないかの距離にあったナイフは離れてくれました、まる

というか、もう夜だなー、

そう思いながら俺は寝転がってベランダ（というか窓のすぐ近く）の方から外を見る。

そこには、俺の事を明るく照らしてくれる月が昇っていた。

空の境界 二次創作 第一話（後書き）

第一話はこんな感じです、如何でしたでしょうか？

楽しんで頂けたら嬉しいです。

空の境界 二次創作 第二話（前書き）

今回で伽藍の洞編は終了です

空の境界 二次創作 第二話

SIDE：永

午前五時、

朝、俺が起きた時、まだ織の姉ちゃんは起きてなかった。

というか起きる気がしない。

なんでもかって言うと、すっげえ気持ちよさそうな顔で俺の隣で寝コケてるからだ。

あの顔は絶対昼過ぎまで起きないね、うん。

という結論に俺は達したので、俺は今すぐ姉ちゃんを叩き起こす事にした。

え？なんでかって？だって折角存在してるのにただ情眠を貪るだけとか、勿体ないでしょ？

「よ、い、しょっ」

その掛け声と共に、俺は姉ちゃんの寝ていた布団（ちなみに俺は何故か寝転んだ時のままの恰好で寝ていました。布団ぐらい用意してくれてもいいんだよ？姉ちゃん）を下から掴み、思いっ切り引っ張り返した。

「うおお！？」

コロコロコロ…、ピタン！

咄嗟の事だったからなのか、それとも他の要因の所為かは知らないけど、織の姉ちゃんは布団を引っくり返した方向に向かって少し転がって行ったあと、壁にぶつかって停止していた。
ごめんな姉ちゃん、愛のムチってヤツさ。嘘だけだ。

「……いてえな、何すんだよ、永」

そう言っただけ姉ちゃんはぶつけた所を擦りながらヨロヨロと立ち上がって俺に文句を言ってきた。

「えゝ、だってさあ、もう朝だよ？起きるでしょ？普通。」

何かこの国の姉ちゃん位の年の女の子はこれ位に起きる子も少ないらしいよ？」

「だからってそれが何でオレを起こす事に繋がるんだ？」

「それはですね、姉ちゃんに朝飯を作ってほしいからですよ」

「はあ？」

だって自分には料理の知識はあるけど作る腕は無いからね。
あと面倒だからだけど、

「朝飯くらい食べなくても別に死なないだろ？だったら食わなくていいだろ。」

「おっとー？これは酷いぜ姉ちゃん、こんな無垢な弟が飢えに苦しんでるって言うのにさゝ」

「無垢な弟はそもそもそんな風に飯をねだったりしないだろ。
じゃあな、私はまた寝る」

そう言っただけ姉ちゃんは俺がさっき引っくり返した布団をまた敷いて、その中に潜り込んで寝てしまった。
布団からはもう既に気持ちよさそうな寝息が聞こえている。

……マジですか、俺朝飯抜きですか？
うーん、困った。嘘だけ。

……そうだ！黒桐サンの所があるじゃないか！！

あの人からは何故かは知らないけどややお人好し臭がしたから平気な筈だな、うん。

それに織の姉ちゃんの事さえバレなきゃ良くね？良いよね？うん、良い筈だ。

そうして俺は勝手に結論を出したあと、部屋のドアを開けて、俺は外に出た。

SIDE：OTHER

黒桐幹也、彼は今日、いつもより早く目が覚めて、自らの勤めている事務所、というか仕事の社長、というかトップである……まあ何でもいいが、蒼崎橙子が昨日戻ってきた時に妙に上機嫌だった事を思い出しながら、今日の式の退院の事を考えながら朝飯の用意でもするかと思っていたのだが……、

「あ、すみませんけど、黒桐サンですよ？
いやあ、ウチの姉ちゃんが寝てしまったんで、悪いけど朝飯くだ

さいな？

「というか貰いますよ？ええ」

新聞を取るためにドアを開けた途端に肌の浅黒い、見かけ九歳位に見えるちっさい少年にそんな事を言われた。

「……えっと、誰だい？君は。」

ひょっとして迷子かな？それとも単なる人違いじゃないかい？」

幹也は一応その少年に迷子ではないか、人違いではないかと確認するが、

「いやいや、貴方であつてますよ？黒桐幹也サン？式の才姉サンが惚れ込んでるって人でしょ？あつてるあつてる、そんな顔してるしそれに蒼崎橙子サンの所で働いてる黒桐って人なんて貴方以外いませんよね？」

昨日貴方の部屋の隣に越してきたんですよ、ウチ。

まあ気付かなかったと思いますけどね？」

その少年から返ってきた返事は幹也の予想の斜め上に行くものだった。

「どこでそれを知ったんだい？君は」

そしてその少年に式の事や、蒼崎橙子の所で働いていることすら知られているのだから、ごまかす事は出来ないな、そう思って幹也が少年に聞いた所、

「どこでかは秘密って事で許してくれよ？」

でもさ、昨日貴方の上司の橙子サンが何か言ってた？

「こう、面白いモノに会ったとか、そのモノの見かけとかさ」

という返事が返ってきたので幹也は少し思い出そうとしてみる。
そして幹也が思い出した事に、こんなものがあつた。

それは幹也が、病院から戻ってきた橙子に式の様子を聞いた時の事だつた。

『そう言えば今日、病院で面白い奴に会つたぞ』

『橙子さんが面白いって言うなんて珍しいですね、どんな人なんです？』

『ああ、何かこう、見た目は九歳位の男子で、浅黒い肌の奴だったな』

『……それだけだと橙子さんにそういう趣味があるのかと思われますよ？』

『……そういう事は口にしないほうがいいと思うぞ』

そう、確かに幹也が聞いた橙子の話によれば、橙子が病院で会つた面白い奴と目の前の少年の見かけは一致しているし、何より少年は式と橙子の事を知っている。

だから彼は、少年にこう言った。

「確かに君は僕の知り合いの事を知っているみたいだけど、それだけじゃここに来てご飯を食べる理由にならないよね？一体どうしたんだい？」

「もしもし？俺が最初に言った話聞いてましたか？

……まあいいや、で、何で来たかって言うと、俺の所の姉ちゃんが今完全爆睡中なワケでして、このままだとあの姉ちゃんは多分昼過ぎまで寝ている気だと思うワケよ。

んで、そのままだと俺が飢えて苦しくなっちゃうからさ、黒桐サンの所に来たワケですよ、以上終ワリ」

そんな少年の説明に彼は、ふう……、と溜息をついたあと、「じゃあまあ、何か作ってあげるから、上がるかい?」、と聞いていた。

「ああうん、上げてくれるって言うならありがたく上がらせてもらいますよ。」

すみませんね、こんな朝早くに」

そしてその少年は彼が聞いたことにそう答え、少年は彼、黒桐幹也の部屋で朝食を取ることにしたのだった。

SIDE：式

「おはよう、式」

傍らで声がした。

首だけを横に動かす。

そこにいるのは、ずっと昔に見知った友人だ。

黒ぶちの眼鏡も、飾らない黒髪も、本当に変わっていない。

ただ今日は少し、変化があった。

それはその友人の隣に、一人の少年がいたことだろう。

「起きたな？式の才姉サン。
昨日はどうも」

そしてその少年の声は昨日、私の病室に来たあの声と同じだった。

「僕のこと、わかる……？」

友人の声は微かに震えていた。

……ああ、知ってた。

おまえがずっと式を待って。

おまえだけがずっと、私を守っていてくれたことを。

「黒桐幹也。フランスの詩人みたいだ」

呟いた声に、彼は破顔した。

まるで一日ぶりに学校で会った時のような、ありきたりの笑顔をする。

その傍らにいる少年も、何故だか酷く嬉しそうだ。

友人のその笑顔、そこにどれほどの努力が隠されているのか、私には分からない。

ただ——彼も、あの約束を覚えていたんだ。

「今日が晴れて良かった。退院にはもってこいだ。

ね？永くん」

「ああ、そうだな黒桐サン。

今日は退院にはとても良い日だ。日差しがとても心地よい」

できうるかぎりの自然さで彼は言い、

隣にいる少年も、そんな彼に対して本当に心地よさそうな顔で言う。

ガランドウの私には、それらは何より温かった。

泣き顔より笑顔である事を、この友人は選ぶ。

孤立である事より孤独を認める事を、織は選んだ。

私はまだどちらも選べないけれど。

そう思っていたら、不意に声をかけられた。

「式の才姉サン、よかったな。
才姉サンには、こんないい人がいるじゃん」

優しい声だった。

その声は友人の隣に座っている少年から発せられていて、
その隣の少年は、起きている私を見て本当に、心底楽しそうな顔を
している。

「……ああ。無くならないものも、あるみたいだな」

「そうだよ。だから今は、ゆっくり休みな。」

君の事をずっと待っていてくれた。彼の笑顔でも見ながらさ。」

少年にそう言われ、柔らかな日差しと合一していきそうな彼の笑顔を、
私はぼんやりと眺めた。

飽きるまで。

——そんな事で胸の穴が塞がりはいないと分かっているけど、
今はそうする以外に何もしたくない。

……柔らかな彼の笑顔。

それは、私の記憶の中にある物と同じ笑顔だった。

空の境界 二次創作 第二話（後書き）

次は痛覚残留にいきますよ

空の境界 二次創作 第三話（前書き）

痛覚残留編開始、

空の境界 二次創作 第三話

SIDE：幹也

七月も終わりに近づいて、僕の周囲はにわかに騒がしくなってきた。

二年もベツトで昏睡状態にあった友人が意識を回復したり、大学を辞めて就職した先の仕事場で二つ目の大仕事が終わったり、隣に越してきたという少年が何故か自分に懐くので橙子さんから毎回仕事場に連れてこいと言われたり、五年ほど会っていなかった妹が上京してきたり、と息つく暇もない。

黒桐幹也の十九歳の夏は、そんな慌ただしさの中で始まった。

今日は久しぶりの休日で、高校時代の友人の誘いで飲み会に顔を出して、気がつけば終電を逃していた。

飲み会に参加した連中はタクシーを捉まえたりして帰っていったが、給料日を明日に控えた自分にそんな余裕はない。

仕方がないので歩いて帰ることにした。

幸い自宅はここから二駅ほどしか離れていない。

さっきまで七月二十日だった日付は、もう二十一日に移り変わっている。

午前零時すぎ、夜の街をひとり歩く。

すると、不意に後ろから声をかけられた。

「やや、黒桐サンじゃないですか。」

え？なに？この時間に帰りって今日は随分遅いんだね。

明日仕事でしょ？今日は飲み会でもあったのかな？でも未成年はお酒飲んじゃダメですよ？でないと警察とか言うのに捕まるって橙子サンが言ってたよ？」

その声は、ここ一ヶ月ほどで知り合った少年のものだった。

その少年は手におそらくは服が入っていると思われる荷物を手に持っていた。

「ああ、永くんか。」

確かに今日は飲み会だったけどね。お酒は飲んでないよ。

永くんこそどうしたんだい？こんな時間に」

「そですか。ならひとまず安心」とでも言えればいいのかな？

俺？俺ははさつきまで姉ちゃんに頼まれた服を調達しに行った所だぜ？

何かね、服って布の質が良くないとダメらしいよ？俺にはよく分かんないな。

しっかしよくもまあ、黒桐サンはあんなにおっかない女性の所に毎日飽きもせず仕事に行くもんだね？あの人に毎回俺の事解剖させるって言うてくるの止めてくれって言うて効果あるかな？黒桐サンなら」

「たぶん無理だね。永くんの事を随分気に入っているようだから」

「気に入るって……。まあ俺も嫌いじゃないけどね？あの人アレで中々可愛い所もきつとあると思うんだけど、それまでにね？俺の身体持つかね？」

「ははは……」

永のそんな疑問をそう笑ってごまかしたあと、家路に一人の道連れを加えて再び歩き出す。

明日が平日という事もあり、繁華街は眠りにつこうとしている。
今日の晩はひどい雨だった。

深夜になって雨は止んでくれたが、アスファルトには今だ名残りが強い。

濡れた路面が水音を立てる。

夏も真中。

今夜も気温はゆうに三十度を越えている。

夜の熱気と雨の湿気が肌にまとわりついてうんざりしていると、
まあ永の方はそれすらも楽しんでいるようだったが、道にしゃがみ
こんでいる女の子を見かけた。

黒い制服を着た女の子が、苦しげに道の端にうずくまっている。

……その、教会のシスターを思わせる制服には見覚えがあった。

地味ではあるが上品なデザインは、お嬢様学校と名高い礼園女学院
のものだ。

学人に言わせるとメイドさんばくていい、とその筋の人には大人気
の制服である。

断っておくと別に僕はその筋には含まれず、妹が礼園に入学してい
るので知っただけだった。

ちなみに隣にいる永に言わせると引き立てるには良い装飾だよね、
と前に一度、一緒に歩いている時に見かけたのをそう評していた。

「礼園は全寮制だと聞いたけど……」

「ま、たまには夜遊びしたくなったんじゃないの？いくら才嬢サマ

つつても…、いやむしろ才嬢サマだからかな？そういう事もあるんじゃないですかね？ハイ」

「でもこの時間はとくに寮の門限過ぎてるでしょ……」

「おっとそうでした。これはうつかり」

そう、なのにこの時間にこんな所にいるのは怪しすぎる。

何かのトラブルに巻き込まれたのか、それとも永が言うように校則を守らないで夜遊びをする不良さんなのか。

妹の事もあるし、少女に声をかける。

もしもと話しかけると、少女は緩やかに振り向いた。

「――」

少女は微かに――ものすごく密やかに、息を呑んだように見えた。

髪の長い子だった。

瞳は落ち着いていて、とても大人しそうだ。

整った顔立ちは小さく、可愛らし――、

「こらこら、目の前の才嬢サンにそう見とれてると式の才姉サンや橙子サンに、『黒桐サンは夜中に道の端にうずくまっている女の子に声をかけて見とれていました』、って言っちゃうよ？それはマズいでしょ？黒桐サンの生命的に？」

前髪は綺麗に切り揃えられていて、一目で良家のお嬢様を連想させる。

ただ違和感があるとすれば、左右対称の房の、左側だけがハサミで

切られたように無かった事だ。

「簡潔にまとめたね、そんな感じならいいと思うよ？
で、その才嬢サン？この俺の隣の人が才嬢サンに聞きたいことがあるそうです」

「はい、なんでしょう」

青い顔で少女は言った。

唇が紫色。

チアノーゼを起こしているのは明白だ。

少女は片手をお腹にあてて、苦しそうに顔を歪めていた。

「お腹、痛いのか？」

「いえ、その——わたし、あの——」

少女は平静を装いながら、言葉を空回りさせる。

その様はどこか危うかった。

まるで始めて会った頃の式のように、今にも倒れてしまいそうな雰囲気がある。

「君、礼園の生徒さんだろ。電車に乗り遅れたのか？」

「ここからじゃ礼園は遠いよ。タクシーを呼ぼうか？」

「いえ、いいんです。わたし、持ち合わせがありませんから」

「うん、僕だつてないよ。」

「永はある？」

「ごめんな黒桐サン、俺はいつも外出時にはジュース一本分しか持つて歩かねえんだ。」

まあ、回りくどいけど無いって事、悪いね才嬢サン」

少女は、はあ、と目をしばたいた。

……我ながら、とんでもない条件反射をしてしまった。

しかも自分より十歳も年の離れている子供にタクシー代があるか聞くなんて。

「そっか、なら家が近いんだね。礼園って全寮制って聞いたけど、外出届が通るのか」

「いえ、家はもつと遠いんです」

ははあ、と頭を掻いた。

「つまり家出のたぐいかな」

「まあ、だろうね」

「はい、そうするしかないと思います」

……困った。

見れば少女は**ずぶ濡**れた。

さっきまでの雨に傘もささなかったのか、ぼたぼたと水滴がしたたっている。

あの時以来、僕は雨に濡れた女の子は嫌いだった。

だからだろう。

自然に、こんな言葉が出た。

「今晚だけ、僕の所にくる？」

「そんな、よろしいんですか……!？」

しゃがみこんだまま、すぐるような目付きで少女は訊いてきた。

「うん。一人暮らしだから問題はないけど、保証はしないよ。

一応その気はないけど、へんな偶然が起きてこつちがその気になつちやうかもしれない。それでも健康な青年男子だから、そのあたりは考慮にいれてくれ。

それでもいいっていうんなら、おいで。あいにく給料日前で何もないけど、鎮痛剤くらいはあるから」

「やっぱ優しいね」。黒桐サンは。

俺の時もだつたけどね、お人好し臭がしますね、ハイ」

永がからかってくるが、少女は喜んだ。

その無防備で純粋な笑みは、僕も嬉しい。

手を差し伸べると彼女は緩やかに立ち上がった。

――一瞬。

少女が座っていたアスファルトに、赤い染みがあったような気がした。

SIDE：永

で、黒桐サンが才嬢サンを自分の家に送ることになったんだけど…

「わりと歩くけど、苦しかったら言いなさい。女の子ひとりぐらいなら、なんとか背負っていけるから」

「はい。でも傷は塞がっていますから、痛みません」

ハイ、それ嘘、どう考えても遠慮してるようにしか見えませんです、ハイ。

それに片手を腹部にあてて、何かの痛みに苦しんでるようにしか見えないですし？

黒桐サンもそれは分かってるみたいだから、俺が言うことでもないですよ。

っていうかさっきあの才嬢サンが座り込んだ場所、アレあからさまに血みたいなのがあつただけど、まあいいか。

俺関係ないしね？まあ面白そうだけどもさ。

……んで、そんな才嬢サンと黒桐サンとのやりとりを見てしばらくしたら、黒桐サンの住んでいる（俺もただけどね）アパートに着いた。

「じゃあ、黒桐サン、俺はこれで」

「ああ、うん。ごめんね、僕等の帰る速度に合わせてもらって」

「すみません……」

「いえいえ、気にしないでですよ、ってね、んじゃね」

そう言っただけ俺は黒桐サンの部屋のすぐ隣の自分の部屋に入っただけ

た。

中に入って分かったのは、もう既に織の姉ちゃんが寝てる事と、机の上に多分織の姉ちゃんが作ってくれたと思われる和食が置いてあった事だ。

ちなみに具材なんかは昼間のうちに俺が揃えておいた。

俺が姉ちゃんの服を揃えるために出かけたのは夕方の事だ。

何でそんな事をする必要があったのかって言うと、普通のシンプルな衣服なら普通に何の素材もいらなくて作れるんだけど、織の姉ちゃんが着たいって言う和服の場合、模様はいらなくて言うてただ服の構造とかが面倒くさい。

なので夕方に出かけてから和服の構造を覚えて和服作りを頑張っていたんだよ。

あと、何だっけ、確か……そう、ブルゾンだ。

それも織の姉ちゃんに欲しいと言われたので作りました。

お気に入りのヤツは今、式の才姉サンが持つてる赤いヤツだそうだけど、それだと完全に被るからね、黒いヤツにした。

それにしても……、

「織の姉ちゃんって、料理うめえんだな」

机の上にあった織の姉ちゃんの料理を食べながら、そう一人ごちる俺だった。

1

2

3

4

空の境界 二次創作 第四話

SIDE：永

翌朝七時頃、俺が起きた時には珍しいことに、もう既に織の姉ちゃん起きていた。

そして何故か昨日俺が作った服が入ってる袋を開けて中の着物を着ているところだった。

何かこう、もう少し羞恥心を持ってほしい、かもしれない。ちなみに着物の色は赤だ。多分赤は織の姉ちゃんに合うと、俺は思う。

「おはよう姉ちゃん」

「お、起きたのか」

「ああ、というか姉ちゃん今日起きるの早くない？」

「いやほら、おまえが昨日調達してきたやつあったろ。」

アレ着てみようと思って」

そんな理由で早く起きるんですか。

つまり俺の飯より服優先って事ですね？

まあいいんだけどさ。

「なんでおまえふて腐れたような顔してるんだ？」

「ふっ、教えるワケないぜ。」

まあそんな事より昨日は飯ありがとうな」

「ああ。」

アレお前が帰ってきた時には随分冷えてたかもしれないが、どうだった？」

「いやいや充分充分、あれすげえ美味かったんで」

「そうか、ならいい」

「じゃあ次はこっちから聞くけどさ、その着物どうよ？何か物足りない所ある？」

一応は布とか気を使っただけど」

昨日俺が作った着物はどう？と聞くと、姉ちゃんは着物の感触とかを確かめながら、

「いや、特に不満はないな。

というかおまえ器用すぎだ」

「お褒めに預かり光栄でございますよっ、と」

と言ってくれた。よしよし。

着物に着替え終わった姉ちゃんは今度はブルゾンの方に手を出す。

「それさあ、色赤じゃなくて黒だけど、いいよね？」

「まあ、いいよ。

こっちが用意してもらったんだからな」

そう言っただブルゾンの方をしげしげと眺めている織の姉ちゃんの姿はすげえ可愛い、というか綺麗だったので、

「やっぱ姉ちゃんって綺麗だよね」

ばふっ、

と言ったあと、姉ちゃんにとりあえず抱きついた。

「……離れろ、おい」

「えゝ？いやだ。

まあとりあえず感觸でも確かめてみようと思つワケですよ、主に
こつ、身体の？」

俺に離れると言つ姉ちゃんにそう言つたところ、

ゴン！

返つてきたのはゲンコツでした。

「イタイよ？姉ちゃん。

姉ちゃんとはたまにそういう暴力的な事を俺にやらなくなればもつ
と綺麗になると思ふんだ」

「だつたらおまえがオレの事を作り替えればいいだろ。

神様みたいなモンなんだからそれぐらいできるだろうが」

「そんな事したらそれは織の姉ちゃんじゃなくなっちゃうでしょ？
それは俺にとってとても大きな損失だぜ？」

「じゃ、諦める」

「酷つ、まあ余り気にしないけどね？俺は」

そんな会話が終わつて、俺は朝飯^{トースト}を作りながらテレビをつけてみる。

「人間てこういう自らが何かしなくても勝手にその代わりをしてく
れる、みたいな道具好きだよな？テレビとかさ、自分が現場に行か
なくても戦争だろうが今テレビに映つてゐる殺害現場だろうが、見れ
ちゃうんだもんな？」

人間とは面倒臭がりというのはを体現した生き物なのかもね？」

そう、今俺が見ているテレビ、そこには殺害現場にいるニュースキ
ヤスターが、淡々と語つているところだった。

「何をわけの分らない事を……」

半年前から放置されていた地下のバーで、四人の青年の死体が発見された。

「そう？だって人間は道具を使うだけじゃなく、発展までさせてるよ？」

これはサボりたいという本能の現れだと思っただけだな、俺。」

四人はいずれも何者かに手足を引き千切られ、現場は血の海になっていたらしい。

「へえ、手足を切断じゃなくて引き千切られてるって、この人随分特殊な嗜好してるね。」

でも俺は嫌いじゃないよ？こういう人。

そっいえば姉ちゃん」

「なんだよ」

俺は姉ちゃんにトースターから出てきたパンを渡しながら聞く。
その様子はどこか怠そうだ。

「姉ちゃんってまだ人殺したい？」

それに対して姉ちゃんは、

「ああ、まあな」

だそうです。

「でもさ、それって正直もう最優先じゃなくて良いよね？」

「だけどオレはこの感情しか抱けない、それが例え元は『シキ』から流れ込んで来ていたものだとしてもな」

やれやれ、織の姉ちゃんにも困ったもんだね。

「でももう織の姉ちゃんは既に一人の人間としてできているんだぜ？
前みたいに式の才姉サンに身体を預けて眠り続ける、なんて事は出来ない。」

当然の事ながらこの世界で生きている人間にとっては殺人衝動が第一、なんて人間を自らの仲間とは思ったりはしないみたいだ。むしろ排除する傾向にあるらしいよ？

でも俺はそんなのは嫌だ。もう少し姉ちゃんには他の人間とも関わってほしいね、だって俺とここ来てから姉ちゃん殆ど寝てばっかじゃん。」

そう言う俺を少し鬱陶しげに姉ちゃんは見てこんな文句を言う。

「じゃあどうしろっていうんだよ。」

そんな事をいくら言っても抱けないものは抱けない、そうだろ？」

「まだ姉ちゃんは勘違いしてるみたいだから先に言っておくよ。」

もう式の才姉サンと姉ちゃんは、優先順位は逆である必要はないんだよ？なにしろもう繋がっている一つの“モノ”じゃないのだからね。

自分のオリジナルの優先順位を作っていいんだ。それこそが人間だからね。」

そう言っただけは、ただ黙って話を聞いている姉ちゃんに、更に言う。

「だから、まあ、ね。まずは俺とキスってヤツを試してみようか。」

案外優先順位変わるかもしれないよ？」

「おい待て。急に話変わりすぎだろ。」

「どうやったらそんな話になるんだよ」

姉ちゃんは何か言っているけど、無視無視。

俺は姉ちゃんに、身体を人間の大人と同じくらいにまで成長させて、姉ちゃんを抱き寄せた。

とつさの事だったので姉ちゃんは驚いたまま、大して抵抗せずに抱き寄せられてくれた。

「おい、何すんだよ」

「まあまあ、そんな怖い顔で睨まない睨まない。」

「そうだな、この身体の時は姉ちゃん、つてのも何か変だから、織って呼ぶ事にしようか。いいよね？まあダメって言っても呼ぶけどね？」

「それで、何するかって言えば、こういう事？」

「そう言つて、俺は姉ちゃんの唇に深い深い、俗に言うディープキスつてヤツをした。」

「んむっ！？……………んっ……………んんっ」

「ほほう、随分と感度が良い様ですな。姉ちゃん。」

「俺がキスし始めてまだ五秒ほどしか経ってないよ？」

「なのにもう身体から力抜けて倒れ込みそうなんだけど。」

「……………プハアッ。」

「ハアッ、ハアッ……………なに、しゃがる……………」

で、案の定キスし終わったら姉ちゃんは完全に腰に力が入らなくな
って崩れ落ちましたっ、と。

姉ちゃんは俺の事を睨んでくるが、正直キスの所為で腰砕けになっ
て立てなくなっている姉ちゃんに睨まれても、ねえ？

「そんな姿で睨んできても説得力ないぜ？ 織。

それにその姿も可愛いものがあると思うね、俺は」

「この野郎……」

「ハイハイ、そんな睨まないでくれよ？

それに気持ち良かったでしょ？ キス。」

そう言われて姉ちゃんは顔を真っ赤にしながらも、反論してきた。

まあその反論も可愛いだけなんだけどね？

「何が気持ち良いだ。

いきなり人の唇奪いやがって。お陰で立てなくなっちまったじゃ
ねえか」

「それが気持ち良いって事だよ。織。

俺としては殺人衝動なんかよりもハマるならこういう一般的に快
楽といわれているモノにハマってほしいね。だってそっちは殺人よ
りもきつと良いよ？」

俺のそんな言葉に姉ちゃんは、アホな事言ってるなよ、とか言った
あと、

「まあ…、確かに悪くはなかったけどな」

、とキスの感想をもらした。

相変わらずこつちには顔向けしないでそっぽ向いてたけどね？

「へえ、ホントに？だとしたら嬉しいなあ、それは新しい優先順位が出来るって事だよ。」

「そしたら俺も織の事嫁にしたいなあ」

「おまえバカか？おまえは一応オレの弟って事になってるんだろ？が」

「あまいぜ織」

そう言いながら俺は元の九歳の身体に戻る。

「こんな風に身体変えたらぶっちゃけ弟とかいう仕切り無いでしょ？
というか大人の時の戸籍も作っちゃおうか？そしたらほら、姉ぢやんの事嫁にしても何の問題も無いでしょ？」

「おまえ、そういう事に対しては何でそんなに頭回るんだよ」

ハッハッハ、酷いぜ姉ちゃん。

それじゃまるで俺が普段頭の回らないヤツみたいじゃないか。

「それは酷いぜ姉ちゃん」

「本当の事を言っただけだ」

「でも姉ちゃん、俺が嫁にするって言ったの拒否しなかった、って事は戸籍とかの問題解決したら嫁になってくれるって事？」

俺がそう言つと姉ちゃんは少し考えるような素振りをしたあと、

「まあ、考えておく」

との返事をくれた、万歳。

「まあそれで？今日は外に出てみる？姉ちゃん」

「ああ。まあたまには外に出て行ってみるのも良いかもな」

「そう、なら俺も行くよ。ほら、アーネンエルベって喫茶店あったじゃん？あそこで今日はきつと何か面白いことがあると思うんだ。」

あ、でも強制じゃないから、来たくなければ来なくても良いよ？無理させると悪いからね」

「アーネンエルベ、ね。じゃあオレも今日はそこに行ってみるかな」

「え、ホント？やったね、今日は何か良い事がありそうだ」

そうやって喜んでる俺に、姉ちゃんはこんな水を差す。

「いつも思っただけど、おまえのその話し方ってかなり軽薄な感じがするぞ」

「良いんだよ、それで」

そう言っただけで姉ちゃんとの会話を終えたあと、俺はさっきまで殺害現場を映していたテレビに目をやった。

……その時既にテレビは、もう違う番組へと変わってしまっていたが。

SIDE：幹也

見知らぬ少女との一件の後、事務所へ向かった。

僕が勤める会社に正式な名はない。

専門は人形作りなのだが、大部分の仕事は建築関係の仕事だった。

所長である蒼崎橙子は見た目二十代後半の女の人で、工事途中で廃棄された廃ビルを買い取って自分の事務所にするような変人だ。

永くんがそれを知った時は、黒桐サンも物好きだねえ、と言っていた。

僕はそれに対して、そんな君も進んで関わろうとしてるんだから結構物好きじゃないのかい？、と聞き返していたが。

ようするにそれは会社ではなく、橙子さん本人の趣味の延長に他ならない。

そんな所で働く事にしたのは色々と事情があるのだけれど、今はこれが黒桐幹也の日常だ。

最近是他にもう一人、連れがいたのだけれど今日はいなかった。

確か姉がいると言っていたから、一緒にどこかへ出かけたのだろう。

それにこんな日常にも、愚痴はあるけど文句はない。むしろ幸運だとさえ思っている。

……問題もあるんだけど、そんなのはまだ我慢できる範囲だし。永く人を連れて行く度に、解剖させろ、って言うのは少し自重して欲しいと思うけど。

——そんな事を思っているうちに会社についた。

いつもみたくこのエレベーターのない四階建てのビルの四階にある事務所まで歩いて上る。

事務所に入ると、——いつもの散らかった光景の中に不釣り合いな姿がひとり。

黒に近い藍色の着物姿の少女が、気怠い眼差しでこちらに振り返る。

——着物には魚らしき模様があつた。

「あれ？」

式、なんでこんな所にいるのさ」

「こんな所とは失礼だな。 magari なりにもここは君の仕事場だろう、黒桐。」

それに君こそ今日はいつもの少年をとまって来ていないじゃないか。飽きられたのか？」

「違いますよ、今日はたまたま居なかったんです」

式の向こう側、机に座った橙子さんがじろりと睨む。

煙草を啜えた橙子さんは、相変わらず飾り気のない服装をしている。葬式にだって出られるようなスマートな黒いパンツに白いシャツ。そして片耳には本人の嗜好でオレンジ色をしたピアスをしている。

「しかし早いな。しばらく仕事の受注はないから、今日は昼過ぎに顔を出せといったろう」

「いえ、そういう訳にもいきません」

金銭の状态的に。

「それより、何で式がいるんですか？」

「私が呼んだんだ。少しばかり野暮用ができてね」

式とは今、少し話しづらい関係になっていたりする。

それに式は話したくなさそうなので、自分の机に向かう事にする。

……仕事がないから、やるせない。こういう時は雑談にかぎる。

そう思っただけで橙子さんとはしばらく雑談していると、橙子さんがどうやらお金に困っているらしい発言をした。

……なんだか、イヤな予感がした。

「あの、所長。出社早々こんな事は言いたくないんですけど、お給料ください」

「黒桐。その件なんだが、困ったことに金がない。申し訳ないが今

月分は来月送りにさせてもらうぞ」

まったくの平常心で橙子さんは言い切った。しかも断定。まるでこっちが悪党みたいだ。

「待ってください。昨日百万近い銀行振込があつたでしょう。なんでそれで金^{モノ}がないって言うんですか!？」

そりゃあ使つたからだろう、と橙子さんは椅子をキイキイ鳴らして反論してくる。

その後の、昨日突然の出品で買ってしまったという役に立たないウイジャ盤の事を言つた後、

「つまり、アレですか。冗談抜きで今月は給料なし、と」

「ああ、社員は各自で金銭を都合してくれ。

大丈夫だ。本当に困つたらあの永つて少年に頼めば多分金ぐらいくれるから」

あろうことかついこの間出来た僕の友人でもあり、自分の知り合いでもある九歳ぐらいの少年に金を借りてこいと言ってくる橙子さんに僕は、わかりました、と少々怒りを含んだ声で答えて席を立つ。

「では、今月の生活費を都合してきますので会社を早退させていただきます。よろしいですね」

「いいよ。」

ところで黒桐、それとは別にひとつ頼みがあるんだ」

口調を変えて橙子さんが言う。

式が呼び出された事に関係があるのだろうか。

内心の怒りを抑えて立ち止まる。

「なんですか、橙子さん」

「金、貸してくれないか。見ての通りおけらなんだ」

「——全力でお断りします」

力いっぱいドアを閉めて事務所を後にした。

空の境界 二次創作 第五話

SIDE：橙子

「いないよ。そいつは間違いなくオレと同類。

——だからきっと、会った瞬間に殺しあう」

式が出て行った後、橙子はお金の事について頭を悩ませていた。

確かにこうやって式に仕事をさせたりする事でその場凌ぎにはなるが、昨日入った百万と同じで急にお金が入用になって一瞬で消えてしまう事もありうる。

そうなるといつまでも黒桐に給料未払いになって、今回はアレでOKだったが今後の文句がひどくなるかもしれない。

だとすると今後、継続的に手に入れられる収入が必要だが、あいにく橙子自身には働く気はない。

面倒な問題だった。

「面倒だな、錬金術師でもないのに」

そう椅子にもたれかかってキイキイいわせながら一人こちる。

しばらく橙子はそうしていたが、不意に携帯を取り出してどこかにかけ始めた。

数秒間呼び出し音が鳴った後、電話の向こうで人の出る気配がした。

「もしもし？橙子サン？何の用ですかね？俺今姉ちゃんと喫茶店に

来てるんだけど？」

電話に出たのは永だ。

だがその声はどうにも少し、機嫌が悪そうな声だった。

「どうしたんだ。随分と機嫌が悪そうだな」

「そりゃあね。姉ちゃんとこれから楽しくおしゃべりしようって時に突然電話が鳴って、しかも相手は橙子サンときた、これはきつと何か嫌なことが起こるに違いないね、うん。」

どうやら永は自分と姉の会話を邪魔されたのが嫌だったらしい。しかしそんな事を気にする橙子でもないわけで……、というか気にしてたらこんな人物にはなっていない、普通に会話を続けた。

「随分な言いようだな。まあそんな事はどうでもいいんだ。とりあえず、金をくれないか？」

そんな明け透けに言った橙子の言葉に対して永は電話の向こうで、うーん、とうなった後、

「随分率直な物言いだね。嫌いじゃないよ？そういうの。」

「んで？お金だっけ？別にいいけどさあ、それってどれ位いるの？」

「悪いが一時的なものじゃなくて継続的に欲しいんだ」

そう言う橙子の無茶な要求にまたもや、うーん、とうなった後、永からの返答は、

「継続的につて事になると今すぐは無理かな？だって収入源ないし。じゃあわかった、今度株やってみるよ、そうしたら橙子サンの欲しい額にもよるけど大抵の額なら楽勝でしょ」

と言う、極めて嬉しい事だった。橙子にしてみれば、そんな上機嫌な橙子は永に対して、

「そうか。まあ毎月百万くらいでいいぞ。

それくらいあればたぶん急な出物でも楽に買えるだろうし」

と、自分の欲望駄々漏れな事を言っていた。

「まあさ、別にお金ぐらい幾らでもあげても良いんだけどね？

ちゃんと黒桐サンにも給料払ってあげてくれよ？じゃないとそのうちの人橙子サンの所出て行っちゃうよ？」

「あいつに他に行くところがあるとは思えないな」

「そしたら俺が行く所作っちゃいますよ？それは困るでしょ？」

そんな永の言葉に橙子は、ちっ、と舌打ちをした後、

「まあ、出来る限りは払うさ。

そういえば今永は喫茶店にいるんだったな。なんて名前の喫茶店だ？」

「え？アーネンエルベって名前の所だけど？」

「そうか、わかった。じゃあな」

と言って一方的に電話を切った。

SIDE：永

俺は今、姉ちゃんと二人で喫茶店にきて、とりあえずケーキでもパイでもいいから食べようよ、と言って姉ちゃんとケーキを食べていた。俺だけでチーズケーキを、だけどね。

まあ姉ちゃんはまだこういうのは好きじゃないかもしれないけど、俺は一度食べてみたかったから丁度いいんだよね。

名前はさっき橙子サンにも言った通りアーネンエルベだ。

ちなみに名前を橙子さんに言った時、何かイヤな予感がした。

たぶん橙子サンが言ったんじゃないと思うけど、というか思いたいけどね？

式の才姉サンが来る予感がするワケですよ。

アーネンエルベはアンティークな喫茶店だった。

看板はドイツ語、俺はこういう細かい（？）オシャレは好きだ。
というかただ単にドイツ語の響きが好きなだけかもしれない。

そしてつい先程かかってきた電話が切れたのでとりあえず適当にポケットに押し込む。

「今の電話って、誰からだったんだ？」

俺の隣に座っている姉ちゃんなんかあまり興味はなさそうだったけど聞いてきたので、答える事にする。面倒だけど。……まあそれも嘘だけどね？

「ん〜？ほら、式の才姉サンの上司、黒桐サンの上司でもあるけどね？」

あの俺が遊びにいくと毎回解剖させろって言うてくる人だよ。そんなに俺の臓器が見たいのかな？あの人」

俺がそう答えると、ああそういえば言ってたな、と言った後姉ちゃんも顔を少し顰めて、そう言う話をモノ食ってる時にするな、とも言ってきた。

そう言えばそうだったね、今は食べ物食べてる最中でした、これはうつかり。

「でもさ、やっぱり着くの遅くなっちゃったね」

そう、今はもう昼だ。

本当は朝早くにここに来ようと思ったんだけど、道に迷って、更に道中に色々店があったから入っていたら、いつの間にかこんな時間

になっていた。

「それはおまえが悪い。おまえが道も知らないのに勝手に先へ先へと行くわ、面白そうな店見つけた、とか言って適当に店に入っているからこんなに遅くなっただろ」

酷いね？姉ちゃん。弟の好奇心をそんな風に扱うなんて、俺泣いちゃうよ？

「勝手に泣いてる。バカ」

「人の心を読むなんて鋭いね、姉ちゃん。それは俺に興味を持ってくれてるって事かな？だとしたら嬉しいね。」

……あ、ちなみに泣くって言うのは嘘だよ？こんな所で、……まあどこでもだけど？男の子って泣いちゃダメらしいじゃん？財布無くした時と女の子にふられた時はいらいしいけど、俺は姉ちゃんにふられるつもりはないしね？でも不公平だよな？性別が違うってだけなのになさ」

そんな俺の様子に姉ちゃんは、

「おまえって、かなり変なヤツだよな」

という評価を呆れ顔で俺にくだした。

酷いなあ姉ちゃん。それに、姉ちゃんは人にそんな事言えるのかね？

「そんな変なヤツに惚れられた姉ちゃんも、実は結構変なのかもよ？」

「オレはおまえ程じゃないさ」

俺が姉ちゃんに指摘した所、返ってきたのは俺がより変なヤツだろという回答でした。

そしてそんな会話を姉ちゃんとしていた所、

「ふたり——？」

という、式の才姉サンの声が聞こえてきた。

そしてそれと同時に何故か俺の頭も驚掴みにされた。

当然、俺の頭を思い切り驚掴みにしているのは隣に座ってる姉ちゃんだ。

「ねえねえ？なんで俺の頭驚掴みにされてるの？イタイんだけども？」

「おまえ……今日はいいい事があるかもって言ったよな……？」

そう言いながら、姉ちゃんは妙に“いい笑顔”でこっちを見てきた。ごめんなさい姉ちゃん、その顔怖いです。嘘だけだ。

「これのどこがいい事なんだ……？」

「ま、まあまあ……待ってよ姉ちゃん。これは俺の責任じゃなくてきつとあの橙子サンって人が俺と姉ちゃんの一時を壊しに——、
ってどうして更に力を込めてるの？イタイ、イタイって」

俺の必死（まあこれも嘘だけど）の弁明にも耳を傾けることなく、姉ちゃんは無慈悲に俺の頭を掴む手に更に力を込めて締め付けてくる。

実はこれイタイってよりも頭の血管が締め付けられるせいで、しばらくやられていると頭の方が、フワツ、となりそうになる。まあ平

気だけどね？たぶん普通に人間やってる人ならヤバいと思うな。

「起こったモノは仕方がないけどな。まだ気づかれてないみたいだし、オレを隠せ」

「え？なんで？別にいいんじゃない？見つかったても。別に式の才姉サンは普通に喜んでくれると思うよ？」

俺が織の姉ちゃんが隠せと言ってきたのを別に見つかってもよくね？見たいな反応で返したら、

ゴン！

ゲンコツがふってきました。

「イタイなあ。まったく何するのさ、いきなりさあ。」

「バカ、あいつは俺がもう居ないと思ってるんだろうが。だから口調もオレみたいな口調になってる。今更式の前には出ていけねえよ」

なんとまあ、変な所で律儀というか、こう、頑固っていうか？そんな理由で会いたくなかったの？姉ちゃん。

まあこれ以上隠さないでおこうとすると姉ちゃんたぶん次は俺の首締めにくるからね、あれはちよつと遠慮したい。

「はいはい、分かったよ姉ちゃん。でも隠して欲しいって言われてもね、その着物がある限り無理じゃない？だってその着物物凄く目立つよ？なにしろ赤だからね」

「じゃあそれなんとかして隠せ、おまえなんでも出来るんだろ」

そう隠せという顔は、結構不機嫌オーラが出ている気がした。

そんな無茶な、まあ不可能ではないけどさ。

あ、ちなみに不機嫌オーラってのはこう、シュビビッ！って感じのヤツね？

まあそんなもの存在しないけど。

「まあ分かったよ。姉ちゃん。そんじゃま、こう、ホイッ、っとな」

そう言っただけは姉ちゃんに他の人間には関心を持たれないような境界じみたモノを張る。

まあ本人にとっても気づかないぐらいの偽装レベルだから、あの黒桐サンでもなきや見つけれないでしょ。

「これで本当に隠したのか？何も変わってないように思うんだが」「きちんと隠したよ。これを見破れるのは世界に二人、俺と黒桐サンだけさ」

俺が得意満面にそう言ったら、姉ちゃんは不満なのか、俺に文句を言ってきた。

「コクトーに見つかるんじゃない意味ないだろ。

そうしたら式にも見つかるんだから」

そんな事言ってもねえ、なにしろ黒桐サンですからね？

「ごめんな、黒桐サンから見つかからない結界を張るのは、たぶん無理だね。

黒桐サンが本気で探そうと思ったら、たぶんどんな存在でも見つかったらうよ」

「そんなにモノ探しがうまいのか？コクトーは」

「ああ。たぶんこの世界の探し物上手ナンバーワンは彼で決まりだね」

「ふうん」

そんな感じで俺と姉ちゃんとのやりとりが収束する中、式の才姉サンのところでは今、こんな会話が繰り返られていた。

「兄さん、こんな女と早く手を切ってください」

だって。式の才姉サン随分嫌われてるね？あ、でもこの場合はあの黒髪のコが特殊なだけか……あ、どっちも黒髪だったね。んじゃあまあ、ここはひとつ、妹サンと呼ぶ事にしよう。

んで、妹サンの隣にいる子は、と。おや？あれってこの間（昨日だったかな？）見かけた才嬢サンではないですか。もう治ったのかね？お腹の傷。

あ、でも元から傷なんてなかったな、て事はアレはタダの錯覚って事だね。

「随分嫌われてるね、姉ちゃん」

「オレは別に関係ないだろ」

まあそうなんだけどね？

でも、

「あの才嬢サンも俺と繋がってるみたいだね。そんなに“世界”は俺の力を借りたいのかな？まあ別に貸してもいいけどね？面白いから」

ま、結局のところ、織の姉ちゃんの事以外は全部本気じゃないんだよね。全部冗談ってヤツ？あ、でもやっぱり黒桐サンとか橙子サンは嫌いになれないな、あと式の才姉サンもね？

あれ？俺って結構色んな人に興味持ってたんだね、自分でも意外だよ。

「おい、食い終わったならもう行ってもいいんじゃないか？
そろそろオレは帰りたくなってきたよ」

「もう？まだまだ日中だよ？でも姉ちゃんが帰りたいて言うのなら余り無理はさせられないね。いいよ、帰ろうか。」

今日は珍しくこんなに長い時間外にいたんだからね、帰って休んでもいいと思うよ。

でも今度は夜に歩きたいね、姉ちゃんは夜にその着物を着ていると凄く映えると思うんだ」

そう言っただけで俺達が席を立つて、会計に行こうとしたら、

「あ、この間の子……」

「え？」

見事に才嬢サンと妹サンにはち合わせしました。

「や、これはどうも。この間の才嬢サンではないですか。
そちらのお隣の方はお知り合いですか？」

突然の出来事に対し、俺は特に慌てた風もなく会話する。

「え、ええまあ。黒桐鮮花さんって言うんです」

紹介された方の妹サンは、知り合い？、と聞いていたのでこちらには自己紹介する事にした。

「あ、黒桐サンの妹サンですか。どうも、俺は貴女の兄の知り合いでして、永と言います」

「そう言えば兄さんが最近面白い友達が出来たとか電話で言ってたわね。」

それってひょっとしてあなたの事？」

おやおや、電話で俺の事はもう教えたんですか、そうですか。楽しみがひとつ減ったね、こりゃ。

「そうそう、俺の事であってますよ。」

まあ俺は今日は姉ちゃんとここにケーキ食べに来ただけですからね。

まあ姉ちゃんはもう外行ってるみたいだし、ケーキ食ってたの俺だけなんですけどね。

という事で、とりあえず今日はさようなら？また機会があれば会えると良いね、妹サンに才嬢サン」

「ええ、また機会があればね」

そんな妹サンの返事を聞いて、俺はその場から即刻立ち去った。

え？何故かって？それはね？ドアを出たところで待っている織の姉ちゃんが機嫌悪そうにしてたからさ。

待たせちゃったね、こりゃ。

|

|

|

|

空の境界 二次創作 第六話

SIDE：藤乃

私は、黒桐さんと別れた後、今日喫茶店で再会した少年の瞳を思い出していた。

「——とても、おかしな目だった」

何故か出てしまう私の言葉。それはしかし、私には止められない言葉だった。

「——全部が“アル”のに、全部が“ナイ”」

そう、そんな不思議な瞳。

その瞳はきつと、この世の総てを覗いている。

その瞳からはきつと、かみさまでも逃げられなくて。

だからきつと、その瞳はわたしのやってた事やった事も、これからやる事も全て知っていて。

だけどその瞳はわたしのやる事を、復讐するために殺す事を、知っていて止める気のない目をしていた。

なぜだろう？とわたしは考える。

どうして目の前にいる人間がこれから殺人を犯す事も、もう既に四人もの人間を殺している事も知っていて、それなのにわたしを見るあの少年の瞳には一切恐怖も軽蔑もなくて、ただただ、面白そう、と思っっている顔をしていたのはなぜだろう？

その後、幾ら考えても結局、その自分の中の問いに答えは出なかった。

SIDE: OTHER

夜も深まり、時期に零時になるという頃。

倉庫街に人影はない。

いや、たった二つだけはあるが、人影はあった。

それは、ひとつは少女を連れ込んで犯そうとしていた青年のモノと、その対象である少女のモノだ。

「……！」

うめき声は、そんなケモノじみた発音にしかない。

そしてうめき声をあげている青年、その青年には、すでに両腕はなかつた。

まるで知恵の輪。それとも紙飛行機を飛ばす為に捻られたゴム。

いずれにせよ、一度と人体として機能はしまい。

「た、た、助け、て……！」

青年は目前に立っているだけの少女から逃げだそうと走り出す。

とたん、彼の体はふわりと浮いて、右足が膝から千切れた。

それは、本来なら行動を起こす側は違はずだった。

普通なら、今逃げているのは少女の方だっただろう。

それが当然。なにしろ高校生ほどの男子の力に一般の女子学生が勝てるワケがないのだ。

それが世界の常識、だった。

しかし、今夜ばかりは、その“常識”は当てはまらなかった。

びしやり、とバケツの水を叩きつけるように血が迸る。倉庫のコン

クリート壁に跳びはねたその跡は、なにかのアートのようでもあった。

浅上藤乃はそれを爛とした瞳で見つめ続ける。

「ね、捻れ、捻れて、はは、ネジだ、オレの足ネジになっちやった、ひひ、あははは……っ！」

彼の言葉は、よく、わからない。

あたまがわるいせいだろう、と藤乃は無視する事にした。

「……凶れ」

—— 呟く。

それは何度目かの同じ発音。

繰り返し繰り返す言葉は呪いになると、彼女の友人は教えてくれた。

青年は地面に這いつくばり、首だけを動かしている。

両手は捻れて、右足はなく、足からの出血が地面を濡らす。

赤い絨毯みたいだ、と藤乃はそこに踏み込んだ。

靴が血に沈む。

夏の夜は暑い。

粘つく大気が肌に纏わりついて、苦しくなる。

たちこめる血の薫りはそれに似ていた。

「――ああ」

芋虫みたいな青年を見下ろして、藤乃は嘆息する。

「おお、これはこれは才嬢サン？こんな夜中に倉庫街で何をやっているのかと思えば。

男を連れ込んでイチャイチャするワケでもなくこーんなスプラッターな殺人劇とは、ねえ？これは随分変わった嗜好をお持ちのようだ。

あ、でも勘違いしないでくれよ？俺はそういう風に人を殺せる人間、嫌いじゃないよ。

なにしろそういう人間には絶対に面白い事がついて回るはずだから」

そしてそこに、唐突に、本当に唐突に子供の声が響く。

それは、二日前、そして今日の昼に会った少年のモノだった。

SIDE：永

深夜、倉庫街に面白い事がある、そう感じた俺は姉ちゃんに言って、外出してきた。

そしたらいきなり俺の視ている前で起こるスプラッターな光景の数々、まあ普通の一般市民が視るモノじゃないよね、あれ。

んで、一通り一応は芋虫みたいに男になるまで待つてただけどさ、アレも結局は俺が取り込まなきゃいけないワケだよね？昼間の四人にしてもさ？

それでとりあえずスプラッター劇は見飽きたのでさっき言った台詞と共に才嬢サンの前に出て行ったワケですよ、俺は。

で、俺の台詞を聞いた才嬢サンは固まってしまった、っと。

「ね？どうしたの？続きを早く見せてよ。そんな中途半端な状態じゃ面白くないし、何より才嬢サンが人並みになれないよ？」

そう俺が言っと、最初の部分を聞いた時は何だかイヤそうな顔をしてたけど、最後の『人並みになれないよ?』宣言でやることにしたらしく、俺の目の前でまたスプラッターな光景が更新された。

「そうそう、これで才嬢サンはようやく人並みっていう“モノ”になれたんだ。

でもどうして皆、空虚である事を嫌うんだろうね?“空虚”にもなにかしらの意味はあるんだよ?

まあでもそんな下らない事はどうでもいいか、今は才嬢サンが人並みになれた事を喜ぶべきだよね。

で、実際の所どう?人並みになった感想は?」

そう問う俺の声は相変わらず軽薄で、はつきり言っただけの普通の人間な嫌悪感をあらわにするだけの質問の内容。

そんな質問だけど、今の才嬢サンは普通じゃない、と思う。

だから俺の質問に才嬢サンは答えてくれると思った。

なにしろその普通の状態じゃない才嬢サンは、自分のなりたかったモノになれたんだから、それなりに感想とかあるはずだよね。

「こうしてやっと——わたしは人並みになれたのですね」

そう言う才嬢サンは嬉しそうだけど同時にどこか厭そうな顔もしている。なんでだろうね?

自分のなりたい“モノ”になれたんだから人間ってこういう時は素直に喜びしかないんじゃないかなかったっけ?

「そうそう、才嬢サンはね、やっと“人並み”になれたんだよ。

でも変わってるよね?人並みになりたいから、って。特別じゃなくて、普通の人間になりたいのに、世間一般ではその行動は異常な

んだ」

俺が、異常、と言った時、目の前の才嬢サンは微かに肩を、ビク、と震わせた。

警察っていうのに連絡されると思ったのかな？そんな事する気はないのにな。

「や、でも俺にとってはそうじゃないよ？

俺は止める気ないしね？それに自分の欲望の為にそうしたなら、それはそれで良いんじゃない？だって人間ってそういう生き物なんでしょ？だったら他の人間が否定しても俺は肯定してあげるよ？面白いから」

「——わたしは、藤乃はこんな事までしないと、駄目な人間なんですか」

俺が言った事はもう、余り頭に入ってはいないみたいだけど、姉ちゃんの顔は何だか先ほどよりも厭そうな顔になっている。

「というか才嬢サン、藤乃って名前だったんだ。じゃあ次からは藤乃サンって呼ばなきゃね？」

「え？別に良いんじゃないの？やりたくてやった事なんだから、楽しいでしょ？」

「わたし、人殺しなんかしたくないのに」

「そうでもないよ、おまえは」

突然の言葉に、藤乃サンが振り向く。

俺の方からは、ちょうど真っ正面になっているから、振り向く必要はないね。

「あなた、は――」

倉庫と倉庫の間の路地裏の入り口に、着物の女の人がいた。
まあそこにいたのは、式の才姉サンだったワケだけれども。

――
――

――

――

「オレ達は似たもの同士だよ、浅上」

そういつてさも可笑しそうに微笑う、式の才姉サン。

そしてそんな式の才姉サンに反発するかのように、藤乃サンは言う。

「――ふざけないで」

なんだ、先程はあんなに簡単に人を殺してたのに、自分が異常者だと言われたら途端にあんな反応を返すなんて、面白くないなあ。

それは自分を認めないって言っているようなものだよ？ 藤乃サン？

あ、藤乃サンまたあの眼を使おうとしてる、でも、ね？ さっきみたいな状態じゃないと、藤乃サンは力を使えないみたいだ、勿体ない事だね。

「さっきまでのおまえなら殺してやったのに。喫茶店の時もそうだった。……もういい、白けた。今のおまえなんか知らない」

そう言った後、式の才姉サンは踵を返して俺と藤乃サンの所から遠ざかっていく。

なんだ、ここで殺し合いでもするのかと思ったのに、つまらないな。

「大人しく家に帰れ。そうすれば二度と会う事もない」

結局、式の才姉サンは最後まで俺に声もかけずに行ってしまった。

「あーあ、今夜ここで殺し合いでも起こるかと思ったのに、つまらないなあ。

あ、そうだ藤乃サン。今度あの才姉サンと殺し合いしてね？ 期待してるよ？ 面白そうだから」

そう言う俺もそこから立ち去った。

ただ、ぼつと血だまりの中、立ち尽くす藤乃サンを残して。

SIDE：幹也

七月二十三日、僕は友人の頼みで搜索していた学校の後輩を保護した後、橙子さんの所に連れてきて橙子さんや式と話をしている所だった。

「あいつに話は通じないよ。完全に手遅れだ。目的を果たすまで止まらない。」

いや、果たしたって止まるかどうか。手段と目的が入れ替わっち

まってるからな。それにそれを知っていてさらに愉しもうとするヤツもいたしな」

そう言う彼女は、本気で怒ってる。

でも……、

「式、まるで浅上藤乃を知ってるような口振りだね。それにその楽しもうとする奴って誰だい？」

「知ってるし、会ってる。昨日の鮮花との待ち合わせに同伴してたんだから。」

それにその愉しもうとしてたヤツってのは、オレの退院の日におまえと一緒に来ていた子供だ。あいつ確かおまえに懷いてたんじゃなかったか」

「え？」

なんで鮮花が浅上藤乃と一緒にいるんだ？話が全く繋がらない……くはないか。不良達に脅されていたのは女子高生としか聞いていなかったけど、浅上藤乃が礼園女学院の生徒なら話は別だ。

だけど……、

「なんだ、鈍いな黒桐。浅上藤乃の調査はしてないのか」

「あのですね、その名前を聞いたのはほんの二時間前です。こっちは湊啓太の保護だけが目的だったんですから、そこまで気は配れません。」

それに……、その、永くんがなんでそんな所にいたんですか？」

「そんな事知らん。アレの思考回路を人間に理解しろというのは不可能だろう」

そう、そこなのだ。なんで永くんがそんな殺人現場にいて、しかもそれを愉しんでいる様子だという、……なにか、とても嫌な予感でした。

それは鮮花や永くんが犠牲者になるとか関わっているとか、そういうた不安じゃない。

もつと何か……大事な事を考えないようにしていたのに、それを思い返した焦燥に近い。

「……けど、それじゃあ浅上藤乃は今も学校に通っているんじゃないか？」

「いや。事件の晩から寮にも家にも帰っていないし、学校も休んでいる。完璧な行方不明だ。鮮花も昨日から会っていないというしな。

だが、お前は忘れているようだから言っておくが、永少年の方はお前のすぐ隣に住んでいるんじゃないか？調べるなら、永少年から聞いてみればいいだろう」

「橙子さん、永くんの事はそうですが、浅上藤乃の事はいつ調べたんです」

「少し前からだよ。彼女のご両親から搜索依頼を受けてね。昨夜、式から鮮花と浅上藤乃が一緒にいたと聞いて連絡を入れてみたが、鮮花は友人である浅上藤乃の異常には気づいていないようだった」

「……何て皮肉だ。鮮花との約束があと一日遅ければ、いや、もっと早く湊啓太を探し出せていたら昨夜の被害者は出なかったかもしれないのに。」

……

……

.....

空の境界 二次創作 第七話

SIDE：永

今日は七月二十四日、で、今日はどうやら夕方から台風が来たりとかするらしいんだけど。

「あーあ、なんかもうタダ殺したい、ってだけになっちゃったよね。藤乃サン。」

俺は今、部屋でテレビにうつってる交通事故を見ながらそう呟いていた。

一見タダの交通事故扱いだが、まあアレはどう考えても違うでしょ。だって普通運転手以外に乗っていない車の運転手の首が捻じ切れるとかありえないからね？

「そいつって確か昨日の夜にお前が見に行ったとかいうヤツだろ？」
「そうそう、あの時はなんか、生きる実感を得る為、とか？まあとにかくそんな感じのちよつと特殊なだけの感じだったんだけどね？今はそうじゃなくて、純粹に楽しみの為だけに殺してるって感じかな？まあそれでもつまらなくはないから別に良いけどね？」

そんな俺の態度に姉ちゃんは呆れぎみに、はあ……、と溜息をつくだけだ。

そうして特に何もせずに姉ちゃんと部屋でゴロついていたら、いつの間にか正午になっていた。

空は段々と暗くなって、雨がポツリポツリと降ってくる音がする。

「姉ちゃん」

「ん？なんだ」

「今日って台風が来るよね」

「まあな、天気予報で言ってたろ」

俺の問いに、姉ちゃんはいつもの少し怠そうな感じの返事を返す。

ああ……、本当にやることがない。

でも、それはもうすぐ終わる。

もうすぐきつと、藤乃サンはまた殺人を犯そうとするんだろっ。

そして殺されたモノの魂は、肉体というカタチを失って、また俺の中へと落ちてくる。

まあ、落ちてくるのは仕方のないことだ。なにしろその落ちてきたモノにまた“存在”を与えてあげないと、“世界”が煩いから、まあ、“世界”くらい簡単に消せるけどね？それじゃあ折角この“世界”が今までやってきた事を無に帰す事になるし、何より俺自身がそんな事はしたくない、と思う。

だって、この世界には今も生命が満ち溢れているし、楽しい事も沢山ある。

式の才姉サン達の事なんてまさにその楽しい事にドンピシャだ。

「なあ永」

そんな事を考えていると、不意に姉ちゃんが話しかけてきた。

なんだろうね？姉ちゃんから話しかけてくるって珍しい。

「なんだい、姉ちゃん」

「おまえさ、いつまでもずっと、ここにいいのか？」

そう聞いてくる姉ちゃんは、なんだかいつもより少しばかり、まあこんな事言ったら失礼かもしれないけどさ、儚そうな、女の子してる顔だった。

「……おまえ今、なにか失礼な事考えなかったか？」

「え？イヤだなあ、そんな事考えるワケないじゃないか」

「ふん、どうだかな……」

俺の否定の弁も適当に聞き流して姉ちゃんは窓の外を見はじめる。

そこに写っているのは、台風が来たせいか、凄まじい勢いで降ってくる雨と、姉ちゃん、そして更にその奥で寝転がっている俺だった。

「そうだね。ずっとここに留まってるってワケにもいかないな。

黒桐サンや橙子サンとの付き合いは続けていくけど。

今度——まあ、一……二……三……、四年後辺りの冬かな？それくらいには行きたい所があるからさ、その時はついてきてね？姉ちゃん。

ま、俺は姉ちゃんの事が好きだからね、一緒にきてくれないって言っても連れて行っちゃうから安心してくれていいよ」

「それは安心できるのか……？」

俺が言った事に対してそんな風に姉ちゃんは言うてくるけど、窓に写ってる表情にイヤはない、という事はきっと姉ちゃんも俺と一緒にいる事はイヤじゃないって事だろう。

嬉しい事にね。

ああ、でももうすぐ面白い事が大橋で起こるはずだ。

あの、黒桐サンや、橙子サンからは単なる税金の無駄遣いだとか思われていない大きな橋。

今日はそこで、また面白い事があるんだろう。

それは多分、式の才姉サンと藤乃サンが殺し合う事だと、俺は思う。

ああ、やっと……、やっとだ。

俺と繋がってる人達同士の争いが見れる。

それは、今まで起きた、殺人事件？ってヤツよりもよっぽど面白いに違いないね。

「そろそろ時間だからね、姉ちゃん、俺はまた見に行ってくるよ」

「そうか、気をつけるよ？まあ必要ないかもしれないが」

「心配ありがとう、姉ちゃん」

「ああ。しかし式もバカだな、あんなのは本当は望んでいる事じゃないのに」

「はは、それは俺も同意するよ？だって姉ちゃん達は、本当はそんな事には向いてない、可愛い人達だと思うから。あ、お昼は冷蔵庫にパン入ってるから、それで我慢してね。

じゃあね、たぶん夜には戻るから」

「可愛いはよけいだ。……じゃあな」

そう俺は、まだ隣に寝転がっている姉ちゃんに見てくる事を告げて、面白い事が起こる大橋に行く事にした。

なんか、姉ちゃんの顔は少し赤かった気がしたけど。

SIDE：藤乃

大橋は、底の浅い湖と化していた。

四車線もの広いアスファルトは一面雨水に浸され、歩く度にくるぶしまで濡れてしまう。

叩きつける雨は斜めに降り注ぎ、風は柳のような街灯を叩き折らんと荒れ狂っていた。

空は闇。

ここはすでに遥かな海上。

港に見える街の明かりは、まるで地上から月を見るように、遠く遠く届かない。

浅上藤乃は、その嵐の中へやってきた。

黒い制服は、烏めいて夜に溶ける。

彼女は雨に濡れながら、紫に変色した唇から息を吐いて歩く。

街灯の下まで辿り着いた時、死神と少年に出会った。

「やっと来たね、藤乃サン。待ちくたびれちゃったよ、なにしろもう片方の主役がいるのにお相手がいらないんだから、このままだと濡れ損になっちゃうしね？それに式の才姉サンてば、なんだか俺に今にも襲いかかりそうな空気出してたんだよ？さつきまで。

あと二人共、美人ってヤツ？なんだからさ、こんな嵐の中にいつまでもいたら風邪ひいちゃうからね？それは俺、あまり嬉しくないよ？まあでも、そんな事はどうでもいいか。

ね？式の才姉サン？」

「知るか、そんな事。……やっと会えたな、浅上」

嵐の海に、白い装束の両儀式と、なんだか凄く、この場には不釣り合いな陽気さを持った少年がいた。

赤い革の上着がぱちぱちと雨を弾き、少年は雨に打たれるのを愉しんでいるように見える。

彼女は雨に濡れて幽霊に見えて、少年の方は、やっぱり雨っていいよねー、とどこかの普通にいる子供のような感じだ。少し、いや、か

なりおかしいが。

式と藤乃は互いに街灯の下に立ち、少年はその街灯の上に、如何なる手段を使つてか、座つて二人を見守る。

その見守っている少年の眼は、観客席でゲームの試合を見ている人間と同じだ。

そして、二人の距離は、そう。ちょうど十メートル程。

この豪雨と烈風の中、お互いの姿はよく見えたし、お互いの声もよく聞こえるのが不思議だった。

「両儀——式」

「大人しく家に帰れば良かったのに。おまえは血の味を知ったケダモノだ。人殺しを愉しんでる」

「——それは貴女でしょう。わたしは、愉しんでなんか、いない」
「どっちも同じような事をしてるのに、酷く食い違う意見だね、見解の相違つてヤツかな？」

藤乃は荒い呼吸のまま、街灯の上にいる少年の言葉を無視して、式を凝視する。

そこにあるのは敵意と殺意。彼女は静かに左手で自らの顔を覆った。

……指の隙間から、爛と輝く両目が覗く。

答えるように、式は右手にナイフを持った。

これで二人の対面は三回目。

この国には三度目の正直という諺があつたな、と式はつまらなげに

笑った。

それに対して街灯の上にいる少年は、確か二度あることは三度あるっていうのもあったよね、そこちらは本当に愉快そうに笑った。

少年の笑いに多少不愉快そうな顔をしながらも、式は思う。――
――この浅上藤乃は、十分な程殺人対象だ。

「まあそんな事はどうでも良い。……実感したよ。オレ達は似たもの同士だって。

ああ――――今のおまえなら殺してやる」

その言葉で、ふたりの枷は完全に解き放たれた。

SIDE：永

「ありや、見えなくなっちまったよ。追いかけるしかないね、こりや。」

ま、そんなワケでこの二人の戦い（というより殺し合い）を観戦してたんだけど、最初に式の才姉サンが左腕を捻じ曲げられた後、このままだと死亡確定だというのをすぐに悟った才姉サンが藤乃サンの視界から逃れる為に飛び降りて、しかも窓を割ってだよ？そのすぐ下に広がる駐車場へと行った。

んで、そこで俺が見たのは、

「あーあ、これはまた、捻れる捻れる。というかさつき式の才姉サンの腕も捻れてたよね？」

そこで見たのは、隠れた式の才姉サンを炙り出す為に、駐車場にあった鉄柱を悉く曲げようとする藤乃サンだった。

それにしてもね、さつき式の才姉サンの左腕、どう考えても捻れてたよね、あれどうしよう……、今すぐ治すのは無理っぽいね。今は殺し合いの最中だし、それに目の前でこんなに面白い事が起こっているのにそれを壊すなんて勿体ないしね。

あ、才姉サンが飛び出してきた。

「——そこ！」

藤乃サンも才姉サンに気付いたみたいで、その姿を視界に捉えていたけど、才姉サンはそれをもう壊れてるっぽい左腕を盾にすることで一時的にだけど無効化。

それを見て俺は、こりゃ決まったかな？と思ったけど、藤乃サン、貴女も中々しぶといですね。

なんと才姉サンの一撃を、怖いという感情のお陰で屈んで避けるのはね。

あ、式の才姉サンまた隠れちゃったよ、見に行ってみよう。

と、その前に、

「藤乃サン」

俺が突然呼びかけた所為だろうか、藤乃サンはかなり驚いてこちらを凝視していた。

というか俺の首が捻れてる。

「ねえねえ？イタイんだけど、やめてくれない？」

俺がそう言った所、藤乃サンの驚きはさっきよりも深まったようで最早驚きより恐怖といった方が良いね、アレは。

まあとにかくそんな表情でこんな事を言ってきた。

「そんな——どうして」

「生きてるの？って？さあなんでだろうね？自分で考えないと人間

の脳細胞って死滅するらしいよ？脳細胞の為に自分でも考えてみなよ」

「そんな事——」

まだ何か言いかけてるけど、まあ良いや、別にこんな台詞の一つ一つに意味があるわけじゃないしね？

そう思った俺は、何か言つてこようとする藤乃サンを置いて、今度こそ式の才姉サンの所へと向か————おうとしたら今度は左足が捻られた。

で、バランスを失つた身体は当然倒れ込むわけだけど、

「あのさ、そういう無駄な事をしなくなれば藤乃サンはもっと良くなると思うんだ。」

だって今は殺し合いの最中だよ？それなのに殺し合いの相手を蔑ろにして、あまつさえ観客に手を出すなんて、そんな事したら劇の役を降ろされちゃうよ？」

「なにをさつきから訳の分からない事を言ってるんですか……」

そう言ってくる藤乃サン、でもね？聞いてくるのはいいけど、聞きながら腕とか胴体とかを捻じ切るのやめてくれない？普通答えられないでしょ？

「え？ワケの分からないって何？というかさ、ホント、イタイってこれ。」

普通の人なら泣いちゃうよ？あ、普通の人間はこんな事になったら泣く前に死んでたね、これはうつかり」

そう言う俺の状態は、まあ、普通の人間が見たら卒倒するんじゃない？

だって首に両手足、その上胴体までバラバラにされた子供の死体が勝手に喋ってるようにしか一見、——イヤ何度見てもだけど、見えないからね。

藤乃サンもそんな俺の様子を見て瞳には若干怖さがあるように感じられる。

まあ無いかもしれないけどね？

それで、いつまでもその状態にいるワケにはいかないので身体を修復（かなりグロいので描写できません）していたら、

「だから言ったら、今日は安全じゃないって」

式の才姉サンがそう言いながら出てきました。

その顔はどこか呆れた感じで、俺の事を、バカを見る目？で見てきた。

「酷いなあ、確かにイタイけどさ？耐えられないようなモノじゃないよ？これ」

「うるさい、もうおまえは黙って後ろにいる」

才姉サンはそう言うと、まだ完全に修復しきつてない俺の身体を蹴りで（実は結構すぐ近くにいたんだ、驚きだよ）後ろの方に吹き飛ばした。

まったくさ、才姉サンも藤乃サンも、二人共俺への扱い酷いよね？

まあその間藤乃サンは全身確かに捻じ切ったはずの俺が平然と会話をしていた事で茫然自失になってたけど、今のでようやく自分を取

り戻したらしい。

才姉サンへの攻撃を再開していた。

そして才姉サンは才姉サンで、その“視線”を悉く殺しきってたけど。

でもさ、一つ言わせてもらっけどさ、その左腕、殺しちゃダメでしょ？治すの面倒でしょうが。というか勿体ない。

ばが^ん。

追い詰められた藤乃サンは、遂にこの橋自体を破壊し始めました。
いいね、そういうの好きだよ？俺。

捻れ始めた橋は、簡単に崩壊し、鉄筋は軋んで悲鳴をあげて、地面は斜めに傾斜して、所々の天井は崩れてく。

あ、才姉サン落ちちゃったよ。まあ大丈夫だよな？きつと。

藤乃サンは、呆然としてるけど。まあもう劇は終わっちゃったしね。
たぶんこの後橙子サンと黒桐サンがここに来る気がするから、外で待つてようか、うん、そうしよう。

そう考えた俺は、最後に崩れてくる建物の中、うつぶせに倒れてる藤乃サンの方を振り返って、

「お疲れ様でした。良い劇でとても面白かったです。

また機会があればこんな面白い劇を見せてくれる？」

そう笑顔で挨拶して、この崩壊してくる建物から去って行った。

空の境界 二次創作 第八話

SIDE：幹也

台風が都心を直撃している最中、僕は事務所に帰ってきた。

雨に濡れて事務所に入ると、橙子さんはぼろり、と啜えた煙草を落として出迎えてくれた。

「早いな。まだ一日しか経っていないぞ」

「台風が来るっていうんで、交通機関が麻痺する前に帰ってきたんです」

そうか、と難しい顔をして橙子さんは頷く。

何か、都合の悪い事でもあるのだろうか？

いや、今はそんな事より――

「橙子さん。永くんの家には行ってみましたけど、誰もいなかったんで諦めました。で、浅上藤乃についてですけど、彼女は後天的な無痛症です。四歳までは普通の体質だった」

「なんだ、永少年はいなかったか。だが浅上藤乃の事はどういう事だ？そんな馬鹿な話があるものか。いいか、浅上藤乃は痛覚麻痺を起こしているにも関わらず、運動麻痺を起こしていない。後天的というのならやはり脊髄空洞症あたりが有力だが、それでは運動能力に支障をきたすんだ。あんな感覚だけがない、なんて特殊なケースは先天的な物以外あるまい」

「ええ、彼女の主治医もそんな事を言っていました」

そして僕は、旧浅上……いや、浅神家での藤乃の話を端的に説明した。

彼女が十二歳の時に実家が破産し、それを分家筋にあたる浅上家が土地の利権目当てに借金を肩代わりし、彼女を引き取った事。

視神経脊髄炎——デビツク症の事や、浅上藤乃が人工的に感覚を無くされた事あたりになると、かなりハイになってアラキドンとかキニンドンとかいう、正直怪獣の名前としか思えない薬の名前を言っていた。

「つまり痛みをなくしてしまう薬なんですね？」

「直接的じゃないがな。たんに痛みをなくすのならオピトイドっていう麻薬のほうがいい」

そういつて橙子さんは、浅上家が藤乃の超能力を鬼子として封印しようとした事、そしてそれが逆効果でかえって藤乃の能力を強めてしまったことを語った。

そんな橙子さんの言葉は、……覚悟していたというのにショックだった。

「痛みさえしなければ——彼女も人を殺す事はなかったのに」

「おいおい、痛みを悪いものみたいに扱うな。痛みはいいものだ。悪いのはあくまで傷。前後を間違えてはいけない。私達には痛みが必要なんだ。」

傷は痛むのが正しいんだ、黒桐。それが無いものは人の痛みが分らない。それはあの永という少年も同様かもしれないがな」

SIDE：永

橙子サンや、黒桐サンから『税金の無駄遣い』そう言われていた大橋、ブロードブリッジはまるで巨人の手で絞られたみたいに歪んでいた。

そして俺がそんな中近くの塀の部分に座って豪雨に打たれながら捻れた橋を、ぼー、っとただ眺めていると、この嵐の中、橙子サンがバギーで駆けつけてきた音がした。

そして、やっと来たんだと思って俺が見に行ったら、そこでは橙子サン達が警備員ともめていた。

あ、式の才姉サンも出てきた。なんか片腕血まみれだね。

そして才姉サンに走り寄る警備員の人、まあ才姉サンが呆気なく当て身を食らわせて気絶させてしまった。

ありや？藤乃サン出てこないね？藤乃サンとはまだ繋がってるから死んではいないみたいだ。

あゝでも結構酷い怪我したんじゃないかなろうか。

……治しに行こう。式の才姉サンの方はたぶん橙子サンが義手ぐらい作るでしょ。

そう思った俺が、恐らくまだ藤乃サンがいると思われる建物の中に入って行った所、そこには仰向けになって転がっている藤乃サンがいた。

「んん？死んではないみたいだけど、傷が酷いなあ。それにまた無痛症？だっけ、になってるし。もういいや、この際だから傷も無痛症も全部治そう。もう藤乃サンは痛みがどんなモノか理解できたから、無差別に人を殺すような事はしないでしょ。何か左胸も無くなってるけど、これも治しちゃおうか。

今日俺を楽しませてくれた御礼だよ、藤乃サン」

俺はそう言いながら藤乃サンの身体に手を翳す。

すると、さっきまで傷だらけだった藤乃サンの身体が瞬く間に修復されていき、数秒後には何の傷も無い、完全に完治した藤乃サンがそこにいた。

さっきまでは心なし苦しそうだった呼吸も、穏やかなモノになっている。

「うん、これで大丈夫だよ。じゃ、橙子サンの所に行こうか。今日はありがとうね、藤乃サン」

そう、俺は再度藤乃サンに今日の劇の御礼を言って建物を出て、橙子サンの所に行った。

「で、永」

「なあに？ 橙子サン」

あのあと橙子サン達の所に行ったら俺はかなり黒桐サンに怒られた。なんでも、どうして藤乃サンが人を殺している事を知っていたのに止めなかったんだ、だそうで。

俺はその時、最初は聞き流そうかと思った。だってあれは本人の欲望に従った結果で、それはきっと正しい事だと思っているから。だけど、今でもその考えは変わらないけど、次からは積極的に人を殺したりするのを薦めないようにしようとは、思う。

だって、その事で怒ってる黒桐サンの顔はなんだかとても、悲しそ

うな、辛そうな顔だったから。

まあでも、薦めないにしても、これまで通り劇としては楽しませてもらうけどね？

それが“喜劇”になるか、“悲劇”になるかは別として。

「さつき黒桐にも散々言われていたから分かっているとは思うが、ああいう人間を誘い込んで人を殺させるような行為を愉しむんじゃない」

「分かっているよ。さつき黒桐サンに凄いい言われたからね。俺だって黒桐サンに嫌われたくない。

きつとそれは、この世界から面白い事が消えるのと一緒にだから」

だからそう言うてきた橙子サンにそう返したら少し面白そうに、へえ、意外だな、と言われた。

「何が意外なのさ、橙子サン」

「いやなに。少年、君のような存在は人間の言う事なんか気にとめる事などないと思っていたんだがな」

酷いね、橙子サン。いくら俺が人間じゃないっていつても、それは俺が人間の言う事を軽視する理由にはならないよ？

「酷い事言うね橙子サン」

「それに黒桐に随分執心のようじゃないか」

ん？それはまあ、ねえ？

「だって黒桐サンはきつと『特別』になれなくて『普通』になったんじゃない、彼は元から『普通』にしかない人間だ。

だから黒桐サンは誰の『特別』にもなれないと同時に誰の『特別』にもなれる。

具体的に言うなら、彼の知り合いは極限までに、本当に追い詰められた時に頼るモノは、神にでもこの『』であり根源の渦といわれている俺でもない、『黒桐幹也』に頼るのさ。だからそんな存在に嫌われるのは、ね？

まあ最近一人だけ俺の事を頼ってくれそうな人が出来たから、俺はとても嬉しいんだけどね」

俺がそう言つと、橙子サンはさも愉快そうに笑った後、そうか、じやあ私ももうどうにもならなくなったら黒桐に頼るのかな？と聞いてきたので俺は、ま、たぶんそうだと思うよ？と言つて返した。

そうして暫く、橙子サンのバギーの中で揺られながら俺と橙子サンは、

「それにしても今日の台風、凄く愉しいね。やっぱりこういう光景は胸が躍るよ」

「ん？君は台風が好きなのか？」

「うん。だってこんなに強い風が吹いていて、雨も凄いい勢いで降ってくる。普通の日にはこんな愉しい事味わえないよ」

「君、奇怪な趣味をしているな」

「ま、それは橙子サンも同じでしょ？だって魔術師に人形師までやつてる人って十分奇怪でしょ？」

「まあ、普通にはいないだろうな。というかいたら商売あがったりな部分があるしな」

「でしょ？」

轟々とふりつける雨と風が鳴り響く中、そんな会話を俺達は事務所に着くまでしていた。

家に帰った後、織の姉ちゃんにこの事を話したら、オレも行けばよかったかな……、なんて言ってたけど。

……ごめん姉ちゃん、それはやめてくれ、たぶん一発で黒桐サンにバレルから。

空の境界 二次創作 第八話（後書き）

痛覚残留、了

空の境界 二次創作 第九話（前書き）

俯瞰風景、開始

空の境界 二次創作 第九話

SIDE：永

相も変わらず、暇な一日が流れている。

俺は居間でごろごろ、姉ちゃんも寝転がっているのでその腹に頭を乗せて。

これはあの藤乃サンの事件？っていうのかな？が終わった後やり始めたクセ？のようなモノなんだけど、最初の頃は姉ちゃんは何かと俺の頭を落とそうとしてたけど、今では慣れたのか、頭を乗せても何も言ってこなくなつた。おかげで俺は最近の日課といえば寝転がってる姉ちゃんの腹に頭を乗せる事になってしまっている。

いや、気持ちいいから良いんだけどね？でもそろそろ、何か刺激が欲しいなあ。

そう思つてテレビを見ていたら、ちょうどニュースで飛び降り自殺の知らせが出ていた。

「へえ、世の中には自分から死ぬ人もいるんだね。これも面白い事のひとつとして理解していいのかなあ。ね？姉ちゃん」

そんな俺の問いに姉ちゃんは少しの間考えた後、言う。

「まあおまえが面白いと思うなら面白い事で良いんじゃないか？」
「ま、究極的にはそうなんだけどね？でもやっぱ、自殺を愉しむよりも自殺する理由を聞いて愉しもうかな？うん、たぶんそっちの方

が良いよね?」

俺のそんな言葉に姉ちゃんは、

「ああ、まあな」

と答えてニュースに興味を失ったのか、目を閉じて眠ろうとし始めた。

だけど……、

「寝かせないよ、姉ちゃん」

ボスッ、

「ぐっ……、」

そう言っただけでその音と共に、俺は頭を姉ちゃんの腹に頭突きを食らわせる。しかも結構強めに。

で、当然無防備だった姉ちゃんは、その頭突きを食らってうめき声をあげる——、と思っただけで俺の頭に拳がふってきた。

しかもこれたぶん本気だね。

でも俺だっていつまでもそんなに食らってるわけじゃない。

平然と、余裕を持って避けた。んで、その俺を狙った拳はそのまま俺の頭のあった所に向かって——、

ガン!

「つつう~~~~!?!」

床に当たるワケですね、ハイ。

今の姉ちゃんは腹の痛みと俺を殴ろうとした拳が床に当たった事で二重苦だ。

流石にマズいだろうと思って声を掛けることにする。

「ダイジョブ？姉ちゃん。いきなり床を殴り出そうとするから驚いちゃったよ。ストレスでも溜まってたの？」

そう言う感じのトボケた言い方だけど。

「永……おま……え……分かって……て……やって……る……だろ……」
「え？まあね？だって姉ちゃん何気に力強いからね。俺も殴られるのイヤだし」

「こ、の、野郎……」

そう言いながら俺の事を睨みつけてくる姉ちゃんは、余程痛かったのか涙目になって腹をおさえながら息も絶え絶えな様子で俺に言うてくる。

ああ、可愛い。

「そうやって痛さにうめいてる姉ちゃんも可愛いよ、うん。」

あ、でも野郎っていうのは頂けないかな、もうちょっとその所の言葉遣いを直したほうが良いかな？ん？でもそうか、そうしたら姉ちゃんらしさが無くなっちゃうかな？ね？」

だけどそう俺が聞いても姉ちゃんは答えず、代わりにうめき声が聞こえるだけだった。

「ダイジョブ？なんか本当に辛そうだね？」

「……そりゃあアレだけ思い切り頭突きされたからな、目茶苦茶痛いんだよ」

え、それは悪い事をしたなあ。

「ごめんね姉ちゃん。代わりに痛くないようにお腹擦ってやるよ」

「え……？」

だから俺は痛がつてる姉ちゃんのお腹を擦ろうとしたんだけど、姉ちゃんは体をよじって触らせてくれなかった。

「なんで体よじるの姉ちゃん？お腹痛いんでしょう？だから擦ってあげようとしてるだけなんだけど？」

「い、いやいい、いい。そ、そんな事なくてもオレは大丈夫だから」

「ホントに？なんか顔も少し赤いんだけど、熱でもあるの？そうだとしたら病院行かなきゃね」

「いや、本当にオレは平気だから、な？だから腹を擦ろうとするのはやめてくれ」

姉ちゃんはその言うけど、でも顔はまだ心なしか赤いし、腹も少し楽にはなつたみたいだけど痛そうだ。

でも姉ちゃんがこれ以上言っても聞かなそうだったので、俺が諦める事にしたらようやく姉ちゃんは落ち着いてくれた。

「はあ、姉ちゃんも頑固だね？そんなに俺に腹を擦られるのイヤだった？」

「え？い、いやそうじゃなくてだな……あの、その……なんだ？」

そう言つてこちらを見てくる姉ちゃんの顔はまた先程までみたいに赤くなっている。

ああ、なんだ、そういう事か。

「つまり姉ちゃんは照れてたつてワケだ。ふんふん、納得納得」
「~~~~~っ!!」

おお、姉ちゃん更に赤くなつていつの間に敷いたのか知らないけど布団の中に潜り込んだじゃったよ。

うゝん、そんなに恥ずかしかったのかな？聞いてみよう。

「姉ちゃん。そんなに恥ずかしかったの？」

「あつ、当たり前だろっ!!」

俺が聞くと、そんな声だけが布団の中から響いてくる。

「でもいつもお腹の上に頭乗つけてるじゃんか。平気でしょ？」

「腹の上に頭乗つけるのと腹を擦られるのは違うんだよっ！バカッ」
ふう……、なんか変なところで子供っぽいんだから。こんな事で拗ねるなんてさ。

まあこうなつたらしばらくは出てこないだろうし、その間は外に散歩に行こうかな、暇だし。

「じゃあ姉ちゃん。俺はしばらく外に行つてくるから、帰ってくる頃には機嫌直しとしてよ？」

そう言つて俺は立ち上がつて部屋から出る。
部屋から出る直前に姉ちゃんが、ボソツと、

「……すぐに戻ってこいよ」

そう言った声がした。

SIDE：式

八月も終わりにさしかかった夜。
いつも通り、私は散歩をする事にした。

夏の終わりにしては肌寒い外気の中、静まり返った街の中を、私は行くあてもなく歩く。

月光は青々と夜を浮き彫りにして、全てが麻酔されたこの世界。

そんな中を私はただ、ただ、歩く。

そうして歩いていくと、真夜中だというのに人に出会う。

俯いて、ただ早足で進んでいく誰か。

自販機の前でぼんやりとする誰か。

コンビニの明かりに集う、幾多もの誰か。

そこには何か意味があるのだろうかと探ってみても、所詮は部外者の私にはその意味はちつとも掴めない。

「あ、式の才姉サン。またこんな時間に出歩してるの？お肌荒れちゃうよ？女性なんだから肌は大事にしないと。黒桐サンもそういうところ気付いてあげなきゃね。あ、そうだ、今日一緒に歩こうよ。たまには良いよね？」

この、ただひとりの少年を除いて。

……

……

…

——二年前。高校二年への進級が間近だった両儀式という私は、交通事故に遭ってそのまま病院に運ばれた。

雨の日の夜の事だ。

幸い特に外傷もなく、出血も骨折もない綺麗な事故だったが、その反面、ダメージは頭のほうに集中したのだろう。

以来、二年間の昏睡状態が続き、目覚めたのはつい二ヶ月ほど前だ。

医師達は死者が蘇生するぐらいのショックを受けたらしく、つまり私にはそれほどまでに回復の見込はなかったという事だった。

それは私自身も同じで、そこまで大げさなものではないけれど、あの衝撃を受けていた。

それはまあ、自身に確証が持てない、とでも言うのだろうか。

会う人間も、記憶にあるのと同じ人ばかりで、だから自分の記憶にあるかつての私がつっていたような行動をとる。

だから両親にも知人にも、彼らの知っていた両儀式として触れあえるし、彼らも私をそう認識している。

しかしそこには今の私の意思はない。

いや、あるのだろうが実感が湧かないのだ。

両親知人、その誰もをかつての私は知っていて、その記憶もちゃんとあつて。

なのに私にはそれを私が過ごしていたという実感がない。

それはまるで擬態みたいな生だった。

タネの明かされていない手品を見ようとしても、予め全て識っている。タネの明かされた手品は、もう驚く事は出来ない。

だけどその中でひとりだけ、例外がいた。

それが、

「ねえ、さつきからずーっと黙って歩いてるけど、俺の話聞いているの才姉サン？」

先ほどからずっと、私の横を歩いている永という名の少年だ。

「悪いな、聞いてなかった」

「えー、酷いなあ。だからね？七月の終わりぐらいから橙子サンに金くれって頼まれてさ、今株やってるんだけどこれがまた大当りしましたー——」

そういつて、永は何だか私にはよく分からないような株の話をずーっとしてくる。

永は幹也と同じく、退院してから結構頻繁に会っているけど、というよりトウコの所に行けば大抵いるだけだけど、私の記憶には幹也の姿はあっても、彼の姿だけはなかった。

だから私の記憶に永が最初に出てくるのは私が目覚めた日と同じ。

だけどその時に会ったはずの彼の記憶には、“いた”という記憶はあっても、何を“したのか”という記憶はない。

つまり永は、私にとって唯一タネの“明かされていない”手品のよ
うなモノだった。

だから、そうして生きている実感も持てない私は、かつての私らしい行動を繰り返し、昔の自分に戻れるかもしれない、こうすれば、この夜歩きの意味も分かるかもしれないと思い、私が目覚めてから出会った、永という名の少年とともに夜歩きをする。

……ああ、そうか。

だとすれば私は、かつての私に恋してるといえなくもないワケだ。

そしてそれを、この少年が見守っているってところかな。

——まあ、一緒に歩いているのは今日が初めてなのだけれども。

………

……

…

随分と長い間永と歩いていた気がしてふと顔を上げると、そこは噂に聞くオフィス街だった。

行儀よく同じ高さのビルが並んでいて、ビルの表面は一面の窓ガラス。

今は月明かりだけを反射していた。大通りに並ぶ高層建築の群れは、怪人の徘徊する影世の世界めている。

その奥に、一際高い影がある。二十階以上の梯子のような建物で、見たらそれは月まで届けとばかりに伸びる細長い塔に見えた。

「あのマンションって巫条ビルっていうんだよね？」

「ああ」

マンションである巫条ビルに明かりはない。住民は皆眠りについているのだろう。時刻はじき午前二時を回ろうとしているのだ。

その時——つまらない影が網膜に映りこんだ。

人型らしいシルエットが視界に浮かぶ。

それは比喻ではなく、本当にその少女達は浮いていた。

「あゝ。今日も浮いちゃってるねゝあの娘達」

風は亡く、夜気の冷たさは夏にしては異常だ。

うなじの骨が、寒さによって針ときしむ。

もちろんそんなのは私だけの錯覚。

「ああ、そうだな。今日もいる」

不快だが、見えるものは仕方がない。

そうして、私の隣でのんきに声を上げる永に返して、私は月にもたれるようにして飛行している、件の少女を見上げていた。

………

……

…

空の境界 二次創作 第十話

——イメージはとんぼ。忙しく飛んでいる。

一羽の蝶がついてきたけど、翅の速度は下がらない。蝶はいつしかついてこれなくなって、視界から消える頃、力なく落ちていった。弧を描いて落ちていく。

鎌首をもたげた蛇のような落下は、けれど折れた百合に似ていた。

その姿が、ひどく哀しい。

一緒に行く事はできなくても、せめてあと少しは傍にいてあげたかった。

でもそれは不可能だ。だって地に着がっていない自分は、立ち止まることさえ自由ではなかったのだから。

S I D E : 永

俺は昨日に引き続きどうにも暇だったので、橙子サンの事務所に別段用事もないけど行って誰かと雑談でもしようかと思ったら、式の才姉サンは橙子サンと話してるし黒桐サンは寝てる。

……、やる事がない。

仕方がないので黒桐サンが起きるまで待つ事にする。

そろそろ起きるでしょ……………あ、起きた。

「おはよう黒桐」

「随分と気持ち良さそうだったね」

「すいません、眠ってしまったみたいです」

いや、それぐらい判るから。

「つまらん事を説明するな。見れば判る」

そう橙子サンはきつぱりと言い捨てて、口に煙草をあてる。

「起きたなら茶をいれてくれ。いいリハビリになる」

「……………」

あゝしかし、暇だ。

「式は何か飲む？」

「オレはいい。すぐ寝るから」

まあ確かに式の才姉サン眠そうだね。やっぱりあんな時間に散歩してるのが良くないよ、うん。

「永くんは？」

「俺は、あれ、特にはいらなかな。強いていうなら話し相手になつて？今日皆寝るか他の人と話すかしてるせいで物凄く暇なんだよね」

「はは、わかったよ」

……………

……

…

で、事務所兼橙子サンの私室からとなりの台所っぽい部屋にきた。

ここは何か、一般的な家庭の台所というよりも、正直実験室にしか見えない。蛇口も三つ、横に並んでるし。

だから前に黒桐サンに素直にそう言ったら黒桐サンもここに来た当初同じような事を思っただけ、まあようは学校の水飲み場だね、

と言っていた。

三つの蛇口のうち、二つは針金で縛られて使用禁止になっている。理由なんてわかるワケもない。

黒桐サンに聞いても理由はわからず、橙子さんは判りやすくいいだろうつて言っただけだね、という事しかわからなかった。

でもこれは判りやすくてもあまり好めるような状態じゃないと思う。なんか寂しいよね、こういうの。

そういえば何で黒桐サンはここに就職してるんだろ。

唐突に気になったので今コーヒーマーカーを作動させている黒桐サンに聞いてみる事にした。

「ねえ、何で黒桐サンはここに就職してるの？まあ正直就職って言うていいのか位微妙な所だけだよ」

「ん？ああ、それはね――」

そういつて説明し始めた黒桐サンの話によると、

ここに就職したきっかけは、どうやら橙子サンの作品に惚れ込んでしまったかららしい。

式の才姉サンが一人で十七歳のまま時間を止めてしまった後、黒桐サンは目的もなく高校を卒業して大学生になった、らしい。その大学に入るのは式の才姉サンとの約束で、例え式の才姉サンが回復の見込みのない病状にあったとしても、その約束だけは守りたかったんだそうだ。

けどその後は何もなく、大学生になった黒桐サンは、ただカレンダーの日付だけを追っていく事になる。

そして、そうやってぼんやりと過ごしていた時に、友人の誘いで何

かの催し物に足を運び、そこで一体の人形を見つけたらしい。

それはヒトの道德ぎりぎりまでに迫った、精巧な人形。

人間をそのまま停止させたような形は、同時に、決して動かない人型である事を明確に提示している、当時その人形を見た黒桐サンは、そう思ったそうだ。

明らかに人ではなく、同時に人にしか見えないヒトガタ。今にも息を吹き返しそうな人間。

けれど初めから命などない人形。

生命にしか持ちえない、しかし人間では届かない場所。

その二律背反に、黒桐サンは虜になった。

理由はおそらくその在り方全てが、あの時の式そのものだったからだろう、そう黒桐サンは言う。

人形の出展者は不明、パンフレットにはその存在すら載っていない。そんな存在なのに黒桐サンはそれを必死になって調べて、そしてある、業界では曰くつきの人物に辿り着いた。

制作者の名前は蒼崎橙子。

橙子サンは、言うなれば世捨て人で、人形作りが本職だというのに建物の設計もやっているらしい。

とにかく物を作る事ならなんでもやるが仕事を引き受けることは滅多になく、いつも自分から“こんな物を作ります”と相手に売り込みにいき、報酬を前払でもらって制作にとりかかるといふ、それがわかった時黒桐サンは、余程の道楽者か、あるいは変人かと思ったそうだ。

そして興味はより深まっていき、よせばいいのに黒桐サンはその変人の住みかを調べあげてしまった。

それは都心から離れた、住宅地とも工場地帯ともいえない、なんとも半端な住所だった。というよりここなだけどね？

その蒼崎橙子の住みか（つまりここ）は正しく廃墟というべき所だった。

それはおよそ人の住むような所ではなくて。
だから廃墟というのがしっくりくる。

そこは数年前の景気がいい時に工事が始まり、景気が悪くなったので途中で放置された本当の廃ビルで、とりあえず建物としての形は出来ているが内装はまったくなく、壁も床も素材が剥き出し。

完成時には六階建てになる予定だったらしいが、四階から上はない。工事が途中で放棄された為か、造りかけの五階のフロアが屋上らしきモノになってしまっている。

ビルの敷地は高いコンクリの塀で囲まれているものの、侵入するのは簡単で、ご近所の子供達が秘密基地にしまったのが奇跡と言えるぐらい、ひたすらに怪しい建物。

そう、黒桐サンはこの事務所のある建物の事を評した。

「それで、その買い手のいないまま放置されていたこのビルを橙子さんが買い取ったらしいよ」

「へえ、随分変わってるね、そんな状態の所を買うなんてさ」

「まあそれが橙子さんだからね。永くんも知ってるでしょう」

「まあね」

でもって話を戻そう。

結局その後、黒桐サンは橙子サンと知り合って、入ったばかりの大学を辞めてここで働く事にしたらしい。

「それに信じられないけど、給料はきちんと出てるしね」

ちょっと待って。

「黒桐サン、それ俺が橙子サンに渡してるヤツだから」

そこだけは譲れない。

俺が先月の終わりから始めた株は、今では元の二千倍、二十億近い資産になっている。

だけどそれに目をつけた橙子サンが最初はあまり期待していなかったのか百万とか言ってたクセに、今では毎月その十倍を要求してくるようになった。

この欲の塊め、まあ良いけどね。別に。

問題なのは橙子サンはそれをたまに入ってくる臨時収入とその毎月俺が渡しているお金の殆どを、自分の研究とか材料費に使ってる事で、黒桐サンに支払われている給金は全て、その中から余裕が出来たから支払われているという事だ。まあそれにしても大した問題じゃないんだけどね？

黒桐サンはどうやら俺がその事を知らなかったようでかなり驚いていた。

「え……？じゃあ僕の貰ってる給料って……」

「そうなんだよ。アレ橙子サンに渡したヤツから余ったのを黒桐サンに渡してるの」

「……はあ、何やってんだ橙子さんは」

「まあまあ、気にしない気にしない。それに黒桐サンの給金もきちんと支払われているなら良かったじゃん」

「まあ、そうだけど……。ありがとう。永くん」

「ははは、どういたしまして？」

そうして会話を終えると、

「——遅いよ黒桐」

隣からそんな催促が届く。

見れば、とっくにコーヒーマイカーには黒々とした液体が満たされていた。

………

………

…

「昨日で八人目らしいね。世間もそろそろ関連性に気付いてもいい頃だろうに」

「そうだね。あれだけ続くと流石に誰か気付いてもいいよね」

灰をもみ消しながら唐突に切り出す橙子サンにそう相槌をうちながら、俺は適当な所に座ってこの間買った本を読んでいる。題名は「アーサー王物語」。古本屋で見つけたので興味本位に買ってみたんだけど、中々に面白いので何回か読み返している。

まあそんな事は置いて、橙子サンが言っているのはここ最近に連続している女子高生の飛び降り自殺の事だろう。ここ最近に知った事なんだけど、どうやら橙子サンは悲惨な話題が好きらしい。

「八人目……？あれ、六人なんじゃないですか？」

「君が惚けている間に増えたんだ。六月から始まって、月に平均三人か。あと三日以内に追加一人が出るかな」

「出たら出たで面白そうだけれどもね？とりあえずこれ以上連続して起こるのはやめてほしいかな？だってこの本読めなくなるし」

「永、お前その本今月の初めあたりからずっと読んでるじゃないか。いい加減飽きないか？」

「いいの。この本は感動できるよ？アーサー王はまあ、基本だけどこのエクスカリバーを湖に返せとか言っている所なんて中々だよ？アーサー王は死ぬ間際にベディヴィアに、湖に剣を返せ、と命じられる。しかしベディヴィアは王に返せといわれたこの剣を湖に投げ入れることに何の得があるうか、と思って剣を隠して王に、剣を湖に返しました、と嘘をつく。

その後何度か言われてようやく剣を湖に返すのだけでも、ほら、この時点で人間の欲の深さが現れてるように感じられない？」

「そののどこが感動できるんだ？」

俺の力説に橙子サンは、やれやれ、といった感じに肩を竦める。

「えー？だってさ、アーサー王は敬愛すべき理想の王として描かれているし、出てくる騎士達も皆、王を敬愛している。

なのに王に剣を湖に返せといわれたベディヴィアは、そんな王の命令を聞いても何度目かまで目先の欲に目を眩ませて剣を湖に投げ入れる事が出来ない。

俺はそんな人間の姿に感動するワケですね、ハイ」

「よく分からね、お前は」

失礼だね、橙子サン。

そうやって俺と橙子サンが会話していると、黒桐サンが話の流れを元に戻そうとしたのか声を上げた。

「ま、まあでもようは関連性はないって話ですよ。自殺してしまった娘たちはみんな学校も違うし、交友関係もなかったって。まあ警察が情報を隠蔽してるだけかも知れませんが」

あれ？黒桐サンが人を無闇に疑うなんて珍しい。

「ひねくれた事を言う。黒桐らしくないな、無闇に人を疑うとは」

橙子サンも俺と同じ事を考えたらしく、その顔は意地悪く笑っていた。

「……だって遺書が公開されていないでしょう。六人、いや八人です。それだけの数なら一人ぐらい遺言らしい物を公開してもいいでしょうに、それをひた隠しにしてる。これって隠蔽でしょ？」

「だから、それが関連性だ。いや共通点の方が正しいか。八人中、大半が死亡者自ら飛び降りる現場を複数の人間に目撃されているし、彼女の私生活にはなんの問題も浮かび上がらない。薬をやっていたとか、怪しい宗教にかぶれていたという事もないわけだ。極めて個人的な、自分そのものに不安を抱いての突発的な自殺であるのは疑いようがない。故に残しておきたい言葉は無く、警察もその共通点

を重要視していないんだろうね」

「……遺書は公開されないんじゃないんで、初めから用意されてないって事ですか？」

黒桐サンはそんな橙子サンの説明を聞いて半信半疑のようだ。

「そそ、そういう事。まあ、それが完全に確定しているワケではないけれども」

黒桐サンは俺のそんな台詞を聞いてコーヒーを飲みながら思考の海に入ってしまった。

遺書がないのは何故か？遺書は極論でいうのならば未練という事だ。そして飛び降り自殺は死んだ事さえ明らかにならない完全な自殺ではなく、人目につく、それこそ遺書のような自殺は何かしたい事がある故の行為ではないのか。

「幹也、飛び降りには八人で終わりだぜ。この後にはしばらく続かない」

そんな、ともすれば暴走しそうな黒桐サンの思考を遮るようにして式の才姉サンが話に入ってきた。

「終わりって、わかるの？」

そう言って聞く黒桐サンに、式の才姉サンはああ、と遠くを見ながら頷く。

「見てきたから。飛んでいるのは八人だった」

「そつえば八人飛んでたね。あの娘達」

「ほう、あのビルにはそれだけいたか。式には初めから人数は判っていたんだな」

「うん。あいつは始末したけど、あの女たちはしばらく残っていると思う氣にくわないけどね。——なあトウコ。なまじ飛べちまうと人間ってというのはあんな末路を迎えちまうものなのか」

まああれは飛べるといふより飛んでしまった、の方がしっくりくるけどね。

「どうだろうな。個人差があるからはつきりとは言えないが、過去、人間だけの力で飛行を試み成功したものはいない。飛行という言葉と墜落という言葉は連結だ。」

だが、空に憑かれた者ほどその事実が欠落していてね。結果、死んだ後も雲の上を目指して飛行するはめになるわけだ。地上に落ちることもなく、空に墜ちていくように」

「そしてそうなった者は永遠に地上に戻れない。そうなった者は、ただ永遠に空から地上を俯瞰する事になる」

「そういう事だ」

まあ、そうなんだけど、

「でも人によつては例えそうなるとしてもそれを選ぶ人もいるよ？それはもう空に憑かれたというよりも、空に恋したつて言つた方がいいんじゃない？だからパイロットの夫を持つ妻が空を愛する男を呪う指輪を作つた、なんて話結構有名でしょ？男は空に恋をして、女はそれを呪うワケだ。まあ現実には男に限つた話でもないと思うけどね？」

「なんだ？永は随分ロマンチストなんだな？」

「いやロマンチストつてワケじゃない、と思うよ？たぶんだけどね？」

そんな風に俺に意地悪く口を歪ませながら言ってくるけど、実は橙子サンもロマンチストなんじゃない？言わないけどね。

式の才姉サンは納得いかなげに顔をしかめてるね。

……怒ってる気がするのには気のせいかな？まあたぶん気のせいじゃないよね？

「あの、すみません、話が見えないんですけど」

「うん？いや、例の浮上ビルの幽霊の話さ。もっともアレが実体だったのか只のイメージだったのかは、実物を見てみないとかなともな。暇があれば見にいこうとは考えていたが、式が殺してしまったのでは確かめようがない。……まったく、永のせいで話がズレたじゃないか」

「酷いね？橙子サン。あ、でもまだ確か本体は生き残ってるよ？それは俺が保証する。生き残ってる理由は現地で考えてね？きっと橙子サンなら解るはずだよ」

「ほう、そうか、これは楽しみが増えたな。なら尋ねてみるとするかな」

黒桐サンはそんな俺たちの会話を聞いて、……ああ、やっぱりそっちの話かって顔をしてる。

でもね？それは三週間も昏睡状態だった黒桐サンに俺達がされる顔じゃないと思うんだ。

まあ、確かに橙子サンと式の才姉サンという組み合わせじゃ仕方ないのかもしれないけど。

「で、なんだったか。……ああ、式が巫条ビルの屋上に浮いている少女を見た、という話は聞いているだろう。その話しには続きがあるってな、少女のまわりには人型らしきモノがせわしなく飛行していたそうだ。巫条ビルから離れない、という事からあそこが網になっていたんじゃないかと話をしていてね」

橙子サンの話の奇抜さと難解さはますますその色を濃くしていき、それに比例するように黒桐サンの顔には解らない、という色が濃くなっていく。

そんな顔色は橙子サンも判るようで、簡潔にまとめて説明した。

「巫条ビルには一人の浮いている人間がいて、そのまわりには飛び降り自殺者になってしまった少女達の姿があった。この八人の少女達は幽霊めいたものだろうね。生きて浮遊していたのは一人だけ。話としてはそれだけの、簡単な構造だ」

ま、今回の怪談は橙子サンの言うように、話としてはそれだけの、酷く簡単なモノだったんだ。

………

……

…

空の境界 二次創作 第十一話

SIDE：式

——うなじの骨がシン、と軋む。

震えは外気の寒さからくるものなのか、内気の寒さからくるものなのか。

判別のつかないそれを放っておいて、両儀式は悠然と歩を進めた。その隣には一人の少年もいる。

巫条ビルに人の気配はない。

午前二時、白ばんだ電灯だけがマンションの通路を照らしている。

クリーム色の壁は電灯に照らされ、通路の奥まで続いて見えた。闇を完璧に払拭する人工の光は人間味がなく、払拭すべき闇より不気味だった。

「やっぱり人間は面白いね。駆逐するべき闇よりまあお払拭すべき人工の光で安心しようとするなんてさ」

式はそれを無視する。

そしてカードチェックの玄関を素通りして、エレベーターに二人は乗り込む。

中は無人。内部には鏡が張り付けられており、利用者の姿を見せるという趣向がこらしてあった。

そこには、二人の人物がいる。片方は浅葱色の着物の上に赤い革製の上着を羽織った、げだるい目をした人物。もう片方はまだ夏の終わりだというのにフード付きの黒い膝のあたりまであるコートを着た、まだ小学生ほどと思われる背丈の少年。

着物の人物は何にも関心がない、呆とした瞳。

コートの少年は何か面白いモノが見れるかもしれない、そんな期待する瞳。

式は鏡に映る自分と向き合ったまま、屋上へ通じるボタンを押した。静かな機械音と共に、二人の周囲の世界が上がっていく。機械仕掛けの箱はゆるりと屋上へ辿り着くだろう。

わずかな時間だけの密室。今この外で何が起きていようと式には何の関わりもなく、関わりようがない。その実感が、空虚な筈の心にわずかだけ染み込んだ。

「昇降機の浮遊感ていいよね。何かこう、自分は今浮いてる、みたいなの？」

「うるさい」

「ごめんな式の才姉サン。何しろ俺はこの感覚が好きなんで、つい言ってしまったみたいだ」

この少年にとっては、そうでもないみたいだが。

……

……

…

音もなく扉が開く。

その先は一変して明かりのない空間だった。屋上に通じる扉だけがある小部屋に出ると、式と永を残してエレベーターは一階へと下りていった。

電灯はなく、周囲は息苦しいほどに暗い。

足音を響かせて小部屋を横断し、屋上へ通じる扉を開ける。

——暗い闇が、昏い闇へとすり替わる。

視界いっぱいには街の夜景がとびこむ。

巫条ビルの屋上は、特徴のない作りだった。剥き出しのコンクリートが真っ平に続く床と、周囲に張り巡らされた網目状のフェンス。

今まで二人がいた小部屋の上には給水タンクがあるだけで、他に目につくものは何もない。

作り自体は何の変哲もない屋上。

ただ、その風景だけが異質だった。

周囲の建物より十階分は高い屋上からの夜景は、綺麗というより心細い。

細い梯の上に登って、下界を見下ろしているようだ。

「ここは他より高いからかな？夜景が美しいものだね。まるで宝石の散りばめられた海の底のように見えないかな？天も地も。うん、今度来る時は姉ちゃんと来てみようかな？あ、勿論今夜みたいな物騒なのは無しでね？」

暗い、光の届かない深海めいや夜の街は、たしかに美しい。街のそこかしこに灯る光は深海魚の瞬きに似ている。

——自分の視界が世界の全てだというのなら。

たしかに今、世界は眠りにっている。

おそらくは永劫に、おしむらくは仮初めの。

その光景そしてその静けさはどんな寒さより心臓を締め付けて、痛いくらいだ——

そんな眼下の街並みと対するように、夜空の冴えも際立っていた。

街が深海なら、こちらはただ純粹の闇。その闇に、宝石をばら撒いたような星々が煌めいている。

月は穴。式は昔、両儀の家で聞かされた事があつた。

曰く、月は異界の門だという。その、神代より魔術と女と死を孕んできた月を背に、ひとつ、人型が浮遊していた。

その周囲に、八人の少女を飛行させて。

………

……

…

S I D E : 永

「おおゝ何かこう、あれだね。普段あまり目にかかる光景じゃないだけに綺麗だね、ああいうの」

俺が今見ているのは、夜空に浮かぶ八人の少女、その中央にいる白い影だ。

その白い姿の影は、たぶん女の人、だと思う。

全く汚れない、むしろ病的なまでに綺麗な白い衣装と、腰のあた

りまで届く黒髪。

でもあの、なんて言ったらいいのかな？……ユウレイサン？

ユウレイサンの着ている装束からのぞく手足は細くて、このユウレイサンを一層……何だっけ？たおやか、とても言うんだっけ？に見せている。

細い眉と冷たくかげる瞳は、絵の中の登場人物みたいに見えなくもない。

年は二十代前半かな？あ、でもあれは零体だから年って概念はないのかな？でも本体の方もたぶんあれ位の年齢だよな？

あー、でもさっき言ったユウレイサンっていうのはあれには当て嵌まらないかもね？人間的にはどっちもユウレイなんだけれども、俺的にはまわりを飛んでる八人の娘達の方がユウレイっぽいかな？実際飛び降り自殺して死んだみたいだし。

だとしたら……巫条サンと呼ぶ事にしようかな？やっぱり。

でもああやって月を背にして飛行している光景ってどこか心奪われるモノがあるよね。

うん、幻想的というのかな？

「ふん——たしかに、こいつは魔的だ。」

そんな事を考えていたら、俺の隣で式の才姉サンがそう嘲るように呟く。

うん。確かにアレには魔的な魅力はあるね。だから俺は式の才姉サンにこう返す。

「そうだね」

でも、あの姿は、どちらかというと髪以外は全部が病気で、無事で健康体なのは髪の毛だけでも見えるよ？

「なら、殺さなくっちゃな」

「という事は劇の始まりかな？期待してるよ？才姉サン？」

そんな俺達の呟きに気付いたのか、彼女——巫条サンは視線を下界へ下げる。

こんな、地上七十メートルを超える巫条ビルの屋上からさらに四メートルの高所にある巫条サンと、それを見上げる式の才姉サンの視線が交錯する。

二人の間に交わす言葉はなく、通じる言語もない。

才姉サンは上着の内側からナイフを取り出す。それは刃の部分になり長くて、正直柄の部分は掴めればそれで良いという、味気ないようにしか見えない凶器^{モノ}だった。

上空の視線からは殺す気があるのかな？まあよくはわからないけど殺気みたいなモノを感じた。

ずっと、白い装束が揺れ、巫条サンの指先が才姉サンに向けられる。

やっぱり、

「あの手足つてき、病人みたいだよ。例えるなら——そうだね、
単なる骨か、百合、だね」

風も亡い、そんな夜に声は長く中空に残響する。

……

……

…

SIDE：OTHER

差し向けた指に殺意が籠もる。

白い指先はぴたりと式に向けられた。

ぐらり、と式の頭が揺れる。細い体は崩れ落ちるようになたたらを踏
んだ。

だが、一度だけ。

「
」

頭上にいる女——巫条霧絵はそれで微かに怯んだようだ。

貴方は飛べるのだ、という暗示が、この相手には通じない。

相手の意識そのものに『飛んでいた』という印象をすり込むそれは、暗示の域を超えて洗脳の業にまで達している。抗う事は出来ない。人は結果として本当に飛行を実践しようとしてしまうか、その事実を信じる事ができずに、それでも自分は飛べるのだという確信に満ちた確かな実感に恐れをなして屋上から逃げていく事になる、そんな、避ける事の叶わない暗示。

それを、式は軽い目眩だけでやり過ごした。

そしてさらに、その相手の傍らにいる子供からは、まるで何も存在していない闇から生まれた時から見つめられているような重圧を感じる。

あの子供は危険だ、だが同時にこちらが手を出さなければ絶対に何もしてこないだろうという確信を、巫条霧絵はその子供に抱く。

だから、とりあえずあの子供は放っておき、巫条霧絵は今自分に対して害をなす存在である式に意識を集中する事にした。

「――」

接触が浅かったのだろうか、と巫条霧絵は訝しみ、もう一度暗示を試みる。

今度はより強く。

“飛べる”などという薄い印象ではなく、“飛ぶのだ”という確固たる印象にして。

.....

.....

...

SIDE：永

そして俺の前では才姉サンと巫条サンの殺し合いが始まる。

才姉サンは空中に浮いている巫条サンの死の線を視て何処を切るのが一番いいかと判断したようで、右手でナイフを掲げた。柄を逆手に持ちながら。

だけどその才姉サンの手が止まる。あれは——洗脳の類なのかな？いや、アレはもう呪詛、と言うべきかな？でも残念だったね、式の才姉サンには、

「冗談」

そう言いながら才姉サンは今度は左手を持ち上げる。

「そんな憧れは、私の中にはないんだ。生きている実感がなければ、生の苦しみなんて知らない。ああ、本当はお前の事だってどうでもいいんだ」

生きているという実感が、亡いんだ。本当はその生の実感が亡いという事が、既にそれを求めているという事で、

「でも、あいつを連れていかれたままは困る。抛り所にしたのはこっちが先だから、返してもらうぞ」

その生きている実感を得るのには黒桐サンが必要って事だと思うよ？

そして才姉サンは何も握っていない左手で、何もない中空を掴む。その左手は、橙子サンによってつけられた義手で、橙子サンが言うには「霊体を掴めるようにしておいた」んだってさ。人を魔改造するのは止めておいた方がいいと思うな。俺は。

で、そのまま霊体であるはずの巫条サンをその掴んだ左手を後ろへと引く事によって手繰り寄せた。

まるで聖書でもあったような聖ペテロの奇跡の漁獲みたいに、その網にかかった魚のようにして、こちらへと手繰り寄せられてゆく。

「――！」

巫条サンの形相が変わる。巫条サンはさっきよりもより強い力を込めて式の才姉サンに意志を叩きつける。たぶん、俺達に対して通じる言葉で叫べるんだったらこう言ってたんじゃない？

“落ちろ”って、その叫びに怨嗟を込めて。

でもそんな事はまるで関係ないといわんばかりに式の才姉サンはそれを無視し、

「おまえが墜ちろ」

そう宣告して、手繰り寄せられて落下してきた巫条サンの胸にナイフを突き立てるんだ。

まるでなにか、そうトマトや、果物のようなモノにナイフを突き立てる時と極々同じようなそんな呆気なさ、そして刺された者が自分の圧倒的なまでの死の感覚に酔うような鋭さで。

刺された巫条サンからは、出血はないね。胸を貫くナイフのシヨックで動けない、精々一回ビクン、と痙攣しただけだ。

その遺体を、才姉サンは夜の街に、ただ無造作に放り投げる。

巫条サンの体は柵を擦り抜け、音もなく落下していった。

——それは、深海に沈んでゆく、白い花のように見えなくもなかった。うん。

.....

.....

...

「あゝいけないと思うな。そういつの。ゴミはちゃんと捨てるべき場所に捨てなくちゃ。」

あ、でもあれって霊体だから捨てる場所って決まってるじゃないよね？
ならあそこに捨ててもいいのかな？」

「うるさい、もう用事は済んだんだ。帰るぞ」

「あらら、怒らせてしまったかな？ごめんな？でも疑問に思ってもよくない？きつと誰に聞いても思ってくれるよ」

「いいから早くしろ」

「はいはい。まったく怖いねえ。嘘だけどね？」

そんなやりとりをしながら俺達は屋上から立ち去ったんだけどね？

——上にはまだ、消えてないユウレイサン達が漂っていたんだ。

空の境界 二次創作 第十二話（前書き）

俯瞰風景、了

今回は空の境界とは関係のない、何やらよく分からないエピソードが後半に含まれておりますのでご注意ください

空の境界 二次創作 第十二話

SIDE：永

その日、大通りを散歩をしていたら珍しく橙子サンと会った。傍らには妹サンもいる。

橙子サンはどうやらほんの気紛れでこの道を選んだらしい。

なので俺もほんの気紛れで、暫く一緒に歩く事にした。

まだ俺に取ってはそこまで馴染みのないビル街、そこを呆とまわりのビルをただ眺めながら歩いていると、不意に誰かが落ちてきた。

俺の人生？では意外とよく聞く音、人の身体が破壊され、死亡し、そして俺に吸収されるための手続きのような、そんなぐしゃりという音。

その音の原因がビルから墜ちて地上にぶつかったから出た音なのは明白だ。

人が墜ちた所からは朱色が、アスファルトへと流れていく。

墜ちたモノの中で原型を留めているのは長い黒髪と、細くて病人のような——いや、むしろ骨かな？それとも百合？

……まあとにかく、そのような物を連想させるようなモノだったんだ。

ちなみに、貌はもう亡くなつてて、そこにあるのは顔だけだったよ、だから普通は人物の判別はつかない。まあ俺は、あの日の夜にビルの上で会つてるけども。

幻想という名の現実、事実という名の現実になつて終わったのだろつ。

……今回の劇は余り面白くなかつたな。前回のが少し、そう、ほんの少しだけ、面白過ぎたせいもあるかもしれない。

だから俺は集まつてくる人だかりにも大して興味を持たずに、同じく人だかりを無視して歩き出す橙子サンの隣を歩き始めると、足音をたてながら妹サンが追い付いてきた。

「橙子さん、今の飛び降り自殺でしたね」

「ああ、そのようだね」

妹サンの言葉に応える橙子サンの声は曖昧だ。たぶん、あまり興味が無いせいだろつ。

まあ実際にどれだけ深刻な決意をしていようが、周りに生きる人にとつては自分の周りから人が一人いなくなつただけの事だし、更に言えばその殆どの人にとつては今みたいに自殺した人は悲しみの対象じゃないと思う。

……たぶんそれは、退屈なだけの自分の人生に一石を、といつても一時的な話題程度にしかないけど、投じてくれる娯楽の一種である筈だ。

昔——そうだね、例えば軍の人なんかの特攻隊つてヤツに送り出された時の人達の死は、単なる自殺じゃなくて、国の為の名誉つて

言う部分があったから、英霊として扱われたけども。だけど今のあ
あいう人達がする自殺っていうのは正直、名誉なんて何もない、そ
れは単なる自殺、人の好奇心の的、そしてその人物の所属していた
組織や、例えば住む所を提供していた者達からすれば単なる迷惑で
しかない。

そこに本人の意志は介入できず、今こうしている間にもどこかで病
気などが原因で死んでゆく大多数の人間と大して扱いは変わらない。
変わる事といえば精々が警察が関わるかどうかぐらいだ。

「去年は多かつたって聞いたけど、また流行りだしたんでしょうか。
でも私、自分で死んじゃうヒトの気持ちって分かんないな。橙子さ
んは解ります？」

ああ、そうまた適当に頷いて、空を見上げて何かの幻想でも視るか
のように答えた。

「自殺に理由はない。たんに、今日は飛べなかっただけだろう」
「まあそのおかげで永遠に飛べなくなる事もあるけどね？滑稽だけ
ど」

………

……

…

…… ああ、そういえばこんな面白い話があったね。まったくあちら

で起こった自殺とは関係ないけれども。

そうして話のネタを一つ思いついた俺は、さっき妹サンの質問に答えてからあまり話さない橙子サンに話しかける。

「そういえばさ、橙子サン」

「なんだ、永」

「あそこで今さっき起こってたつまらない自殺よりは面白い戦争中での話が一つ、あるんだけど、聞く？」

「橙子さん、人が死ぬような戦争の話面白がるだなんて、この子一体どういう神経をしているんですか？」

「まあまあ、待ってくれよ妹サン。そんな頭ごなしに否定すると人生損すると思うよ？」

「永、いいから話の続きを」

「橙子さんも話を聞こうとしないでくださいよ！」

俺がこれからある戦争の最中に起こった話の一つ、死神のような魔女のエピソードを語ろうとしたら妹サンが酷い事を言ってきたが、まあ橙子サンは聞きたそうだから話そうかな。

「うん、じゃ、話そうか？」

そうして俺は語り始める。

「まあ、化石城の亡霊って話なんだけど――」

――ある日本の戦闘機と、英国の戦闘機が、恐らくはビルマあたりで戦争をしている時、ジャングルの上で戦闘になり、日本

の戦闘機は英国の戦闘機を墜としたが、その戦闘機が墜としたと思
った戦闘機もまた、微かに残っていた力で一瞬だけ姿勢を立て直し
て自分を撃墜した後自分の直上を通り抜けようとした日本の戦闘機
に一撃を浴びせ、撃墜。

その後、普通の戦争物の映画とかならこのままお互いを殺し合うん
だろうし、それはこのエピソードでも同じだけれども、そこに至る
までの道筋が違う。

まず、先ほど言った戦闘で墜ちた戦闘機のパイロットの二人はジャ
ングルのそれぞれ丁度真ん中に巨大な木をおいて落ちる。
まあここまではいい、何処にでもある普通の戦争物だ。

だがその後、墜ちた時間は夜だった、夜には何処から恐ろしく、
身の毛のよだつ女の悲鳴が聞こえてくる。

それはとある船長の言葉を借りるなら、「魔女の泣く声は人の胸を
ゆるめるものだ。特に男には耐えられないほど物悲しく、心にこたえ
る」というところか。まあその難破船の船長は、そう書き残して死
んでしまったのだけれども。それは遠い、大航海時代の話だ。

そしてその魔女の泣く声を聞いた二人は、このような泣き声が一晩
中何処に行っても響いてくる中で一人でいるのは耐えられない、そ
う結論して互いにその夜は手を出さない事にした。

そうして結論を出した二人は、とりあえず眠る所の確保を、という
理由からジャングルの何処から見ても一目瞭然の、正に天まで届こ
うかという巨木の元へと向かった。

木に着いた二人は自分達が遠目からは木だと思っていたモノが実は

巨木の化石である事を知り、そして先ほどから聞こえ続けている恐ろしい女の悲鳴も風がそこに開いた穴を通り抜ける音だと安心して、大した事ない、そう二人は思う。

——不意に、二人は人の気配を感じた。常識的な精神状態なら、あるいは違うモノが見れたかもしれないが、二人はここに来るまでずっと、いや、今もだが、女の悲鳴のような音を聞き続けている。だから幻覚が見えてしまったのは仕方がないことだったのかもしれない。

二人は、見た。自分が振り返った先に黒くて長いローブを着ている女を、そしてその女は恐らくは日本人と英国人、つまりその女を挟んで丁度対角線上にいる二人と同じ人種の首を持っていた。

二人は発砲した。当然だろう、いきなり自分の後ろに気味の悪く、さらには首を持った魔女が現れたのだ、これで冷静な方がおかしいだが、二人が撃った魔女はやはり幻覚だったのだろう、弾はその女を通り抜け、反対側にいたお互いの身体に命中し、二人は穴だらけになって死亡。後に残るのは、巨木の化石の内部でこれから骨になるであろう死体が二つ。

灰色の化石の城は魔女の泣き声で男を誘い、黄泉の国へと連れていくためにいつまでもそこに立ちつづけているのだと………そういい伝えられているという。

確かめる術はない。近寄った男で、生きて還った者はいないから………

……

……

…

「こんな感じの話なんだけど、どう？」

「確かに面白かった。いや、中々やるな、永。私は普段はあまりその手の話には興味ないんだがな、これはよかったと思うよ」

「ありがとね、橙子サン」

感想は上々、というか橙子サンから中々という評価が貰えるだけで大したものですよ。

そしてそんな話をしばらくして、俺は今日は別れる事にした。

「じゃあね、橙子サン、妹サン。今日の散歩は中々楽しかったよ」

「ああ、またな。永」

「ええ、さようなら」

そうして俺は、踵を返して自分の住むアパートへと向かった。

|

空の境界 二次創作 第十三話（前書き）

矛盾螺旋、開始

空の境界 二次創作 第十三話

SIDE：永

大通りの外れを、俺は空を見ながら歩いている。隣には姉ちゃんもいる。まあたまにはこんな所を歩いてみてもいいだろう。橙子サン風に言うんだったら、気まぐれってヤツ、なのかな？

時刻は夜だ。

今年は、どうやら秋が短かったらしい。

いつも寄っている本屋でおばちゃんと本を買うついでの世間話をしていたらそう言っていた。曰く、「そのコート、夏は暑そうだったけど、今ぐらいなら丁度良さそうね」という事らしい。

確かに少し寒くなっていた気がする、姉ちゃんも最近では寒くなってきたのかブルゾンを着てるし。

「ねえ、姉ちゃん」

「ん？」

「今日さ……ん？なんだろうね、あれ」

「うん？どうしたんだよ」

俺が話しかけようとしたのに途中でそれが疑問符になった事を不思議に思ったんだろう、姉ちゃんは聞いてきた。

その俺の目線の先にあるのは丁度……、そうだね、十六、七歳くらいかな？の子供（まあ俺にとっては年上なワケだけれども）が、座り込んでいた。

そのヒトの外見はまあ一見すれば性別不詳、という所だろうかね。

繊細な顔立ちに、細くて女の子みtainな身体。髪は赤くて、なにかな？ 遺伝なのかな？ まとまりはあまりよくはない。

目はどこを見ているかは分からないけど、ずっと細められているし、歯は、カチカチと震えているように見える。

まあおかしい所の極めつけはそのヒトの恰好で、こんな、もう寒くなってきた日だっていうのに汚れたジーンズのズボンに、群青色のブルゾンを羽織っているだけ。その上着の下は裸だ。

というかブルゾンって何？ この町では冬には着るのが習わしなのだろうか？ 織の姉ちゃんも着てたけど、式の才姉サンも着てたし。

そのヒトは、寒さからかな？ それとも違う何かに怯えているからかもしれないけど、歯をカチカチと、ただ鳴らしている。

「ねえ姉ちゃん、あのヒトの所に行ってきたもいい？ あのヒトきつとあんな格好じゃ寒いよ？ というかナニか面白い事が起こりそうな気配がするから、そのまま連れ帰っちゃうかもしれないけど、いいよね？」

「まあ……、一応お前の金で養ってもらってるようなもんだしな、好きにしろよ」

「はいよ、じゃあここでしばらく待っててね？ 姉ちゃん」

「わかった」

姉ちゃんの許可も貰ったので俺はそのヒトの所に行こうとした。しただけ……、

「なんだよ、学校辞めたらもう他人ってわけか？ そうか、トモエち

やんは社会人だから、ボクたちみたいなお子さまとは付き合えない
っていうんですか？」

何か変な人達に先を越されちゃったみたいだ。

あはは、と笑い声があがる。

だけでもそのヒト——巴だったかな？トモエでいいね。トモエは、
何の反応も示さない。

ふうん、とそのトモエに絡んでる男の一人が、トモエの上着から手
を離すと、トモエの顔を殴りつけた。

あらら、そうゆう事やったらダメだよ。君達がやったところで欠片
も面白くないのに。

がん、という衝撃音とちゃりん、とナニかが路面に落ちる音。

「——」

「寝てんな、馬鹿」

なぶるようなその男の声に、周囲はまた笑い出す。

そしてその音で、どうやらトモエも再起動したみたいだ。

「……えんじょう……ともえ」

自分の事を何かと、自分の名前を呟く事で再認識して、再駆動して、
トモエは目の前にいる男達を睨みつけ、そしてナニか呟いた後に正
面に立っていた男——どうやら相川っていうみたいだ、の口の中

に拾った空き缶を突っ込んで、それを平手で打った。

「じつ……！？」

相川は倒れこみ、トモエはそこに更に追撃として頭部への蹴りを入れた。

爪先で思い切り。

その男が吐き出した空き缶には、血が付いていた。

そして相川はそれきり動かなくなってしまう。たぶん、失神したか、首の骨を折ったからじゃないかな？

それをトモエは確認した後、走りだした。

人通りの多い駅前じゃなくて、さびれた路地裏へ。

トモエが走りだしたのを見て、ようやくこのトモエを囲んでいた集団も現状が把握できたらしい。

本来、ただ自分達に搾取されるだけの筈の存在が、自分達に噛みついてきたという事をね。

「あのヤロウ、ふざけやがって——ブツ殺してやる！」

ありゃ、あの変な人達トモエを追いかけていつちゃったよ、そう思っていたら、近くに式の才姉サンがいた。才姉サンもあの現場を見ていたらしい、興味はなさそうだったが。

「あ、才姉サン。その鍵届けるの？」

「ああ、一応あいつの落しものだからな、届けなくてはいけないん

だろ？こついうのは「

そう言つて才姉サンが手に持っているのは、さっきトモエが殴られた時に落としたモノ、どうやら鍵だったらしい、だった。

「じゃあ俺も行つていい？」

「好きにしろ」

「あいさ〜」

そうして俺と式の才姉サンは、トモエが逃げて行つた方向へ行く事にした。

ブツ殺してやる、か。

連中の大声を聞いて、俺はつい笑ってしまった。

奴らはそれを本気で言っている。そのくせ、その言葉の意味合いを真剣に考えていない。

その覚悟がない者が、たった今その経験をしてきた相手に「殺す」と告げるなんて、なんて軽率さだろう。

——俺は、さっき人を殺してきたのに。

………

……

…

SIDE：永

そうしてトモエを追いかけてきた俺と式の才姉サンの前には、あの変な人達からボコボコに殴られているトモエがいた。

ははは、面白いねえ、こういう光景ってさ？興奮しちゃうかもしれないよ？

アレって、イタイのかな？何か目が死んでてもいいって感じなんだけど、どうなんだろうね？というかまだイタイって感覚残っ

てるのかな？

「じゃあ、オレはこれ返してくるから、おまえはどうする？」

「あゝ、じゃあ俺も一緒に行くわ。OK？」

「ああ」

そうして、俺と才姉サンはトモエの方へと近づいた。

からん。

「しかし才姉サン、そのゲタ良い音するね」

「うるさい」

最近、才姉サンのうるさいは照れ隠しじゃないかと思えてきたんだけど？ま、どうせ気のせいだろうけどね？というか声の響きが凄く冷たいし。

………

……

…

SIDE：巴

からん。

綺麗な音がした。

人を殴りつける鈍い打撃音に比べてとても小さい、鈴のような音。

さっきまで俺を殴っていた三人は動きを止めて、音のした方向……自分達が入ってきた路地裏の入り口へ振り返る。

腫れ上がった瞼を開けて、俺もその相手を見た。

「――」

意識が、凍った。

そうとは思えないほど、俺はその相手から目を離せなくなってしまうていた。

それほど――路地裏の入り口に立つ人影は、常軌を逸していたのだ。

そいつは、この寒空のもと素足で丸っこいゲタのような物を履いていた。

漆塗りの黒と赤い紐が、白い素足をよけいに際立たせて、言葉を失うほど印象的だ。

いや、胸をつくほどの特異さはそれだけじゃない。

その人物は橙色の和服を着ていた。豪華な晴れ着ではなく、祭りの日に見かけるような簡素な着物だ。

その上に、あろう事か赤い革製のジャンパーを羽織っている。

からん、ともう一度音がした。

ゲタが地面を蹴る音。一步ずつ近寄ってくる。

ふと、ソレの傍らにもう一つの人影がいる事に今更ながら気付く。

そちらは黒いコートを着た——みた感じ九歳ほどの少年だ。

その二つの人影は、まるで何事も起こっていないような自然な足取りで、こちらへと向かってくる。

細い身体と輪郭。白い肌と——こちらの魂を見据えるような玄い瞳。薄汚い路地裏には不釣り合いな幽美な立ち姿。

この人影を、なぜかは知らないが俺は女だと判断した。

ソレの姿から俺は目が離せなかったけど、同時にその隣にいる子供からも意識を離す事はできなかった。

何故かといえば、やはりその子供の雰囲気によるものだろう。

なにしろその子供は、ここで起こっているこんな凄惨な状況を見ても一切怯えず、しかもその眼は嗤っているのだ、断じて普通の子供じゃないと俺は断言できる。

「おい」

和服と洋服を混合させた女——いや、見た感じ俺たちと大差ない年齢のようだから少女と言つべきか、がぶつきらばうに言った。

少女は不機嫌そうな表情でこちらを眺めると、無遠慮に近寄ってくる

る。

俺を囲んでいた三人は戸惑ってから、二人を囲いはじめた。暴力に麻痺していた奴らは、麻痺しているからこそやってきた女が欲しくなったのだ。普段の奴らでは出せない、抑圧された感情を剥き出しにして少女とその隣の子供を威圧する。

「オレ達に何か用か」

じりじりと近寄りながら奴らは言う。すでに逃さないように囲んでいるあたり、三人の心は一つのようなだった。

ゲスめ、と罵りながらも、俺は何もできない。

殴られた手足は痣だらけで力が入ってくれない。

あの子供の方は如何でもいいが、着物の少女が、こんなニセモノみたいなガキに汚されるのが我慢ならない。

いや——だが、アレがこんな連中に汚されるなんて事あるのだろうか？

「何か用かって訊いてんだよ。耳ないの？あんなら」

連中のひとりが近付きながら怒鳴る。

それに子供の方は顔をニヤつかせ、少女の方は答えず、無造作に片手を差し出した。

……そこからの出来事は、本当に魔法みたいだった。

少女の差し出した手によって男のひとり引き寄せられ、柔道でいう所の内股というヤツだろうと思われる行為によって、倒され、他

の二人も、それぞれまったく無駄な動きのない一撃によって沈んだ。

俺はそれをただ呆として眺めている事しかできなかった。

「ちつ、いしあたまな石頭」

「それ、ダブってるぜ？オ姉サン」

「いいんだよ、こういうのは直感的に言うんだからな」

「さいですか」

舌打ちしながら、少女は乱れた着物の裾をなおし、子供はツツコミを入れている。

——街の明かりも、月の光りさえも届かないこのゴミ溜めの中で彼女の頭上にだけ、銀色の光芒が降り注いでいるみたいだった。

「あ、そういえばトモエとかいうヒト、オ姉サンが落し物を拾ってくれたよ？」

子供がこちらに話しかけてくる。

それに対し俺は何か言おうとしたのだが、口の中が傷だらけで言葉をひっこめてしまった。

少女の方は革ジャンのポケットに手を入れると小さな鍵を取り出して、こちらに投げてよこした。

地面に座り込む俺の前に、見覚えのある鍵が落ちる。

「落としもの。おまえのだろ」

声は、脳の奥の方で響いた。

……鍵。ああ、さつき殴られた時に落としたのか。もう、今になつてはどうでもいい家の鍵。これを届ける為にこの女と子供はやってきたのか。

と、少女はそれで用は済んだとばかりに背を向けた。

子供の方はまだここに残るようだが、少女の方はさよならの言葉も、いたわりの言葉もない。

やってきた時と同じように、散歩めいた足取りで去っていく。……俺の事などどうでもいいというように。

そして俺はそれを呼び止める事はできなくて、いつの間にか少女の姿はなくなっていた。

そんな俺の前に残っているのは、こちらを見ている子供だったが、その子供もやがて踵を返してその場から去ろうとした。

「——ま」

で、と手が動く。

何を引き留める？どうして引き止めようとする？

俺だつて——臙条巴だつてあのイカれた女はどっかに行ったにしろ、それよりも更にイカれているかもしれない子供なんてどうだつていい。

けど——けど今こうしておいていかれるのはたまらなかった。誰にでもいいから、捨てられなくなかった。自分には何の価値もないのだ、本当に偽物にすぎないのだ、という衝動に耐えられなかった。

「ちょっと待て、おまえ！」

叫んで、立ち上がる。……いや、立ち上がろうとしたが、うまく立てなかった。

身体の節々がうずいて、壁に手を当ててようやく中腰の姿勢がとれるだけだ。

子供は振り返ると先程とは打って変わってつまらなそうな目を向けてくる。

「なにかな？俺としては何だか、あまりにもつまらない展開だったんで帰ろうかと思ってたところなんだけどね？」

平然とそうこの子供は言う。そのすぐそばには五人もの人間が倒れているというのに、こいつは何も感じていない。

「おい、まさかこのままにして行く気じゃないだろうな」

息も絶え絶えに言うと、子供は周囲の惨状、特に俺が傷つけて血を流している二人を見て、こちらを向いて言う。

「まあ、この程度なら警察がなんとかしてくれるでしょ？というかこんなの放って置いても問題ない気がするんだけど、助けがいるの？それに、その言葉を言うのならトモエは才姉サンに言うべきだったね」

その子供の声は本当に不思議がついていて、なぜ助けがいるのか本当にわからない、という口調そのものだ。

俺はそうだ、と頷いた。

「だとしたら、呼ぶのは警察かな？それとも病院かな？」

本気で、どこかズレた事を聞いてくる。

俺は病院しか考えつかなかったが、これをあくまで正当防衛として考えるのなら警察を呼んだ方が早いかもしれない。

だが――

「――警察は、ダメだ」

「なんで？」

子供は言う。

……何故か、俺は、決して口にはいけない秘密を、切り札を差し出すような決意で告げた、こんな子供に。

「俺は、人を殺したんだ」

わずかではあるが、時間が止まった気がした。

俺の言葉を聞いて子供は怯えて逃げるところか、その反対に必死で壁にもたれかかっている俺を何秒か観察した後、言った。

「ああうん、確かに殺してるのかな？その恰好を見る限り」

まるでそれがさも面白い事のように笑いながら言う。

その影響だろうか、俺も、熱にうかされたように、自虐的な告白を続ける。

「本当だぜ。ついさっき殺してきた。包丁でハラん仲ぐちやぐちやにして、首かつ切ってやったんだ。アレで生きてるはずがあるもんか。……へへ、今頃うちじゃポリ公どもが集まって俺を血眼になって捜してる事だろうよ。そうだ、夜が明ければ俺は一躍有名人ってワケさ——！」

気がつけば俺は自嘲気味に笑っていた。

つまらない自分の声を聞く。

どうしてか、それは泣いているような声だった。

「うんうん、まあ別に俺は言っている事を否定しようとは思ってないぜ？むしろ面白いからOKだ。信じるって。

だけでもそうしたら警察にも病院にも連絡するのはやめた方がいいね、報せても、牢屋？だっけ？にそのまま連れていかれて終了でしょ？

……ん？ああ、だから上半身裸なの？才兄サン。返り血でも飛び散ったのかな？あ、別にこんなの聞かなくてもわかるね、こりゃ失敬」

子供はそのまま、俺の前でしゃがみ込む。

「——な」

俺の息が詰まる。

この子供の言う通り、着ていた服は血に濡れてしまったから脱いだのだ。ズボンだけはそのまま、上半身裸のままブルゾンを羽織って逃げてきた。

……^{わかっ}理解ている。

この子供は俺が殺人者だと分かっているのに、その表情はさっきから一貫して、ニコニコと笑い続けている。

「おまえ恐くないのか。俺は人を殺してきたんだぞ。」

一人殺すのも二人殺すのも一緒だ。事情を知ったおまえを、このまま行かせると思うのか？」

「いや、俺は観客だから精々さつき見た劇の感想しか言えないよ？
まあでも、今日の劇はイマイチだったね、誰も死ななかったし」

つまらなそうに、あゝあ、と溜息をつきながら子供は肩をすくめて、やれやれといった様子だ。

「本当に——俺は人殺しなんだぞ？」

だから俺はそんな子供の様子が怖くて、そんな事しか言えない。

子供はより一層笑みを深めて、言った。

「もう聞いたよ、それ。」

それに人を殺すのは——ああ、また怒られるかな？まあいいや、人を殺すのは自分がやりたくてやったんだったら別にいいんじゃない？少なくとも俺は認めると思うね」

子供は言った後、そろそろ戻らないと、と言って俺に背を向けて去っていきこうとする。

……その背中を、俺は逃がしたくないと思った。

「ま、待てよ、おまえ、認めるって言ったな！」

駆け寄ろうとして、地面に倒れこむ。

それでもなんとか立ち上がって、俺は振り返る子供の顔を睨んだ。

「なら助ける。俺を認めるんだったらそれぐらいしろ」

いつもの自分からは考えられない勝手さで叫んだ。

必死になって、恥も外聞もない。脈絡も理由もない俺の声に、子供はまるで俺がそう言うてくるのを待っていたかのように口を歪めていた。

「認めるんだったらそれぐらいしろ、ね。まあ別に助ける事にいやはないけど、何を？俺にはそんな、人を殺すような罪を無くす権限はないよ？」

—— そうだ。

俺は、何から助けてもらいたいんだ？

こんな子供に、助けてほしい。そう思うだけで明確に何から助けてほしいのか、俺はうまく考えられない。

……それが何より大切な事だと、臙条巴の心に刻まれているというのに。

「——ここはそのうち人目につく。その前に、俺を匿え」

子供はそれを聞いて、さらに口を歪める。

「匿うつてのは、つまり隠れ家が欲しいのかな？」

「そ、そうだ。人目につかない所まで手を貸してくればいい」

「人目につかない所？ははは、そんなモノ、自分の家の中以外に存

在しないよ?」

子供は笑って言うが、そんな事俺だってわかってる。

子供が笑っていたからか、俺は怒鳴り返した。

「それがダメだから言ってるんだ!それともおまえの家にでも匿う
つてのか、このクソガキ!」

くそ、と悪態をつく。

と、子供はその笑ったままの顔で言ってきた。

「その言葉、待ってたよ。うん、俺の家に来なよ」

「——は?」

「いやね?ずっと待ってたんだよね。そう言ってくれるの、だって
さ、強制的に匿うワケにもいかないでしょ?」

そう言って子供は歩き始める。俺に手も差し出さなければ氣遣う一
言もなく。

それでも俺は、その子供についていく事にした。

何たってあの子供は、こんな、殴られて満身創痍、さらには人を殺
したとまで言った俺を“認める”と言った。

あげくの果てには俺が自分から匿えと言うのを待っていたとさえ。

自分より遥かに小さい子供の背を、ただ追いかける。

あの子供には尋ねなければならぬ事が山ほどあるっていうのに、
何も考えられない。

……そうだ。もしかしたら俺は、こんな自分よりも幼い子供に、救われたのかもしれない。

……

……

…

空の境界 二次創作 第十四話

がたり、と音がした。

隣の部屋からだ。

時刻はそろそろ十時になるのだろうか。仕事で疲れきった体を布団に預けてから、数分と経っていない。浅い眠りから起こされて、俺はゆったりと微睡んでいた。

隣の部屋からした物音は一度きりだ。

襖が開く。隣の部屋に通じる襖。電気を消した暗い俺の部屋に、四角い光が入りこむ。母親だろうか？

俺は薄目でそちらを眺めて――

――いつもここで思う。

こんな光景、見なければよかったのにと。

襖を開けたのは母親だ。逆光になって、立っている事しか判らない。俺にはその姿より、襖から覗ける隣の部屋の惨状しか見えなかった。

安物の卓袱台の上に倒れ伏している、父親の姿。

茶色のはずの卓袱台は真っ赤に染まって、倒れ込んだ親父は畳に赤い血を流し続けている。……どこか、壊れた水道管みたいだった。

「巴、死んで」

立ち尽くす影が言った。

その影が母親であつた事は、自分の胸を刺されてから思い出した。
母親は俺の胸に何度も何度も包丁を突き刺すと、最後には自分の喉
に包丁を突き立てた。

悪夢といえは悪夢だ。

俺の夜は、いつもこんな風にして終わってしまう。

……

……

…

SIDE：巴

かちかちかちかち。

耳の奥から響いてくるような音で目を覚ますと、両儀姉弟はもう出
かけていた。

俺は痣だらけの体を起こすと、部屋の中をぐるりと観察する。

この部屋はとあるアパートの一室で、昨日の子供の家だ。
玄関から居間へと続く廊下の長さは二メートルほどで、その途中には他の部屋へと通じる扉が五つあった。

居間の隣りには和室がひとつあり、そこは寝室になっているらしく、さっきまで子供とその姉が寝ていた布団がある。

——昨日の夜。

あの子供とその姉の後を電車に乗って二十分ほどしてから、さらに何分か歩いた後着いたのがこの部屋だった。

アパートのエントランスにある住民のポストの所には両儀と書かれていたから、姉弟の名字は両儀というのだろう。

姉弟——特にその子供、は俺を部屋へと連れて入ると、適当に何か作るんでちよつと待ってて、と言った後、しばらく経って出てきたのは『鮎井』。

姉の方は——これが俺が一番に驚いた事なんだが、なんとあの場から去ったはずの女だった事だ。

だが、それについて俺が両儀弟——永とかいったはずだ、に聞いた話ではあの女とは別人で、双子のようなモノだという。

永が言うには、両儀姉、織という女は双子で、片割れの式という俺が見た女と実家とは仲が悪く、別居しているらしい。式にオレの事は黙っておけよ、だそうだ。

その式とかいう女にしても、最近の実家とは折り合いが悪くなり、

一人暮らしする事になったらしい。

女はその事を別段気にした風でもなく、子供の持ってきた俺のと同じ『鮪丼』を食べていた。

ちなみに子供の方かというと、俺に飯を出したせいで食べる物がなくなっただのか、自分は何も食べずに俺が飯を平らげていくところをニコニコと眺めていた。

それでその後、飯を食べ終わった俺は腹が膨れてしまったせいか、強い眠気が襲ってきてそれを見た永に、じゃあ布団出すから、と言われて敷かれた布団に横になり、そのまま眠ってしまった。

そうして、目覚めればあの姉弟の姿はなくなっていたというワケだ。

「——何なんだ？あいつら」

思わず言葉が漏れる。

目が覚めて冷静になって思い返してみれば、永の方は小学生ぐらいぽかったが、姉の方は俺と同じ年ぽかった。女、というより少女といった形容の方がぴったりだ。

俺と同じ、十七といったら学生だ。という事は二人とも学校へ行ったのだろうか。

おそらくそうだろう、そう思いながら俺が居間から和室へと移動すると、居間にある座卓にはラップのかかった白米と味噌汁があり、そこには、『これ一分ぐらい電子レンジにかければオッケーなんで』と書かれたメモ用紙が張り付けてあった。

その朝飯をレンジにかけながら俺はふと、昨日の永の台詞を思い出す。

人殺しだという俺の言葉に、永はそんな俺を“認める”と言った。

……少し信じられない事だが、どうやらそれは本当のようだ、そう思う事ができた。

何故かとあまり具体的な説明はできないが、少なくともあの言葉は嘘ではないと、とにかくそう思えたのだ。

そこまで考えたら自然と自分の目から涙が出そうになっている事に気付くが、同時に俺はここに長居をする気はなかった。

礼の一つぐらいは言っておきたかったが、その相手がいないのでは仕方がない。俺は盗みに入った泥棒みたいに慎重な足取りで、見知らぬ姉弟の部屋から出ていく事にした。

SIDE：永

俺は今、昨日も通った大通りのあたりを一人で散歩中だ、正直他にやる事がないので困ってたよね。

幸い本は持っているで、どこかに本を読める適当な場所がないかと歩きながら探していると犬の銅像がある広場を見つけた。

そこにはベンチがあったので俺は丁度いいと思ってそのベンチに腰掛け、本を読み始める。

題名は——“REDSUN・BLACKCROSS 7”？あれ？七巻？俺が持ってきたのってヒンデンプルグの最期って巻じゃなかったっけ？あゝあ、ミスったなあ。

まあいいや、俺は考え直す。どうせ今の手持ちの本はこれしかないしね、これ読んで時間潰そう。

.....

.....

...

《ともかく、話を聞きたい》

高梨はいった。

《なるべく人数をあつめてくれ》

《野戦病院へいかれたらどうです》

大尉はこたえた。

《あそこならば、話をきくのに言葉はいりませんよ》

《大尉》

《なんでしょう、法務少佐》

《君は、わたしのことを後方からやってきた苦労しらずとおもっているかもしれない。が、わたしにも為すべきことがあるのだ。》

《俘虜虐殺の罪状でも適用するのですか？》

《いったはずだ》

高梨はこたえた。

《わたしの任務は調査だと》

《なにをしらべるのですか》

《かんがえてもみたまえ》

高梨はあたらしい煙草に火をつけた。

《戦争はまだまだ続くのだ》

大尉は沈黙した。

しばらくして、煙草をもらえんですか、とかれはたずねた。

.....

…

…

俺は読み終わった本を閉じて、あたりを見回す。

時計を見ると時刻はいつの間にか七時を回り、気付いたらあたりは既に夜になっていた。

「ああ、もう夜になってたね。どうしようかね？もう帰るかな？うん、そうしよう」

そう決めた俺は、ベンチから立ち上がって、駅の方へ歩いていく事にした。

街ゆく人々は今日もいつもと変わらず忙しそうに歩いてゆく。その姿は俺には正直、若い時の体力を苦勞する為に使っていて、老いた時に自分の好きな事なんて出来なくなっているというのが判らなくて、ただ生き急いでいるだけのようにも見えた。

「あんなに忙しそうに歩いて、あんなの時間の浪費でしょ、きっと年をくった頃にそれに気づくヒトもいる、のかな？」

というかいらないとね、人間はどんどんつまらなくなっていってしまふに違いないよ。

まあ、そうなったとしてもどんな所にも黒桐サンみたいなヒトはいれると思うけれどもね？

そんな下らない事を考えて歩いていると近くにコンビニがあったのでそこで俺はガリガリ君（味はソーダ）を買ってコンビニを出す。

時刻は——俺がフラフラ歩いていたせいもあるだろうが、既に十時になっていた。

十時といえば、大体姉ちゃんが帰っている時間だし、ついでにいうなら夕飯の時刻をとくに過ぎているという事でもある。

「これは姉ちゃんもう帰ってるなあ、夕飯どうしよう？あゝでも姉ちゃんて確か作れたよね？じゃあ別にいいか。ゆっくり帰る事にしよう」

そうしてゆつくりと帰る事に決めた俺は、そのまま駅に行って電車に乗り込んだ。

——あ、アイス溶けちゃうじゃん。したらやっぱり出来るだけ急いで帰ろうかね？

SIDE：巴

俺は日中、街の中をいつ見つからないかとびくびくして歩いた。
といっても最初は、だ。

どうやら世間はこちらの事情とは関係なくいつも通り、という事らしい。

見知らぬ道を、街灯の弱々しい光が照らす。

秋の陽が落ちてから三時間は歩いた。

どこで夜を明かそうかと悩んで、気がつけば、俺は両儀のアパートの近くまでやってきていた。

人間、堕ちればここまで女々しくなるのかと呆れる。

俺の—— 臙条巴というヤツの長所は感情の切り替えの速さだと自負していたのに、これじゃあ速いも遅いもない。
全然、未練が断ち切れていないじゃないか。

見上げれば両儀の部屋には電気がついていない。姉弟は留守のようだった。

「——いいさ、ついでだ」

誰もいないから中に入れない。そんな事は分かっているのに階段を上がっていく。

厳しい現実には直面する事で、唯一の救いに縋る自分に引導を渡してやりたかったのだ。

カンカンと音をたてる鉄の階段を上がって、二階の真ん中にある部屋の前に着いた。

今朝、俺が出た時にはあったチラシ等の郵便物はない。

姉弟のどちらかは一度帰ってきたようだ。ドアをノックしても何の反応もない。

「ほら、いない」

俺は立ち去ろうとして、ドアのノブを回してみた。

——ガチャ。

ドアは簡単に開いた。

外から見て確認したが、やはり中の電気はついていないようで、暗い。

俺はドアノブを手にしたまま凍りついて、頭が真っ白になってしまった。

もしかするとこのまま何時間もつつ立っているのだろうか、と思った瞬間——俺はドアの隙間へ身を滑り込ませ、中に忍び込んでし

まった。

「――」

ごく、と喉がなる。

信じられない信じられない、こんな事をやるなんて信じられない！

そりゃあ俺はアウトローをきどっていたけど、犯罪めいたことは嫌っていたんだ。卑怯な事は子供の頃から嫌いだったんだ。だっていうのに、人殺しの次は家宅侵入をやらかしている。

――いや、これは不可抗力だ、それにあいつだって言っていたじゃないか、家に来なよって！

かちかちかちかち。

内心で支離滅裂な言い訳をしながら足を進ませる。

玄関から廊下へ、廊下から居間へ。

明かりがついていないから、部屋の中は真っ暗だ。闇の中、息を荒くして忍び足で歩く。

くそ、これじゃあ本当に泥棒じゃないか。

電気。電気だ。暗いから怪しくなる。あ、でもスイッチってどこにあるんだ？

蛍光灯のスイッチを求めて、壁を手探りで調べていく。

と――その時、玄関のドアが開く音がした。

「ただいま」

両儀が帰ってきた、と身構えるより早く、この家の住人である両儀——どうやら今帰ってきたのは姉らしい、は電気をつけて居間のドアを開けた。

開けて、ぼんやりとした目で不法侵入中の俺を見つめる。

「——なんだ、永はまだ帰ってないのか。おい、何してるんだ？ 電気もつけないで」

そんな、まるで俺がいるのが当然のような口振りをする、両儀（姉）は部屋のドアを閉めて革ジャンを脱ぐ。

そしてそのままソファに腰を下ろすと、あくびをして寝ようとする。

謎だ……。何が謎かといえば、俺という侵入者を気にしていないのも謎だが、そんな侵入者の前で無防備に寝るこいつの精神も謎だ。

そんな女の態度に一瞬、イラッときたので襲ってやろうかと思ったが、流石にそんな事をやって大声を出されてはたまったものではないので俺は理性を総動員させた。

この女は、俺の事をなんとも思っていない。俺が人殺しだという事をあの子供から聞いて……。どこまで本気かは知らないが……。分かっているくせに。

なのに突然自分の弟が、人殺しだという見知らぬ男を連れてきたのを容認して、あまつさえ自宅を隠れ家として使用されるのに反対しないなんて、こいつは正気なのだろうか……。？それとも薬でもやっているのか……？

「……おい。あんた」

俺が呼びかけると、女はまだ眠ってはいなかったようで、気怠そうに体を起こしてきた。

「なんだ、腹でも減ったのか？ だけど生憎飯を作るのはオレじゃなくて永だ。だから飯が食べたいなら永が帰ってくるまで待てる。そうすれば永が作ってくれるさ」

「いや、飯の事じゃない、というかそんな事はどうでもいい。……なんで俺を助けたんだ？」

俺がそう訊くと、着物の少女は心底不思議そうな顔でこっちを見てきた。

「おまえを助けたのはオレじゃなくて永だぞ？ なんでそんな事オレに聞くんだ？」

「何言ってるんだ。確かにあの子供が俺をここに連れてきたけど、ここはあんたの家だろ？ 家主の許可がなきゃ匿えないじゃないか」

俺がそう言つと、女は一瞬至極不思議そうな顔をした後、納得したように手を叩いた。

「ああ、言ってなかったな。この家の家主はオレじゃない。この家の家主は永だよ」

……………は？

「あの子供が？ 冗談だろ？」

そう言つて両儀（姉）の顔を見る。

いくら何でもそんな馬鹿な事があるものか。たしかに俺の神経はま
いっちまてるが、常識ってモンを忘れるほど壊れちまつてる訳じゃ
ない。

その証拠に、こいつが嘘を言っているかどうかぐらい見抜いてみせ
る。

俺は着物姿の少女を睨む。彼女はそれをまるつきり気に留めない。
無視するのは違う、堂々とした自然さだ。

……信じられないが、どうやら困った事に、両儀（姉）がまったく
の本音で話しているって事だけは疑うまでもない。

それとも、もしかしたらこの姉弟には一般的な理由は必要ではない
のだろうか。

そうでなくてはあの永という子供がこの家の家主だというのが納得
できない。

そもそもここはアパートのはずだ、いったい家賃はどうしていると
いうんだ。

「家賃はいつたい誰が払ってるんだよ」

「永だ。あいつ確か六月頃から株をやり始めて今じゃ貯金が数億あ
るとか言っていたぜ」

「……なあ、あんたまさか危ないクスリでもやっているのか？」

俺がそう聞くと着物姿の少女は、いや、オレはああいう薬とかは好
きじゃないんだ、と言う。

だが俺にはそうとは思えない、じゃなきゃいったいどこの世界に
そんな子供がいるんだ？

「じゃあ聞くが……あんた正気か？この家の家主をあんな子供がやっていて、しかもその上貯金が数億だと？嘘を言うなよ。それにもしそれが本当だとして、それなら尚更俺みたいな奴を匿ってたらマズいんじゃないのか、普通警察に言うとかするだろう」

「さつきから失礼なヤツだな、おまえ。オレは薬はやっていないし、正気だ。警察にチクるような事もしない。まあ、おまえがチクってくれっていうなら、するけど」

ああ、俺だってよく考えたらそんな心配はしていない。だいたいこいつが警察に連絡するシーンなんて想像出来ないし、ましてやあの子供が警察に連絡するところなんてどうやって思い浮かべろってんだ。

それに今気づいたが、俺が心配しているのはもつと根本的な事だった。

「あのなあ。俺は男で、おまえは女だろ、あの子供はよくても、見ず知らずの野郎を泊めるっていうのはそういう事だぜ。それがいいのかって言ってるんだ、俺は！」

「え？女を抱きたいんだったら別の所に泊まるだろ、男ってそうじゃないのか？」

きよとん、とした顔で返答されて、俺は言葉を失った。

「いや、だから——」

「ああもう、うるさいな。ここが気に入らないなら他の隠れ家を探せばいいだろう。だいたいさつきも言ったようにここは永の家だ。だからオレにいくら言ったって無駄だよ。言いたい事があるなら直接永に言え」

ぴしゃり、と言いきって少女は再びソファで横になって寝ようとする

る。その時に頭の位置が気に入らないのか、何度か頭の位置を微調整しながら。

……どうやら俺の事なぞ眼中にないらしい。

「じゃあ俺はここを寢床にするぞ、それでいいんだな！」

カッとなって怒鳴っても、両儀（姉）はどこ吹く風というようにまったく気にした風もなく頷きやがった。

「だからいって言ってる。邪魔だったら邪魔っていう」

ごろん、とソファで横になって両儀（姉）は言う。

俺はそれで気が抜けてしまって、カーペットの上に座り込んだ。

そのまま時間だけが流れてゆく。

………

………

…

空の境界 二次創作 第十五話（前書き）

長らくお待たせいたしました
次話投稿です！

空の境界 二次創作 第十五話

SIDE：巴

とにかく、俺は開き直る事にした。

感情の切り替えの速さは臙条巴の取り柄なんだ、という自負を取り戻すかの勢いで今後の事を考える。

暫くの寢床は、一応確保できた。食費は手持ちの三万円で一ヶ月は保つだろう。

その間に、俺は警察に捕まらずに生きていける方法を探さないといけない。

「——ん？」

ふと、疑問に思った。

どうして今晚、この家は鍵がかかっていなかったのだろうか、と。

「おい、なんでこの家、鍵がかかってなかったんだ？」

「んー？なんか永が、今日は巴がいるからかける必要ないでしょ、とか言ってたぞ」

「——あ？」

話を聞いて、俺は卒倒しそうになった。

この姉弟——両儀は、俺がいるから、そんな理由で家に鍵をかけなかったというのだ。

理解できない、そも、家の鍵とは本来見知らぬ者が家に入る事がで

きないようにする為の物のはずだ。

なのにかかっていない。

それも見知らぬ人間である俺がいるから。

つまり俺が侵入できたのは偶然でもなんでもない。

もしかしたら最初から、俺がここに来る事を知っていたのではないか、そう思ってしまうほどだ。

「このバカ、鍵ぐらいかけとけ！もし俺が本物の泥棒だったらどうするんだよ」

「鍵なんて、別におまえが困ってないならいいだろ、かけなくてもそれに別に盗まれても困るものなんてない」

……くそ、こう言えばああ言うヤツだ。

実際問題、俺自身の身の安全の心配もあるけど、それよりもまずこいつらの安全も心配だ。

だってそんな理由で鍵開けっ放しにしてたらどれだけ財があっても足りないじゃないか。

たぶん、同じ手法で泥棒が入った場合、次の日には根こそぎ金目の物はなくなっているのじゃないか？

それに、取るのは金だけじゃないかもしれない。

何故かは知らないが、何時の間にか俺はこの姉弟が本気で心配になつてきた。

とその時。

「やふく。さつき鍵が如何とか聞こえてきたんだけど、どつたの？何かあつた？」

どたどたと足音を立てながら、この家の主である（姉が嘘を言っていないければ）子供が帰ってきやがつた。

手には飲み物でも入っているであろうコンビニの袋をぶら下げている。

「おい、お前」

「ん？どうしたの、巴」

「鍵ぐらいかけとけ。あと、呼び捨てにすんな、おまえ年下だろうが」

俺がそう注意するとこの子供は、いきなり何を言ってるんですかとでも言いたげな顔をして首を捻った。

「うん？鍵？いやさ、巴——あーなんて呼べば良いのかな。ま、いや。とにかく居たでしょ。」

あとまあ、呼び方を改めろって言うならそうするけれどもね？その場合は何て呼んで欲しいかも言ってくれないと、呼べないよね。

うん」

「そんな訳わからねえ理由で鍵開けっ放しにすんな。あと呼び方は巴さんでもしておけ。いいか、明日からは鍵ちゃんとかけるんだぞ」

「まあわかったよ、巴サン。ところで、これ飲まない？もう随分遅いからご飯はもう食べたと思って飲み物しか買ってこなかったんだよね」

この子供はそう言つと、持っていたコンビニの袋から幾つか飲み物を取り出し、俺と両儀（姉）に一本ずつ投げて自分も一つ手にとつて台所の方へと歩いていった。

「んゝ、やっぱなんも無いねゝ。ごめんけど諦めてね。今日の夕飯」「ほんとに何も無いのか、永？」

隣に居た両儀（姉）が台所に居る子供に声をかけるが、子供はやっぱ無いねゝ、と返してくるだけだ。

「はあ……つて事は今日の夕飯本当にないのかよ……」

「ごめんねゝ、姉ちゃん。あ、あと明日の朝もないから」

夕飯がないと告げられ、更に明日の朝飯までないと言われてがつくりと頂垂れた両儀（姉）は、そのままソファで横になってしまった。子供は、そんな姉の姿を見て笑っている。

「巴サンもごめんねゝ」

と思つたら子供——両儀（弟）は、俺にも謝つてきた。

「何で俺に謝んだよ」

「え？いや、一応ここに居る事になったんでしょ？だったらご飯食べれないのは可哀想かなと思つてね」

そう言つて、この子供はぽりぽりと頬を掻いて苦笑していた。

「そんなに気を使う必要はねえよ」

「そう？ならいいのだけどね」

ったく、こいつもこいつで変なヤツだな。

こんな奴らとしばらく過ごす事になったのは、匿って貰う事を含めても果たして不幸なのか幸運なのか、その時の俺には判断できなかった。

両儀の部屋で寝泊まりするようになってから、一週間近くが経った。

俺もあいつらも昼間は出かけているので、夜に眠るときだけ顔を合わせるというおかしいな生活が続いている。

それでも一週間も経ってしまえば互いの名前ぐらいは知っておかなければ不便なわけで、子供の方は互いに知っていたので姉の方と名

前を教えあっていた。

フルネームは、子供の方は両儀永、姉の方は両儀織。何とも驚いた事に、あの姉弟はどちらも学校に通っていないそうだ。

姉の方はともかくとして、子供の方は義務教育じゃないのかと突っ込んだが、あの姉弟はそんなモノ知った事じゃないと言わんばかりに無視してくれた。

それ以外の事は、俺も聞かないし姉弟も言わないのでとんと判らない。

両儀（姉）は俺の事を臙条と呼ぶ。そのせいかは知らないが俺も両儀（姉）の事は両儀と呼んだ。

一方、両儀（弟）である子供の方は俺の事を巴さん巴さんとしつこく呼ぶので、俺も両儀（弟）の事は永と名前で呼ぶ事にした。

俺は、いずれ永遠に別れてしまう、その筈だ、だから俺は両儀（姉）の方を名前で呼ぶ事はしない。

だっていうのに、永は俺を名前で呼び、俺も永の事を名前で呼ぶ事に慣れてしまった。

最近は何儀（姉）の事さえ、織、と名前で呼びそうになってしまっている自分がいた。

……自分には、そんな覚悟なんか無いってのに、そういう関係は、邪魔なだけだと判っているというのに。

SIDE：永

「巴サンには彼女とかいるの？」

いつも通り、大して変わらない夜に夕飯の支度をしながら、俺は不意に気になった事を聞いてみる。

でも巴サンって、本来只の人形だし、考えてみれば彼女なんているワケもないんだよね。

だけどそんな俺の考えとは裏腹に、巴サンは返答してきた。
はて？何で答えられるのだろうか。

ああ……魂だけは引き継いでいるのか。まるでゲームのセーブデータじゃないか。

「女って……そりゃあ、いればこんな所に転がり込んできてねえだろ。てかガキのくせにそんな事聞いてくんな」

「そんな事言わないでよ。只単に顔が綺麗だから気になっただけなんだからさ」

「いつもと同じ顔をしながら言われても嬉しくねえし、そもそも俺は男に綺麗なんて言われて喜ぶような変態じゃねえ」

「俺は事実を言ってみただけだよ。で？居たの、居ないの」

「居たには居たけど——女には懲りてるんだ、俺は」

お？

「へえ、どうして？」

気になった俺は、先程まで作っていた夕飯（今日の夕飯は麻婆豆腐だ）を居間の方へと持って行きながら、聞いた。

皿を運んで居間へ行くと、織の姉ちゃんも巴サンの話に興味を持ったのか、はたまた夕飯が待ち遠しかったのかは知らないけども、既に座卓についていた。

「ゲイなのか、臍条は？」

そして俺が話を聞こうと思って皿を置いた後、いつもの如く姉ちゃんの隣に座ろうとしたらいきなり姉ちゃんがそんな事を言った。ハテ？ゲイ？

「姉ちゃん、ゲイって何？」

「なんだ、そんな事も知らないのか、永は。そうだな、最大限ぶっちゃけて簡単に言うと、男色だな」

「ワケねえだろ。子供に余計な事教えてんじゃねえ。」

たんに面倒くさいだけだ。実際に付き合ってみたら、大して面白くもなかった」

その後、巴サンはトットツと、思い出話（というより愚痴な気がするな、子供相手にセックスとか言っているのか？）を語り始めてい

った。

「だけど結局別れたんだろ。どうやってふったんだ、おまえ」

まあ気にはなるよね。非常に下世話だけどね。

「あのな、俺だけを悪者にすんな。ふられたんだよ。ホテルでさ、やる事やってから唐突に言われた。あなたはわたしを見てくれていなかった。わたしの外見ばかりで、心を見てくれなかったのよ、ってさ。正直、わりとショックだったぜ」

そう肩を竦めて巴サンが話のオチを言う。だけどその話の内容がどこか可笑しくて、俺は笑いを堪えるのに必死だった。

：見れば、姉ちゃんも笑っている。

「なんだよ、今の話のどこがおかしいんだ。青春のほろ苦い思い出だろうが。笑うんじゃないよ」

そうして笑い続けていたら、俺達が笑っている事が気に食わなかったのか、ふて腐れたような態度で麻婆豆腐をつついていた巴サンに怒られた。

「え、何で？だって外見しか見る事なんてできないじゃん。心を見るなんていうのは普通の人間には不可能だよ。だからその女の人が求めたのは異常、巴サンは異常なんて求めてなかったんだから、別れたとしても痛くも痒くもないはずだよ」

「永の言う通りだぜ、巴」

「うつせえ、大体十歳やそこのガキに何が判るってんだ」

その言い分は心外だなあ、人を見かけで判断したらいけないよ、巴

サン。

「だって多くの人間は、心なんか見ないじゃないか。見るのはまずもって見かけ。大体あれだよ、そんなに心を見てほしいんだったら女性を奴隷にする事を嗜好しているような人々に頼めばよかったじゃん。その類の人はきちんと有るか無いかもわからないような『心』を見て、あるいは見たつもりになって、それを屈服させる為に努力してくれるよ。心を見るってそういう事も含まれるでしょ」

だから俺の前に座っている巴サンにそう言ったら、横に座って麻婆をつついていた姉ちゃんに思い切り頭を叩かれた。

「永、今は飯の時間だ。そういう話をするんじゃない」

「ああ、ごめんな姉ちゃん。つい言ってしまったんだよ。」

……まあ巴サン、とにかくそういう事だから。要は巴サンが別れたのは間違いじゃないって事、OK？」

「あ、ああ……なんつか、おまえ、子供っぽくねえな」

今の言動だから自覚はしてるけど、酷くね？酷いよね？

そんな会話の後、飯を食い終わった俺はまたいつもと同じ様に和室で寝ている姉ちゃんの所に行き、これまたいつもと同じ様に姉ちゃんの隣に自分の分の布団を敷いて、寝た。

……

……

⋮

空の境界 二次創作 第十六話（前書き）

遅れました、申し訳ない。（――）m

空の境界 二次創作 第十六話

SIDE：永

巴サンが家に来てから二週間目、今日俺は特にする事もなく、橙子サンはたちの悪い風邪にかかって寝込んでいるので事務所に行く事も出来ずに街をふらふらしていた。

外はやつぱりというかなんというか、本屋のおばちゃんが言っていたように短い秋の所為で非常に寒く、正直に言えばコートの前を完全に閉めて、一応俺の持っているコートに出来る完全な防寒態勢のはずなのにまだ寒い。

一体なんだというのだろうか、そんなに俺がヒトの形をとっている事が世界は気に食わないのだろうか？

大体今はまだ十二月にもなっていないというじゃないか、これから更に寒くなるというのにこの状態じゃあ俺は冬を越えられないんじゃないか、という疑問が頭を一瞬ではあるけれども過ぎってしまう。で、俺がそんな他愛のない事を考えながら特に行くあてもなく歩いていると、なーんか物凄く顔の怖い人と会ったんだよね。

「貴様……何者だ」

しかも何でか知らないけどかなり驚いている、というか態度が刺々しい。

まあたぶん橙子サンと同じ魔術師のヒトだと思っただけだね。

でも俺はこんな人知らな——ああ、荒耶っていうんだ、この人。なにになに……ふうん、数百年生きて、最早存在がひとつの概念となっている、人物というより怪物……。

俺がこの人を知らない、そう考えた瞬間に、“世界”が今俺の前にいるこの人の簡単な情報を寄越した。

だから俺は今考えたように情報を咀嚼して、改めてさっきの質問に答える事にした。

「何者って、俺はただの小学三年生の不登校生徒ですよ？」

まあ、結局適当にごまかすだけなのだけれども。

俺がそうごまかすと、荒耶サンは見る人を威圧するこわい目を細め、探るようにして、また俺に同じ質問を繰り返した。

「もう一度聞く。お前は何者——いや、何だ？」

そう聞く荒耶サンの細められた目からは、質問の内容からも感じられるように俺をヒトとして見ていない、化け物を見るかのような感情が垣間見えた。自分も充分に化け物だと思うんだけどね？

あゝあ、ごまかし失敗、つと。このヒトあんまり嘘とかごまかしつて効かなそうなんだよね。

でもな、このまま荒耶サンと話し続けるとこの人良からぬ事を考えそうだしなあ。

……ここは——あれだよ、式の才姉サンや、橙子サンに面倒が行くようにこう答えよう、うん。
面白くなると思うから、いいよね？

「俺は、荒耶サン達魔術師がその生涯を賭け、そして何世代にも渡って到達しようとするモノ、その終着点でもあり、そして『とも呼ばれる存在だ」

荒耶サンは目を見開く。

当然、ここで終わると俺が“良からぬ事”の標的にされてしまうので、というか解剖されかねないので、まだ言葉を続ける。

「おつと、ここで終わりじゃないんだよね、これが。

荒耶サンの求めているモノは確かに今ここにある。だけど荒耶サンは根源^{オレ}の渦から直接は力を貰う事はできない」

「……ならば如何しろ？貴様のその体を解剖すれば手に入るというのか」

根源の渦である俺の話に興味を持ったのか、荒耶サンも問いを違うものに変えた。

ここまでは予想できるね、うん。

「貴方がこの俺に到達して力を得るのにはね、荒耶サン。権利を持った者以外が無理に入ろうとするなら、到達する権利を持った者の体を媒体にして道を開くしかない。そしてその体の最も身近な所有者は荒耶サンが今推し進めている計画のターゲット。その所有者の名は——」

俺がそこまで言うと、荒耶サンは完全に確信したという口ぶりで、

次の瞬間、俺が発したのと同じ名を口にした。

「「両儀式」」

………

………

…

そしてその後、俺と荒耶サンはアーネンエルベに行って暫く話をした。

そこでは荒耶サンはかなり気味悪がられていたが、気にしない事にする。

内容は、両儀式を荒耶サンが嵌めるという計画。

で、その話によるとどうも……俺が家に匿っているという事になっている巴サンは、荒耶サンの作り上げた結界内から脱走した作り物で、それはイレギュラーであったけどそのイレギュラーに式の才姉サンを結界内に誘い込む暗示をかけていた、そうだ。大して期待はしてなかったらしいけど。

つまり俺のやった事は、この荒耶サンの期待を、大してしていなかったとはいえ砕いてしまったワケだ。

……あゝ、やっちゃったかな？

「ごめんな、荒耶サン」

「ふん、気にする事などない。元から私はさしてあの人形には期待などしていなかったのだから」

おや、なんか意外に優しくない？この人。

「それに貴様は道さえ作れば私に力を渡すと言ったからな。ならばこそ、私は今進めている計画に万全をもってあたろう」

なんという現実主義だろうね、うん。こういう理解が早いのは高評価だよ、俺の中では。

「だけどその代わり荒耶サンは俺に辿り着くには式の才姉サンの体を使わなくてはならない」

「ああ、知っている。だからこそ、計画なのだ」

先程頼んだ紅茶を啜る。

「その計画なんだけどね？まあ俺は荒耶サンの計画の一部をダメにしてみましたワケだし、多少は協力してもいいんだよね」

「……それは本当か？」

俺が協力してもいいと言うと、荒耶サンは少し疑わしそうに聞いている。

「まあ、道を開くのは荒耶サンと、なんだっけ…確か、コルネリウス・アルバ？とかいうヒトが協力してやってよね」

俺がやるのは誘導を多少補助する事、それが終わったら俺は荒耶サン達のやる劇を見る観客になるから。んで、道を開いた景品は俺がこの世に贐す死、って事でOK？」

「貴様は……ヒトでも、抑止の力でもない、そういう事か」

俺が軽い感じでそう答えると、荒耶サンはまるで悪魔と取引をしているようだ、と意外と失礼なことを言った後、窓の外を見て溜息をつく。

なんだ、意外と人間らしい所があるじゃないか。

ただのヤバイ人だと思ってたんだけどね。あ、でも俺自身ヒトじゃないからこのヒトが本当にヤバイかどうかは判らないのかな？

………

……

…

その日の夜。

俺は荒耶サンと別れた後、また昼間と同じようにあてどもなく街をぶらついていた。

……… けどいい加減ただぶらつくのにも飽きたな、どうしようか。

そう考えながら歩いていたらいつの間にか俺は、巴サンと初めて会った路地裏に来ていた。

そこであつた殴り合いの時に飛び散った血の跡は、今はもう無い。

——— そういえば、と俺はふと考える。

どうして俺は巴サンが人形だと気づかなかった？俺は根源の渦、全てがそこに在り、俺はその全てでもあるはずだ、だが俺が巴サンの事を見抜けなかったのは一体どういう事だ？

唐突に考え始めたが途中で面倒になったので、取り敢えず適当な一つの結論をその考えに与える事にする。

ま、考えてみれば簡単な事だよね、面倒臭くなって強引な結論を付けただけではあるけども。

そんな風に強引な結論付けをした後、俺があの路地裏から立ち去り街中を歩いていると、大変珍しい事に織の姉ちゃんに遭遇した。

俺がそう言っと、姉ちゃんはおあ、まあな、と答えた。

そう言つて姉ちゃんは俺の事を少し恨みがましく見てくるが、正直もう、ね。

「はいはい、そんな親の帰りが遅くなつた子供みたいな事言つたりして、可愛いねえ姉ちゃんは」

うん、可愛い可愛い。

可愛かつたから頭を撫でてあげたいけど、俺のこの体は小さくてそんな事は出来ないので諦めた。

「い、いや、可愛いとかそういうのはないだろ？それにっ、子ども扱いするな！お前の方が子供だろ！」

だけど姉ちゃんは俺に子ども扱いされた事が気に食わなかったのか、微妙に怒っているように見える。

「うん、ごめんごめん」

「…謝り方も親が子をあやすような感じじゃないか……まあいい、許してやるよ。その代わり、次からはちゃんとメシ作れよな」

一応姉ちゃんは許してくれたようで、俺の態度に呆れた調子でそう言ってくれた。

よかった、適当な誤りでも許してもらえて。

まあその代わり夜の時間が削られそうだけど、全然許容範囲でしょ。

~~~~~

姉ちゃんと話をして暫く、俺はまだもう少し歩いてまわるから、と言って家に帰る姉ちゃんと別れた。

それで今俺はやる事もないのであの巫条ビル、その屋上に来ている。

あの時浮いていた女の人たちの姿も今はもう既になく、見上げた夜空にあるのは今日も今日とて綺麗に地上を照らす月だけだ。

そしてそこで俺はビルの屋上という高みから、ただ地上を歩いているだけでは見えない綺麗な町の全景を見下ろしていた。

昔なら、そうだね、電灯が一般化して、こんな風に町中が昼も夜も電灯で照らされていなかった時代。

そんな時代なら、たとえ空を飛んで、そしてこんな風に町や村を上から見下ろすような事があったとしても綺麗などとは思わなかった、そう思う。

だってそんな時代の町や村はそもそも明かりなんていうのが殆ど無くて、上から見ても見渡す限り闇ばかりでこんな風に星空が地上にあるような輝きを放ってはいなかっただろうから。

そんな事を考えながら俺は暫く（約一時間ほど）屋上から町を眺め続けていた。

相変わらず、寒い。本当に寒い。

昼間にも思った事だけど、どうしてこの国はこんなにも寒いのだろうか。

まだ十月、これからもっともつと寒くなる。

その時は……どうしようかな、コタツでも置こうかな？

暖かいよね、きつと。

寒い中そんな他愛の無い事を考えながら、それでも綺麗な夜景から目を離せずにいる俺の頭上には、やっぱり光り輝く月が在った。

……

……

…

空の境界 二次創作 第十七話

SIDE：永

その日、俺が散歩をしていると珍しく式の才姉サンに会ったので、そのまま一緒に散歩をする事にした。

「くそ、おまえには相変わらず線が見えないな」

「才姉サン、折角こうして一緒に散歩してるっていう時にそんな物騒な事言わないでよ、一瞬冷汗かいたじゃん」

「おまえは死なない、って事だろ」

才姉サンはそう言ってるけどもね。

まったく、冬に冷や汗かくなanteeいい気分じゃないよね。

それにしても、散歩してる時に人の（？）死を見ようとするなんて、そんなに俺を殺したいのだろうか？

まあ死なないんだけどね、俺は。

そうして、そんな一般の人から見たら一見何の会話か判らないような会話を交わしながら人込みを歩いていると、後ろをつけてくる気配があつた。

その更に後ろには、巴サンの気配もした。

後ろをつけてくる気配は、どうやら巴サンと初めて会った時に式の才姉サンに撃退されていた人達の中の一人みたいだ。つけ回している対象は、どうやら才姉サンみたいだね。

よくまあ、こんな寒い中つけ回すなんてご苦労な事だね、素直に感心するよ。

まあ別に危険はないようだし、才姉サンも気づいてはいないようだから、無視しても問題ないでしょ。

……

……

…

そうして一時間ほど才姉サンと軽い会話をしながら歩いていると、巴サンの気配がいつの間にか消えている事に気がついた。

どうやら巴サンは、俺達をつけ回していたヒトの一人についていつて何処に行くのか知ろうとしたみたいだった。

そんな事やらなくてもいいのになー、無駄な事が好きなんだね、彼は。

「じゃあオレはこっち行くからな、おまえはどうするんだ？」

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか分れ道にきていたようで、式の才姉サンは一応俺の事を一緒に散歩をしている仲だから聞いてくれたみたいだ。

まあここまで来たらもう帰ってもいいかな、また遅くなりすぎると

織の姉ちゃんに怒られるかもしれないし。

「ん、じゃあ俺は帰る事にするよ。またねー、才姉サン」  
「ああ、じゃあな」

はてさて、今日の夕飯は何にしようか……あ！

そこで俺は一つ名案を思いついた。

「今日の夕飯はこれだね、これしかないとおもつよ、うん」  
「思いついたら即実行しないとね。」

んで、俺が帰った後、自宅にて。

「で？何でそれでオレがこれをつける必要があるんだ、永」

そこでは着物にエプロンという、どう見ても和風の家にいる奥さんにしか見えない織の姉ちゃんが台所で夕飯を作っていた。さっき聞いた所によると、今日の夕飯は焼き魚だそうだ。台所からも魚を焼く良い匂いが漂ってきている。

「うん？そりゃ、可愛いからでしょ？」

というか寧ろそれ以外に理由とかいらないでしょ、常識的に考えてさ。

「何だよその理由……。大体なんでオレが飯を作らなくちゃいけないんだよ、いつもみたいに永が作ればいいじゃないか」

「えー、たまにはいいでしょ？大体姉ちゃんはいつも俺の料理を食べてるんだから、たまには俺にも食べさせてくれないとねー。それに姉ちゃんときたら最近はずっと俺にばかり飯を作らせるんだからさあ」

姉ちゃんとは自分で夕飯を作る事が不満なようだけど、俺は姉ちゃんの料理が食べたいし、実際に食べたのなんて数えるほどしかないからね。後は全部俺が作ってたし。

だから俺がそう言うと、姉ちゃんは若干口籠もりながら答えた。

「それは……おまえの料理が美味いんだから仕方ないだろ」

おお、なんと。

「姉ちゃん、そんなに俺の料理美味かったの？だとしたら俺、結構嬉しいんだけど」

「……ああ、まあな。おまえ…他の事も結構そつなくこなすけど、料理の方もそうだったから」

そう、姉ちゃんは魚の方を見た後、今度は味噌汁の方を作りながら答えた。

しかし、そこまで美味いと思ってたのか、嬉しいねえ、こういうのは。

俺がそんな感じの軽い幸福感に浸っていると、更に姉ちゃんは嬉しい事を言ってくれた。

「まあでも、たまにはこういうのも悪くは無い、か？まあ…たまにだけ」

「マジか！？」

だから俺が思わずまだ味噌汁の鍋から手を離していない姉ちゃんの腰に抱きついてしまったとしても、別に俺は悪くないと思う、というか悪いはずが無い、うん。きつとそうだ。

「うわっ！？やめるバカ！鍋がひっくり返るだろ！！」

だというのに、いきなり俺に抱きつかれた事でテンパった姉ちゃんが俺にくれたのはとても痛い拳骨でした。

ガスッ、という音と共に俺の脳天へ姉ちゃんの拳骨が振り下ろされる。

「イタツ、イタイよ、姉ちゃん。俺はただ単に抱きついただけなのに……」

「そういうのは、時と場所を考えろよな。今は鍋を持ってるんだから危ないだろ」

ああ、そういえばそうだね、これはうつかりだったよ。ごめんな、姉ちゃん。

でもゲンコは酷いと思うよ？言わないけど。

………

……

…

で、その後夕飯ができてから俺は気づいた事が二つほどある。

最近、巴サンがなんだか姉ちゃんに惚れてる気配がするんだよ。

だから早速、聞いてみる事にした。

「姉ちゃん」

「んー？」

「最近巴サンと何かあった？」

「？いや、別に何も無いぞ」

「ならいいんだけどね」

本当かな？最近巴サンの姉ちゃんを見る目は思春期の男性を思い起

こさせるんだけど。

で、気づいた事のもうひとつは、その巴サンの帰りが遅いんだよ。いつもならこれぐらいには帰ってるはずなんだけどね、どうしたんだろうね。

「それよりもさ、もうあんな奴待つ必要ないだろ。そのうち帰って来るんだから先に食べようぜ」

で、姉ちゃんは巴サンが飯ができてから二十分ぐらいしたのに帰ってこないのでもそろそろ待ちきれなくなってきたような気がする。仕方ない、巴サンの分の夕飯は後でラップに来るんで冷蔵庫に入れておいて、今は先に食べちゃおう。

「はいはい、わかったよ。俺も早く姉ちゃんの料理食べたいしね、悪いけど巴サンのは——」

——冷蔵庫に仕舞っておこうか、俺がそう言いかけた時、玄関のドアが開いて巴サンが帰ってきた音がした。

………

……

…

SIDE: 巴

夜になって、いつもより少し遅く戻った俺は、両儀（弟）と（姉）に遅くなった事を謝った後、弟の方に尾行されている事を教えてやった。

あの夜の連中がおまえか、それともあのもうひとりの方の姉を本格的に監視しているんだ、と。

けれど、両儀（弟）はそんな事はどうでもいいとばかりの態度で答えた。

「仮に俺をつけてたとしても俺気にしないし。それよりも帰ってくるの遅いんだよね、お陰で巴サンの夕飯冷めちゃったよ？」

温める？ と俺の言った事を完全に無視して聞いてくる。

俺も、今度ばかりは理性の箍を意図的に無視した。

「気にしないし、じゃねえだろ。監視してるのは連中だけじゃないんだ！赤いコートの外人に見覚えはないか？」

だけどそんな俺の質問に答えたのは、弟ではなく姉の方だった。

「こいつは意外と知り合いいないからな、そんな愉快的な奴と知り合っていたら今頃ずっとそいつの話をしてるよ」

姉がそう答えると、弟もそうそう、と言ってそれきり、この話には反応しなくなった。

恐らく興味が持てなかったのだろう。こいつらは幾ら自分達に影響を与える事でも（姉の方は弟のメシになると反応するが）本人達が

つまらない事だと判断すれば何であろうと放っておくのだ。

たぶん、この子供は冤罪で他の奴に万引きにされてもまったく意に介さない。

姉の方にとっては、大事なものは外の評価ではなくて自分の気持ちだけ。

弟の方なんかはそれより更に極端で、仮にそれが自分に害を及ぼすと判っているとしても、“面白くない”そう判断したらとことん無視、だ。

……ああ、流石に弟のは極端過ぎる気もするが、俺だってそうであろうと望んでいたし、それが自然ですらある姉弟を気高いとまで思っている。

だが、今回ばかりは例外だ。

あいつらは——いや、あいつは本物だ。

俺や、あの連中——路地裏で殴り合った奴らようにニセモノ、作り物の危険性じゃない。

本物の、混ざり気のない空恐ろしさを持っていたんだ。

「話を聞け！これは他人の事じゃない。他ならぬおまえら本人の事なんだぞ！少しは心配する俺の気持ちにもなってみろ！」

怒鳴る俺の声に反応したのは弟ではなく、姉の方だった。

姉の方は煩わしそうにソファの上で肘をついて寝転がり、俺の方を見上げてきた。

後々考えると、この時、俺はかなりムキになっていたに違いない。

この両儀姉弟があんまりにも無関心だからじゃない。理由はもつと

単純だ。

それは――

「そいつらがつけてたのはオレじゃなくて永の方か、式の方なんだろう。なのになんでおまえはオレの事も心配するんだ？確かに式とは外見瓜二つだけど」

違う、そんな事じゃない。俺がおまえらを、おまえを心配してるのは――

「この馬鹿、心配するに決まってんだろ。俺はおまえにケガなんかしてほしくないんだ。俺は――おまえに、惚れてるから」

聞き合っていた空気が、ぴたりと止む。

……言った。もうじき消えるべき俺が、口にしてはいけない事を口にしまった。

この言葉は何より――俺自身の為に、形にはいけなかったのに。

両儀――織は不思議なものでも見るような目で、俺を見ている。

数秒ほど経って、着物の少女は笑い出した。

「ははは、永が言ってたのはこういう事か！だけどおまえがオレに惚れるなんてあるもんか。おまえ、その赤いコートの男に催眠術でもかけられたか。よく記憶を確かめてみる事だ、きつとおかしな音がまざってるぞ！」

織は、笑って相手にしない。

どのような確信があるのか、彼女は本当にそんな事はないと断言した。

俺は勿論、そんな事は認めない。

「違う！俺は本気だ。お前を見て、初めて人間を美しいと感じたし、ようやく近い人間に会えたと思った」

思い出されるのは、この間の夜の出来事。

………

……

…

……どこかで蒸気があがっている。

しゅー、しゅー、と絵本にあるような音がする。

灯りはなく、部屋は暗い。

ここは、熱い。

鉄板の焼ける音と、そのマグマみたいな光だけが頼りだった。

周囲の壁に、大きな壘が並んでいる。

床には細長いチューブがちらばっている。

誰もいない。

ただ水蒸気の音と、水の泡立つ音だけが

.....

.....夜になって、俺はふと目を覚

ました。

いやな夢を——見たからだ。

かちかちかちかち。

時計を見るとまだ午前三時をまわったばかりで、目覚めの時間には  
ほど遠い。

部屋にある自分が今寝ているもの以外の二つの布団に目をやると、  
どちらも姿はなかった。

..... あいつらは、というか姉の方は、ときおり夜中に外に出ていく  
時がある。一度聞いてみたところ、あまりにも空腹なのに弟が帰っ  
てこないから探しに行くらしい。

にしたって、草木も眠る丑三つ時に出歩く事もあるまい。

迎えに行ってみようか——互いのプライベートには極力関わらな  
い（弟の方はそんなものはどうでもいいという感じだが）のがここ

を俺が床にする為の暗黙の了解だと分かっていたのに、そんな事を思った。

さんざん迷って、よし、と立ち上がった。

あの俺が路地裏で殴り合いをしていた時のヤツの姉妹なんだ。あいっだってたぶん、デタラメに強いんだろう。

ただいくらデタラメに強いといっても、両儀（姉）が同い年の少女である事に変わりはない。

それにあいつのあの格好は、夜中にたむろするバカどもを惹き付けるのには十分すぎる。

決意をかためて俺が居間を通り抜け廊下に出た時、音もなく玄関のドアが開いた。

着物に革ジャンという、普段通りの少女がそこにいる。

両儀はやはり音もなくドアを閉めた。

「なんだ、帰ってきたのか」

なんとなくおあずけをくらった気がして、俺はつい話しかけた。

ちらり、と両儀がこちらを見て――

瞬間。殺されるかと、思った。

電気が消えた薄暗い廊下で、両儀の目が確実に俺を捉えている気がする。

何も出来ない。息する事も出来ず、まともな考えさえ浮かばず、俺はただ立ち尽くした。

「——おまえじゃ、ダメだ。やっちゃ、いけない」

声がした。

気がつくと両儀はするりと俺の横を通り抜け、苛立たしげに革ジャンをソファに投げ捨てていた。

そのまま両儀は布団に寝転がると、天井をじっと見つめる。

俺は背中に残る悪寒を堪えながら和室に戻って、自分の布団の上に座った。

そのまま、意識を失いかねないほどの無言の時間が流れる。

それに堪えきれなくなった俺は、両儀に声をかけた。

「なあ、おまえどこ行ってたんだ？」

その言葉に、両儀は一瞬何かを我慢するように目を閉じたが、またすぐ目を開く。

「永を探してた」

返ってきたのは俺の予想通りの答え。

「でもダメだな。あいつどこを探しても見つからない。だからさっき廊下でおまえを見た時、おまえを腹いせに殺ろうかと思ったけど、やっぱりダメだ。殺ったら、たぶん永に文句を言われるし、何より意味がない」

「……俺は完全にやられる、と思ったぜ」

素直に言っと、両儀はオレってそんなに殺気を出してたつもりはないんだけど、と言う。

「オレは別におまえを殺したいってワケじゃない。オレは確かに人を殺したいと思うけど、ただ殺すっていうのは意味がない。意味もなく人を殺すのは——やっぱりダメだ」

両儀は溜息を吐くようにそう言っと……禁断症状の麻薬中毒患者のように、またぼんやりと天井を見つめはじめた。

こんな事は、今までになかった。

俺があ路地裏から出て初めて会った頃の両儀は、あんな殺気を持ったりはしていなかった筈だ。

「おい、どうした両儀。らしくねえぞ、しっかりしろ！」

おかしい事に——俺は今まで触れた事もなかった少女の肩を掴み、起き上がらせていた。

信じられない。この、常人とは違う、どこか超然とした雰囲気を感じてた女の肩が……こんなに、細かったなんて。

「……オレはしっかりしてるよ。」

今回ののは、ただあんまりにもあいつが帰ってこないのと、オレの

人を殺したいって気持ちが重なっただけだ」

ただそれだけだ、両儀はそう言って言葉を切る。

俺は両儀から手を離して、また自分の布団へと移動する。

両儀はまた、布団に寝転がった。

「なあ、両儀」

声をかけるが応えはない。あいつは以前言った。心は見えないものだ、と。  
だから、見えない物の悩みなんて、決して他人に打ち明けたりはしない。

両儀は——子供と一緒になのかもしれない。  
そんな考えが、唐突に頭に浮かぶ。

安心できる相手——あの弟がいなけりや、独りだ。

俺だってそうだったけれど、気を紛らわす為に軽く付き合える友人は何人も作った。だけど、こいつにそんな友人はいないだろう。

子供に必要なのは、そんな軽い友人ではなく、親のような存在なのだから。

だけど——

「——なあ、両儀。おまえ、友達っているか？」

俺は少女の顔を見ないように、両儀のいる布団に背を向けて尋ねた。

両儀はそれに、少し考えて、アツサリといない、と答えた。

「やっぱりな、作った方がいいぜ、友達。落ち込んでる時はな、意味がなくてもいいから、そういう奴らに面倒を押しつけちまえばいいんだよ。その場しのぎでもけっこう楽になるぜ。こっちの悩みなんてほつといて、くだらない話をするだけでいいんだ」

「——前はいたんだけどな、そいつとはもう会えないと思う。まあ、今は永がいるけど」

少女の言葉に、俺は何も言えなくなった。両儀の声がひどく寂しそうに聞こえてしまつて。

けれどそれは気のせいだったのか、両儀はダン、とベッドを殴りつけて独りでに怒り出してしまつた。

「大体何なんだあいつは！ たまに早く帰ってくるかと思えば、その次の日は日付けが変わっても帰ってこない。この間だって今日みために日付けが変わっても帰ってこないで、お陰でオレは夕飯を食いそびれる羽目になった。ああ、苛々する！」

ばたばた、と暴れる音がした。

今度こそ、ほんとうに、信じられない。

あの両儀が、布団の上で手足をばたつかせて暴れている——。

俺はその光景を見るのが少し怖くて、両儀に振り返るのだけはやめておいた。

……少々暴れると両儀は静かになった。

ともあれ、両儀をここまで狂わすあの少年が羨ましい。

俺は、あの少年の事をもう少し知りたくなった。

「なあ両儀」

「……………」

まだ機嫌が悪いのか、両儀は応えない。俺は構わず続けた。

「あいつって結局どんなヤツだよ。俺にはただの変な子供にしか見えないぜ？」

「——ああ。変なヤツだよ。ほんとうに——変な、ヤツ」

どこか呆れを感じさせるような、そんな呟きで両儀は答える。

どこらへんが変なのか、俺が思っている事よりも変なのかそうじゃないのか、なんて事は聞かない事にする。

俺が知ったところでさしたる意味はあるまい。

「で、おまえが今日出歩いてたのって、あいつを捜してたんだろ。理由は？」

両儀は答えた。

「理由は、腹がへったからだろ。それ以外にはない筈だ、たぶん。でもまあ、おまえを不安にさせるぐらい、今のオレは機嫌が悪かったってコト」

淡々と、まるで他人事のように両儀は言う。

「不安つて——別に俺は不安なんか……」

「オレに殺されると思ったって、言ったクセに」

綺麗な声が、首の後ろにかけられる。

……冷たい蛇が首をなぞっていくような感覚。

俺は自分の背後で寝そべる相手が本当に人間なのか、ほんの一瞬だけ、疑問に思った。

「ほら、今もそう思った。でもそれは見当違いの不安だよ。オレが殺人をする時があるとしたら、それを永が望んだ時だけだ。少なくとも、おまえは対象にならない」

……どういう意味だろう。

あの子供は、誰かの死を望む事があるんだろうか。

そうだとしたら、俺——臙条巴を殺す気はないと、なぜ言い切れるのだろうか。

「でも——そうだな。やっぱりおまえは新しい隠れ家を探すべきだ、臙条。オレは殺人衝動がどこから来てるのか知ってる。だけどそれでも——きつと、両儀織にとって、人殺しは優先順位が高いんだ」

あいつが全部変えてくれればいいのに、と、ぽつり、と告白するよ  
うな神妙さで両儀は呟く。

落ちた声のトーン。心情の不安を吐露する、とぎれそうな声。

……ちくしょう。ただでさえ遠い女が、よけいに遠く感じられち  
まった。

それで悟った。

俺は今日、こいつが帰ってきた時に感じた恐怖と同じぐらい——  
いや、それ以上に惹かれているんだって。

「——ばかヤロウ、そんな事あるか」

とにかく両儀の言葉を否定したくて、言葉を繋げる。

「おまえは情緒不安定なだけだ。さつさと友達でもなんでも気軽に話せるヤツを作って、無理難題でもふっかけやがれ。友人なんてのはその為にいるんだし、そうしないと離れていつちまうものなんだからな——」

そこまでまくしたてて、言葉を切った。

……今俺が口にした事。  
感情にまかせて思いを口にして、気が付いてはいけない事に気が付いてしまった。

「——そういう事だ。俺は寝るぞ」

苦虫を噛み潰すように吐き捨てて、布団に寝そべった。

両儀が何か言っていたが、無視して眠る事にする。

今夜はこれ以上、両儀とともに話が出来る自信がない。

……理由は簡単だ。自分の言葉に胸を衝かれた。

そう、どうしたって。

俺には、あいつの友達という役はまわってきそうにない。  
もちろん、あの弟のような役も。

…

……

………

「そうだ、おまえは本物だ。俺はおまえの為なら、何だってやってやる——」

ついこの間起こった夜の出来事、それを言葉を紡ぐ間、ほんの一瞬だけで思い返した俺は、座り込んだ両儀の肩を掴んで正面から睨む。

両儀は、笑うのを止めて見返してきた。

「ふうん、そっか」

喝いた声。

両儀の手が俺の襟元を掴む。と——俺は簡単に、まるで紙にでもなったみたいな軽さでソファに投げ出された。

その音を聞いて、織の弟が、こちらへとやってくる。

だがそれに構わず、織はベッドの上に投げ出された俺に馬乗りになると、どこからか取り出したナイフを俺の喉元に向ける——。

「なら、オレの為に死ねる？」

喉元に、刃が触れる。

両儀の目は、何の感情も浮かんでいない。

いつものように、無関心なままナイフを下ろして、俺を殺すだろう。

「姉ちゃん」

「わかってる」

両儀の弟は少し咎めるような声を出す、両儀は一言そう返すだけ。

両儀は自分の為に何かをやって死ねるか、と聞いているんじゃない。

自分の快樂の為に殺すよ、と言っている。

今のはそういう意味の言葉だ。

——こいつの為に、命を棄てる。

死ぬのは怖い。今も身動きできないほど恐ろしい。けど、自分はどうせ長くないのだ。人殺しをした俺は、いずれ警察に捕まって二度とこちら側に戻ってくる事はない。なら——

「……いいぜ。おまえの為に死んでやる」

言った。

両儀の目が、人間らしい色を帯びていく。

「好きにしろ、どうせ先は短いんだ。俺は親殺しだからな。下手すりゃ死刑さ。それなら——絞首台より、おまえのほうが巧そうだ」  
「親殺し？」

ナイフを俺の喉元で止めたまま、両儀が繰り返す。

俺は今まで隠していた記憶を、殺される直前に語り出した。それはきつと——死ぬ前に、一度ぐらいは懺悔の真似事をしてみたかったからだろう。

あの少年も、俺の話の黙って聞こうとしている。

「ああ、俺は両親を殺したんだ。ダメな親でさ、俺の目を盗んでは借金をして遊びまわる。俺もいいかげん面倒みきれなくなつて、何度も何度も——何かの間違いで死にそこなわないように何度も——包丁で内蔵をかきまぜた。俺の家は暖房もねえからな。あの夜は寒かつただろ？吐く息も白くてさ、人の臓物のほうがあつたかいんだ。人間のハラん中から湯気がたちのぼるなんて、一生に一度見れるか見れないかだぜ！へへ、まったく——何もかも痺れて俺は馬鹿になつてたんだろうよ。指は包丁を放さねえし、腕はいつまでもハラワタアかきまぜやがる。そのうちさ、俺は親を殺す為に刺したのか、ハラをかきまぜる為に刺したのか分からなくなつちまつて、それが人間だつたかどうかさえ分からなくなつちまつて——」

泣くかな、と思つたが涙は出なかつた。

むしろ妙な清々しささえある。

俺はあの不出来な親を殺して、本当に自由になつたんだ、と。

「——巴。おまえ、どうして殺したんだ」

目の前の女が、尋ねた。

考える。俺はどうして殺したんだろう。

憎かったのか。煩わしかったのか。違う、そんな綺麗な感情じゃない。

なら俺は——恐かったのだろうか？

「俺は、恐かった。夢を——見るんだ。

仕事から帰ってきて、布団に入る。しばらくすると隣から母親と父親の言い争う声が聞こえて、襖が開く。父親が血塗れになっていて、母親が立ってた。母親はそのまま俺を刺し殺すと、自分の喉を刺して死ぬ。初めは、俺はそのまま死んだかと思った。でも違う。朝になって目が覚めれば、そんな事はない。夢だ。つまらない夢だったんだ。

俺はきつと、両親を殺したくて、でも出来なくて、そんな夢を見ただろうよ。それから——その夢を毎晩見た。毎日毎日、その夢の繰り返しだ。夢といっても毎日だぜ。いいかげん耐えられなくなる。俺は、俺が殺される夢が恐かった。もうあの夢を見たくなかった。だから——もう見ないように、殺される前に殺したただけだ」

そうだ。あの夜。何かの用事で襖を開けた母親を、隠していた包丁で滅多刺しにした。何度も殺されたんだ。今までの鬱憤を晴らすように、念入りに殺してきた。俺は自由だ。あんな出来ない両親にもあんな不気味な夢にも、もう縛られる事はない。

ざまあみろ。清々する。夢にまで見た、いや、夢にさえ許されなかった自由！

これでもう何に怖がる事もなくて——くそ、なんて——汚れた、

自由。

だけど話が終わった時、今まで俺が人を殺したと言っても、おまえは監視されているんだぞ、と言ってもまったく動じる事のなかった、そんな、不思議というより変なヤツ、という印象が相応しい子供——永が、そのまだ子供らしい顔を、ひとつ、光る筋で濡らしていた。

顔はひどく——物悲しそうだ。

「——莫迦だな、おまえ」

そんな自らの弟の様子を見て、本気で両儀は俺に言う。  
その遠慮のなさ、逆に俺をスカツとさせた。

本当に、まったくその通りだ。俺は頭が悪いから、それ以外の逃げ道を考えつかなかった。

だが後悔はしていない。結果として警察に捕まるにしても、あの日々よりは幾分はましだろうから。

……ただ、ひとつ。自らの罪を口にして気がついた。

俺は自分の事だけを決めてきた人間だ。

そんなヤツがたとえ本当だとしても、他人に惚れているなんて口にしてはいけなかった。……そんな資格さえない。

両儀が笑って相手にしないのも当たり前だ。

けど……こいつを守りたいという気持ちだけは本物なんだ。

ニセモノだった俺にある唯一の本物なのに。薄汚い人殺しの俺では、その思いさえ汚れている。

——悔やむといえ、今はそれが後悔だ。

それが判ってしまった途端。

さっきまで俺をかりたてていた熱病は、新品に取り替えられて捨てられた旧型のテレビみたいに、急速に冷めていった。

「それでも——」

俺は、あの殺人を後悔していない。

その、たった一言——もう一言が、喉から、つつかえたかのように出てこない。

あの殺人はしなくてはいけない事なのだと、心の底で巴が言っているというのに。

両儀は傍らに弟を引き寄せ、その頭を撫でながら、遠い眸ヒトミをしていた。

臙条巴という俺の中心を見透かすような、一点の曇りもない観察。

弟の方はされるがままに頭を撫でられながら、それでも哀しそうな表情のまま、俺から目を離そうとしない。

「——ひどい間違いだ。我慢するのがおまえの長所だったのに、結局、辛いほうを選んだんだな。初めて会ったのは、おまえを永が連れてきた時か。あの時の臙条巴おまえは臙条巴をないがしろにしていた。未来をなくして空っぽになったおまえは、今みたいに死にたかったのか」

……俺を気粉れ、自らの欲望で、殺そうとする少女。

……俺が殺されてもいいと思った少女。

そして、俺の事を……哀しい目で見てくる子供。

そのみつつが問いかけてくる。

……どうだろう。

あの夜、俺は、確かに自分をどうでもよく扱っていた。

相手を殴り殺してもいいと思ったし、逆に殴り殺されてもいいと思った。けど、死にたくもなかった。

あの時は、ただ生きるのが難しかったただけだ。

目的もなく生きている、ニセモノみたいな自分が無様だった。

死にたいと思うクセに自殺もできない自分が醜くて、居たくなかった。

こうしてこいつらに自らの罪を明かしている今だって死ぬのは御免だ。

——でもどうせ、人間は最後に死ぬ。俺はそれが人より少し早くて、人より無様で、人より価値がないだけだ。

「——それは違うよ、巴サン」

そんな、無価値な、つまらない死に方がきつと俺には耐えられない。

そう思った俺に、相変わらぬ表情のまま両儀に撫でられている、永が声をかける。

「巴サンは、無価値じゃないよ。……そうそれは、ただ巴サンが誤解してるだけなんだ。きつと、そう——」

その声は、いつものふざけたような声ではなかった。

その瞳は、まるで道に迷っている事に気付いていない子供を見ているような色だ。

「俺は、巴サンが死ぬのは——イヤだと思っんだ」

「そっだな。オレもおまえの命は、いらない」

ナイフが外れた。

永の手を引きながら、両儀は俺から離れていく。

何処に行くというのだろう両儀は革ジャンを手にとって出かける支度をする。

俺は、それを見つめる事しか出来なかった。

「ねえ、巴サン。巴サンの家ってさ、どこにあるんだろうね」

永の声は、既にいつもと変わらない、少し軽い調子に戻っていた。

……俺の家は借家を転々と渡り歩いた。半年もすれば家賃を払えなかったり、借金の取り立てがひどくて追い出されたからだ。

俺はそれがイヤで——子供の頃からイヤで、普通の家がほしかった。

「聞いてどうする。どこぞのマンションの405号室だよ」

「それじゃないよ。巴サンが、ほんとうに——帰りたい、そう心から思う家の事。わからないなら、いいよ」

今はね。……そう言っつて、姉弟はドアを開けた。

「俺は——そうだね、うん。やっぱり、巴サンには、死んでほしくないよ。」

巴サンは綺麗だ。ね？姉ちゃん」

「ああ。今は多少汚れているかもしれないけどな。望めばきっと——また走れるさ。」

じゃあな、臙条。居たければ、まだ使えばいい」

姉弟は消えた。

去り際の、両儀の一言。

それは俺の心の底——一番下の部分にある何かに、響いた。

だけど、俺はそんな自分の心を真っ直ぐに見る気になれず、目を逸らしてしまった。

……一人だけ残されるところは生活感がありすぎて、嫌が応でも淋しさと、本来俺が存在するべきではないという違和感が増す。

俺は、そんな事を考えるべきではないのに。

……俺はそんな、違和感と淋しさに溢れてきた部屋を、なにかもがモノクロづき、錆びついた心の有様で一ヶ月過ごした部屋を見つめ、去る事にした。

- 
- 
- 

- 
- 
- 
- 
- 
- 

.....

## 空の境界 二次創作 第十八話

SIDE：永

十一月八日の昼。

天気は昨日とさして変わらない曇り模様で、電灯のない事務所は棄てられたみたいに薄暗かった。

この事務所は相変わらず広い、と思う。机だって十人分ほど並べられているし、来客用じゃないかなと思えるソファだってある。

まあ、床はコンクリート打ちっ放しっていう荒々しさで、壁には何にも貼ってないけど、もう少し頭数さえ揃えばそれなり職場として見えるはずだと、俺は思う。

んで、そんなまあまあ広い事務所には今、俺の他にあと三人いる。

窓際にある所長の机に、橙子サンの姿はない。

なんでも、今朝になって風邪が治ると何処かに出かけてしまったから、らしい。

橙子サンのいない事務所の中、俺は黒桐サンの隣に座ってお茶を飲んでいた。黒桐サンは橙子サンから頼まれたという調べ物をやっている。

だから俺は邪魔をしないように静かにしているしかないし、なににより俺自身、今は特に何かをやるうとも思わない。

……この前。この前の夜、巴サンの話を聞いて俺は——初めて悲しいって感じた。

巴サンは——自分が人形だと、判らない。  
もう幾度も殺されて、また起き上がるというループをしていた事にも、気づけない。

それはなんて、悲しい事。

だから俺は、あれからしばらくの間は——今もだけど何もやる気が起きなくて、ただ昼も夜も、街をずうっと歩いていただけ。

そんな俺の様子を見て、姉ちゃんは俺が帰るのが遅くなっても怒ろうとはしなかった。

それどころか俺が遅くなった日は自分でご飯を作ったりもしていて、それが俺には申し訳なかった。

今日だって、俺は外を歩いていたら車の免許を取りに行く為に一ヶ月間違う町に行っていて、ようやく昨日帰ってきた黒桐サンに偶然会った時に、昼間のこんな時間に外にいたら不審がられるよ、よかったら一緒に事務所に行く？と聞かれていなければ——たぶん、来なかったんじゃないかな。

ちらりと隣で仕事をしている黒桐サンを見やる。

……資材屋のリストとにらめっこして、時たまどこかに電話をかけて話し、またにらめっこを再開する作業に移る。そんな忙しそうなでも充実してるみたいな顔をしている黒桐サンと俺の他には、あと二人の人物がいる。

一人は、来客用のソファアーに腰を下ろしてぼんやりとしている着物のヒト。まあ言う必要なんかないと思うけど式の才姉サンで、才姉サンは何をするでもなく礼儀正しい姿勢で座ってる。

もう一人の方はというと、前にどこかで見た学校——礼園女学院だったわけね？の黒い制服を着た、黒髪の長い女のヒト。名前は忘れたけど、確かこのヒトは黒桐サンの妹だった気がする。

黒桐サンの事を兄さん、って呼んでた筈だし。全然似てないけどね。

その事を黒桐サンに聞いたら、黒桐サンも同じような事を思っていたらしく、久しぶりに会うって言ってた妹サンに会った時ビックリしていたのはまだ俺の記憶に新しいよ。今はどうでもいい事だけど。

「鮮花」

そんな事を考えているとどうやら黒桐サンの方は電話が一段落ついたらしく、黒桐サンから一番離れた所に座って広辞苑とかいう本よりも分厚い本を何冊も重ねて橙子サンが出て行く間際に自分に残した課題を熱心に、かつ静かにこなしている妹サンに声をかけた。

妹サンは写している文章を最後まで書き留めてから、さらりと黒髪を揺らして顔をあげて、黒桐サンと妹サンは会話し始めた。

俺はその間、ずっともうお茶がなくなって、空になったコップの底を眺めていただけだったけど。

………

……

…

そうしてしばらく、黒桐サンと妹サンが魔術やらなにやら関係の話をしていると、ばたん、とドアの開く音と共に橙子サンが帰ってきた。

「それでは隠匿を死守する意味がありません。学んだ者を外に出しては、魔術が広まってしまいます」

そして、今度は橙子サンも加えて会話を始め、その会話を適当に耳に入れながら指で空中に光で絵を描いて何となくこう——寂しいような気持ちを紛らわせていると、そんな言葉が耳に入ってきた。

「そうだね。事実、協会に留学してから力をつけ、野に下ろうと考える輩も多い。けれど十年も経てばそんな考えはなくなるのさ。なぜって、魔術を学ぶのなら協会は最高の環境だからだ。魔術師として最高の環境が揃っているのに、わざわざ何も無い野に下るなんて馬鹿な考えは起こさない。魔術師は魔術を学ぶのが最優先事項。学んだ知識や力を使おうなんて事は考えない。そんな時間があるのなら、さらに上の神秘を学ぼうとするだろう。だが鮮花は初めから目的が私達とは違うからな、協会に入ってもあそここの毒に冒される事はない。まあ、私はあんな所に入るよりも、そこでさっきから絵を描いている永に教えて貰った方がいいと思うけどね」

妹サンは橙子サンの言葉を聞いて、？と首をかしげた。

「……一つ訊くけど、その協会の中でも秘密は守られているってコト？」

その時。唐突にソファから声がした。

そこにはさっきから、俺と同じように一人ですっと黙って窓の外の

風景を眺めていた式の才姉サンがいる。

「——そうだ。協会の中でも魔術師は自分の研究成果を誰にも明かさない。隣り合った者達が何を研究して、何を目指して、何を得たのかも謎だ。魔術師が自己の成果を打ち明けるのは、死ぬ前に子孫に継承する時だけだからな」

「ただ自分の為だけに学ぶくせに、自分の為には力を使わない。そんな在り方に何の意味があるんだ、トウコ。目的が学ぶコトなら、その過程も学ぶコトか。最初と最後にしかないのなら、そんなのはゼロと同じじゃないか」

……式の才姉サンの指摘は、相も変わる事無く手厳しい。

そして、それを聞いて橙子サンは苦笑いをしながら俺の方を指差して、ちよつとこつちへ来いと手招きしてくる。

仕方がないので俺はまだ描き途中だった黄金の剣を持った騎士の王サマの絵を空中に固定してから、そこら辺にあるものにぶつからないように避けながら、橙子サンの側へといった。

「目的はある。だが、お前の言う通りでもあるな。魔術師はゼロを求めているんだ。初めから無いものを目指している。魔術師達の最終的な目標はね、“根源の渦”……まあ要するにこの少年——」

橙子サンは言いながら俺の頭に手を乗せ、語る。

「——へと到達する事なんだ。アカシックレコードとも呼ばれているが、渦の一端にそういう機能が付属していると考えた方がいいだろう。なあ？永」

「……そうだね」

「なんだあ？つれないじゃないか。まあいい。で、この少年はね、たぶんすべての原因だ。この子からあらゆる現象が流れたしている。原因を知れば終わりもおのずとはじき出される。有体にいえば“究極の知識”か。は、究極なんて基準を作って結局有限なものにしているから、この呼び方も正しくはないのだがね、一番解りやすいからそういう事になっているのさ」

言って、橙子サンは俺の髪をわしゃわしゃ、と適当に弄りながら、話を続ける。

……やめてほしいな、髪がぐしゃぐしゃになるから。

「魔術師の最終的な目的は真理への到達に他ならない。人間として生まれた意味を知る、なんて俗物的な欲求もない。ただ純粹に真理というものがどんなカタチをしているかを知りたがる。そういったものの集合体が彼らだ。自己を透明にし、自我だけを保った者達——永遠に報われない群体。世界は、これを魔術師という」

淡々と語る橙子サンは、いつもよりも随分と熱のこもった語り調だ。

……まあだけでも、それを話されている黒桐さんは話を聞いてもちんぷんかんぷんでよく分からなかった、というような顔をしていた。

妹サンの方は、橙子サンの話の途中から、俺の事を見て固まっていた。

……そういえば、この妹サンは俺が“根源の渦”って事知らなかったんだっけかな？

「あの、いいですか？目的があるんなら学ぶ事にだって意味がある

でしょう。報われないなんて事は……って、そうか。まだ誰も辿り着いてないんですね？」

「辿り着いた者はいるさ。行ったからその正体が解ったんだ。現在にまで残されている魔法だって、たどり着けた者達が残したものさ」

お陰で俺の中に次々とそういう魔術師達が入ってきちゃったけどね。……でもまあ、今はどうでもいいか、そんな事。

「だが——あちら側、つまりこいつの居た側に行った者は帰ってきてはいない。過去、歴史に名を残すような魔術師達は到達した瞬間に消失した。……一人ほど例外である半端者もいるが、こいつは半人前なんで無視しよう。」

こいつのいた場所がそんなに素晴らしい世界なのか、それとも行ってしまうたら帰ってはこれない世界なのか。それは——」

「俺に辿り着いた者はね、皆取り込まれて、もう戻ってはこないよ。極たまに例外はあるけどもね」

「……だ、そうだ。“根源の渦”本人がそう言うんだから間違いないのだろうな。私としてはもうそんなところに行く気はないが」

それからしばらく橙子サンの話を聞き、話が終わって一時間ほど経ったあと、鮮花さんと式の才姉サンが喧嘩？みたいな事をして、才姉サンは出て行き、今はその事を気にかけた黒桐サンが妹サンと口論をしている。

ちなみに俺は、その間中絵の続きを描き、今は剣の英雄の絵を描いている。

うーん、ポーズでもとらせてみようかな？

「たしかに鮮花の言いたい事もわかる。ただ、僕は式がどちらにしかって関係ない。例えば式が織でも、自分の気持ちは変わらないと思

「よ」

そう照れ隠しに頬を掻きながら黒桐サンが言うと、妹サンは愕然として椅子から立ち上がった。

「——相手が織でも、好きだって言うの？」  
「……………うん。まあ、たぶん」

途端、黒桐サンの顔面に、分厚い本が投げつけられた。

というか、黒桐サン。オ姉サンは貴方のモノだけでもね、織の姉ちゃん俺のモノだから。

「なんて、不潔——！」

だっ、と駆け出していく音がして、妹サンは事務所から出て行ってしまった。

黒桐サンは痛む顔に手を当てながら、一人で笑い続ける橙子サンを睨みつけていた。

……………

……………

…

それから一時間ほど経って、もう俺が絵を描くのに飽きたので今度

は体の構成を変えて霧のような物体にして、ソファの上を漂っていると、橙子サンが俺に話しかけてきた。

「しかしだな、永。気になっていたんだがどうして今日の君はそんなに暗いんだ？話の時も生返事だったし、今も暗い表情で漂っているだけときた。いつもの楽しそうな空気が微塵もないぞ、今の君は」

…… 自覚はしているけれど、そんな風に率直に言われてもねえ？  
というか、何で霧になってる俺の表情が分かるのこのヒト、実は化生の類だったり？

「永。君は燃やされたいのか？」

そんな事を考えていたら、俺の方にペーパーナイフを向けて、橙子サンがにやりと笑っていた。

心なしか、額の所に怒りマークが出ているような気がしないでもない。

「できれば燃やさないでほしいなあ…なんて考えたり？  
いや、すみませんでした。許してください」

そんな橙子サンのいい笑顔が怖かったので、俺はさっさと体を元の状態に戻して側に頭を下げに行った。

「はあ……。まあいい。で、どうして君はそんなに暗いんだ？何か悪いものでも食ったか」

「違うよ。ヒトじゃないのに、自分の事を完全にヒトだと認識している人形って、悲しいなあ……とね」

そう思うワケですよ、俺は。

「ほう。人形？どんな奴なんだ？」

「……いや、いいよ。うん。今は……いや、これからもたぶん、別に話さなくてもいいかな。俺はその人形を——治すから」

「治す？」

「うん。治す。今回のあの人形は、藤乃サンや巫条サンとは違って面白くない。たぶんこの先もアレが人形のままなら面白くなてならないで、俺に取り込まれて消えてしまうのじゃないかな。だから——俺はその人形を治すよ。その人形はとても綺麗なんだ、たぶん恐らく、俺が治してもきつと綺麗なまままでいてくれるよ」

俺がそう言つと、橙子サンは面白そうな顔をして、言ってくる。

「“根源の渦”に治される人形、か。君はよほどその人形が好きなんだな、永。よければ私にも見せてはくれないか？ 人形作りの参考になるかもしれない」

「まあね。でもこれからしばらくしたら会う事になるかもしれないから、連れてくる必要はないかな。たぶんその時が、その人形が人形でいられる最後だから」

「人形でいられる最後？」

橙子サンは、俺の最後に言つた言葉を理解できないようで、首を傾げた。

「そうだよ。その人形は——人形じゃなくなるんだ。だから、これからもたぶん話す必要はないよ」

俺がそう言つと、橙子サンはがたん、と音をたてて椅子から立ち上がった。

いきなり橙子サンが立ち上がったので、今まで黙って俺達のやりとりを見ていた黒桐サンは驚いている。

「おまえ、まさかその人形をヒトにするつもりか？」

「ヒト……か。そうだね。俺はその人形をヒトにするよ。大丈夫さ。見てもたぶん、誰も気づけない」

橙子サンは真っ直ぐに俺の目を見据える。

だから、俺もその目を真っ直ぐに見返して、そう言った。

「まったく、折角の人形をヒトにするなんて、これじゃ商売上がりたりな気分だ」

橙子サンは俺の言葉を聞くとやれやれと首を振りながらまた椅子に腰掛けそう言った。

その様子は口調とは裏腹に、微妙にはあるけど楽しそうにも見える。

「うん。ごめんな。でもね、それが“<sup>俺</sup>根源の渦”だよ。もう一回言うけど、本当にその人形は綺麗で、悲しかったんだ。だからこそ、俺は——」

助けたいなあ、と思ったんだ。

……

……

⋮

空の境界 二次創作 第十八話（後書き）

言い遅れましたが、たぶん今回、少なくとも橙子は織に会うかもし  
れません

空の境界 二次創作 第十九話

SIDE：永

次の日。俺が目を覚めたのは、もう日がかなり傾いている時刻だった。

起き上がってまわりを見まわすけど、巴サンはあの夜にここを出ていったきり帰ってきていないし、姉ちゃんもどこかに出かけてしまっているっぽいね。

「どうしようかな」

要は今、俺は一人という事だ。

このままねえちが帰ってくるまで一人で絵を描くのも良いのだけれど、絵は見せる相手がいないくちは面白くないからね、どうしようか。そんな事を考えていると、朝も昼も飯を食っていなかったせいだろうか、空腹な事に気がついた。

「駄目だね。やっぱり何をするにしても空腹ではね。今日はどこかに出かけて外で食べようかな？ うん、そうしよう」

確か橙子サンの事務所って、近くに飲食店あったよね。

……月見うどんしかなかった気もするけど。

俺はそう決めると、すぐに出かける支度をした。

……

……

…

SIDE：幹也

式が橙子さんのバイクを借りて出かける、なんて珍しい出来事から  
一時間ほどして、僕と橙子さんは直接、件の小川マンションを見に  
行く事となった。

ただど事務所から出た所で、相変わらず真っ黒いコートを着込んで  
いる永君に会った。

「遅い昼ご飯を食べに来たんだけど、その店の場所がわからないか  
らさ。仕方ないから、橙子サンの所に行こうと思ったんだよね。だ  
から何か食べさせてくれないかな、橙子サン」

それを聞くと、橙子さんはそのまま永君を拉致するかの様に首を  
掴んでいつて、橙子さんの車の後ろに放り込んだ。

「え、何で俺いきなり放り込まれたの？俺ご飯食べに来ただけなん  
だけど？」

「帰ったら黒桐が作ってくれるそうだから、とりあえず今は付き合  
え。大体今はもう昼じゃない」

「僕は作るなんて言ってますよ、橙子さん。……まあ麺類ならい

いですけど」

「ありがとうね黒桐サン。後さ、橙子サン。別に付き合うのはいいけどもね。いきなり放り込むのはやめてね」

そんな永君との短い会話を終えた後、マイナー1000とかいう、ミニクーパーみたいな橙子さんの愛車に乗って永君を後ろの座席に載せたまま都心のビルから離れる事三十分弱。ほどなくして僕は港地区に到着した。

茅見原と呼ばれるそこは、とにかく広い。土地があり余っているのか、広大な平面にときたま高層ビルが建っているだけで、一昔前のポリゴンゲームのフィールドを連想させる。

件のマンションは、確かにマンションが乱立する地域の中にあつた。周囲には同じ造りの巨大マンションしかなく、遠くに円形の塔が見えているのに到達するのに時間がかかってしまった。

~~~~~

SIDE：永

「え、来たかつたのってここ？ 別にここ俺が来る必要ないよね？」

「おまえはもしもの時の為の保険だよ、保険」

橙子サンの事務所で拉致られた後俺が連れて来られたのは、黒桐サンによると茅見原とかいう多数のマンションが乱立している所だった。

ちなみに、橙子サンの目的地はどうやら、そのマンション群の中でただ一つだけ円形のカタチをとっている荒耶サンの計画で使用するマンションのようで、俺としては面倒が起きなければ良いなあ、なんて思ってたりもする。

マンションに入る為の道は一本だけというなんとも不便な仕様で、橙子サンの車は敷地からマンションに入ってそのままロビーへと向かった。

「なんだ、地下駐車場なんてないじゃないか」

運転席でそう愚痴ると、橙子サンは車を路上に駐車させた。

「じゃ、行こうか」

くわえ煙草をして橙子サンは歩き出し、黒桐サンはその横に並んで俺は二人の後につきながらマンションの敷地に踏み入る。

——変な感じだ、このマンション。

入った瞬間、俺はそう思った。

マンションのロビーの壁はクリーム色で統一されてて、これ以上ないほどに清潔だ。

内部の空気は外部と違って暖かく、体に纏わりついてくるような感じだ。

……だけど嫌な感じじゃない。なんだか——うん、そうだね、なんだか生き物の胎内に居るような、そんなゾクゾクとくる不思議な

感じかな？

だっていうのに、どうして——黒桐サンはこの上も無く気分が悪そうな顔をしているんだろうか？

そんな黒桐サンの様子を見た橙子サンが耳元で何事かを呟く事によって、ようやく黒桐サンはその悪寒から解放されたようだけど。

でもまあ、それは俺にはあまり関係がない事なので、俺はマンションのロビーを観察する。

このマンションの構造は、そうだな、モーターの中に入ってるコイルみたいなかんじのカタチをしている。

この建物は中央から真つ二つに切った円を向かい合わせにしたような形で、片方は東棟、もう片方は西棟という事らしい。

しかもどうやらこの建物、東棟から直接は西棟に行けないみたいだ。絶対に一回は中央のスペースに戻って、そこを通過しなくては行く事が出来ないようになってる。

ロビーに管理人室はなく、俺達の今居るこの空間の中央にあるものはマンションの大黒柱とでもいうべき一本の柱で、その中には一階から十階までを移動するエレベーターがあり、その柱の横には階段らしき物もあった。

エレベーターと階段を柱で囲ったという感じの柱で、正直、ここの工事には適当さが感じられる。

まあ全部計算でやっているわけだから適当も何もないとは思っただけだ。

「——イヤな建物ですね、ここ」

「幽霊屋敷みたいだな。隠しきれずに、不吉な物が気配になって漂

っている。そういう建物はわりと多いよ。人を狂わす建物というのは簡単に作れるからな。壁の色、階段の位置を変えるだけで人間は不調をきたす。それが毎日使う人間なら、よけいに酷くなるだろう」

橙子サンはまずエレベーターに乗った。

「何階に行くの？これ」

「そうだな……何階がいい、黒桐？」

「いえ、何階でも良いです。……しいていうなら四階ですけど」
「なら四階でいいよ」

橙子サンはエレベーターの中をしげしげと見渡しながら言う。

エレベーターの中は抜れた、螺旋の柱のような造りだった。

………

………

…

SIDE：幹也

「行ってみる。私は一人でエレベーターを使ってみたい。そうだな、この上の階で落ち合おう。その階段を上がってこい。おそらく螺旋階段だろうが、目を瞑った方がいいぞ。永、おまえも黒桐と行ってこい」

じゃあな、と残して橙子さんはエレベーターに乗り込むと、上の階へと昇っていつてしまった。
ランプは十階まで上がっていく。

——僕はそれを呆然と見送って、二人残されたという事に思い至った。

ロビーには僕しかない。

永君はエレベーターのドアが閉まると、ずっとロビーの奥の方へと消えてしまった。

自分の息遣いしかない世界。

昼間なのか深夜なのか、判別のつかない巨大な密室。

まるで部屋全体が真空パックされたかのような重苦しすぎる圧迫感。知らなかった。マンションという建物が、これほど不気味で外界から遮断された異界だったなんて。

「ちくしょう。絶対に降りてきてくれないんだろうな、橙子さん」

独り言を言っ活を入れたが、まるで逆効果だった。反響する自分の声が他人の声のようになって耳元に伝わってくる。……夜の墓場だって、ここまでは不気味じゃない。

とにかくだ。ロビーにいるかぎり、密室という不安が付きまとう。覚悟を決めて405号室に向かう事にした。

外部に出て、外をぐるりとまわる廊下は内部ほどの圧迫感はなく、景色には面白みがない。

何しろ四方はみな同じようなマンションなのだ。

それを横目に眺めながら突き当たりまで進む。東棟を最後まで歩いて、四階の五号室に辿り着いた。

部屋の前には、先に行っていた永君が黒いコートに付いているフードを目深にかぶった永君がいる。

「黒桐サンが来たかったのって——ここかな？」

——九日前の夜。この部屋に押し入った空巢は、そこで複数の死体を見て逃げ出した。

「そうだけど……どうしてわかったんだい？」

そのまま混乱して警察に届け出た空巢は、もう一度訪れた時には普段通りに生活している家族と対面して、ますます混乱したという。

「……勘……かな？ なんとなく、このような気がしたからだよ、黒桐サン」

空巢は幻でも見たのか。それとも、何かの手違いがあったのか。

よせばいいのに、僕はここまで来たという勢いもあってかチャイムを鳴らした。

ぴんぱーん、という明るい音。

「そこでインターホンを鳴らしてしまうのが、黒桐サンだよねえ」

永君が何か言っている。だけど栓をしたかのように、僕の耳にその言葉は入ってこない。

しばらくして——マンションの部屋の扉は、ぎい、と音をたてて開いた。

そこから、何かが出てきた。

まず、人の腕。

それから、頭。

「はい、臙条だけど。……あんた、誰？」

ドアを開けたいかつい顔をした中年の男性が、さも面倒そうに言った。

………

……

…

——結局、あの話はただの与太話だった。

事件があったという五号室の臙条家に異状はなかった。

ロビーに戻ると、エレベーターはまだ十階で止まったままだ。ボタンを押せば降りてくるのだろうが、その中には橙子さんが乗っている。怖くなって階段を使わなかったのか、と責められるのは目に見えていた。

仕方なくエレベーター横の階段へと足を運ぶ。

ロビーに充滿する空気の重さは依然としてあったけれど、臙条家が普通だった事でゆとりが出来ていたのだろう。

どこか薄暗い、赤みがかった電灯で照らされた階段を僕は登り始めた。階段は直角に曲がっていくタイプで、エレベーターのまわりに絡み付くようにとぐるを巻いて上へ上へと伸びている。

橙子さんの言うとおり、確かに螺旋階段だ。

各階につくと階段の途中にぽっかりと穴が開いて、ロビーに出るような作りになっている。

………

………

…

「来たね。じゃあ降りよう」

ロビーには橙子さんが待っていた。

何も言わずにエレベーターに乗る彼女に付いていく。

エレベーターに乗ると、橙子さんは各階に対応するボタンの前に立って、振り向かずに言った。

「黒桐、下を向いてろ。ちょっとしたクイズだ。永は……いいな、どうせすぐ判るから」

「そうだね、仕方ないね」

「え？ はあ、下を向いてればいいんですね」

エレベーターが閉まる。また、大きな駆動音。

下に落ちていく時間は三秒もなかっただろう。

マンションという巨大な密閉の中の、もっとも小さな密閉の箱が停止する。

「さて問題だ。ここは何階でしょう」

言われて顔をあげる。

エレベーターは開いていて、ロビーが見えた。

さっきの階とまったく同じロビーの壁には、5の数字のプラスティックが嵌められていた。

「あれ……五階のままだ」

さっき僕が登って辿り着いた階は、確か五階だった筈なのに。

でも、エレベーターは確かに動いた。となると、間違っているのは僕のほうだ。

少し考えて、当然の結論を口にする。

「じゃあ、さっきのは六階だったんですね」

「正解。黒桐は一階登ったつもりで二階登ってしまったんだな。間違いやすい階段の設計だが、まあそれはおまけみたいなものだ。」

ところでさ、マンションというのは奇怪だろう？ 自分の住んでいる階を確認する手段が、ロビーにあるあんな小さな文字だけなんだから。高い階になればなるほど、エレベーター内の感覚は解りづらくなる。これでエレベーターのスイッチに細工して、各階の数字を取り替えてしまえば、住み慣れていない者なら確実に四階だか五階なのだか解らなくなるだろう。機会があつたら近くのマンションで試してみればいい。時間は深夜がいいな、気分が俄然もりあがる」

それだけ言つと、橙子さんはエレベーターを閉じた。

ほどなくして一階に到着すると、僕はロビーに出た。

「そうだ、ちよつと東棟のロビーに行つてみよう。確かどちらの棟にも一階にはロビーがあるんだろう？」

そう橙子さんが言つて、僕は一階のロビーへとそのまま移動した。

………

……

…

SIDE：永

「仕掛けるなら、まあ、ここかな。万が一の為の逃走経路ぐらいは作っておこう」

「橙子サン、そんな心配しなくても平気じゃないの？　少なくとも黒桐サンは死なないでしょ？」

言いながら、大理石の床に膝をついて座り込んでそのまま、地質学者かなんかみたいに床を手でぺたぺたと触って何かをしている橙子サンにそう言ったら、橙子サンは顔をあげ、少しむっ、として俺の言葉に答えた。

「なんだ、それではまるで私は死んでもいいと言っているように聞こえるぞ、永」

「いやいや、そうではないけれどね。橙子サンはさ、世界最高の人形師なんだろう？　それなら自分自身の事も作ってるのじゃないのかな？」

「馬鹿者。あれこそ本当の保険だ。そんなに軽々しく使っていい物じゃない」

橙子サンはそう言って、また作業に取り掛かる———と思ったら、今度は橙子サンのほうが聞いてきた。

「———ところでさ、階段使って気がつかなかった？　動かした跡があっただろ、アレ」

「うん？　……ああ……そういえばあった気がするね、そんなモノも」
「？」

確か———そうそう、階段の壁際の隅の部分に擦り傷みたいのがあ

ったんだっけね。

「柱じゃない。階段だけだ。壁の隅とか見なかったのか。壁に擦り傷があっただろう。ああ、そうか。怖くてそこまで気が回らなかったのか」

床に手をあてて、振り向かずに橙子サンは言う。

「……でも、階段を動かすなんて不可能です。あの柱を動かすって事は、このマンションを壊すって事でしよう？」

「だから階段だけだと言っている。ロケットペンシルなんだ、ようするに」

「ろけつとぺんしるって、何ですか？」

ぴたり、と橙子サンの手が止まる。

「あははっ、これはジェネレーションギャップってヤツかな？ これは橙子サンも年をとったって事？ だよな、だよな？ あっはははは——」

すっ、と立ち上がって橙子サンがこちらにつかつかと歩み寄ってくる。そして——。

「そうかそうか、そんなに面白いか」

——その言葉と共に、ごん、とフライパンの底を叩いたような音が俺の頭から響いた。

「永君。今のは君が悪いと思うよ」

「……そうだね、黒桐サン。これからはもう少し自重する事にしよ

うかな、うん」

そんな言葉を黒桐サンに返ししながら橙子サンに殴られた頭頂部を擦っている、橙子サンは黒桐サンがロケットペンシルを知らないと言った事が信じられなかったのか、黒桐サンにロケットペンシルの説明を始めた。

「知らないのか、黒桐。一本の鉛筆の中に、十個程度の鉛筆の芯が入っているんだ。小さなミサイルみたいのがつまっている。拳銃の弾倉に似てるな。鉛筆の中で縦に重なっていて、芯が減ったら古いミサイルを抜いて、一番後ろに入れなおす。と、次には新しいミサイルが出てきて、芯を削る手間をかけずに書き物ができるといっ物だ。……今でも売ってるのかな。イメージ的にはトコロテン」

納得いかない、とばかりに橙子サンは言うけれど、まあ、黒桐サンだからね、仕方ないよ、とも思う。

……かくいう俺も見た事はないけれど、知識としては知ってるよ、どうでもいい事だけだね。

「螺旋階段を下から押し上げたって言うんですか。ピストンかなにかで」

「だろうね。はじめから半階分余分に作ってあったんだろう。エレベーターが使用できるようになったのと同時に、下から押し上げたんだ。一回分増やす為じゃない。螺旋の出口をズラす為だ。そうすれば北と南が逆になる」

さあ帰ろう、と橙子サンはまた歩き出した。

中央のロビーに戻り、この円形のマンションから出る間。橙子サン

は納得がいかないとばかりにぶつぶつとこんな事を呟いていた。

「……本当に知らないのかなあ、ロケットペンシル。私が学生時代の頃は流行ってたんだけどなあ、アレ。……まさか本当にジェネレーションギャップか？ それは——イヤすぎるな」

……

……

…

最後に。

車に戻った時に駐車違反のキップがきられていた事でよけいにいらついたんだろう。

帰りの車の中橙子サンは黒桐サンに、永の飯は作るな、と言っていた。

そして、その日の夜。

珍しく俺は午後八時前という、かなり早い時間に帰っていた筈なの
だけども。

日付けが変わって、日が昇った頃になっても。

織の姉ちゃんは——帰ってこなかった。

空の境界 二次創作 第二十話

……がち。がち。がち。がち。

気がつく、俺は両儀の部屋にいた。あいつらに両親を殺した事をバラした夜から、決して足を踏み入れなかったこの部屋に。

外は陽が落ちようとしている。あいかわらず癪に障る時計の針は、じき六時をまわろうとしていた。

——頭が痛い。

あの姉弟と縁を切ってから九日ほど経ったのだろうか。俺は十一月になったばかりの街の中で浮浪者のように生活していた。メシも食わず、ただ両親の死体が発見されるニュースだけを探していたと思う。

無理な、人間として最低の生活をしていたせいか、頭痛は日に日に強くなっていた。それだけではなく、体のほうもガタがきている。不養生が祟ったのか、関節という関節が重かった。

「……何やってるんだ、俺」

膝を抱えて呟く。

二度とここには来ないつもりだった。

けれど今は——ただ、両儀の声が聞きたかった。

がたがたと齒の根が合わない。俺は怯えていて、助けを求めるように、いつのまにかここにやってきていた。

明かりをつけない暗闇の中でどれぐらいそうしていただろう。

世界は、唐突に光に満たされた。

「なにやってんだ臙条。久しぶりに見たと思えばまた電気をつけないで」

鮮やかな紅い着物と黒い革製のジャンパーを着た少女が言う。あの夜のように、俺がいる事がさも当然だともいうみたいに。

肩口までの黒髪も、黒く深みのある目も、男のような口調も。

何一つ以前と変わらず、当たり前のように両儀は部屋に入ってきた。

「永の奴は……まだ出掛けてるのか。これはまた夜になっても帰ってこないかもしれないぞ、臙条」

両儀はそんな事を言いながら、俺の横までやってきて何かを渡してきた。

渡された物は約三十センチぐらいの長方形の箱で、箱を揺すってみると、ごそごそ、という音がした。

「何だよ、これ」

いきなり箱だけを渡された俺が両儀に聞くと、両儀はそれに、ん？と首を傾げて俺の横にそのまま座り込んだ。

「何って、靴だよ。おまえの」

「？」

……靴？

「そんな事より何か話があるんじゃないのか、おまえ」

俺がいきなり渡された物が靴であるという事に頭が理解に到達する前に、両儀は俺にそう言った。

「俺は——」

何をどう口にしたものか考えてもいなかった。ただ、誰かに助けてほしいと思っただけで。

……変わってない。俺はあの子供と初めて会った時も、何から助けてほしいかすら思い出せなかったんだから。

「——わからない。俺は、どうかしちまってる。自分に自信が持てないんだ」

手が震え、靴が入っているという箱を取り落としてしまう。

両儀は何も言わずこちらを見ている。

俺は、ただ有りのままを喋るしかなかった。

「今日、街で母親を見かけたんだ。はじめはよく似たヤツかと思っ
た。けど……間違はなく母親だった。後をつけたらさ、とんでもね
え事に——あいつ、あのマンションに帰って行きやがった——」
体の震えを止められず、そうまくしたてる。

——と。

両儀はそうか、と言って立ち上がった。

「ようは両親が生きてたって事だろ。ニュースにもなっていないん
だから、そう考えるのが普通なんだ」

「そんなワケあるか！ 俺は確かにお袋を殺した。親父だって死ん
でた。それは絶対なんだ。間違ってるのは生きてるほうだ！」

そうだ。なのになんで、普段通りに生きているのか。

なんで普段通りに自分の家に帰っていくのか。

あの、血にまみれた地獄のような家に、どうして——

「ふうん、間違ってるんだ。じゃあ確かめにいこう」

「——な、に？」

「だからさ、そのマンションに行つて確かめればいいじゃないか。
本当に臙条の両親が生きているのか死んでいるのか。そのほうがは
っきりするだろ」

決まりだ、とばかりに両儀は立ち上がって動きだす。革ジャンの内
ポケットに長いナイフを入れて、帯の後ろ腰にも二本目のナイフを

挟む。

そんな物騒な支度をしていながらも、ちょっとそこまで煙草でも買いにいこうか、なんて簡単さで、紅衣着物の少女は俺の手を引いて立ち上がらせると、そのまま歩きだした。

どうやら俺が行く事は確定らしい。乗り気ではなかったが、こいつを一人で行かせるわけにもいかず、俺は同行する事にした。

「ちなみにオレはマンションの場所を知らないから、道案内は任せる」

「……はあ。わかったよ。ついてこいよな」

そう言つて、立ち上がった俺が今度は両儀の手を引いてドアのほうに行こうとすると、両儀は俺が引つ張ったのが予想外だったのか一瞬驚いたような顔をしていた。

「ああ、そうする」

俺はもうヤケクソで両儀を引つ張って、一ヶ月前まで暮らしていた港地区のマンションを目指した。

………

……

…

両儀の手を引くなんていう慣れない事をしたせいもあって、マンションに到着したのは夜の七時過ぎになってしまった。

十一月とは思えない寒空の下、月に届けとばかりに円形の建物が建っている。周囲の四角いマンションとは一線を画する建物。このおかしな建物は変わった造りをしていて、東棟と西棟とに分かれている。俺の家は西棟の四階。話によると入居希望者は山ほどいたのだが、マンションのオーナーが人見知りするとかで全体の半分ほどしか入居させなかったという。……こんな高級志向のマンションにうちがあるのは、親父とオーナーが知り合いだからだそうだ。

「ついたぜ、ここだ」

後ろにいる両儀に話しかける。

両儀は、何か幽霊でも見るかのような目付きでマンションを見上げていた。

「なんだ、これ」ただ、そう口にする。

俺はそんな両儀を後ろにおいてマンションの敷地に入る。

ブロック塀に囲まれた敷地は、下手な小学校の敷地より広い。建物自体は円形なので幅をとらないが、まわりの庭はなかなかのものだ。その庭を一刀両断するように、舗装された道がマンションへと伸びている。

俺は黙りこくっている両儀を連れてロビーに入った。

ロビーをしばらく歩いて、マンションの中心にある大きな柱に到着

する。柱の中はエレベーターになっていて、その横には滅多に使われない螺旋階段がある。

俺はボタンを押してエレベーターを呼んだ。

がち、がち、がち、がち。

……イヤな気分だ。

心拍が普段より速い。息が上手くできない。

それも当たり前か。今から、自分が殺した連中の死体がある部屋に行こうっていうんだから。

エレベーターが来た。

中に入る。両儀も続く。扉が閉まる。

お——————ん。

聞き慣れた駆動音をたてて、エレベーターは上がっていく。

「——捻れてる」

ぼつり、と両儀は呟いた。

エレベーターが四階に着いた。俺はエレベーターからおりてすぐ正面に続く、北に向いた通路へと歩きだした。

そのままマンションの外側に出ると、道は直角に左に曲がる。東棟の外周をまわる廊下だ。左側にはマンションの部屋が並び、右側は外に面している。四階から下に落ちないように胸元あたりまでの柵がある。

「この突き当たりが俺の家だ」

歩きだす。あいかわらず静かなマンションで、部屋からの声はするが廊下で出会う事はまずない。

突き当たりの部屋の前に着いて、俺は止まった。

—— ホントウに、入ルのか。

腕が動かない。目が、ぼやけてしまつて、ドアノブが掴めない。いや、そうだ、その前にチャイムを鳴らさない。

たとえ家の鍵を持っていたても、チャイムを鳴らしてから入らないと母親が怯えてしまう。一度借金の取り立てにきた野郎がいきなり家に押し入った事があって、それ以来チャイムを鳴らして入らないとお袋は怯えてしまふんだっけ。

指がインターホンのボタンに伸びる。

それを両儀の指が止めた。

「チャイムはいい。中に入ろう、臙条」

「—— 何言ってるんだ。勝手に入るつもりかよ」

「勝手も何も、もとからここはおまえの部屋うちだろ。それに気になる

コトもある。カギ持つてるだろ。かせよ」

両儀は俺から家の鍵を受け取ると、がちやりと回した。

ドアが開く。……中からはテレビの音。

誰か、いる。

感情のこもっていないカタチだけの家族の話し声がする。

今の生活を母や世間のせいだとグチる親父の声。

それを黙って聞き流して、ただ頷くだけの母親の声。

それは、間違いなく臙条巴の日常だ。

声もあげずに中に入る両儀に俺もついて入り、廊下を抜けて、今に通じるドアを開ける。

立派な部屋には不釣り合いなテーブルと小型のテレビ。ろくに掃除もされていないゴミだらけの汚い部屋。

そこにいるのは、間違いなく俺の両親で、親父は俺達が入ってきたというのに振り向きもせず、バイトが終わったのに帰ってこない臙条巴に対するグチを言い、母親はそれに曖昧な返事を——こちらも振り向かずに、返していた。

——なんだ。

なんだ、これは。

両親がいる。小心者のくせに自分を大物なんだと疑わない親父に、それに合わせるだけの母親。

殺したハズの二人が、変わらない日常で生きている。

いや、そうじゃない。

こいつら、どうして入ってきた俺達に振り向きもしないんだ——
——！！？

「やっぱりそうか。臙条。臙条が帰ってくるのはいつも何時なんだ？」

耳元で両儀が聞いてくる。俺は九時頃だと答えた。

「あと一時間か。それまで待ってしよう」
「なんだよこれ。いったいどうなってるんだ、両儀ッ！」

あまりに平然とした態度を崩さない両儀にハラを立てて詰め寄ると、面倒臭そうに両儀は俺を一瞥する。

「どうって、チャイムもノックもしなかったから、お客さんに対応しないだけだろ。決められたパターン以外の行動に対応する為のスイッチを、オレ達は押さなかった。だから客は来ていないってコトで、臙条の両親はいつも通りの生活をしているだけ」

言って、両儀は堂々と居間を横断して隣の部屋——そこは俺の部屋だ、に移動した。

行くか行かないか。散々迷って、結局俺は両儀に続いて自分の部屋へと入った。……当然、居間の両親からは目を背けて。

——そのまま、そこで俺達は待った。

何を、と聞かれるなら、日常通りに帰ってくる臙条巴——自分自身を、と答えただろう。

電灯の点いていない、夜の闇に侵された暗い部屋の中、ただ待ち続ける。

それはおかしいな時間だった。永遠にも一瞬にも感じられる責め苦。現実感というものが蕩けてしまつて、時計が逆に回っている。

やがて、巴は帰ってきて、いつも通りに無言で部屋に入ると一度だけため息をつく。

深い、深いため息だ。それは、まるでそうする事によって今日一日の辛かった事が帳消しになるとでもいうような、そんなささやかな、現実への抵抗の儀式だった。

その巴さえ、この巴に気がつかない。

「前に永のヤツが言ってたな」

そんな巴を見ていると不意に、隣にいる両儀が言葉を発した。

「おまえが自分の両親を殺した、って言った日のコトなんだけど——」

……そこまで言って、しかし両儀は続きを言わない。

その言葉の続きがあつたとして、それは果たして目の前にいる巴「イッにか、それともすぐ隣にいる巴オレに向けようとしたものか、判らない。

やがて、巴は布団を敷いて眠りにつき——しばらくして、居間から口論の声が聞こえた。

口論は、俺が初めて聞くような母親の感情的な声が、親父に食ってかかっている。

……女のヒステリージャンキーつてのが麻薬中毒患者みたいに暴れだすものと初めて知った。なんて間の抜けた、どうでもいい真実だろう。

居間のほうから、何かがぶつかるような音。

母親らしき人物の荒い息遣いが、襖越しに聞こえた。

「……やめろ」

呟いても、何も変わらない。

だって、これは。

がち、がち、がち、がち。

襖が開く。巴が目を覚ます。立ち尽くす母親の手には、大きな包丁が握られている。

“巴、死んで”

何かが切れてしまったような、感情のない女の声。

がち、がち、がち、がち。

巴には逆光で見えなかっただろう。

母は、まるであの時の両儀の弟みたいに、本当に。

悲しそうに、泣いていた。

が、ち。

母が巴を滅多刺しにする。腹、胸、首、腕、足、腿、指、耳、鼻、目、最後には額まで。

包丁はそこで折れて、折れた刃で母は自らの首元をぶった斬った。

——部屋に響く、ばずん、という鈍い音。

……今まで、俺の中で流れていた歯車とも時計の音とも、ましてや噛み合わない歯がぶつかる音ともわからない“ナニ”かが、壊れたような音をたて、再び。

今度は今まで刻んでいたような淡々とした規則正しいものではなく、エンジンがオーバーヒートするかのような音をたてて、その“ナニ”かは刻み始めた。

ああ、なんて——

「——ひどい、ユメだ」

現実になっている、俺の悪夢。

これがどんな現象なのかなんてどうでもいい。

ただリアルすぎて、俺は吐き気を堪える事しかできなかった。

つい、と紅い着物が動く。

両儀は部屋から立ち去ろうとしていた。

「気が済んだか。なら、出よう。ここにはもう用がない」

「……用がないって、どうして！ 人が——俺が、死んでるのに」

「自分が死んでるって？ 案外視野が狭いんだな、おまえ。よく見

る、死体からは血なんて一滴も零れていないじゃないか。それに、

今生きてるのはそこに転がってるエンジョウトモエ臙条巴じゃなくて、オマエ臙条巴だろ。

転がってるほうは、朝になれば目を覚ますよ。これはそういう『輪』
なんだからさ」

両儀の言葉にハツとして惨劇の現場を振り返る。……たしかに、あれだけの凶行だというのに血が一滴もこぼれていない……。

「な、んで——」

「知らないよ。こんな事をする意味がまるで分からない。とにかくさっきも言っただけどここにもう用はない。さ、次に行こう」

すたすたと両儀は歩いていく。

たまらなくなつて、俺はその背中へと問い掛けた。

「次つて——他にどこへ行くつていうんだ、両儀！」

「決まつてるだろ。臙条巴、おまえの本当の住み処だよ」

あっさりと、本当に——あっさりと、まるで俺の混乱という憑き物を落とすように両儀は言った。

空の境界 二次創作 第二十一話

中央のロビーまで戻ると、両儀はエレベーターには乗らずにその裏側に回った。エレベーターの後ろ……南の方角には東棟に通じる通路がある。

東棟は、西棟とまったく同じ造りだった。

このマンションの性質上、西棟の者は東棟へは入らない。半年以上も暮らしていたというのに、俺はこんな当たり前の事実になつて気がついた。

渡り廊下を歩いていく。

時間も十時をまわって、風は刺すように冷たかった。

……東棟の住人は少ない。

その為か、電灯も最小限しか点けられておらず、並んでいる部屋からも明かりというものが皆無だった。

明かりだけが頼りの、冬の闇。

そんな無人の廊下を両儀は突き進んでいく。ひとつ、ふたつ、みつ、よつつ。……行き止まりにある最後の部屋に着くと、ぴたりと足を止めた。

「さっき言っておこうかと思ったのはさ、この部屋のコトなんだよ」

不意に、両儀は扉をじつ、と見ながら喋り始めた。

「おまえは405号室だと言ったじゃないか。だけど永がこの間、おまえがオレに告白してきた後外を歩いてたらさ、あいつがオレに言ってきたんだ。『いいかな、姉ちゃん。仮に臙条サンのマンションに行く事になったとして、臙条サンの部屋は410号室だからね？ 決して間違えたらいけないよ』ってさ。あいつがそういうコトを間違えるっていうのはありえない。そうなると臙条って家族は四階の最後の部屋、ようは410号室にいないとヘンなんだよ」

「———なんだって？」

「あのエレベーターはしばらく動かなかったんだろ？ 入居者がそろって、みんなこのマンションに住み慣れた頃にやっと動き出した。それが始まりの合図だったんだ。全部、北と南を逆に入れ替える為のラクリなんだよ。エレベーターが円形だったり音がでかったり、すごいはったりだ。二階が使われていないのもその為だけ。乗っている人間に気付かせないように半回転させるには、最低限一階分の距離は必要だったんだろ？」

北と南の出口が———入れ替わる？

そんな子供の遊びみたいな仕掛けが、本当にあるっていうのか。だが、本当にあるとしたらどうだろう？

エレベーターから出て正面にある道が西棟に続く通路だ。それは当たり前すぎてすみなれた人間にとって疑いようがない事実。

なら———エレベーターが半回転しているコトにさえ気がつかなければ、エレベーターから出て目の前にある通路に行くのは日常だ。

もし本当に知らずのうちにエレベーターが回転して出口が北ではなく南に向いてしまっていたとしたら、俺は今まで東棟に向かっていたことになる。このロビーの南側と北側の作りはまったく同じだ。各棟に通じる通路はどっちだって直角に左に曲がっているから、間違いいには気がつかない。

「じゃあ——こっちが、俺の家だって言うのか」

「うん。正確には入居して一ヶ月間だけいた家。エレベーターが稼働するようになってからはさっきの家だ。ナンバープレートを入れ替えて、きつと階段もエレベーターの稼働に合わせてずらしたんだろ。うな。階段の出口も逆にしないと話にならない。ここの階段って螺旋状になってないか？」

ああ、まったくその通りだ。俺は頷くコトもできなかった。

「けどウソだぜ。普通は気付くだろ、こんなの！」

認められず反発するが、両儀はやっぱり平然として俺の言葉を否定した。

「普通じゃないから、気付かない。ここは異界だ。周囲を囲んでいるのは同じような四角いマンションばかりで、風景に大差はない。マンションの中は壁でしきられてる。クリーム色の壁の所々には怪しげな模様が混ざっていて、無意識のうちに網膜に負担をかける。

——オレも一応結界ってモノは知ってるけど、これは本当に手が込んでる。細かい異常が何一つないから、いや、むしろ細かい無数の異常で埋め尽くされているから、それが普通でもっと大きな異常に気が付けない」

両儀はドアノブに手を伸ばす。

「開けるぞ。半年ぶりの我が家だぜ、臙条」

両儀は嬉々として言う。

俺は——それを、開けてはいけない気がした。

だが、両儀は躊躇う事無くドアノブを回し、かちゃ、という音と共に、ドアは開いた。

十号室の中は、ねっとりとした闇だった。

闇しかなかった。

かちかちかちかち。

耳の奥で、そんな音がする。

体が、関節が、重い。

「電気は——これか」

闇のなか両儀の声がする。

ぱちりと明かりがともった。

「——」
「息を呑む。」

でも、驚きはしなかった。ソレがある事は、とつくの昔に分かつていたんだから。

「死後半年つてところだな」落ち着いた両儀の声。

ああ、そうだろう。

俺達が入りこんだ居間には、人間の死体が二つあった。

薄汚れた人骨と、かすかに付着した肉らしきもの。どろどろに腐食した肉は床にこぼれ、積もって、なんだか分からないゴミのヤマミたいになっている。

膳条孝之と膳条楓——俺の父と母の死体だ。

俺が一ヶ月前に、自分が殺される悪夢を見たくなくて殺してしまつた両親の死体。

でも半年前の死体。今も生活している東棟の膳条という家族——

。それらの矛盾を、俺はこれ以上考えられない。

やる事もなく立っているだけの両儀と同じように、俺はなんの驚きもなく、落ちていく砂時計を眺めるような考えない心で、死体を見ている。

さつきの光景——俺が毎晩見ていた悪夢の再生映像だった出来事にくらべれば、こんな、済んだ後の死体は不気味なだけだ。別段シヨックでもない

とつくの昔にくたばった人間の死体。

誰であるかも判別不能な、骨の山。

目があつた部分は暗い洞窟のように穴があき、ただ虚空を睨んでいる。

……無価値だ。

これほど無意味で、報われない、馬鹿みたいな死が、両親だったものの。

周囲からの迫害に耐えられず、かといってそれを自分のせいではないと居直る夫にも逆らえず、繰り返す毎日のすえに親父を殺して、自らも殺した母親。

「――」

なのに、それだけなのに、俺はそれから目を離す事ができなかった。

これはなんだ。

俺はどうしたんだ。

――父も母もいないと。

あれほど嫌悪していた人間が二人死んでいるだけで、どうして俺は、こんなにも木偶の坊になってしまつたろう――？

その時。玄関から、扉の開く音がした。

「なんだ、やる気あったのか」

両儀は笑うように言うと、ジャンパーの内側からナイフを取り出す。ゆっくりと誰かが居間に入ってくる。

声もあげず足音もたてずに現れた人影は、どこにでもいそうな中年だった。顔には表情がなくて、虚ろな視線が逆にはつきりと危険な物を感じさせる。

どこかで見たような男は、そのまま俺達に襲いかかってきた。糸に操られた人形のように、前触れもなく。

それを両儀は滅多斬りにして殺してしまう。

一人。二人。三人。四人。玄関からわらわらと入ってくるマンションの住人達を、目にも留まらぬ速さの斬撃で切り刻んでいく。

「この体、前より動きやすいな……」

すぐに居間は死体で埋まってしまった。

両儀は俺の手を取って走りだす。

「長居は無用だ。行くぞ」

両儀はあくまで両儀だ。

俺は——両親の死体を見てからおかしくなっではいたけれど、それでもこの状況を許せなかった。

なんでこんな、問答無用で人を殺すんだ、こいつ。

「両儀、おまえ——！」

「話は後にしてくれ。それにこいつらは人間じゃない。何回も何回も死んで、その度に起き上がってるような奴らだ。そんなの、人間でも死人でもないただの人形だ。でも——やっとならやっとなら殺せるんだ。生きてないから、殺すっていうのもおかしいかもしれないけど」

本当に——嬉しそうに笑って、両儀が走る。

俺はわずかにためらってから、両儀に殺された家族らしき集団の死体を踏みつけて廊下に出た。

廊下に出ると、すでに五人ほどの人間が廊下に倒れていた。俺がそれから目を背けている間に、両儀は八号室の前で何人目かの人間を斬り伏せていた。

——強い。

圧倒的でさえある。どうやらこの連中は東棟からやってきているようだ、映画に出てくるゾンビみたいに動きが緩慢なわけじゃない。

人並み以上の激しさで襲いかかってくる。

だっていうのに、両儀は眉一つ動かさずあっさりと始末する。血が出ないのは、両儀が言っとおり連中が人間じゃないからだろつか。

返り血ひとつ浴びずに住人達を殺害し、中央のロビーへの道を開いていく両儀は、紅い死神めいていた。

俺は両儀が切り開いていく人の群れの先を見る。

ロビーから電灯の光が漏れている。明かりのない西棟の廊下にかかるうじて光を届けている通路の入口に、黒い人影が立っていた。

意志がない住人達とは違う。

黒い石碑なんじゃないかと錯覚するほどの塊は、黒いコートを着た男だった。

それを見た瞬間、俺の意識は凍りついて、糸が切れた人形のように指先一つ動かなくなつた。

見るべきではなかった。いや、違う。俺はここに来るべきではなかったのだ。そうすれば出会ってしまう事もなかった。

あの、静かで凄惨な出来事には相応しい、悪魔みたいな黒い影に――

……

…

男は、暗い渡り廊下で待っていた。

中央のロビーに続く、狭く一つしかない道を塞ぐように。

黒い外套を着込んだ男は月明かりさえ拒んでいて、夜より深い影のようだ。

男はマンションの住人達を斬り伏せていく紅い少女を感慨もなく眺める。

その眼差しを感じ取り、立ちはだかる最後の住人を殺して、両儀織は足を止めた。

少女——織は、立ちはだかる住人達を斬り伏せていく間、ずっとこの男を睨み付けていた。

織はこの男に見覚えがあった。そして、その時の印象が、織に油断だけはするなと訴えかけ、少女の感覚を鋭敏にさせる。

「……皮肉なものだ。本来ならこちらの完成が後になるべきだったのだが」

重い、聴く者を魂から屈服させる声で、魔術師は言った。

一歩、男は前に出る。

無造作で隙だらけの前進。織はそれを見て、その整った、凛々しい顔立ちを喜悦に歪めた。

目の前の男が『敵』で、自分と臙条巴を殺す気だという事は、理解している。

だというのに、心の奥底からは、抑え切れないほどの歡喜が押し寄せてきていた。

「——知ってるぞ、おまえ」

そう、織はこの男に会った事があった。

……彼女は思い出す。

今から二年前、雨の夜に起きた出来事を。

「左様。こうして会うのは実に二年ぶりだ」

聴く者の脳を鷲掴みにする、重い声。

男は、ゆると自らのこめかみに手を触れた。頭の側面。額から左には、一直線に切られた傷跡がある。二年前、両儀式がつけた深い傷が。

「おまえは——」

「荒耶宗蓮。織を殺す者だ」

眉一つ動かさず、魔術師は断言した。

~~~~~

男の外套は確かに魔術師めいていた。

両肩から下がる黒い布が、童話に現れる魔法使いのマントに似ている。

そのマントの下から男の片腕が突き出された。離れた織の首を掴もうとするように、ゆっくりと。

織は目に複雑な色を浮かべつつ、それでも一向に衰えない殺気のまま、両足のスタンスをかすかに広げて構える。

「ふん、あれだけ盛大に殺意を撒き散らして自慰<sup>ゴロ</sup>しておいて、まだ足りないか。まるで盛った獣だな」

「……そういうおまえも、ヒトの行為を覗き見るなんて、随分と趣味が悪いな」

両儀織自らが、殺している間に求めていた物、それは快樂だった。だが、さっきまでのそれには——織本人が求めていた物は無かった。

彼女はただ殺す事に快樂を感じるわけではない。死を尊び、殺し合いを尊ぶ。それでこそ、彼女は満たされる。

そして——彼女、両儀織にとってこの魔術師は、その尊い殺し合

いをするに足る存在だった。

「趣味が悪いといえbaumうひとつ。あの繰り返しはおまえの趣味か？」

織は油断せず、けれど顔には喜悦を浮かべ、魔術師に問う。

繰り返し——あの膳条家のように、夜に死んで朝に生き返る不可解な現象。

その問いに、魔術師は織にはそれを聞く権利がある、とでもいうように答えた。

「効果的ではないが。」

私は一日で完結する世界を作り上げた。しかしただの生と死の隣り合わせでは両儀にはなりえない。同じ人間達の営みと死去でなければ、おまえを祀あげるには不十分だ。死亡したのちに蘇生する螺旋では不完全である。絡み合いながらも相克する事が条件ならば、彼らは繋がってはいけなない。よって陰には彼らの死体を。陽には彼らの生活を用意した」

「は。だからこっちが死体置場で、あっちが日常ってコト？　つまらない事にこだわるんだな。そんなの、何の意味もないじゃないか」「もとより普遍的な意味などない。あくまで私個人の意志だ」

そして、男は織の背後に呆然と立ち尽くす少年を見つけた。

膳条巴は、荒耶宗蓮という闇を直視して固まっている。

「そう、意味などない。もとより同じ人間が二つの属性に同時に存在する事は不可能だ。死者と生者は相容れない。矛盾しているこの

世界に、個人が共通できる意味は皆無だ」

魔術師は少年から視線を少女へと戻す。

もう、臙条巴には意味もないというかのよう。

「これは単純な実験だ。人間は、果たして違う死を迎えられるのか試したかった。人は必ず死ぬ。だがその死は各人ごとに定められた死ではない。一個人が最後に行く死とは、たった一つのものなのだ。火事で死ぬと定められた者はどのような形であろうと火事に死亡し、家族に殺されると定められた者はどうあがこうと家族によって命を落とす。一度目の死の直面から逃れようと、二度目、三度目の死は必ず決められた方法でしか到来せぬ。

この限られた死に方を、我々は寿命と呼ぶ。

人は死に方さえ定められている。だが同じ結末を何千回と繰り返せば、その螺旋にも狂いが生じるだろう。狂いは些細な事故でかわない。仕事帰り車に轢かれるという在り来りの不幸でいい。——にも拘わらず、今の所結果は同じだ、二百ほどの繰り返しでは、人の運命は変わらないとみえるに」

つまらなげに、感情もなく男は語る。

それを見て——織は、この男はやはり殺さなくてはいけない、そう思った。

手段、過程、どのようなそれらを経て、この男がこんな事を行っているかは知らないし、解らない。

ただ、一つだけ確かな事は、男は、その本人でさえどうでもいいという実験で、臙条巴の家族に毎日殺し合いをさせているということだ——。

「その為に同じ死に方……最後の一日を繰り返させているのか。同じ条件で始まる朝と、同じ条件で暮らしている家族を用意して。それで、夜に死ぬのは臈条のところだけか」

「それでは異界の意味がない。ここに招き入れた家族は、全てが崩壊していた者達だ。もともと壊れていた関係は、ゆとりを無くさせるだけで終着駅に辿り着く。何十年とかかる終わりへの道は苦行だ。彼らは、一月でいずれ至る結末に辿り着いた」

……誇るのでもなく、嘆くのでもなく、魔術師は言う。

織はその時初めて、瞳に殺意のみを宿らせ、黒い男を一瞥する。

「……ブレーキを壊して背中を押した、の間違いだろ。たしかにさ、この建物はストレス溜まるよな。いたる所で歪んでいるんだ。床も、壁も、照明も、どれも知らず知らずのうちに人の神経に負担をかける。ここまで何の呪術的な効果が必要としないで人間を狂わせる事ができるんだ。たいした建築家だよ、おまえは」

「ここの設計は蒼崎に依頼した。賛美なら私ではなく彼女に送らるべきだろう」

男は、さらに一歩踏み込んだ。

話はこちらまでらしい。

織は魔術師の眼を見ながら——最後に、本当の疑問を問いかけた。

「アラヤ。どうして、オレを狙う？」

男は答えた。

「——両儀式。あれより効果的だからだ」  
「なに……？」

予想外の答えに、織の頭に一瞬空白ができる。

その隙について——男はさらに一歩進んだ。

「おまえと一緒に暮らしている両儀永は、『』、根源の渦である」

……およそ総ての魔術師がただひたすらに目指し、到達しようとする『』、根源の渦などと呼ばれるモノ。

それは幾多の魔術師達が触れようとし、近づき、あるいは取り込まれるうちに、意思に似たモノを持った。

だがそれは本来、意思など覚醒せずに、芽生えかけたそれはそのまま消えるはずだった。

しかし、それは最後に両儀式という存在が『』に触れる事によって、芽生えかけた意思は完全に自我を持つ。

その名前が——『両儀 永』。

「アレは二年前、ただ消え逝くおまえを救い、ただの両儀式の意識体の一つでしかなかったおまえに体を与えた」

両儀式がつけた名前はただの『』であつたソレに、両儀永という中身を与えた。

そして。

中身は自らの自我を完全に覚醒させた両儀織の所属していた人間という種族に興味を持ち、同時に、両儀織という存在自体に対しても特別な感情を抱いた。

「両儀式は、確かにアレと繋がってはいるが、おまえのほうがより結び付きは強い。」

——知っている筈だ。今のおまえは霊長でありながら、霊長より一つ上の、上位者となっている事を。だが、アレはおまえに上位者としての特別な能力チカラを与えなかった。アレはおそらく、おまえを共にある存在としてだけ欲しかったのだろう。だから、おまえにあるのは不老不死と、ヒトを越えた身体能力のみ」

それならば私にも付け入る隙はある、と魔術師は言う。

織は、愕然と——この言い寄る闇を見つめていた。

その貌に、さきほどまで浮かんでいた喜色はない。

ただ、純粹な敵意のみが浮かんでいる。

「二年前は失敗した。だから今回、私は同じ“起源”を持ちながら分かれた者達を両儀式にぶつけ、自らの名を気付けせようとした。だが、私はそれよりも遥かに効率のいい方法がある事を知った。

そうだ、その方法はおまえを——」

男の声は、笑いを堪えきれない者のように高揚している。なのに顔だけが動かない。変わらない、苦悶に満ちた哲学者の貌。

「あまり時間はない。これはアレに知られた時点で終わってしまう計画だ。既に蒼崎も感付いている。藤条巴は拾い物だったぞ。おまえは私の意志とは外れた所で、自分からこの場所を訪れたのだから」

「ああ――」

織はナイフを構え、持つ手に力を込める。

声は喘ぎに似ていた。

男は足を止め、織の背後を指差した。

そこにあるのは、たった今彼女が積み重ねた死者の群れに他ならない。

織はそれらを殺す時、快楽は感じなかった。どれもこれも皆死にたがっていて、仕方なしに殺したに過ぎない。

だから、この男なら、織は満足できると思った。

そして、それを最後の殺人にして、これからは永と共に生きてみようかと思ってもいた。

「――おまえなら永もきつと、殺しても何も言わない……！」

迸る叫びと共に、織は魔術師めがけて飛び出した。

弾丸にはない弓のような鋭い迅さ、ヒトの能力を越えた速度で、獣のような殺意をともなつて。

## 空の境界 二次創作 第二十一話（後書き）

二つ名メーカーで試しに両儀 織と打った所、まさかの二つ名は覚<sup>フラ</sup>醒<sup>クタル</sup>だったという驚きが。

まさか本当に両儀織の起源は覚醒だったのかな？

## 空の境界 二次創作 第二十二話

ssssssssssssss

両者の距離は、すでに三メートルほどしかなかった。

細い廊下で対峙する織と魔術師にとって、お互い逃げ道という物はない。後退など——両者とも、思考の隅にさえ存在しない。

織の体が弾ける。

この距離なら接近に一秒と必要しない。瞬きする間ほどのうちに男をナイフで切り刻める。

紅い着物が闇に溶け込む。

その前に、魔術師は発音した。

「不倶、」

空気が変わる。

織の体が、その速度を緩める。

「金剛、」

片手を中空に突き出し、織に向けたままで魔術師が音を漏らす。

織は、床に浮かび上がる線を見つけた。

「蛇蝎、」

魔術師の周囲から、あらゆる流動が途絶えていく。

大気を流れる様々な現象が密閉されていく。

織は視た。

黒い男の足元から伸びる、三つの円形の文様を。

『——体が、重い……？』

魔術師を守る三つのサークルは、星の軌道を描いた図形に似ていた。三つの細長いサークルが重なり合うように地面と大気に浮かび上がっている。

そのサークルの最も外側の線に踏み込んだ途端、織の体はその動きをヒトと同等まで落とされた。本来なら完全に動きを止める筈のそれに入っても動けたのは——やはり織が上位の存在になっている故だろうか。

「両儀織——その体、荒耶宗蓮が貰い受ける」

魔術師が動く。

織が夜の闇に紅い着物を溶け込ませて走ると同様に、男も、夜の

闇に溶けて獲物へとにじり寄った。

近づく過程さえ視認させない亡霊のような速さ。

それは結界に踏み込み、動きを常人と同等にまで制限された織には咄嗟に反応しがたいほどの速さだった。

見ていたのに——男が近寄ってくるを見ていたのに、男が自分の真横に立っていると知覚できない——

寒気が走る。

事ここに至り、彼女はようやく『敵』が正真正銘の怪物なのだと理解した。

魔術師が左手を伸ばす。

万力のように開かれた手の平が、織の顔を握り潰そうと伸ばされる。

「疾っ」

殴りつけるような背中 of 悪寒が、男のあまりの異常さに一瞬止まってしまった彼女の体を再起動させた。

魔術師の指先が顔に触れた瞬間、織は弾かれたようにバックステップした。それと同時に行き掛けの駄賃とでもいうかのように、魔術師の腕にナイフによる一撃をいれる。

ザン、という鈍い音をたててナイフは魔術師の手首を切断した。

「、戴天」

魔術師が発音する。

確実にナイフの刃が通り過ぎた魔術師の手首は、腕から落ちなかった。

刃は大根を切るように綺麗に通ったというのに、魔術師の手は傷一つない。

「、頂経」

右手が動く。死なない左手から逃れて距離の開いた織を追うようにして放たれた右手は、彼女の首を捕らえていた。

少女の首を片手で鷲掴みにして、魔術師はそれをそのまま宙吊りにする。織が少女であるにしても、腕一本で人間を持ち上げる姿は鬼か悪魔か、まるで化生のようなだった。

「っ——」

織は声を出す事もできない。

男の手は、喉を通ろうとする織の声をその途中で握り潰していた。

その握力だけではない、手の平から感じる何か。それが織の喉から脊髄を通して、水が染み渡るように織の体全体へと広がっていく。

彼女はこの時、

『——ああ、またか……』

そう思った。

「——未熟。この左手には仏舍利を埋め込んである。どれだけ切り刻もうとも、単純に断ち切るだけでは荒耶は傷つかない」

少女の喉を掴んだ手の平で締め上げて魔術師は語る。

織は答える事ができない。気管を押し潰す力が強すぎて、呻きすら出なかった。

……男の腕は、人間の首をへし折る為の機械だった。がっちりとした喉を鷲掴みにした指は力任せには解けない。下手に体を揺らして反撃をしようものなら、この機械は織の首をへし折ってしまう。

魔術師の語りは続く。

「加えて私は死なない。私の起源は『静止』である。起源を呼び起こす者は、起源そのものに支配される。すでに止まっている者を、おまえはどう殺すというのだ」

織はそれを聞きながら、男を睨みつける。今、首を掴まれ中空にぶら下げられた彼女が男に対して出来る行動は、それが限界だった。結界に囚われ、常人と同等の身体能力しか発揮できない自分が悔しくて、織は齒軋りしながら、それでも何とか反撃を試みようとする男の腕に対してナイフを疾らせようと腕に力を込める。

が、その前に。

魔術師は自らが宙吊りにしている少女を観察し、結論した。

「——そうか、頭部はいらんな」

感情のない声で、魔術師は初めて腕に力を込めた。

ギシ…、と首の骨が罅割れる音が響く。

そのまま――

「――あ……」

織の首はばきり、と折れた。

魔術師のその万力のような手の握力によって折られた織の首が、がくん、とだらしなく横へと倒れた。その瞳に、生氣というものは存在しない。

ドサリ、と紅い着物の少女が地面へと落ちる。

少女はぴくりとも動かない。

「ふむ、強度もやはり人間と大差はないか」

自分がたった今首を押し折った少女を、まるで素材の強度を調べる為の実験を行ったかのような目で見ながら、魔術師は言う。

「……やはりこちらにして正解だった。もう片方――両儀式の方ならば、恐らくはこう上手くはいかなかっただろう。何しろ生きていようが死んでいようが、動くものならば動かしている源を断つ。」

それが奴の能力だ。私がすでに止まった生命だとしても、こうして存在している以上は存在させている系がある。そこを絶たれたのならば死ぬな。唯一の例外はこの左腕だが、それもあの目の前ではそうは保つまい。アレがこちらにあの目を授けなかったのは正しく僥倖だ」

魔術師は、落ちて動かない織に近寄り、屈みこんだ。

「だが両儀織はこの程度では死なぬ。アレと同位の存在ならば、殺すのはアレにしかできぬ。ならばやはり——体を獲るならば麻酔が必要か」

魔術師は、首の折れた、虚ろな目の織に手を伸ばす。

——と。

魔術師が手を触れる寸前。確かに生気のなかった織の瞳に、光が戻った。

「——む」

後少しで顔に触れそうだった手はしかし、織が咄嗟に体を跳ね上がらせて大きく飛び退く事によって叶わなくなった。

「……永のヤツ、どうせなら傷つかないようにしてくれたらよかったのに。そうしたら痛みもない」

織は言いながら、もう既に治ってしまった首に手を当てる。

「——じきに、痛みを感じる必要もなくなる」

魔術師は、三重の結界を維持したまま一步踏み出した。

織はそれに眉を寄せる。

「オレはおまえに体をやる気はないよ。この体は永からの贈り物だ」

ナイフを二本、構えて織は言った。

「オレも結界は知ってるよ。修験道じゃ聖域である御山に女が入らないように結界を張る。張った結界は長い間困った領域を外界から阻むって話だけど、魔術的な干渉ならそれを抜ける事も、壊す事もできる。」

それに——いくら魔術的な結界だって、そう何度も何度も物理的な干渉を受ければ、孔ぐらい開くだろ？」

そして、彼女はゆっくりと結界に一步近づいた。

結界に触れるか触れないかの距離で、彼女の手が動く。手が動いたと見た時には既に、その斬撃は始まっていた。

一撃、二撃、三撃。そこから先はもう、視認する事は不可能だった。

——他者を阻む魔力の壁が磨耗してゆき、魔術師の持つ三重の円形の、一番外側の円が遂には耐え切れず？亀裂？が開いた。

「——蒙昧」

魔術師が焦るように前に出た。

一步、織へと近寄っても織に変化はない。……男の守りは三つから

二つに減っていた。魔術師は内心で舌打ちする。まさか織が結界を力尽くで一時的とはいえ孔を開けてしまうとは思ってもよらなかった。境界に触れた外敵を律する三重の結界の外周、不倶に亀裂を入れられた魔術師は織を仕留めるべく走りだす。

「だがあと二つ残っているぞ」

「待ちは、しない」

結界に入るぎりぎりの距離を維持したまま、織は後退しながらナイフで結界を斬りつける。

再び結界が削れてゆき、修復されかけていた不倶の亀裂は再び拡がり、金剛、蛇蝎にも孔が開く。

そこで織は結界内に体を跳躍させて弾丸のように跳び込み、同時に右手に持っていたナイフを手首のスナップだけで投擲する。

「——！？」

魔術師は咄嗟に避けた。ナイフは魔術師のこめかみを掠めて天井へと突き刺さった。避けた筈のこめかみはごっそりと抉られていた。血と肉が砕かれた骨、脳漿がこぼれだす。

「——ぐっ」

声を漏らす魔術師。

それより早く——彼は、自らの体を撃ち抜いた衝撃を感じていた。

だん、と紅い影が魔術師の体軀に炸裂する。

それがナイフを投げた後、即座にその場で自分へと追撃を掛けた織なのだと魔術師が把握した時、勝敗は決していた。

魔術師の真横で体を捻って、全体重を乗せた織の一撃は、砲弾でも当たったかのような衝撃を伴って魔術師に当たった。それだけでも人間ならば骨が碎けて崩れ落ちそうなものだが、織は、その手に持ったナイフを魔術師の胸へと突き立てた。

ナイフは、確実に魔術師の胸の中心を貫通している。

「じ——ふ」

魔術師が吐血する。血は、砂のように粉っぽかった。

織はナイフを引き抜くと、そのまま魔術師の首筋へとナイフを突き入れる。両手で力の限り。勝敗は決しているというのに、必死の表情で二度目の止めを刺そうとする。なぜなら——

「往生際が悪いな。それでは冥土で迷おうぞ、織」

——敵は、まだ死んではいなかったのだから。

「フウ……やっぱり、オレじゃ駄目だったか……」

全てを諦めてしまったかのような表情で呟く織。ただのナイフじゃ、おまえを殺すのは無理だったか、と。

魔術師は動かない仏頂面のまま、目玉だけでにやりと笑う。

「昔から戦いは引き際が肝心という。最初に出会った時私から逃げなかった時点でおまえの運命は決していた。両儀を捕らえるのだ、もつと梃子摺るかと思ったが、それでもなかったようだな」

魔術師の左手が走る。

……そう。勝敗は、既に決していたのだ。

強く握られた男の拳は、そのまま織の腹部を殴り上げた。

大木でさえ貫きそうな一撃に、織の体が持ち上がる。その一撃だけで、織は胸と首を貫かれた魔術師以上に口から血を逆流させた。

ばきばきと音をたてて、内臓と、それを守っていた骨が碎かれる。

「――」

そのまま織は気絶した。いかに永からヒトを超えた卓越した身体能力を持ち、死なない体だとしても、痛みが度を越せば意識を手放す事になる。力を半分ほどに抑えていたにせよ、コンクリートの壁さえ砕く男の一撃を食らっては、それも当然だった。

魔術師は少女の腹を片手で掴んで持ち上げ、そのままマンションの壁へと叩きつける。織の全身の骨が砕けかねない勢いで行われた凶行は、けれど、さらに奇怪な現象となった。……壁に叩きつけられた織の体が、水に沈むようにその中へと呑み込まれたのだ。

ぞぶぞぶと音をたててマンションの壁が織を完全に呑み込むと、魔術師はようやく腕を下ろした。

……その首にはいまだに織のナイフが突き刺さり、目には先ほどまでの威圧感がみられない。

「……ふむ、どうやら私も限界か」

それからしばしの空白が流れても、黒い外套はぴくりとも動かなかった。

それも当然かもしれない。

どうしてか、魔術師の肉体は、完全に死んでいた。

………

……

…

## 空の境界 二次創作 第二十三話

日付が十一月十日になっても、姉ちゃんは家に帰ってこなかった。

日付が変わるのは、まあ、いいとして。俺は姉ちゃんが日付が変わっても帰って来ないっていうのを別にそこまで気にするわけじゃないけどさ、とりあえず、姉ちゃん昨日の夕飯どうしたんだろうね、っていうのが気になるんだよね、これ。

まあでも朝になったら帰ってくるでしょ、そう思って俺が台所で買い置きしてあった食パンを取り出して居間に行ったら、靴が置いてあった。

「誰のだ、これ」

そう思って靴を見てみると、すぐにそれが誰の物が判明した。

「これって…姉ちゃんが買ったのかな？　巴サンに」

実際に聞いてはいないから実はそうではないかもしれないけど、たぶんそうだと思ったんで、俺はその靴を隣に置いてあった靴の箱に入れてテーブルの上に置いておいた。

ssssssssssssssssssss

帰ってこない姉ちゃんを待っているうちに、街が朝を迎えた。

天気は曇り空、雨でも降りだしそうだ。

姉ちゃんがいないと俺はとかく暇になるので、部屋から出て事務所へと足を運ぶ。時刻は朝の八時過ぎ。机に向かっている橙子サン以外に人影はない。驚いた事に、黒桐サンも式の才姉サンの姿もない。

「黒桐サンと、式の才姉サンは？」

「おお、永か。式は風邪をひいたそうだが、黒桐はその看病だとさ。私の風邪がうつったんだと式は言っていたらしいが、酷いとは思わないか？」

俺はそうだねえ、と適当に返事をした。

「適当だな、まあいい。そういえば昨日行ったマンションの入居者な。黒桐が五十世帯のうち三十世帯しか調べられなかったと悔やんでいたんだがな、調査はそれで終わっていたんだな。まあ、お前に言っても意味はないかもしれないが、それは調べられなかったのではなく、初めから記録が存在しなかった。意味はわかるな？」

「そりゃま、わかるけどね？ アレ、意外と面倒だよ？」

「ああ、知っている。だがな——」

言いかけて、橙子サンは眉をひそめた。

何か、体の上にアリの行列が伝っているみたいに不快な表情をする  
と、侵入者だ、と呟く。

「永、すぐに何らかの方法を使って姿を隠せ」

「はあ。まあ橙子サンが言うなら」

橙子サンの表情があまりに不快そうで、しかも是非は問うな、とでもいうような切迫した雰囲気を出していたので俺は了承して、式の才姉サン愛用のソファの後ろの壁ぎわに立ち、姿を消した。

と、すぐに足音が聞こえてきた。

工事途中で放棄されたこのビルの、剥き出しのコンクリートの床をあえて誇張するような、甲高い靴の音。それは一度も立ち止まる事なく、一直線にこの部屋までやってきた。

扉の無い事務所の入り口に、赤い影が現れる。

暗めの金髪に碧眼、彫りの深い顔立ちにいかにも品のある立ち振る舞い。見かけをそのまま年齢としたら二十代前半あたりの欧州人。赤いコートを着た、たぶん美男子という表現が適当と思われる才兄サンは事務所に入るなり陽気に手をあげて、

「やあアオザキ！ 久しぶりだね、ご機嫌はいかがかな？」

なんて、親しみに満ちた笑みを浮かべたのだった。……正直、本当の年齢を知っている俺からしてみれば、その笑みは醜悪極まりないものだったけども。

赤いコートの才兄サンは、橙子サンの机の前で立ち止まる。

橙子サンは椅子に座ったまま、明らかに歓迎していない素振りで才兄サンに冷たい視線を送っている。

「コルネリウス・アルバ。シュポンハイム修道院の次期院長がこん

な僻地に何の用だ」

「はは、そんなのは決まっているだろう！ 全てはキミに会うためさ。ロンドンでは世話になったからね、昔の学友として忠告をしにきてあげたんだ。それとも私の好意は迷惑かい？」

才兄サン（コルネリウス・アルバというそうだ）は大袈裟に両手を広げると、善意に満ち満ちた笑顔をする。橙子サンとは正反対だ。橙子サンは冷ややかな眼差しを崩さない。それを前にしても、アルバの才兄サンはにこにここと笑っていた。

「それに二ホンはいい所だよ。キミは僻地というが、だからこそ協会の監視もぞんざいだ。この国には独自の魔術系統が存在し、我々の組織とは相容れない。大陸から派生したオンミョウドウだっけか私にはシントウと区別がつかないのだが、まあ大した問題じゃないさ。彼らの美点はね、自分達の支配圏を侵されなければ手を出してこないという事だ。協会と違って閉鎖的なんだなあ、事が起こる前ではなく事が起きた後に動きだす。事後処理の達人だよ。二ホン人はみんなそういう人達さ。おっと、これは悪意で言っているんじゃないぜ。私にとっては喜ばしい事なんだ。計画の途中で邪魔が入らないなんて、私の国では考えられない。協会から外れた魔術師にとって、この国は理想郷だよ」

もつとも、私は協会よりの魔術師だから関係ないがね、と付け足してアルバの才兄サンは笑った。……やっぱり、この人は橙子サンだけを见ている。俺の事は気付いていないようだ。

機関銃みたいな速度でべらべらと喋るアルバの才兄サンを片目で睨むと、橙子サンはようやく口を開いた。

「無駄話をしにきたのならお帰り願おう。人の工房に無断で足を踏

み入れたんだ。殺されても文句は言えんぞ」

「なんだ、キミだって無断で私の世界に入ったじゃないか。連れがいたようなので挨拶するのは止めておいたが、本来ならキミこそ不法だど罵られるべきだがね」

そんな感じで、二人の言い合い（というか橙子サンの嫌味）がしばらく続いて、

「で、用件はなんだアルバ。まさか自慢話をしにきたわけじゃないだろう？ 学徒だった頃ならいざ知らず、お互い協会から離れた身だ。自分の研究成果なら腐るほどの弟子相手に披露してくれ」

「フン。相変わらずだね、キミは。解ったよ、つもる話は後にしよう。いずれ私の世界で話し合う事になるんだ。キミの本拠地ではさすがに落ち着けない。楽しい話はくつろげる場所でするものだ。――

――アオザキ。太極は預からせてもらったぞ」

余裕に満ちたアルバの才兄サンの言葉に、橙子サンはかすかに目を白黒させたようだった。

「――太極の中に太極を取り込んだのか。本気で根源に近付こうという心意気は認めるが、抑止力が働くぞ。世界か霊長、どちらが動くかは判らない。だが過去一度として、アレを退けた魔術師はいない。自ら破滅するつもりか、アルバ」

橙子サンは赤いコートの才兄サンを睨みつける。

だけでも、才兄サンは我が意を得たり、とばかりににやりと笑った。

「抑止力？ ああ、あの邪魔者は働かない。今回は自ら道を創るのではなく、もとから開いている道を辿るだけだからね。反動がある

はずもないんだな」

何を言っているんだろうね、もう二回も働いてるっていうのにさ。

「だが、それでも事は慎重に運ぶつもりだ。リヨウギというサンプルは丁重に扱わせてもらおうよ」

——うん？ リヨウギ？ 式の才姉サンはまず間違はなく黒桐サンと一緒にいるけど……。

「……あのさ、ちょっと聞かせてもらってもいいかな、アルバの才兄サン？ リヨウギってさ、どっち？ 式？ それとも織？」

まあわかつてはいるんだけどね、一応、聞いておこうと思って、俺は会話に割り込ませてもらった。

二人が一斉にこちらに振り向く。何をやってるんだおまえは、とでも言いたげに顔をしかめている橙子サンと、呆然と俺を見つめている才兄サン。

……そういえば橙子サンの言い付け破っちゃったけど……まあいいか、別に。

赤いコートの才兄サンは俺を見つけると、楽しくて仕方がないというふうな、にやりと笑った。

「昨日の少年だね。そうか、弟子はとっていないという話だったが、きちんといるじゃないか。嬉しいな、愉しみが一つ増えてしまったじゃないかアオザキ！」

くるり、と橙子サンに振り返って彼は言う。

まるでオペラ歌手みたいに両手を広げて語る才兄サンは、俺には既に劇が破綻している事にも気付かずに踊り続けている哀れな道化にしか見えなかった。

「永<sup>ソレ</sup>を弟子にできる奴なんかこの世に一人もない。……と言ったところで無駄か」

橙子サンは頭痛を抑える時にするような感じで額に指を当てて、ため息をもらす。

「用件はそれだけか。わざわざ報せを持ってきたのには感謝するが、私が協会に知らせるとは考えなかったのか」

「ふん、キミはそんな事はしないさ。仮にしたとしても、連中がやってくるまで六日はかかる。協会の一団が二ホンに上陸するにはこちらの組織と話し合いが必要になるから、さらに二日。ほら見ろ、どこぞの神様なら世界を創っても余裕があるじゃあないか！」

あはははは、と才兄サンは体をくの字にして笑った。

ひとしきり笑うと満足したのか、にこやかな物腰に戻ると才兄サンは踵を返した。

「それでは、また。キミも準備があるだろうが、出来るだけ早い再会を楽しみにしているよ」

最後まで陽気な口調で挨拶を残すと、才兄サンは赤いコートをマントのように翻して立ち去っていった。

oooooooooooooooooooo

「……さて。永、これはどういう事だ？」

「え？ 織の姉ちゃんが捕まってしまったっていう話だけど？」

才兄サンが立ち去った後すぐに橙子サンが、やっぱり頭に頭痛を抑えるように指を当てて聞いてきたので俺はあっさりと答えた。俺のそんな態度を見て橙子サンはあ、とため息をつく。

「おまえ、前に式が織をどこにやったか聞いた時、もう違う生物になってるかも、とか言っていなかったか」

あ、覚えてたんですね。とづくに忘れてると思ってたよ。

「はい、言いましたけど。それが何か？ あ、式の才姉サンと黒桐サンにこの事を言うのは止めてよね。これは俺の考えじゃなくて姉ちゃんに頼まれてる事なんだからさ」

「……まあいい。この事は式と黒桐には黙っておいてやる。それで？」

橙子サンは一応式の才姉サンと黒桐サンには黙っておく、と言った後、胸ポケットから煙草を取り出して、天井を見ながら一服して聞いてきた。

「それで、つて？」

「それで、おまえは今まで通り、観客としてこの劇だか何だかを鑑賞するの？ それとも、この劇の囚われの織ヒロインを助け出しに行くのか、つて事さ」

「うーん、不本意ではあるけどな。今回、劇の脚本を乱してしまったのは俺だから」

「それは助け出しに行くって事でいいのか？」

「うん。でもさ、橙子サンも来てくれると嬉しいな。この乱れた劇、終幕は仕方がないから俺が片付けるとしても…橙子サンもさ、人形が本物の人間になったらっていうの、見たいでしょ？」

俺の言葉に橙子サンはああ、まあな、と頷いた後、言った。

「見たいし、折角アルバに招待までされたんだ。行くしかないだろう」

「それじゃ、行こう？」

「ああ。っと私の部屋のクローゼットに鞆が入っているから持ってきてくれ。オレンジ色のほうだ」

そして。

この後橙子サンの鞆を部屋からオレが持ってきてから、俺と橙子サンはあのマンションへと出発した。

## 空の境界 二次創作 第二十四話

ssssssssssssssssssss

赤い陽射しが、螺旋の塔を照らしあげる。

日没を間近に控えたオレンジ色の世界中、蒼崎橙子と両儀永はマンションの敷地へと足を踏み入れた。

蒼崎の着ている蜥蜴の皮を茶色に染め抜いたような革のロングコートは、細い彼女の体には似合わない。外套は、服ではなく鎧の趣さえ漂わせている。

連れている両儀の服装は、間もなく訪れるであろう夜の、その闇に紛れ、溶け込むような漆黒のコートだ。彼はコートに付いているフードを目深に被り、それはコートの色を白くしたのならば、まるで敬虔なクリスチャンのように見えた事だろう。軽薄な言動が多い彼にはあまり似合わない、けれどそれは普段通りの、少年の恰好。

彼女は一度だけマンションを見上げると、オレンジ色の鞆を片手に歩きだした。一足先には両儀が歩いていた。

緑の芝に覆われた庭をぬけて、マンションの内部へと入っていく。

ガラス張りのロビーは、やはり夕日の赤色に染まっていた。床も、壁も、上の階へと続くエレベーターがある柱も、太陽の中にあるように赤い。

両儀はそこで一旦立ち止まり、後から歩いてきた蒼崎に何事かを告

げ、彼女はそれに頷いた後、くるりと向きを変え、行き先を変更した。

彼女はエレベーターではなく、そのままロビーを東へと歩いていく……二つに分かれたこのマンションは、東と西とに別々のロビーを設けていた。

彼女はそのうちの一つ、東棟の一階にあるロビーへと向かい、両儀はそれを見た後、エレベーターのすぐ脇にある階段を上っていった。

ロビーは、長方形の広い空間だった。

二階を吹き抜けにして繋がっている大広間、といった所だろうか。すでに建物の中であるここでは、夕日のオレンジ色はない。ただ電灯の黄色い光だけが、大理石の床を照らしていた。

「驚いたな。性急なんだねえ、キミは」

男性にしては高い声がロビーに響く。

橙子は何も答えず、無言で視線をあげる。緩やかな勾配を描いて二階に続く階段。その途中に、赤いコートを着た男が立っていた。

「だが、それは喜ばしい事でもある。ようこそ私のゲヘナに。歓迎するよ、最高位の人形遣い」

魔術師コルネリウス・アルバは楽しげに笑うと、芝居がかった仕草で大袈裟に一礼した。

ssssssssssssssssssss

「<sup>ゲヘナ</sup>地獄？」

「そうとも。ここはヒンノムの谷にあった火の祭壇の再現だ。人々を焼き、殺し、苦しめ負の想念を集める熔鉱炉さ。あいにくと神殿の主であるモロクは不在だがね、なかなかどうして立派なものだろう？　これほどの異界なら外界の物質法則とは完全に切り離される道を開く準備はとうに調っているんだ、アオザキ」

赤い魔術師は眼下の橙子を見つめながら得意げに語る。

陽気な青年とは裏腹に、彼女はあくまで感情という物を表さずに返答する。

「アグリツパの直系がユダヤかぶれとは皮肉な話だ。そんなんだから、おまえはこの本質に気がつかない。地獄？　そんなものは地球上のそこかしこに今も存在している。人知をこえた殺戮を見たいのなら戦場へ行け。理不尽なまでの死途を見たいのなら飢餓の国に行けばいい。こんなモノは地獄でもなんでもない。ただの煉獄だよ、これは」

言って、彼女は鞆を床に置いた。

かこん、という乾いた音。

「小罪を犯した為に地獄にも天国にも行けずに永遠に苦しむ魂の在り処。それがこの正体だ。目的があって苦しませるのではない。苦しませる事だけが目的の閉じた輪なんだ。こんなものに、なんら魔術的な効果はない。——少なくとも、部外者であるおまえ自身

にはな」

突き刺すような言葉に、赤い魔術師はぴくりと顔を引きつらせる。

彼女は階段に立つ青年ではなく、この建物を相手にするかのよう  
に目を細めた。

「太極図の具現はおまえの考えによるものではあるまい？ いいか  
ら荒耶をだせ。おまえでは器量不足だし、この先の出来事で利にな  
る事はないぞ。おまえの目的がなんであるかは知らないが、ここは  
おまえが求めそうな解りやすい価値はない。先の忠告のお返しとし  
て、それだけは言っておいてやる」

さて、とばかりに橙子は周囲に目線をくばる。こうして対峙してい  
るはずの赤い魔術師には目もくれず、居もしない相手を捜している  
のだ。

魔術師は、そんな彼女の姿を見つめ続ける。

今にも泣きそうな、殺意に満ちた瞳で。

「キミは、いつもそうだ」

呟きは、堪え切れずに漏れたものだった。

「そうだ。いつもそうだった。そうやって私を過小に評価する。ル  
ーンだって私が先に専攻していたんだ。人形師としての名誉も私だ  
けにあったんだ。だというのに、おまえのその態度に低能な連中は  
誑かされた。私を下だと扱うおまえの態度が、連中にそろって私が  
劣っているのだと認識させてしまった。考えれば判るだろうに！

私はシュポンハイムの次期院長だぞ？ 魔道を学んだ年月は四十年を超える。その私がなんだって、二十かそこいらの小娘の下に位置付けられなくてはならんのだ……！」

呟きは、いつか激昂となつてロビーに満たされていた。

今までの親しみに満ちた態度を捨てて呪詛を撒き散らす相手を、橙子は無関心に一瞥する。

「学問に年齢は関係あるまい。若作りもいいがな、コルネリウス。おまえは外見ばかり気にしているから、中身が追いついてこないんだよ」

冷静な一言は、けれどこの上なく挑発的な侮辱だった。

齢五十歳を超える美貌の青年の顔が、憎悪に歪む。

「——まだ、私の目的を言っていないかったね」

つとめて冷静に、赤い魔術師は語尾を改めた。

「私はね、アラヤの実験などどうでもいいんだ。実のところ根源の渦になど興味はない。あんなあるかどうかとも判らない物を追い求めるなんて、ナンセンスさ。神の領域に触れたいのならグノーシスに走ればいいんだ。遡る必要などない」

一歩、彼は後ろに退いた。二階に登ろうとするよう、少しづつ上がつていく。

「キミにリヨウギシキの事を知らせたのは私の独断だ。アラヤはあ

の少年には知られるなど言っていたが、大した問題ではない。それに、とうのアラヤはリヨウギシキを捕らえる為に命を落とした。相打ちだったんだ、アレは。よって、この結界は私の物となった。だがね、私はヤツの実験の後を継ぐつもりなぞない。

あたりまえだろう……？ 私はね、アオザキ。おまえを殺せるといふから、こんな僻地までやって来てやったのだ！」

喉を壊しかねない勢いで甲高い笑い声をあげて、魔術師は階段を駆け上がる。

魔術師が二階まで上がっていくのを、彼女はただ黙って見つめるしかなかった。

……一階のロビーには、すでに魔術師の悪意の具現ともいえるモノが満ち満ちていたからである。

その時、彼女は今までのどんな事より侮蔑と憎悪を込めて言った。

「——スライムか、これは」

己の周囲に満ち溢れた異形のモノ達を、蒼崎橙子は簡潔に表現した。

しかし、ロビーの外壁から滲み出てきたそのモノ達は、それほど単純なものではない。クリーム色の粘液は壁からばたばたとこぼれだすと急速にカタチを成していく。

あるモノは人型に、あるモノは獣型に。

その醜惡な姿。永久に腐敗と再生を繰り返し続ける、まるでどこかのB級ホラー（スプラッターかもしれない）映画に出てきそうなそ

れは、しかし蒼崎橙子という人形遣いにとってそれは汚らしいだけで、脅威とは成りえなかった。

「これだけの場において、こんなモノしか具現化できないとはな。アルバ、魔術師から映画監督に転向するべきだ。おまえならクリーチャーを用意する予算が浮くぞ。安手のホラー専門になるだろうが、なに、おまえには院長などより向いている職業だ。永のヤツなら喜んで観に行くかもな」

ロビーを埋め尽くすほどのモノ達に囲まれて、彼女はそんな事をぼやいた。

そうして、気付けば自らの周囲一メートルほどの余地だけ残してスライム状のモノに囲まれてしまったというのに、彼女は眉ひとつ動かさずに胸ポケットに手をやった。

そこから一本煙草を抜き取り、それにライターで火を点ける。

これほど詰まらない見世物なのだ、煙草でも吸わなければやっていられない――。

「いや、監督もいけないか。演出が下手すぎる。この程度じゃあの頃の客は喜んでくれない。仕方ないな、ひとつ手本を見せてやろうアルバ。怪奇を銘打つのなら、せめてこのぐらいのレベルは維持するべきだ」

かん、と彼女は足元の鞆に足の爪先を打ち付けた。

「――出る」

拒否を許さない、威厳に満ちた命令。

呼応して鞆が開く。ぱたん、と開いた鞆の中には、何もなかった。

同時に——ナニか黒い物が、蒼崎橙子という魔術師の周囲を回ります。

体を持った台風のように。橙子を台風の目にして、ぐるぐるぐるぐると高速で回りだす。

その気が狂ったような勢いの渦が数秒を待たずして消えて、先程までロビーから溢れ出しそうなほどいた異形のモノ達も、綺麗さっぱり消えていた。残ったのは、蒼崎橙子と閉じてしまった鞆。そして、彼女の前に座るネコだけだった。

「——な、」

その光景を、アルバはは夢心地で眺めていた。

そのネコは橙子より大きく、色彩は真黒、体は厚さというものが見られない。

その影でできた、いや、影かどうか分からないもので構成された、ネコのようなシルエットの姿の頭部にはエジプトの象形文字じみた目だけがついていた。

ssssssss

同じ頃。

両儀はマンションの中央、そのエレベーターの脇にあった東棟に続く階段を上がっていた。

かつん、かつん、かつん、階段を一段上がる度に、靴音が響く。

と、彼はコートのポケットに手をつ込んだ。そこから、蒼崎と同じように煙草を一本取り出す。ジ……、とそれにライターで火を点ける。

そして両儀がそれをくわえると、本来ただ燻って消えてしまう筈のそれは、そのまま上へ上へと昇っていき、東棟の最上階——十階へと伸びていった。

「……やつぱり、姉ちゃんは陽性か。——まあ、解り切っていたからこそこちらを選び、上がってきたんだけれどもね」

上へと伸びる煙を見ながら誰ともなく呟く両儀のその声にいつもの軽薄な色はなく、あるのは重々しい、それこそ教会の神父のような色だけだ。

「人形サンは……まだあの場にいるんだ……。なら、まずは姉ちゃんを引き取りに行くとしようかな。すでに壊れた、壊してしまった劇だからね。飛び入りの役者、急なアドリブ、どれも俺の望んでいたものにはならない、か。」

大体観客が飛び入りとして参加する事自体が間違っているんだよ。言語道断っていうのかな？ これは劇の中断も——やむを得ないかもしれないね、残念だけれど……」

黒いコート、フードを目深に被った影が階段を再び上がっていく。

……かつん、かつん、かつん。

間もなく外では陽が沈み夜の闇が訪れようとしている中。捻れた、螺旋のマンシヨンの階段に。

本来なら観客だった筈の両儀の、乾いた靴音だけが響いていた――  
|。

空の境界 二次創作 第二十五話

§§§§§

彼がくわえた煙草の煙りを辿って階段を上がり東棟の十階に着くと、そこは冷たく静まり返っていた。

そのフロアには両儀織の肉体があり、同時に魔術師の肉体も置かれている階だ。当然、あの魔術師にとってしてみれば最も守る必要がある、最重要区画の筈だった。

「……………」

——だというのに、やはりそこは静まり返って、まるで侵入者に気が付いていないようだった。……いや、事実気が付いてはいないのだろう、でなければ魔術師——荒耶宗蓮が自らの計画を破綻させる存在を、放っておく筈がないのだ。何らかのアクションがあってもよい筈であった。

煙りは、階段を上がりきった後も伸びて、そしてその階層中に拡がっていた。それせいで十階のフロア全体はマンションの内部だというのに、まるで霧の森の中にいるような靄に包まれて一メートル先すら見通せないほどの視界難になっていた。この状態、普通ならまさしく五里霧中という言葉が当て嵌まった事だろう。

だが、今この場にいる彼——両儀にとっては霧であろうと何であらうと、それは障害にはならない。

それも当然だ。何故ならこの霧は彼が展開したものであり、その霧

を見通せないなどという事は有り得ないからである。

「――命じよう。？孔を開けよ？」

両儀がそう発音すると同時に、周囲を覆っていた霧に変化が現れる。

両儀の周りに展開していた霧は命令を受け、両儀の眼前の床で渦を巻く。しゅるしゅるしゅると、カセットテープを巻くような音をたてて段々と渦は深さを増しながら広がっていき、遂には幅一メートルほどのマンホールのような孔が出来上がった。

辺り一面を覆い尽くしていた霧、その一部が孔にまるで釣り糸のようになり垂らされる。

そしてそのまま両儀は糸を見つめながら待った。その垂らされた糸が、己が姉とした存在を探し出す時を。

糸を垂らして一分ほど経った頃、不意にぴくんと糸が震えた。

「……意外と早いね。良い事だ、うん」

彼はそれを確認すると、垂らしている糸を掴み、孔の上に移動した。彼が孔の上に立つと、孔と彼は周りから彼を追うようにして集まってきた霧にその姿を完全に覆い尽くされてしまった。

……濃霧の中からぞぶぞぶと何かを飲み込むような音が辺りに響く。

そして、それは三十秒ほど続いた。

——音が鎮まり濃霧が霧散し、十階の霧が晴れた時。

すでに黒衣の少年の姿もあのマンホールのような孔もそこにはなく、あとにはただ、誰もいなくなった事を示すような静寂だけが残っていた——。

§§§§§

どこかで、ジジジジジ、という音だけがしていた。

「話が違つぞ、おまえの使い魔は妹に敗れたというのは偽りか……  
！」

沈黙に耐えられなくなったのか、アルバは叫ぶ。

橙子はさあ、とだけ答えると黒いネコに視線を移した。

「——不味いモノを食わせたな。だが次は少しはマシだぞ。こんなエーテル塊ではなく本物のヒトの肉。霊的な蓄えも十分にある。私の学友だからといって遠慮する事はないんだ。日頃からちゃんと躡けているだろ？ 敵は食い殺すものだ、と」

とたん、黒いネコは走りだした。

大理石の床を滑るように横断し、階段へと走り行く。

……といつてもネコの足は動かない。座り込んだシルエットのまゝ、目だけを動かして赤いコートの人間へと疾走していく。橙子のいた一階のロビーからアルバのいる二階の踊り場まで十秒もかかるまいだが、それを許すほどアルバも常人ではなかった。

彼は、魔術師である。

「影は消えよ。己が不視の手段をもって。闇ならば忘却せよ。己が不触の常識にたちかえれ。」

問う事はあたわじ。我が解答は明白なり！

この手には光。この手こそが全てと知れ。」

落ち着いた、しかし限界に近い速さでアルバは呪文を詠唱する。

——魔術師にとって呪文とは、その個人による自己暗示に他ならない。

風を起こす魔術がある。これは一つの武器と同じく、初めから性能が決められた力だ。どのような魔術師が使用しても効力は変わらない。ただ、詠唱だけが異なる。

呪文の詠唱とは自己の体に刻み込んだ魔術を発現させる為のもので、その内容には魔術師の性質が濃く表れる。その魔術の発現に必要な意味合いと定められたキーワードさえ含まれていれば、詠唱の細部は各魔術師の好みによるからだ。

大袈裟で芝居掛かり、自己に陶醉しやすい魔術師の詠唱は長い。だが長く意味付けをする分だけ、威力が増大するのも事実である。自己にかける暗示が強力であればあるほど、自己から引き出す能力もまた上昇するのだから。

その観点で言えばアルバの詠唱は優れている。大がかりな長さではなく、必要最低限の韻を踏み、また、自己の精神を昂揚させる言葉を胎み、詠唱そのものの発音に二秒と時間を必要としない。

その事実には橙子はほう、と感心した。

アルバという青年は必要以上に長く、無駄の多い詠唱を好んでいたのだが、ここ数年で確かに成長している。呪文詠唱の組み立ての力と速さ、そして物質界に働きかける回路の繋ぎ方が、驚くほど巧い。

彼の詠唱は単純に物を破壊する魔術ならば、間違いなく一流の業だった。

「我を存かすは万物の理。全ての前に、汝。  
ここに、敗北は必定なり……………」

アルバの片腕が突き出される。

階段の一段目に黒いネコが到達した瞬間、かすかに大気が震動し――

——階段が燃え上がった。

地面から揺らめき立ち昇る蜃気楼のように、青い炎が階段を埋め尽くす。

わずか数秒だけ、炎は階段そのものから出現し、吹き抜けとなっている二階のフロアを貫通して天井へと消えていく。

まるで火山地帯の間欠泉だ。ロビーの酸素を奪い尽くした火の海は、黒いネコだけをこの世から消滅させた。それも当然。摂氏にして千を優に超える魔力の炎は、いかなる動物をもバターのように固体から気体へと変えてしまう。液体を経るプロセスなど、コンマの間さえなかっただろう。

だが、アルバは見た。

炎が燃え尽きた後、ひょっこりと姿を現した黒いネコの奇怪な姿を。

「——有り得ん」

碧眼が階段を凝視する。

黒いネコは薄くなってしまった自分の黒い体を残念そうに舐めると、赤い魔術師へ、ぎょろりと視線を移した。

黒い奇怪が疾走を再開する。

アルバにはネコの正体を看破する余裕さえなかった。

「Repeat……！」

切り裂くような鋭さで、アルバは呪文を繰り返した。

階段が燃え上がる。けれど、今度こそネコは止まらなかった。もうこの火には慣れたとでもいうのか、一直線に魔術師へと伸びていく。

「Repeat！」

炎の海が再度噴き上がり、消える。

ネコはすでに階段を昇りきろうとしていた。

「Repeat！」

四度目の炎も、無意味に終わった。黒いネコは二階に到達すると、アルバへと近寄って口を開けた。人間大ほどのネコの体が、その足元からばくと開かれる。脳天を蝶番にして開く宝箱に似ている。厚さのない、平面のはずのネコの中には、先ほど飲み込んだ異形のモノ達の残骸がドロのようにへばり付いている。

アルバはようやく得心した。これがネコに似たカタチをしただけの、口だけの生き物だったという事を。

「Repeat——！」

死を目前にした恐怖が最後の呪文を繰り返させる。

だがその前に、鮫の顎めいたネコの体が魔術師を挟み込む。赤いコートが丸呑みに啜えこまれ、アルバは意識を失った。

§§§§§

——暗い暗い、闇ばかり。

目を覚ました時、そこには何もなかった。

闇しか、なかった。

「……ここ、似てるな」

永と初めて会った場所に。

「ただあの時は、もう少し、こう——もっと、ごちゃごちゃしたモノが沢山あった気がしたけど」

ここにはそんなモノはない。

何かないんだろうかと辺りを見回してみたけれど、やっぱりオレは何も見つける事ができない。視界に入るのは、いや、完全な真っ暗闇なんだから視界っていうのも変なんだけど、とにかく闇だけ。自分の体すら見る事ができない。ここはそれほどまでに暗かった。

「しかしどうにも。オレは結局殺せなかったな……」

ふとそんな事を思い出してオレはたぶん手があると思われる場所を見つめようとした。……結局闇のせいで手は見えなかった。

あの黒い男にやられるまで手にあったナイフの感触は、今はない。

まあどこか…あのフロアの床に転がっているんだろう。

——そういえば臙条はどうしたんだろうか。アイツは足が速いから、あれからすぐに逃げたなら逃げ切れたかもしれない。でももし捕まっていたら——考えるまでもないか。

その時永はどんな反応をするんだろう。と、オレは頭の中で、そんなどうしようもない事をつい考えてしまう。

ここは音も、明かりもない。普段くだらないと感じて切って捨ててしまう事でも、ここではなければそのうち狂ってしまう、かもしれない。

「は、そういえば、他にもここに似ている所はあったな」

だけど、それは普通なら、の話。両儀式の中でいつも殺されていた殺人衝動——両儀式には、この程度の暗闇に閉じ込められる事なんて慣れ親しんだものの筈だった。

——それなのに、今のオレは、この闇が少しだけ——怖かった。オレは永と会ってから少しだけでも、変わったんだろうか？ この闇を例え少しでも怖いと思うのがアイツと会ったから起きた変化だというのなら、それはそれでいいコトなのかもしれないな、とも思う。

そうしてオレがこの暗闇の中に存在していると、不意にうつすらと白く光る一筋の糸がどこからか、こちらに向かって伸びてくるのが見えた。その糸の光に照らされたお陰で、オレはようやく自分の体はこの闇の中を漂っていたのだという事に気がついた。

一体どうしたというのか。ここは一面の闇ばかりでできている無限だ。だからこんな場所に光なんてある筈もない。

なのに、その糸は一直線にオレがいる方向へとひたすら伸びてくる。だけどその糸がオレに届く事はない。だってここは無限なのだから当然、オレとあの白く光る糸との距離も無限。あの糸が伸びているのは判るけど、ただ伸びるだけじゃあオレには届かない。

——— だけど。

その姿があまりに必死に見えたからだろうか。ついオレはその糸に向かつて、手を伸ばしてしまった。

オレが手を伸ばした瞬間、糸との距離は消え去り、糸を掴もうと伸ばした手には確かに白く光る糸の霞を掴んでいるみたいに不確かな、だけどそれでいて温かい不思議な感触があつた。

「——— え？」

思わずそんな声がもれる。

無限だった距離は一瞬で消え、手には確かに先ほどの糸がある。その糸はオレの手に絡み付いた。

「淋しいのか？」

ちょっと驚いたので、手を開いてオレはこの不思議な糸に聞いてみる事にした。

まあ当然の事ながら糸がその質問に答える事はなかったけど、糸はそのかわりなのか、ふるふると震えだした。

そしてそれはまるでナニカを呼んでいるようだったので、オレはそのナニカがここに来るのを待った。

……オレには不思議と、そのナニカがアイツだというのが予想できている。

——初めて会った時と同じように、また。

「や、姉ちゃん。元気だったかい？　ここはヒトが創ったにしては良くできているね。益々この劇を中断するのは惜しいよ。姉ちゃんはどう思う？」

こんなふうに満面の笑みで、オレの前に現れるのだ——。

ssssss

空の境界 二次創作 第二十五話（後書き）

織……これでいいのかな？

## 空の境界 二次創作 第二十六話

§§§§§§§

「、王顕」

不意に、短い韻が流れた。

アルバの体に袈裟に食いついたネコが動きを止める。

事を傍観者のように眺めていた橙子さえ、その声に反応する。

アルバの背後に、男がいた。

たえず苦悩に満ちた厳しい面差しをした男は、黒い外套を着ていた。

男は初めからそこにいたように、現れた形跡というものがない。

黒い男はアルバを片手で掴むと、無造作にネコから引き剥がし床に転がす。ネコは男が連れ歩く三重の結界の一つに触れてしまっただけではない。

男は眼下の女へ振り向く。それだけでロビーの空気は一変した。

空気が凍りつくとはこの事か。

先程までの大気の緩みが消えていく。本当の主を迎えて、このマンション自身が緊張しているかのように。

「——久しいな、蒼崎」

「ああ。お互い、会いたくはなかっただろうがね」

一階と二階——天と地とに分かれて、橙子は荒耶宗蓮という名の元凶と対峙した。

「アルバが出すぎた真似をしたようだな。本来はおまえに知られぬ内に事を済ます筈だったが、仕方あるまい。私一人では六十四人もの体を用意できなかった。この街におまえがいた事は偶然だが、必然でもあるという事か」

「どちらが引き寄せられたのかは知らないが、そうだろうね。偶然というのは神秘の隠語だ。知りえない法則を隠す為に偶然性という言葉が駆り出される」

答えながら橙子は壁際へと後退した。

この相手はアルバとは格が違う。能力的には互角なのだろうが、この建物の中においては荒耶宗蓮はだれよりも優れている。壁を背後にして守りを堅め、前方にのみ意識を集中させなくては大きな隙を見せてしまうだろう。

橙子は永の口車に乗せられた事を内心で若干後悔しつつ、問うた。

「——それで。このマンションは何の為の装置だ？ まさか生きてはいるが死んでもいる、なんて不確定性を形にした箱というわけでもあるまい。一日で完結する世界を捏造して、死に至る瞬間の魂の炸裂を集める作業は効果的ではない、と何百年も前に結論が下されただろう。何百という死を集めても、おまえの目的は叶えられない」

「無論だ。だがおまえが知りえない真実もある。」

確かに、私は死の数ばかりを追っていた。何万という異なる人間の異なる死を経験すれば、その中に根源に通じる魂の拡散があると信じていた。だが、それでは大元には到達できない。それで辿り着けるのはその人間の『起源』だけだ。霊長という総体の起源には辿り着けない。

重要なのは死の量ではない。死の質だ。元を辿れば死に方の種類はより大きく区別される。私は死途を可能なまで大きく腑分けし、結果それが六十四種であると迫った。ここに集まった者達は一人一人がその種の死に方を背負った者。いうなれば世界の縮図だ。私は彼らの苦しみを体験し、彼らの苦しみを内包する。いずれ八卦より四象へと単純化させ、両儀へと至るために――

「……ふん。そんなに一つである事がいいのか、荒耶。光と闇は敵対するべくして分かれたのではなく、それが最も多くの事柄を内包する属性故に分かたれた物だぞ。あらゆるモノは一つでは孤独なんだ。だから多くに分かれようとする。おまえはそれが許せないだけだろうに。様々な人間の死を調べ、その人生を丹念に研究して自己の物として蓄積する。私の死でさえ、おまえは蒼崎橙子という人間の誕生から死去までを知識として脳髄の隅に保管するのだろう。」

そうやって人間の価値を検分するのは勝手だがね、それを行うのは夜摩の役割だ。人の身であるおまえでは、ただ死を吸い続ける地獄でしかありえない」

「――それでいい。地獄であろうと天上であろうと、底に近い事は変わるまい」

荒耶の言葉に迷いはない。

この世には自身しかいない、と結論した強い意志。

橙子は思う。

日常という螺旋を繰り返したこの建物には、人間が体験するあらゆる死の原型が渦巻いている。今まで荒耶宗蓮という肉体が行っていた地道な記録作業を、この建物は継承したのだ。ここは奴そのものであり、荒耶宗蓮という意識そのものである。

『……つまり、私はいま奴の体内にいるわけか』

呟いて、橙子はロビーに満ちた空気を観察する。張り詰めた空気は、荒耶の為の物ではない。むしろ奴に敵対する、この建物に殺された住人達の声にならぬ怨嗟だ。

彼女でさえ押し潰されそうな怨念の量を、荒耶は一日、また一日と増やしていく。彼の言葉を借りるのなら量ではなく質を増しているのだらう。何百という死は、結局一種類の同じ死に方なのだから。

愛情死、即ち家族、恋人、母性、父性、育児。

憎悪死、即ち家族、恋人、友人、先輩、他人。

様々な理由による様々な死に方。

毎日繰り返され、より確かになっていく同じ結末。

——濃くなっていく、死。

この建物は呪文だ。奴が、荒耶宗蓮の意識を強固な物とするための祭壇。高度な魔術を行う為には詠唱や自身の魔力だけでなく、生命の犠牲や土地自体の力をも行使しなくてはならない。

荒耶は現代に神殿を造り上げる事で、より高度な魔術を行おうとし

ている。いや、魔術ではない。これほどの異界をもちいる神秘はすでに魔術の領域ではない。

これは、そう———今の世界の常識では不可能な領域の神秘。

魔法と呼ばれる、人の手が触れられない禁断の力の行使に他ならない。

「———根源への道を開くのか。

だが何故おまえはわざわざこの方法を選ぶ？ もっと簡単な方法がある事ぐらい、判っているだろう。魔術的な結界を張らずに自分が魔術師ではないと証明したところで霊長の意志は欺けない。近代的な技術による結界で誤魔化せるのは同じ魔術師だけだ。たしかにこの建物なら道は開く。太極図の具現だからな、間違いなく穴はできるだろう。だが、その穴から真っ先に出てくるのは霊長の守護者だ。我々は我々である以上、アレには絶対に太刀打ちできない」

「———抑止力は、すでに働いている。おまえがこの街に居た事。何の理由もなく何かに取り憑かれたような偶然をもって盗みを働いた男。過去一件もなかったこの一帯での通り魔殺人に遭った女。これほどまでに私自身が動く事を抑えたというのに、抑止力は三度も働いている

だがそこまでだ。私は、これ以上根源には近寄らない。数回に亘る失敗は無駄にはしない。抑止力に気付かれずに道を開こうとした事もあったが、アレの目は誤魔化せない。いつか抑止力そのものを倒す手段を調べて挑んだが、アレはそれ以上の力をもって現れる。

結論は一つだ。私には、才能がなかった」

初めて———感情らしき韻を含んだ声が流れた。

黒い男は眼下の魔術師を視界に収める。

「抑止力はこれほどまでに道への到達を阻む。それが人間が手にしてはならぬ力、無への回帰への因となる行為だからだ」  
よすが

——黒い男の独白は続き、それを聞いて彼女は結論付けた。

「そうか。それで両儀式を破壊しようという結論に達したわけだ。だが、それならなぜ両儀織を捕らえたんだ？」

彼女は両目を細める。

両儀式と両儀織。

両儀家は汎用性を極めた人間を作り出す為、器としての肉体はカラの者を産み出そうと年月を重ねてきた一族だった。カラという事は「  
」という事だ。彼らは自分達がどれほど危険な事をしているかも気付かず、遂には「  
」に通じる肉体を産み出してしまった。それが前者、両儀式。

そして一方は両儀式が事故に遭うまで常に両儀式と共に在って、そして両儀式の死に目、彼女を庇って己が消える事を選んだ。だがその意識は消える時に「  
」そのものに触れ、そして「  
」はその意識を両儀式のもう一つの人格などではなく完全な一個体として認識し、「  
」自らがヒトとしての体を与えた。だから当然その体は力に繋がっていて、そしてその繋がりには両儀式と比べてもより強い。それが後者、両儀織。

「——巫条霧絵と浅上藤乃を使つたのは……まあいい。  
おまえが直接動いては抑止力に気付かれる。あくまで間接的に、おまえの存在を匂わせないように式を破壊しなくてはならなかった。

そうだろう？

だというのに、おまえはなぜ式ではなく織を選んだ？ いったいそれで何を望んだ、アラヤ。織と式はすでに互いに独立し、もはや違う存在となっている。それなのにあえて手を出すなんて、ただシキに会いたかっただけなのか」

「——二年前は？<sup>かのじよ</sup>両儀式？を現す為だった。だが今は違う。結論は出たと言っただろう。織にあの肉体は不要だ。根源に通じる体は、私が貰い受ける」

堂々とした発言に、橙子はへ、と口を開けた。一瞬にして荒耶の言っている事を理解したが故に、彼女の意識は真っ白になったのだ。

「まさかおまえ、自分の脳髓を織の体に移すつもりじゃあるまいな……！？」

信じられない、という橙子の口振りに荒耶は答えない。語るまでもない、という眼差しに、橙子はなんて悪趣味なヤツだ、と呟いた。

「……だがまあ、おまえがその体のままだという事は織は無事という事だな。念の為に訊いておくが、織を返す意志はある？」

「欲しければ好きにしろ」

「はん。戦うしかないってワケか。ったく、私はもともと戦闘要員ではないんだがね。あいつの頼みを聞いたばかりにいい迷惑だ」

「私も念の為に訊いておこう。蒼崎。あいつとはアレの事か」

敵対の視線の中、そう問う荒耶宗蓮の顔に浮かんだ一瞬の動揺は、橙子でさえも気付かないほど小さなものだった。

橙子はさあ、と答えた。

「……そうか。アレが気付いたというのならば仕方がないな。当然、

協力する意思是——」

「ないよ」

「……だろうな。残念だ。私は、おまえを正しく評価していた。共に根源に至ろうと競い合った事もある。有り体にいえば、好ましくも思っていた」

かつん、と足音を立てて荒耶は前に進む。

一階に続く階段に近寄るように。

「あの学院で、おまえだけは群体ではなかった。私は魂の原型を。おまえは肉体の原型を目指した。私は、先に到達するのはおまえだと確信していた。」

だが——おまえは諦めた。なぜだ。今のおまえは、自身が魔術師だという事さえも捨てている。

何の為に学び、何の為に力をつけた。

何を救う為に、何を成しえる為の遍歴だ」

黒い魔術師が吼える。

静かに普段となんら変わりのない口調で、双眸だけが憤怒に燃えている。

それを受けとめて、橙子は答えた。

「別にたいした理由じゃないさ。理を重ねれば重ねるほど逆説を生み出す事に疲れたただけだ。私達は学べば学ぶほど遠ざかっていく。根源の渦とて同じだ。無知という素でなければ近付けないのに、無知のままでは認識できないが故に意味がない。」

——おまえと同じだよ。私は認め、おまえは認めなかった。た

だそれだけの、けれど決定的な違いなんだ」

哀しい韻を含んだ告白を、荒耶は眉一つ動かさずに受けとめた。

両者の視線が衝突する。

橙子は荒耶に言う。魔術師の本性、賢くなればなるほど愚かになつていく背理を。

荒耶は橙子に言う。魔術師の本質、学べば学ぶほど高みに達していく道理を。

「おまえは、墮落した」

短く、あらゆる感情を込めて、男は告げた。

「ならば何を指す。何の為に某処に在る」

「……そうだな。私がここにいる理由は、永に言われたからなんだ。織の事はあまり関心はない。驚きはしたけど、それだけだ。私が永に言われたのはね、人形が完全な人間になったのをみたいかい、つて事なんだ。人形師として、見ないわけにはいかないだろう？」

そう、橙子の理由は永にそう訊かれたからに他ならない。永がそう訊いていなければ、おそらくは永は一人でこのマンションに乗り込み、荒耶もアルバも、二人の魔術師は己の気付かぬうちに消されていた筈だ。だから橙子がここへ来たのは全く、永の気紛れによるものだったのだろう。

だが、だとしてもかまわない。彼女は、今の蒼崎橙子という生活を受け入れていた。その環境が幾つもの奇跡と偶然によって積み重ね

られた、二度とは構成されないものだと思っていた。たとえこの矛盾したマンシヨンのように初めから繰り返しても、今と寸分変わらない生活には成り得まい。

だから——乗せられる事があるなら、たまにはそれに乗ってみるのもありだろうと思っただけの話なのだ。

「……墮落か。たしかにそうだな。私は段々と弱くなっていく。それを墮落というのなら、私は墮落しているのだろう。

荒耶。私の理想の超越者というのはね、仙人なんだ。卓越した力と知識を持ちながら何もせず、ただ山奥に佇むのみ——。その在り方に、私はずっと憧れていた。けれど振り返ってみたらもう戻れなかった。中に物が詰まりすぎた私は、そこに到達できる日がない。ずっと、そうだと思っていた。

なあ荒耶。魔術師は生き急ぐ。なんの為だろう。自分一人の為ならば外界とは関わるまい。なのになぜ外界と関わる。なぜ外界に頼る。その力で何を成すというのか。神秘の最奥によって何かを救済しようというのか。なら魔術師になどならず王になればいいんだ。

おまえは人々を生き汚いと言うが、おまえ本人はそうやって生きる事ができまい。醜いと、無価値だと知りつつもそれを容認して生きていく事さえできない。自身が特別であろうとし、自身だけがこの老いていく世界を救うのだという誇りを持たなければとても存在してられない。

ああ、私だつてそうだったさ。だがそんな事に意味はないんだよ。

——認める荒耶。私達は誰よりも弱いから、魔術師なんていう超越者である事を選んだんだ」

魔術師は答えない。

彼は一步、また一步と階段へと近寄っていく。

「根源への道はすでに手に入れた。あと数歩で私の望みが叶う。邪魔をする者、これすべてを抑止力とみなす。蒼崎。おまえも、所詮は人間であつたという事だ」

「——人間でいいさ、結構な事だ」

ロビーの空気が張り詰めていく。

空間が凝固し、そのまま魔術師の殺意によって歪んでしまつのではないか、と危惧するほどの圧迫感。

その中で、彼女はかつての同胞を遠く眺めた。

長く別れていた数年を埋める為の、長い問答はここまでだ。

最後に——彼女は、蒼崎橙子という魔術師として荒耶宗蓮に問いただす。

「アラヤ、何を求める」

「真の叡智を」

「アラヤ、何処に求める」

「ただ、己が内にのみ」

迷う事なく男は答える。

足音は、階段の降り口で止まった。

互いの存在をこの世界から排除する為、両者は行動を開始した。

## 空の境界 二次創作 第二十七話

§§§§§

「なあ、永」

「？ なんだい、姉ちゃん」

辺り一面、鈍く光る靄のようなモノに包まれた空間で、織は永を呼んだ。

今、彼女らは荒耶宗蓮という魔術師の創った無限の闇の中にいる。そこは本来、ただただ、闇が広がる筈の空間。

「なにかさ、気を紛らわせられるコト、しろよ」

「……ずいぶん急に言うんだね、姉ちゃん。いったいどうしたんだい？ 何か悪い物でも食べたかな？」

「食べてない」

「おっと。そうだった。姉ちゃんここに丸一日くらい幽閉されてたんだもんね。食べている筈もないね。でも、それならまずは飯を食べるべきだと思うな、俺は」

だが現在、その闇が無限に広がる筈の空間は闇ではなく、鈍く光る靄のようなモノが埋め尽くしていた。

「いらない。それよりもさ、何かやれって。面白くても、くだらなくてもいい。気を紛らわせるコトならなんでもいいから」

そんな空間でまるで駄々っ子のように繰り返す織に、永はどうしたもんだろうね、と呟きながら困ったように首を傾げた。

うーん、と一頻り首を捻った後、永は再度訊く。

「やっぱりさ、らしくないんじゃない？ 何かあったかな？」

その質問に織は永に見られないような角度に顔を俯かせ、そしてぼそつと呟いた。

「柄にもない事を……ちょっとな」

呟きを聞いて、永はああ、とようやく得心がいったというふうに手を叩いて、言った。

「ああ。つまりこういう事？ 姉ちゃんはこんな暗い——まあ今は暗くないけど——空間に一人で居る時に、柄にもないような事を考えていたから、今はそれを忘れていたい、と」

「……そうだよ。悪いか？」

拗ねたように織は言う。

そんな姉の様子を見て、やっぱり姉ちゃんの良いねえ、と永が言った時、不意に永の着ている黒いコートの内からぴりり、という電子音が響いた。永は織に少し待ってね、と言いながら一つの小型端末を取り出す。

そのまま、織にはよく解らない発音で端末の向こうにいるらしい相手と二言三言言葉の様な音を発してやり取りを交わしたあと、小型端末を仕舞った永は織に振り返った。

「？世界？からだった。巴サンの体の限界まであと一日、だってさ。」

だからそれまで、少なくとも姉ちゃんが一人で大丈夫になるまでは、俺は姉ちゃんの傍にすることにするよ」

§§§§§

ばかり、という音と共に首の骨が折れた。

その後、ずるずると首を引き抜くと、首なしとなった死体を床に打ち棄てる。

打ち棄てたのは、男——荒耶宗蓮だった。

打ち棄てられている死体は、女——蒼崎橙子だった。

男と女は戦い、そして女の方が、この戦いにおいては敗れた。女は死ぬ際に男にある一つの呪いを残そうとしていたが、それは体の限界により途中で終わってしまっていた。

かつての同胞の生首を片手に持ち、魔術師は踵を返す。

やってきた場所——橙子の背後にあった、マンションの壁。戦いの最後、橙子が勝利を確信して離れたその壁こそ、荒耶宗蓮が現れた場所である。

橙子は自ら口にしていながら、その意味を最後まで理解していなかったのだ。

このマンションは荒耶宗蓮そのものである。壁も床も、建物として

の常識など荒耶本人には通用しない。

マンションのいかなる場所にも存在でき、いかなる空間をも手に取れる。ここは荒耶宗蓮という名の異界なのだ。彼はこの敷地の中でなら、どこへでも瞬時にして移動する事が出来る。

本体である黒い魔術師は、水に沈むかの如く、マンションの壁の中へと消えていった。

§§§§§

思い出すものは、ただ、一面の焼け野原のみ。

歩けど歩けど続く亡骸。

川べりに敷き詰められた砂利は石ではなく骨の欠片。風が運ぶ死臭は三千世界を満たそうと尽きる事がない。

争いの時代だった。荒耶は、彼がまだ世界を救うと——その理想を追い求めていた時代の事を思い出していた。

その頃、その時代。

彼は争いが起こると聞けば、その地に赴いた。

反乱が起こると聞けば、その村へと足を運んだ。

彼は間に合った事もあったが、同時に、間に合わなかった事もあつ

た。

そんな中で、彼は次第にひとつの結論へと、見えない、存在しない様な道を登っていった。

間に合っても、間に合わなくても。

結局は、同じ事なのだ。

彼は幾度も、安易にその結論に辿り着こうとすると、それを必死に否定した。同じ筈がない、たとえ最期は同じでも、過程が違えばそれは違うモノになる筈だ。

しかし、そんな彼が赴いた地を離れた時に残るものは常に無数の亡骸だった。確かに、到着した時には生きている者もいた。だがそれも死んでしまった。

怨嗟の声をあげて死んでいく男もいた。

ひもじいと笑いながら息絶えた子供もいた。

我が子の明日だけを祈って泣きながら死ぬ女もいた。

死は理不尽に襲いかかる。

積み重ねた善行も過ごしてきた人生も、その前には何の意味も持ち得ない。

ただどうしようもなく、逆らうだけ逆らって無様に死ぬだけが人間の生。

それでも彼らを救おうと全国を行脚した。

見たモノは果てのない焼け野原だけだった。

彼らは救えない。人間は救われない。宗教では、人の救済はありえない。

なぜなら。

人は救うものではなく、終わらせるものだから。

絶望を絶望で覆い、昨日の嘆きはさらに濃い今日の嘆きで薄れていく。繰り返しされる圧倒的な死の数に、終には彼もまた、自らの矮小さを悟った。

——人間<sup>ワタシ</sup>には、誰も救えない。

そして。

誰よりも人間を救おうとしたと自負していた彼は長い長い堂々巡りの末、結局、最初の結論へと至ってしまった。

救えぬのならせめて、その死を明確に記録しよう。

おまえの今までの人生と、その後に待っていたであろう人生を留めてやろう。

その苦しみを、私が生かし続けてやろう。

命の証とはいかに歓んだかではない。

命の意味とは、いかに苦しんだかなのだから。

そうして。

死の蒐集が、始まった。

§§§§§

蒸気の音と、水の泡立つ音の中で彼は目覚めた。

明かりのない闇の中、マンションの住人達に囲まれて荒耶宗蓮は静かに立ち上がる。少し、夢を見ていたようだ。

「この私が夢とはな。誰彼の未練を見る事はあつたが、自らの未練を目の当たりにしたのは初めてだ。それに、あの視点は……アレか」

一人、魔術師は語りだす。

いや、彼は一人ではなかった。その傍らには鳥籠大のガラスの容器がある。大きなガラスの容れ物の中には液体と、人間の首が入っていた。

頭だけとなったソレは、眠るように瞼を閉じてふわふわと浮いてい

た。

言うまでもなく、蒼崎橙子の首である。

しゅごー、という蒸気の音。

部屋の中央に置かれた鉄板だけが明るい。真つ赤に焼かれた鉄の板の明かりだけが、この魔術師の研究室を照らしあげる。

魔術師は、ただ時を待っていた。

両儀織と蒼崎橙子。両名によつて、今まで使用していた肉体は完全に破壊された。

今、こうして稼動している肉体は予備として用意していたものにすぎない。馴染むまでには時間がかかる。どの道すぐに両儀式の肉体に移るといえど、その為にうまく動かない体で事をし損じては取り返しがつかぬ。

荒耶はただ待つのみだ。もはや、彼を脅かすものは何処にも存在しない。

「アラヤ！」

唐突に、もう一人の魔術師が現れた。

赤いコートの魔術師は納得いかない、とばかりに荒耶へ詰め寄る。

「何をのんびりしているんだ。やる事はまだ残っているぞ、早急に手を打たなくてはいけないだろう！」

「……事は済んだ。蒼崎の工房に手出しは不要だ。臙条巴も同じである。アレは放っておいても何もできん。それは何よりおまえが承知している筈だ」

「……む。たしかに、そろそろ限界だろうがね。…… よろしい、外の事は問題にならないと認めよう。だがリョウギシキはどうする。アレは今意識を失っているだけだろう？ 目を覚ませばここから逃げ出そうとするのは明白だ。私はこれ以上余分な手間ヒマをかけたくないんだよ。逃げ出そうとする小娘を止めるのも、ましてや始終監視するなんて事も考えたくない」

「そちらの危惧もいらぬ。アレはマンションの一室に幽閉したのではない。現界と異界を繋げた無間の中に放り込んだのだ。この歪んだ異界を作り上げた第一の目的は、閉じられた輪を生み出すコト。いかなる手段、いかなる衝撃をもってしても無間の闇からは抜け出せない。いずれ両儀織が目覚めたとしても、アレにはどうする事もできぬ。監視などは不要だ」

変わらぬ苦悩の表情のまま語る荒耶に、赤い魔術師は不満げに口を閉ざした。

「……まあいいさ。もとよりリョウギシキに興味はない。私がおまえの誘いに乗ってやったのは、別の目的だ」

言って、赤い魔術師はちらりと視線を移した。テーブルに置かれた、橙子の首が入ったガラス壺へ。

「約束が違うぞ、アラヤ。君は言ったはずだ。アオザキを殺させてやる、と。あれは嘘か？」

「機会は譲った。だがおまえは失敗した。私が蒼崎を仕留めたのは詮方なき事だ」

「仕留めた？ 笑わせるな。そいつはまだ生きている。君ともある

う者が相手を生かしておくなんて、ずいぶんと甘くなったものじゃないか、ええ？」

赤い魔術師の追及に、ふむ、と荒耶は思案した。

たしかに、今の蒼崎橙子は完全に死んでいない。脳の機能は生きている。ただ喋れず、思考できないという状況だ。それを生きていると見做すのならば、確かに生きているのだろう。

「ツメをあやまるなよ、アラヤ。アオザキは傷んだ赤色とまで言われた雌狐だ。首だけになっていようが隙あらば反撃してくる。確実に殺しておくべきだ」

「——たわけ。口にしてはならない事を口にしたな、コルネリウス」

「なに？」

赤い魔術師は言い淀む。それを無視して、荒耶はガラス壘に手を伸ばした。

「持っていけ。確かにこれはおまえのモノだ。どう扱おうが私に文句はない」

荒耶はすんなりと橙子の首を赤い魔術師に譲った。

鳥籠大の壘を両手で持ち、赤い魔術師は戸惑ったかと思うと——にやり、と不気味な笑みをもらす。

「たしかに受け取った。これはもう私のモノだ。どう扱ってもかまわないのだな、アラヤ？」

「好きにしる。どの道おまえの運命は決まっている」

静かに、けれど重く語る荒耶の声も赤い魔術師には届かない。

彼は愉しげに笑いをかみ殺すと、満足そうな足取りでこの部屋から立ち去っていった。

そして赤い魔術師が去ったのを確認した荒耶宗蓮の脳裏には、先程の夢、その中に彼に言わせるならば？アレ？という存在がいたことなど、残ってはいなかった。

空の境界 二次創作 第二十七話（後書き）

大変遅くなりまして、そして短くて申し訳ない。  
ストライクウィッチーズが予想外に筆が進むものだから……

## 空の境界 二次創作 第二十八話

§§§§§

がちり、がちり、がちん、がちん。

……頭痛が激しくなる。体じゅうの痛みも増してきていて、そこかしこにボルトでも打ち付けられているみたいだった。

俺は痛みに耐えて、膝を抱えて丸まっていた。

歯がかちかちと震えて、意識がはつきりとしてくれない。ちくしゅうという単語を一人で繰り返しながら、意味もなく壁を睨んで存在している。

——あれから、どのくらいの時間が流れたのだろう。

両儀が荒耶にやられてから、俺は何もできずに立ち尽くしていた。荒耶は立ったまま死んでいた。当たり前だ。胸と首にナイフを刺され、首のナイフは根元まで刺さっているのだ。生きているほうがおかしい。

だが、荒耶は生き返ろうとしていた。首に刺さったナイフが少しずつ外側へと動いていく。筋肉が押し戻しているのだと分かるまで、俺はそれをぼんやりと眺めていた。ナイフはからん、と音をたてて床に落ちた。止まっていた荒耶の呼吸が再開する。

俺は——その、落ちたナイフの音でようやくモノを考えられるよ

うになった這いつくばったまま落ちたナイフに駆け寄ると、それを両手でしっかりと握る。見上げると、蘇ったばかりの荒耶の目が、俺を睨んでいた。

たぶん、俺は悲鳴をあげたと思う。荒耶は、とんでもなく怖かった。両儀の仇だというのに刃向かおうなんて思えもせず、俺は夢中で逃げ出した。

逃げられるとは思わなかったのに、とにかく逃げる事しかできなかった。

走って、走って、息が止まるぐらい走って、マンションから逃げ出した。そのまま乗ってきたバイクにまたがって、とにかくあの塔から離れようとした。

……そうして、気が付けばこんなところで震えている。

おそらく、もう主人の帰ってくる事のない両儀のアパート。今まで二人の姉弟が暮らしていた——そしてこれからは永ただ一人が暮らす事になるこの部屋で、俺はまた膝を抱えているだけの、くだらない人間だった。

「……ちくしょう」

もう何千回めの言葉が漏れる。

そんな事しかできない。

俺は、最低だ。両儀をおいて逃げ出してきた。目の前で両親の死体を見田つていうのに、罪の意識もない。自分が殺される悪夢を現実

として見てきたっていうのに、何の感慨も浮かばない。

少なくとも——アレが何なのかぐらいいは整理できるはずなのに、頭がうまく動いてくれない。

「……ちくしょう」

震えが止まらず、まだそんな事を言っただやがる。

大笑いだ。

俺は、今までなんだって一人でやってきたっていうのに。

今、一人じゃ何もできない。

両儀を助ける事も、できない。

「……ちく、しょう………！」

叫んでも頭は壊れたままだった。

両儀を助けるという事は、あの男と争うという事だ。俺は荒耶の姿を思い出すだけで全身が震えてしまって、とても両儀を助けられる状況じゃない。

がちり、がちり。

……時計の歯車が回るような、奇音。

左腕の肘が痛む。逃げる時に打ちつけたのだろっ、骨がひび割れて

いるように痛みが響く。

俺は、心身ともに限界だった。

頭痛も止まらず、関節の痛みも消えない。

息をする事さえうまくできなくて、苦しかった。

「……………」

泣いた。泣いていた。膝を抱えたまま、悔しくて泣いていた。自分が一人で、可哀相で、痛くて、泣いていた。

こうして一人、泣く事しかできない自分がニセモノだと思い知った。やっぱり俺は、ほかの連中と同じようにいたらだと生きるだけの偽物だ。両儀のように本物になりたかったけれど、持って生まれた属性は誤魔化せない。

本物……？

ああ、それでも一度、そういうつもりになれた時があった。

あれは——そう、つい最近だ。

俺は膝を抱えるのを止めて、和室へと視線を向けた。そこにいつもいた姉弟はいない。姉はやられ、弟は帰ってこない。俺は、あの弟に何と言っべきなのだろうか？ 机の近くには、スニーカーが一足投げ出されている。

……人殺しだと告げた俺を信じた姉弟。

……人殺しである俺と当たり前のように接した姉弟。

……俺を、助けてくれた姉弟。

……普段は家にいなくても、何かと世話を焼いてくれた姉弟。

……俺が初めて、一緒にいたいと、大切にしたいと思った相手。

——どうして忘れていたんだろう。

その気持ちは、偽りじゃない。

俺は本気で——あいつを守ってやりたいと思ったんだ。

「——俺は、何を」

守ろうと、守りたいと、思っていたん、だっけ。

「——」

よくわからない。けれど一度だって俺は、自分の命が一番大切ななんて思わなかった。何か別のコト。何か別の大切なコトがあつて、何かに助けてほしくて、あの日、自分の家を抜け出したのだ。

「——くそ、なんて、女々しい」

？オレの為に死ねる？？

そう問いかける両儀に、俺は答えたじゃないか。

何を怖れるものがあるっていうんだ。

やるべき事は決まっていたんだ。だから、誰から見ても格好悪いぐ  
らいのやせ我慢でも、俺は立ち上がらないといけない。

「……そうだったな。ああ、いいぜ両儀。臙条巴は、おまえの為に  
死んでやる」

呟いて、俺は両儀の残したナイフを強く握り締めた。

その時、目の前を黒い影が、通り過ぎた気がした。一瞬、目の錯覚  
かとも考えたが、玄関口に視線を投げると、そこには人影があった。  
人影は、見れば顔のつくりや色は永によく似ているが、それが永で  
ない事は分かった。どう言ったらいいのか、とにかく、そんな気が  
したのだ。

当然そんな警戒心を煽るような者がいきなり現れたのだから、俺は  
バツと身構える。

永だろうか。考えてみればあの子供は色々と思議な感じをした子

供だった。

だが、荒耶だろう。永に姿を似せた別の十二かを追っ手として遣わせて、油断を誘って消すつもりなのに違いない。

それだけの事を考えている一瞬の間に、ソレは俺のすぐ目の前まで迫っていた。とっさに身体を引こうとしたが、もう遅かった。だがソレは俺の目の前で立ったままだったかと思うと、今度はふらふらと、危なっかしげな足取りでドアの方向へと歩いていった。

「……なんだよ、おまえ」

返事など帰ってくるはずがないという事を思いながらも、訊かずにはおれなかった。

案の定、ソレは答える事なく、その代わりとでもいうかのように、まるでついて来いと言いたそうに空気のように存在感のない色の瞳で玄関先から声を発さずに語りかけてくる。

「くそっ」

結局俺は、その妙な存在についていく事にした。なぜだかは判然としないが、確実に、今の俺にとって重要な——絶対に行かなければならない場所へ行くという確信があったからだ。ならば——ついでゆかなくては。

糸はドアを通り抜けるようにしてこの部屋を出ていった。

「待てよ、おい！」

永モドキは、時々俺がついてくるのを確かめるように立ち止まって振り返る以外には、ただ、ゆつくりと、だが確実にどこかに目的地があるのであるとわかる、そんな雰囲気を出しながら歩いている。

俺は導かれるままについていきながら、ぼんやりとその後姿を見つめていた。

考えてみれば、あのモドキが小川マンションへ行くという確信をどうして持てたのか。ただ俺を誘い出して、そして荒耶が行く先には待ち構えているかもしれない。あるいは、ただ俺が幻覚を見ているだけなのかも。あれだけ衝撃的な体験をした後なんだから、それはおかしい事じゃないはずだ。

けれど、俺はそんな考えを否定した。目の前で漂っている永モドキは確かに存在していて、今この瞬間も俺を引っ張るようにして進んでいる。そう考える事で、俺は正気を保てそうな気がしていた。

モドキの後へついて電車に乗った。

目的のマンションとはまるっきり方角が違つ電車に乗って、見知らぬ駅につく。

その町は、都心の喧騒とはかけ離れた静かな住宅街だった。駅前にはロータリーなどなく、小さなコンビニが二つだけある、寂しい賑わいをしていた。

モドキは迷うような素振りも見せず（もつとも、見せたところで俺にそれが解ると思えないが）また動きだした。

数分も歩けば、周りには夕食を終えて静まり返った家々しかなかった。道は暗く、街灯の明かりだけが、頼りなげに行く手を照らしている。

狭い道、狭い歩道橋。ゴミ捨て場には野犬がホームレスのように陣取っていて、いかにも洗練されていない。

はじめは何か——そう、何かここに両儀を助け出すのに協力してくれる奴でもいて、そいつに会わせる為に来たのだろうか（少しは）思っただが、そうではないようだ。

そうと分かると、今度は段々と苛立ちが増してきた。モドキに付いていきながら思った。俺にはこんな所を散歩する余裕はない。

「おい、いい加減にしろ。どこに行くつもりなんだ」

糸の後について、その公園を素通りする。

夜の公園に人気はない。いや、そもそもこんな公園、昼間にだって人はいないだろう。小さな、ただ地面を平坦にしただけのなんでもない遊び場だ。

すべり台もジャングルジムもない。申し訳程度にある鉄棒は赤錆でいて、もう何年も磨かれていない。

永モドキはそこで、ある場所を指した。

「――え」

ふと、脳裏に何かよぎった。俺は……たしかに、この公園を知っている。

幼い頃、もう思い出す事も、思い出す必要もないくらい子供の頃、ここで遊んだ記憶があるのだ。

立ち尽くして公園を眺めていると、永もどきはかなり先のほうまで行ってしまった。

隣にある野原の、さらに隣の一軒家の前で立ち止まっている。俺は永もどきへと小走りに近寄った。

相変わらず、そのモドキは無言のまま、その家を見ていた。俺が近寄ると、そのまま俺へと視線を返す。空虚で、存在感が希薄なその目には、ひどく哀しそうな色が浮かんでいた。

俺は、その瞳に促されてさっきまでモドキが見ていたモノへと顔を向ける。

――くらり、とした。

……家がある。平屋の、小さな家だ。

門は半分以上が朽ち果て、庭は荒れ放題。伸びた雑草やらなにやらが家の壁まで侵食している。壁は所々が剥げ落ち、家というよりくたびれた老犬みたいだ。

人が住まなくなってからどれほど経っているのか。

すでにこれは家ではなく、ただの廃墟にすぎなかった。

「……………」

声が、でない。

俺は食い入るように廃墟を見つめて、知らず、泣いていた。

悲しくも悔しくもないのに、ただ、涙が溢れて止まらなかった。

俺はこんなもの知らない。見た事もない。

けど、魂が覚えている。臙条巴がきつと忘れ去らせない。

大人になった俺が捨て去ろうとも、巴はずっと、この場所を覚えていた。

——俺の、家——。

自分が八歳の頃まで住んでいた場所。とうの昔に忘れてしまった思い出の日々。

？ねえ、巴サン。巴サンの家ってさ、どこにあるんだろうね？

その質問に答えると、少年は仕方ないねともいうように首を振った。

？それじゃないよ。巴サンが、ほんとうに——帰りたい、そう心から思う家の事。わからないなら、いいよ？

……これの事か。

でも今更、こんな所に何があるっていうんだ。崩れて、壊れて、見る影もなくなつた廃墟に用なんて、ない。

家には辛い思い出ばかりだ。働かなくなつて俺に八つ当たりする親父は、家の中では暴君だった。母親は親父の言いなりになってハイハイとしか返事をしない木偶の坊。

満足な食事も暖かい服も、俺には与えられなかった。

俺にとって、両親なんてのはただの厄介事にすぎない。だから両親が死んでいる事より、俺には両親の事が大事なんだ。

大事の、筈なんだ。

なのにどうして——俺は、こんなにも泣いているんだろう。

両親の白骨を見た時もそうだった。何かが痺れて、動けなくなる。大切な事を忘れてしまつて、切なくなる。

「……なんだよ、これ」

呟いて、俺は廃墟の庭にわけ入った。

庭は狭い。一家三人が住むには丁度よかったのだろうが、今の俺はもう大人だ。ガキの頃より庭は狭苦しく感じられた。

……覚えている、この庭を。

幸せそうに笑って、俺の頭を撫でた逞しい父の腕を。

幸せそうに微笑んで、俺を見送っていた優しい母の姿を。

信じられない。そんな夢みたいなの幸福な日々が、俺にもあったのだろうか。

そんな当たり前の幸福を、俺は持っていたというのだろうか。

？——巴？

声がした。振り向くと、精悍な顔立ちの青年がいた。

？大事な物を預けるから、こっちに来なさい？

青年の足元に、小さな子供が走り寄っていく。

赤毛のくせつ毛をした、少女みたいな子供だった。

？お父さん、コレ、なに？？

？家の力ギだ。なくさずに持っていなさい。巴も男の子だからな、それでお母さんを守るんだぞ？

？カギで、まもるの？？

？そうだ。家のカギはね、家族を守る大切なものなんだ。きちんと戸締りができるし、お父さんやお母さんが留守でも大丈夫だろう？カギはな、家族の証なんだぞ？

……まだ幼い子供が、父の言葉をどれほど理解できただろう。

それでもがっちりとしたカギを握り締めて、子供は顔をあげて答えた。

？うん、わかった。大事にする。安心して、お父さん。僕がおうちをまもるよ。一人でも、ちゃんとやっていけるから――？

がくん、と足から力が抜けて、俺は庭に尻餅をついた。

立ち上がるうとしても、うまく立ち上がれない。

過去の思い出が鮮明に焼き付いてしまって、今の肉体をうまく動かせない。

……そうだった。俺にとって家の鍵っていうのは、家族を守る為のものだった。家族の証である宝物みたいな物だったんだ。

その家庭は壊れて、昔の面影さえ微塵もない。

俺はそれを呪って、この今が厳しすぎて、昔の事など忘れてしまった。

……昔。まだ家族が平和だった頃の記憶。優しい母。誇らしい父。我が子の成長を第一にしていた両親。それは本物だった。月日が経って、それが失われてしまったぐらいで偽物と決め付けた自分が馬鹿だった。

両親は、こんなにも優しくかったのに。

明日は、セカイこんなにも輝いて見えていたのに。

俺は今しか見ないで、両親に駄目な人間という評価を下して隔離したんだ。

救いを求める声を見捨て、俺は彼らに止めをさした。

物事は——永遠でなければいけないのか。

違う。永遠を望むほうがいけないんだ。両親の気持ちは本当だった。それを忘れて——俺は、本当の被害者を加害者にして逃げていた。

……周囲から迫害を受けて、働きたくても働けなかった父。

パート先で陰口を叩かれながら、それでも我慢して働いていた母。

あの二人にとって、俺だけが救いだった。

俺が仕事から帰ってくると、決まって母親が待っていた。母は何か言いたそうにしていたけれど、俺は両親の声なんて聞きたくもない、とばかりに背中を見せ続けた。苦しいのは俺だけじゃなかったのに。

母は俺以上に辛かった筈だ。

話し相手もおらず、親父に殴られ、黙々と働いていた母。

彼女の心が壊れたのは当たり前だ。俺は——俺がただの一回でも振り返っていれば、あんな事には、ならなかった。

「——なんて——馬鹿だ」

涙が止まらず、俺は顔を覆った。

両親を殺したのは夢のせいだとか、マンションのせいだとか、そんなのはどうでもいい。

悪いのは俺だ。被害者は母さんだったのに、俺はそれをさらに責めて、振り返る事さえしなかった。両親を殺したのは俺だ。俺がなにより、あの人達を助けなければいけなかったのに。

その償いを、今、しなくちゃいけない——。

座り込んだまま、庭の土をつよく握り締める。

涙は止まっていた。

泣いていたのは、そう。さっきのように悔しいから泣いていたんじゃない。

悲しいから——両親が死んでしまったという事実が重すぎるから、俺は涙を流したんだ。初めて……両親が死んでから半年も経つてからようやく流した、別れの儀式。

でもそれもここまで。いつまでも、こんな寄り道はしていられない。俺はようやく、スタートラインに戻ってきた。

——風は止んだし、合図も鳴った。

さあ、——そろそろ本気で走り始めなくちゃ——

……気が付くと、永のモドキはずっと俺の背後にいた。

何も言わずに、庭でうずくまっている俺を見ている。

俺はどうせ返事はないだろうとは思いつつ、悪態を吐いた。

「くそ、満足かよ」

するとどうした事が、アパートから今の今まで完全に無言を貫き通してきた永のモドキは、ここで初めて口を開いた。

「満足というより……そうだね、コレも必要な事のひとつだ、というコトになるのかな、おそらくは」

必要な事が。ああ、そうなのだろう。

あんな状態のまま荒耶達の所に向かったところで、俺は本当に大事な事が何なのかという事にも気が付かないまま、この世を去る事になっていたに違いない。そういう面では、たとえ結果が変わらないのだとしても、ここに来た事には確かに意味があった。

「あと、もう気付いているとは思っけど今現在ここにいる俺は永じやない。俺は、巴サンの新しい鍵として。』に創られたモノだから、そろそろ姿を元に戻さなくちゃいけない」

永のモドキがひどいノイズの混じった声でそう言つと、同時に白い靄のようなものに姿を隠された。そして靄が晴れた頃に残っていた物は、ひとつの鍵だった。

俺は、ついさっきまで自分の事を鍵だと言った少年が立っていた位置まで、なんとか立ち上がって、覚束ない足取りで近付くとその鍵を拾い上げた。鍵は重く、手に沈み込むような感触を伴ってそこに在った。

月光を受けて銀色に煌めいたそれは、俺がこれから行かなくてはいけない場所の方角を指し示している。

……今なら、あいつらの言いたかった事が分かるような気がする。

あの夜、二人はそれぞれに言った。

死んではイヤだと。

おまえの命なんていらないと。

そうだ。自分自身の存在というのは、他の何よりも大事なモノではなかったか。

人を欺いてまで守るものは、臙条巴というこの命。

——ああ、たぶんそれが一番純粹な真実。

二人は、ともに俺に同じ事を諭そうとしていたのだろう。

片方は哀れみで。片方は侮蔑で。

だったら、俺が両儀を助け出そうとするのは賭けなのだろうか？  
勝ち目のない？ それとも必ず勝てる？

……いや、そんな問いは、どうしようもなく愚かだ。

自分自身が最も大切、そうと知っている俺<sup>ヤッ</sup>が助け出そうとするのだ。  
最初から結果は決まっている。

——必ず助け出す。生きて、必ず。

俺は楽天家なのだろうか、そう思って鍵に視線を落とすと、鍵は——  
やはり銀色に煌めいていた。

ssssss

空の境界 二次創作 第二十八話（後書き）

御感想、御指摘宜しく願います。

空の境界 二次創作 第二十九話（前書き）

たぶん、これで良いと思った第二十九話。

更新、遅くなり申し訳ない。ですがまだ私は受験が終わっておら  
ので相変わらず更新速度は亀の如でございます。了承をば。

あと、感想を見ているとよく織が可愛いと目にしたので、たまには  
アグレッシブな織をと思って入れてみました。

## 空の境界 二次創作 第二十九話

§§§§§

俺の立てた計画は単純と言って良い程簡単なシロモノだった。

あのマンションは確かにあの得体の知れない男どもの根城かもしれないが、同時に、マンションの住人であつた俺にとっても庭のようなものでもある。

（たしか、地下駐車場は使われてはいなかったはず。なら……）

緊張からくる喉の渇きと、こめかみに滲む嫌な汗を、俺は無視した。

（地下から行けば、見つかる可能性は正面から行くよりも遥かに低い）

これは計画といえるほど大層なものでもないかもしれないし、自分でもその事を理解はしているつもりだ。けれど、今日の俺は自分でも嫌になるほどの行動力の塊みたいだった。あるいは、好きな女を自分で助けに行くという行為に酔っているのかもしれない。さあ、姫は城に捕らわれている、勇者よ、姫を助けに行くのだ——くそつ、現実がそんな物語の十分の一でも含んでいたら良いのに。そうしたら少なくとも、両儀織アイツを助けてやるぐらいの事はできるだろう。

助けた後、俺は殺されるかもしれないが、まあ良しさ。助けた後なら、悔いもない。

余分な思考を振り払う為に何度か首を振って俺は再びマンションへ

どうやって入るかという事に思考を切り替えた。

マンションの地下駐車場へ気付かれずに入るにはどうすれば良いか？  
——簡単だ、地下から行けば良い。ならばどうやって地下へ？  
考えようとしたところで、ふと視界の隅に、マンホールが写った。

（……あそこから、マンションの地下に入れるんじゃないか）

確か、地下駐車場にもマンホールはあった筈だ。俺の家——ああ、そうだ、俺の家だ、誰が何と言おうと、あれは——に程近いこのマンホールがあつた。魔窟の様なマンションへと続いている訳もないが、その発想は間違えてはいないはずだ。だとしたらあのマンションに近い——そうだな、一キロ程度の距離にあるマンションから下水道入りする事で地下駐車場へ着くだろう。

（だったら、工具がいるな……）

流石にもう何年も人が住んでいなかった家に工具なんて置いてある筈もないし、よしんばあったとしてもはや廃墟になった家と同様にそれも使い物にならなくなっているだろうから、どちらにしろ、工具はないのと同じだ。

（両儀の家に工具はあるのか？）

他に今の俺が無断で（一応許可は出ているが）入れるのは両儀の家だけだから、必然的に足はそちらへ向かおうとするのだが、はたとその事に思い至って足を止める。普通ならどう考えてもなさそうなのだが、少し、いや、かなり特殊な部類に属しているあの姉弟なら、ありそうな気がしないでもない。

（まあ、なんにせよ一度アイツの家に行けば判る事が…急がないとな）

§§§§§

両儀の家に行き、都合よく、本当に都合よく手に入れられた工具を押し込んだ革袋を持ち、俺は――

（そうだな…結局、逃げる訳にもいかない）

俺は、あの夜逃げ出したマンションへ続くマンホールの前に来ていた。

時刻は午後十一時半。人通りはすでない。

そんな所で俺は支度を調える。

工具の入った革袋に、両儀の残したナイフ。

本当ならあと一つか二つ、武器が欲しかったが、それは無い物ねだりだった。

マンホールを開けて、最後に。

最後に、一度だけ、ポケットに入っていた鍵を取り出した。

銀色に煌めく鍵。

——とおいむかし。

宝物だと思っていた、小さな小さな金属片。

あの少年は、鍵になった事で己に課された仕事を終えたのだろうか？

少しは俺も、自分に課された仕事をこなせるのだろうか？

そんな答えの出ない問いを俺は考えるのをやめて、走ることにした。  
考えるのはよそう、しっかりと前を見て、走ろう。それで得た結果  
には、きっと後悔しないから。

そうして走った。

立ち止まることは、しなかった。

ssssss

人気のない、機械が生活しているようなマンションの中を、階層の中央へ向かって両儀織は歩いていった。彼女とてこのような魔窟に好き好んでいる訳ではないから、自然といつもより少し足早にもなる。

「つたく、あいつは……」

マンションに施された無間牢獄より永に救出された時の言葉を思い出し、なんとなく、わざとらしいため息を漏らした。

「なにが『もうすぐ藤条サンが来るから、下の階に降りて行ってね』だ。オレは使い走りか？」

もう一度、今度は前のものよりもやや大きめのため息を漏らす。が。

「ふふっ」

一転、思わず、といった微笑みがこぼれてしまった。

「まあ、あいつはそういうヤツだからな。仕方ないか」

静かな、人どころか鼠の類すらいないマンションの階層に織の透き

通った声はよく響いた。

声と共に、足音も小さく響いて、一秒も待たずに抹殺されてゆく。

冷たい。空気ですえびつたりと役割が定められているようで、歩くたびに何かしらの外的影響を織に及ぼそうとするような力がある。異分子。そう、異分子なのだろう。荒耶宗蓮にとって、このマンションに存在するは自らのみ。それ以外はすべて異分子と成り果てる。

それでも、織はこのマンションから出てはいけないし、出る筈もなかった。織にとって最も大切な存在——永と、そして今またこの魔窟へと戻ってくる（永がそう言うのだから、たぶんそうなんだろう）——織条がこのマンションに存在する限りは。織には——無意識のうち——織条に、自分が最初にこんな所へ招き入れてしまったという罪悪感が僅かながらにもあったのかもしれない。

「でもまあ、面倒なのには違いない。たまには文明の利器に頼ろう」  
それにまだ本調子でもないし、そう呟きながら、エレベーターのボタンを押す。

大きな駆動音がして、五階からエレベーターが昇ってきた。

「——ち」

そこに居るモノを瞬時に理解し、小さな舌打ちをして、一步後ろへとさがる。武器はない。ナイフは、荒耶にやられた時に失ってしまった。

「おや、誰かと思えば、シキじゃないか。抜け出してしまったのか

い？ 行儀の悪い娘だねえ、少しは大人しくしてられないのかい」  
エレベーターに乗っていた赤いコートの青年が、笑いながらそう言った。

織は青年の手元に目を移すと、眉間に皺を寄せた。心底軽蔑したような眼差しで、冷たく青年をねめつける。

「いい出来だろう？ 私も気に入っているんだ、本当さ」  
「悪趣味だよ、おまえ」

愉しげに笑って、青年は片手に持ったそれを掲げる。

織が眉をひそめて見たソレ。

赤いコートの青年は、片手に、蒼崎橙子の首を持っていた。

橙子の生首は、とても良い出来だった。

生前と何ら変わる所のない色と質感。眠っているように瞼を閉じた素顔は、一枚の絵画のように美しい。

彼女は、寸分変わらず生前のままだった。

ただ一つ、首から下が失われているというだけで。

「おまえさ、新手の変態か？ 女の首を持ち歩くんなんて」

嫌悪感を隠そうともせず、青年の顔を睨みつけながら織は言った。

青年はその言葉に、ふむ、と考えるような素振りをする。

「変態、ね。まあ君がどう思おうとも勝手な事ではある。しかしそのような括りに囚われてしまうのはナンセンスとしか言い様がないな。残念だよ、シキ。私はね、てっきりあの少年がここまで来られると思っていたんだ。師の仇を討ちにね。」

だから少々残念ではあるけど、君で我慢するコトにしよう」

赤いコートの青年がエレベーターから出る。青年の笑顔はいびつで、作り物の笑顔が張り付いているようだった。

「見ての通り、蒼崎橙子死んでしまった。君を助ける為にね。でもまだ完全に死んでいるワケじゃないぜ。意識はある。外の音を聞いて、それがなんであるかを理解できるだけの機能は残っているんだ。慈悲だよ、慈悲。彼女には色々と手を焼かされたが、死者に対する礼は心得ているつもりだ。彼女にはもう少し、生きていてもらおうと思っている」

赤い、血のような真紅を着て、青年は織ににじり寄った。誘惑に耐えて動けない聖職者に這いよる、悪魔のような自然さで。

「何の為に、だって？ 簡単だよ、これだけじゃ私の気が晴れないだけさ。ただ殺すだけでは、私が長年受けてきた屈辱の償いにもなりはしない。彼女にはもっと、痛みというものを思い知ってもらわないとね。ああ、いやいや、それでは誤解してしまうか。あのね、痛みといってもこういう痛みを知ってほしいんじゃないんだ。だっ

てほら、首だけの相手に肉体の傷なんて瑣末な問題だと思うだろ？」

言って、青年は手にした生首に指をかけた。そのまま息絶えている彼女の両目に指を突き入れると、生々しい血とともに眼球を抉り出した。

滝のような涙が、血となって彼女の頬を流れていく。

血に塗れた眼球は、生前の彼女の瞳とはまったくの別物だ。そこにあるのは丸いだけの肉片にすぎない。

青年は、動かない織にそれを手渡した。

「ほら、こんなのでは彼女は呻き声ひとつ上げない！ でも安心してくれ、ちゃんと痛覚は残っている。アオザキは我慢強いから何も言わないけど、目を刳り貫かれるのはどんな感じなんだろうね。痛いかな痛いかな、泣いてしまうほど痛いのかな！ なあ、君はどう思う？」

織は答えない。自分が手渡された丸い肉片の所属していたモノが、永の知り合いだとは判っていた。だが、だからといって如何という訳でもなし、ただ、目の前の人間が妙に馴れ馴れしいのが気に障った。眉間の皺が深くなる。

赤いコートの青年は都合の良いように勘違いして、それを満足げに見つめている。

「はは——でもまあ、きつとたいした事のない痛みなんだろうね。それに正直言うと、私は痛がらせるよりも悔しがらせたいんだ。こうやって首だけになった事も、アオザキには堪え難い屈辱だろう。」

だが、私ならもうワンランク上の屈辱を用意できる。しかし、その為にはあの少年が必要だった。だがアラヤの研究の事もある、今は君で済ませるとしよう。少年はそのあと、私がどこまでも追いかけてゆくよ。だけど、君にも聞いておこうかな？　ねえ君。自分が手塩にかけたモノを壊されるというのは、どういう気持ちだかわかるかい？　それも目の前で、声を上げる事さえできない無力な自分自身を実感しながらだ。ふふ、私なら耐えられないな。壊してしまつた者を殺しても気が晴れないだろう。分かるかい？　私を無視し続けたこの女が、私を殺したいと思うほど憎むんだ。素敵だ、これ以上の復讐がどこにある！　直接の殺害はアラヤに横取りされたが、こればかりは譲る訳にはいかないよ」

赤いコートの青年は、眉一つ動かさない彼女の首に話しかけ――  
唐突に、血の涙を流す首を両手で掴んだ。

「アオザキに弟子がいると知った時、私は嬉しくてたまらなかった。あの時から、私は少年に目をかけていた。残念ながら今私の前にいるのは君だが、それでもどちらにしろ、大切なものを守れないというのには変わりない。恨むのなら私ではなく、ここへ来なかった少年を恨むのだね。安心したまえ、君を地獄に落とすような真似はしない。そんな事をしたら、アラヤに何をされるか分かったものではないからね。しかしね、――この首。こんな中でも、彼女は生きていると言つたらう？　けどね」

青年はにやりと笑うと、万力でもかけるように、両手で首を押し潰した。

リングか何かのように、蒼崎橙子だったモノが、碎けて、地面に落ちていく。

「ほら、これで死んだ」

階層全体に満ち溢れるばかりの勢いで、青年は笑いだす。

だが。

「——え？」

笑いは唐突に、青年自身が漏らした疑問を示す音とともに終わりを告げた。

青年は、自らの体に目をやった。脚、異常なし。腰、異常なし。胴、異常なし。右腕、異常なし。左腕、なし。——  
——なし？

「話が長い割に、中身がないんだよ、おまえ」

くだらない事を長々と聞かせやがって、そう言っつて、織は持っていたモノを脇へ捨てた。

ぐちゃっ、と音をたてて落ちた捨てられたモノは、ついさっきまで青年の一部だった物。

「——なっ！？ き、きさ、貴様アアッ！」

階層の中央で、赤いコートの青年の絶叫が響き渡った。

空の境界 二次創作 第二十九話（後書き）

P S ・ 今度織と永のショートストーリー的なものを時間がある時に書いてみようかなあ。あ、もちろん過度な期待は禁物ですよ？ ネ  
タは…… ホワイトデーあたりになるのかなあ。

空の境界 二次創作 第三十話

地下の下水は迷路のようだった。

明かりなど当然無く、汚水の流れる音だけが時間の経過を感じさせる。

それでも臙条巴は頭に入っているマンホールからマンションまでの道のと自分の勘を頼りにして、目的の位置に辿り着いた。天井へ通じる細い穴。点けていた懐中電灯を消して、壁に作られたはしごを上がっていく。

数メートルも上ると天井に突き当たった。天井となる蓋に覆われたマンホールの隙間にドライバーを差し入れ、大きくした隙間にスパナをねじ込む。後はそのまま、力任せに蓋を押し上げた。

がらん、と丸い鉄の蓋が床に転がる音がする。

地下駐車場の様子は、暗くてまるで判らない。

巴は工具の入った革袋を先に駐車場へ放り投げると、穴の縁を掴んで一気にはしごを上がりきった。

「……………」

駐車場に明かりはなく、巴は静かに周囲を見渡す。

……何か、おかしい気分だった。

忍び込んでいるというのに、見つかる事への危機感がまるでない。

地下駐車場がどれほどの広さなのか、巴には見当もつかない。明かりはなく、ただ蒸気の音だけが響いて、広いのか狭いのか判らないのだ。

「蒸気の、音……？」

呟いて、巴はくらくらと目眩を覚えた。

この暗闇。この空間の匂いを、巴は知っていた。

いや、知っていたのではない。今も、身近に感じている。

——俺は……………帰ってきた……………？

がたがたと体が震える。

かちかちという奇音が、脳髓の中を駆け回る。

臙条巴は、知らず、周囲を見渡した。

明かりはなく、部屋は暗い。

ここは、熱い。

ただ鉄板の焼ける音と、そのマグマみたいな光りだけが頼りだった。

周囲の壁に大きな壘が並んでいる。

床には細長いチューブが散らばっている。

誰もいない。ただ蒸気のと、水の泡立つ音だけを……

……いつも、彼は感じていた。

「――」

巴は声もあげず歩きだした。

体が重い。限界が近づきつつある。

部屋の中心にある鉄板は、火によって焼かれていた。定期的に鉄板の上には水が撒かれて、水は蒸気になって部屋の天井へと消えていく。

天井には幾重もの管がある。管は蒸気を吸い込むと、壁づたいに周囲の壘へと空気らしきものを送り込んでいた。

「――はは」

巴は、力ない足取りで壇へと近付く。

壇は無数にあつて、ちょうど人の頭ほどの大きさだった。

中には得体の知れない塊が入っていて、ちょうど実験室のホルマリ  
ン漬けのように、ふわふわと浮いていた。

どう見ても、人間の脳にしか見えなかった。

壇の下からはチューブが一本伸びていて、それは床を伝わってから  
壁に伸び、天井を突き抜いていた。たぶんマンションの各部屋に繋  
がっているんだろうな、と巴は他人事のように思う。

「なんだよ、これじゃあ安物のホラーじゃねえか」

笑って巴は壁づたいに歩きだす。

……考えてみるべきだった。毎日同じ生活を繰り返す人々は、昨  
日と同じ今日を繰り返している訳ではないのだ。それでは異常性が  
外部に露出する。彼らはあくまで、生きている人間として些細な変  
化のある、けれど大きな変化のない日常という螺旋を繰り返してい  
た。

その為には、人々を殺してはいけないのだ。思考し、肉体を動かす  
脳髓だけは生きていなくてはいけない。

物を考えるだけの物体を生きていると仮定するのは難しいけれど、  
とにかく、脳だけは機能していなければいけない。毎夜、死んでし  
まう肉体とは別の所で、夜に死ぬ為だけに日常を過ごす一個人とし  
て。

それは、地獄ではないのか。

死んで、生きて、死んで、生きて。ただ、それだけの閉じられた輪。逃げる事も止める事も、これを疑問に思う事もない、魂の牢獄。

……毎夜繰り返される終わりを、夢と思って目覚める一日。

臙条巴が、毎夜、悪夢として見ていた現実。

「……そっか。ああ、そういう事だよな」

呟いて、巴は壇の一つに指を触れさせた。

——聞こえない筈の声が聞こえる。

ある筈のない意識が、ただ一言を告げてくる。

？助けて？と壇は言った。

巴は笑う。

……だって、そうするしかない。

助けてって、何を？ 元の人間らしい姿に戻りたいのか。

それともこの繰り返しから解放されたいだけなのか。

でも、どっちにしたって無理な注文だ。

「——俺には、殺してやる事しか、できない」

あの子供なら、もしかしたらそんな力もあるのかもしれない。けど、俺にはそんな力なんてない。――神様じゃ、ないんだ。

だから笑う。悲しくて、悔しくて、滑稽で、笑ってやる事しかできない。

「……俺だってそうだ。助けてほしかった。ずっと助けてほしかったんだ。けど、何から助けてほしかったのか、ずっと分からなかった。……でもそうなんだ。分かっちゃいけなかった。だって、助ける方法なんてないんだから。どんなに意味をすげ替えたって。一番はじめの現象だけは、消す事ができないんだから」

謝りながら巴は探した。

きつとあるはずだ。なければおかしい。意味が合わない。

……荒耶という魔術師は、彼自らがマンションの住人を殺して脳髓を集めたわけではない。住人達が自ら殺しあった後に、その最後の一日を繰り返させる為に脳髓を回収したんだ。

だから――あるはずだ。自分が、膳条巴があの夜を繰り返した原因。半年前に起きてしまった現実が。

それは、程なくして発見できた。  
でも、それだけはあってほしくなかった。

「はは――」

慈しむように、巴はその壇に触れた。

鏡で見るように。彼は肉眼で、たったいま思考している自分自身を見つめていた。

チューブは二本ある。一本は天井へ。もう一本は途中で切られていた。まるで廃棄処分するかのように、ばっさりとこの日常から外されている――。

カタリ、と音がした。

昨日から傷んでいた自分の左腕トモエの肘。そこから、腕が床に落ちた音だった。

ぼたりぼたり、と血液らしきものが肘からこぼれる。

落ちた腕の断面には、骨とか筋肉らしきモノの他に、歯車みたいなモノが交ざっていた。

かち、かち、がち、かち。

あの夜――自分が何かも分からず、呆然と座り込んでいた時からしていた奇音。

殴られて、自分の名前を呼ばれて――ようやく自分が藤条巴というモノなのだと起動した時から響いていた歯車の音。いつも繰り返し夜の、殺されるのがイヤで、予定調和の前に母を殺す事で逃げ出した人形――

それが――俺だ。

「くく——あはは」

放心したように膝をついて、巴は笑う。

「ひひ、ひひひ、ひやはははは！」

気が狂った人間の声が、駐車場に充満する。

——嗤っちまう。

わかってた。初めから自分が偽物だってわかっていたけど、ホントウに作り物だったなんて。

頭は空っぽだ。真っ白で、何ひとつ思い浮かばない。

なのに。

何も考えられないのに、ただ嗤いだけが止まらなかった。

「……ひひ、ひひ、ひ……あはは——は」

本当におかしな話だ。

これだけの事が出来るのなら、何で——俺と、俺の家族はただの一度も悲劇を回避する事ができなかったんだろう。

何十回も何百回も繰り返して——それから逃げる為にやった事が母親を殺す事だなんて、救われない。

「——熱いよ、永。お前からもらった鍵が、熱い……」

俺は本物の藤条巴じゃなくて、作り物の巴だったから、起きてしまった結末を変える事ができなかったのか。偽者だから、荒耶の思い通りにしかならなかったのか。

偽物だから——あいつは俺には何もできないと知って、俺を逃がしただけなのか。

「——違う」

呟いて、巴は歩き出した。

かちり、かちり。——鍵が、熱い。

歯車の音がする。音はここにある人々の声に聞こえていた。助けると繰り返す音と、ポケットに入れていた鍵の引き止めるような熱さが、彼に狂いだす事を許してくれない。目を瞑って、現実から目を背ける事を許してくれない。

……いや——それとも。

巴は鉄板まで近寄ると、もげてしまった左腕の肘を、熱い鉄に押しつけた。

「■■■■■■■■■■——！！！！！！！！」

漏れる苦悶。

じゅう、という肉の焼ける音。

切断面からこぼれる血液は、傷口を焼灼する事で止まった。

巴は笑いながら、止血した左腕を鉄板から離す。

……それとも。彼は、もう、狂っているのかもしれない。

はあはあと荒い呼吸のまま、巴はエレベーターを探す。エレベーターは部屋の隅にあった。十階で止まったままのそれを、ボタン一つで呼びつける。

巴はナイフを持ってエレベーターに乗った。

一度だけ振り返る。蒸気のと水のと音に包まれた地下は、とても、静かだった。

死んだ事さえ気付かず、今も日常という輪を夢見ている脳髄という魂の安置所。

巴は思う。

永遠に変わらない日々と、永遠に終わらない日々。

そのどちらが螺旋といえるのだろう。このマンションは奇怪ではあるものの、永遠であるという事においては疑いようがない。死んでも——たとえ同じ毎日だとしても、朝になればやり直しができるのだから。

ただ、その輪の中にいる限り、螺旋がズレる事がない。

ほんの少し——ほんの少しだけこの輪が狂ってくれたのなら、い

つか、臙条巴が母に殺される事もなく、母を殺す事もない日常が生まれただろう。

だがそれも不可能な話か。ズレた輪は、二度と再び同じ所を廻りはない。死者は死者として終わる事を前提にしなければ、この日常は廻ってくれなかったのだ。

それでもと、巴は思ってしまった。

—— ああ。

永。お前の力なら——螺旋を矛盾させる事ができるのかな。

そんな事は不可能だよな。だってきっと——そんな事ができるのは神様だけだ。

自らの肉体の終わりが近い事を感じながら、臙条巴は十階のボタンを押した。

§§§§§

息を切らして、赤いコートの青年——コルネリウス・アルバは走り続けた。

時折何か、意味のない言葉を喚き散らしながら駄々をこねる赤ん坊になれたらどれだけいいだろう、と微かにそんな考えが頭を過ぎつても、魔術師としてのプライドにかけて、その様な救いに縋る訳にはいかなかった。

赤衣着物の女から逃れるように、時に後ろを振り返りながら、あまり速いとはいえない速度で走る。走って、外へ向かう為に、下の階へと下りていく。

「な、なんだって…この私が……！」

後ろから、足音はしない。だが、追ってきていないと考えるのは樂觀的に過ぎるだろうか。

失った左腕の止血は済ませてある。後は一階まで下りて、そこから外へと逃げる事さえできれば、それで終わる。そこまで辿り着けばいくらでも再起を図れる。その筈だ。

だというのに。

「はあ…大層な事を言っていた割に、結局は逃げるのかよ」

後ろからは、あの女の声が響いてくる。

アルバが荒耶から聞いた話では、両儀式という少女は魔術師を目指す原点『根源の渦』に繋がっている肉体を持つという話だった。他に少々普通よりも身体能力の高い事を除けば、ただの小娘だった筈

なのに。それなのに、おお。

エレベーターの所で一気に多量の血が抜けたからだろうか、重くなり、震える足を、アルバは押さえ付けなければならなかった。くそ、両腕があれば、両足を押さえ付ける事ができたのに。

ああ、とにかく、今は逃げなくてはいけない。しかし、やはりこの状態では長くは逃げられないだろうか。

ならば、罾を仕掛け、多少なりとも足止めをしなくては。

アルバは右手を足から離して、床に陣を描きはじめた。一見すると彼のこの判断は普通なら自殺行為なのかもしれない。描いた陣は極簡単な物で、だが、これが魔術師という生き物だった。

ちょうど陣が完成したところで――足音が響いた。

「――！」

最低でも逃げるふりはしなくては。でなければ獲物は、罾になど掛かってはくれないだろう。

「な――」

伸ばした手が、壁に触れる。けれどその手はそのまま滑り落ちて、彼は階段に倒れこんだ。

段差に伏したままアルバは自分の足を見た。

……腿の部分から、赤いものが流れだしている。赤いものの源泉に

は…。

背後から何か、小さい物を投げつけられたのだ。と彼は他人事のよう  
に把握した。自身が傷ついた、という実感はあるが、今はそれよ  
りも獲物が罠に掛かるかどうかの方に意識がいつている。

「おいおい、魔術師って奴は、どいつもこんなものなのか？ おま  
えが弱いのか、荒耶が例外なのか。ま、いいさ。これで最後だ。こ  
れで、もう二度と殺人はしない」

赤衣着物の女——織は、アルバの描いた陣に向けて真っ直ぐに歩  
いてくる。

アルバは何も言わず、階段に這いつくばったまま、織が陣の上に立  
つのを待った。

倒れたコップからこぼれていく水のように、赤い血は傷口から流れ  
出ていく。意識を保つ為、足に突き刺さったモノ——彼の失った  
左腕、その手に生えていた親指を傷口から抜き取ってそこに止血を  
施す。

「ああ、悪かったな。ナイフを無くしてしまったからさ、代わりに  
おまえの指で代用させてもらったんだ」

「ふ。先程君は私を悪趣味と言ったがね。君の方こそ、悪趣味なん  
じゃないのかい？」

「違うさ。オレはナイフがなかったから代用しただけだ。好きであ  
の女の首を持っていたんだろう、おまえは」

織は、階段に到着した。立っている場所は陣の真上。

階段に倒れ伏したアルバを見下ろすその瞳には、何の感情も窺えない。

「どちらにしろこれで終わりなんだ。あまり手間をかけさせるな」

織はアルバに手を伸ばす。彼の腕を奪った時とは違い、今度はゆっくりと、倒れこんだアルバの喉元を掴もうと身を屈める。

「……あまり手間をかけさせるなどは、随分な言い草だね。これでも私は、魔術師なのだよ！」

——影は消えよ。己が不視の手段をもって。闇ならば忘却せよ。己が不触の常識にたちかえれ。

問う事はあたわじ。我が解答は明白なり！ この手は光。この手こそが全てと知れ——」

アルバは、かつて時計塔で学んだ魔術師としての意地を見せた。詠唱の発音は橙子と戦った時よりも遥かに速く、一秒ほどしか要していない。それでいて最高に自身の精神を高揚させる事が出来てもあった。

詠唱と同時にアルバの描いた陣が光りだし、一瞬だけそれに気をとられた織は、瞬時に次の行動を決める事ができなかった。

そしてそれは、アルバにとってこの上ないチャンスともなる。

「我を存かすは万物の理。全ての前に、汝。ここに、敗北は必定なり……！」

アルバの右腕が突き出される。織がまだ行動を決定しないうちに、かすかに大気が震動し——陣の内側だけが燃え上がった。

ちょうど陣の中央に立っていた織にとってそこは炎でできた牢獄の筈だった。いや、火山地帯の間歇泉のように噴出し、陣の内側だけの酸素を奪い尽くして消えた炎は、織の肉体だけをこの世界から焼滅させた。その筈だった。

だが、アルバは見た。

摂氏にして千度を優に超える魔力の炎を受けて、平然としているリヨウギシキの姿を。

「——有り得ん」

碧眼が織を凝視する。

織は表情を変えずに、アルバの首をその手で掴んだ。掴んだその手からは、とてもあの炎を浴びたとは思えないほど柔らかい感触がする。

織が何か言っていた。

「……立派だ。なんだ、やればできるじゃないか。ただ逃げ回ってただけじゃないんだな、おまえ」

あれはアオザキの使い魔を焼いた炎よりも強力だったはずなのに。それを平然と受け流しておいてなにが立派なものか。

「ぐっ！ …ふ、何が立派だ、この化け物め」

喉を掴まれながら喋るのは少々難しいが、これで最期なのだ、気に

する必要もあるまい、そう結論付けてアルバは口を開いた。

「それで、どうするつもりだい？ このまま私をさくつと殺すのかい？ それとも今の口振りからすると、逃がしてくれたりするのかな」

あえておどけたようなアルバの問いに、織はほんの少しだけ顔に笑みを浮かべながら答えた。

「逃がすっていう選択肢も、まああるにはある。だけどこれはケジメだからさ。おまえが死ななくちゃ、他の誰かが死ぬのさ」

そう言つて首を掴む手に力を入れようとする織に向かって、最期にアルバはこう言った。

「できれば、苦しまないように一瞬で頼むよ」

「……言われなくてもやるさ」

ごきん、という音が織の手から鳴ると同時に、赤いコートの青年の体は糸を切られた操り人形のように、力なく項垂れた。

それは世界にとっては、ただ、日々死んでいく人間達にまた一人の人間が追加されたという以外の何ものの意味も持たなかった。

空の境界 二次創作 第三十一話

ssssss

「まったく、やってくれたな、織」

「おまえが遅いのが悪いんだ。アオザキ」

やれやれ、といった調子の橙子の言葉に織は悪びれる風もなくそう返した。彼女の目の前には、先程彼女自身が止めをさした赤いコートの青年——アルバの骸がある。

「この男はアオザキにやるよ。どうせこいつが目的で、ここに来たんだろう?」

「よしてくれ。いくらなんでも私には死体を蹴るような趣味はないよ」

「へえ」

橙子はロビーにまでやってくると、よいしょ、と鞆を床に置いた。……それだけが昨日とは違う。昨日の鞆はアタッシュケースなみの大きさだったが、今彼女が持ってきた鞆は遥かに大きい。旅行にでも出かけるような、人一人は押し込めるほどの大きい鞆だった。

「——急いだつもりだったが、間に合わなかったか。こいつは、私が殺そうと思っていたのにな」

「殺されたから?」

「復讐の為に殺すような事はしないさ。……しかし、君が永の言っていた織か? なんだ、まるっきり女じゃないか。式の体には男性人格である? 織? と、女性人格である? 式? の二つがあったという

のに、君の体は式と同一のように見受けられる」

「慣れてるんだ。こっちの体のほうが使いやすい」

織の答えに、そうか、と漏らして橙子はポケットから煙草を取り出す。そのまま火をつけて紫煙を燻らせると、織が非難するような調子で言った。

「あまり近くで煙草を吸うなよ。臭いがうつる」

「なんだ？ 来てみれば私が殺す筈だった男は死に、さらに助けるはずだった君もこうして脱出に成功している。一回殺された拳句に私がここに来る用件は着いた時には全てが終了していたんだぞ？

煙草ぐらい吸ったって罰は当たるまい」

「オレが当ててもいいんだぜ？」

言って、いつの間に近付いたのか、織は橙子が啜えていた煙草を奪い取ると、それを踏みつけて火を消した。

「酷い奴だな。それは私の工房にもう殆ど残っていないんだぞ」

橙子は煙草を取られた事に一瞬驚いた表情をしたが、次の瞬間には煙草を取られた事など気付きもしなかったように言葉を続けた。

「しかし君な、臭いが気になるというのなら、いつまでもその死体を放置しておくのも問題だとは思わないか？ 今は冬だが、肉は腐るぞ」

「ああ」

「なら」

別に喰ってしまっても構わないな、とだけ言うと橙子は、足元にある鞆を軽く蹴った。

ばたん、と音がした。

橙子の足元の鞆が開いた音である。

大きな鞆の中身は、それこそ闇だ。電灯の光も届かない固体としての闇が、鞆の中につまっている。

その中に、二つ、ある。

「協会時代からの決まりでね。私を傷んだ赤色と呼んだ者は、例外なくブチ殺している。もっとも、今回は殺すのは取られたが」

鞆の中には、光る、

——二つの、目が。

「さつきは死体を騁る趣味はないって言ったくせに」  
「なに、これも報いさ」

その鞆というには大き過ぎる鞆は、何かに似ていた。実にシンプルに。

鞆というには大き過ぎる立方体。それは神話に出てくる、魔物を封じ込めた匣そのものの姿だ。

匣から現れた得体の知れない黒い生き物は茨のような触手を伸ばして、コルネリウス・アルバの骸を捉えた。

そのまま匣に引き込まれ、足から何千という小さな口に租借されていく。ばりばりと食べられていく。消滅の直前、首だけになった彼は超然と見下ろす人形師と目が合った。すでに死に、もはや光すらないその目からでも、織には彼が最期に思考したであろう事が分かる気がした。

そう、もし、このおぞましい死に方をアルバがしたのなら、彼はきつとこう思っただろう。

……自分は失敗した。

こんな怪物どもと、関わるべきではなかったのだ——と。

§§§§§

エレベーターが上がっていく。

誰もいない小さな匣ハコの中で、臙条巴は壁にもたれ掛かって虚空を睨んでいた。

巴の呼吸は荒い。

独りでもげてしまった彼の片腕。血を止める為に傷口を焼いた事により、神経は気が狂わんばかりの痛みを告げ、頭の中は遠ざけて

いた真実を目のあたりにし、支離滅裂になって自分が何を思っているのかもあやふやになっている。

心も体も限界を突破しようとしている事ぐらいしか、巴は考えつかない。

上がっていく昇降機の中、呼吸だけは整えようと深呼吸を繰り返す。今日に限って使い慣れたはずのエレベーターは遅く感じられた。じれったくなるほどゆっくりと、エレベーターは十階を目指していく。

途中——巴はポケットから鍵を取り出した。

鍵には、脳髄を見た時に感じた熱さはない。

あの熱さは警告か何かだったのだろうか。これから、無謀としかいえない行動を実行に移そうとする人形への、せめてもの警告。

あいつならやりそうな事だな、と巴はぼんやりと考えながら、鍵をポケットに入れ、残された右腕でしっかりとナイフを握り締めた。

エレベーターが止まる。

十階に着いたのだ。

両側に開いていく扉を抜けて、巴はロビーに出た。

目の前には西棟……いや、東棟に続く通路があり、死角になっているエレベーターの裏側には西棟へ続く通路がある。

巴は明かりのない、本当の死体が放置されている西棟へと向かう。

エレベーターの裏側にまわって、マンションの外周をぐるりと囲む廊下に出る。

時刻はじき、夜の十二時になろうとしていた。

廊下から見下ろす夜景は静かで、寂しい。マンションの周囲にあるのは同じ形をしたマンションだけだ。マンションとマンションの間にはアスファルトの道路と、緑の庭が点々と広がっている。

その様は、夜景というよりは緑に囲まれた墓標の群れを思わせた。

ふう、と深く息を吐く。

彼の意識は眼下の夜景に向けられていたが、たった今そこに現れた人物を確かに感じていた。

大きく呼吸をして、乱れていた意識を一つに纏める。

巴はナイフを握って、なだらかに半円を描く廊下へと振り向いた。

明かりのない闇、月明かりさえ微弱な渡り廊下。

巴から二部屋ほど離れたその場所に、黒い外套の姿があった。

影だけでも判る、がっしりとした骨格と長身。

永遠に消える事はないであろう、貌に刻まれた苦悩の色。

魔術師、荒耶宗蓮がそこにいる――。

§§§§§

魔術師と対峙した瞬間、臙条巴は凍りついた。

あれほど乱れていた呼吸も、あれほど痛かった肉体も、まるで終わってしまったかのように静かになった。

目の前で佇む相手がたまらなく恐ろしくて、意識さえも凍っていく。何も、できない。

――だが。彼は、それをむしろありがたかった。先程までは千々に乱れていた心が、何の濁りもなく平坦になっていくのだから。

「アラヤ」

荒耶という絶対者を前にして、巴は完全に自由を失っていた。なのに、何も出来ない筈なのに、彼は言葉をあげた。

言葉を交わすという事は、対等であるという証でもある。今の彼は以前のように、荒耶宗連を畏れるだけのモノではなかった。

その事実、魔術師は面持ちをさらに厳しく曇らせる。

「なぜ戻ってきた」

魔術師は重い声で問うた。

巴は答えられず、ただ、荒耶を見つめ続ける。答える余裕などない。気力を振り絞っていないければ、この魔術師と正面から見つめ合う事などできないのだから。

「ここにお前の居場所はない。臙条巴の代わりは用意されている。おまえはこの螺旋からはみ出したものだ。再び戻る意味はない」

およそ光というものがない目で、魔術師は問いたです。

……たしかに自分はここから逃げ出した、と巴は思う。

けれど戻ってきた。何の為に？　そう、一度は両儀に連れられてだ。そして今は、きっと――

「両儀織を救う為か。愚かな。おまえのその心は、臙条巴のもではない。まだ気がつかぬとは、所詮は人形。この螺旋から外れれば正常には機能せぬか」

「え……？」

「確かにおまえはこの螺旋から抜け出した。だがその後、自害する事も判っていた。家族によって死亡するものは、家族を因として死ぬものだからだ。おまえは自分の家から抜け出し、自暴していた。あのまま捨ておけば死んでいただろう。だが、それでは外界におまえという異常が漏れる。それならば――私は、おまえに違った役割を与える事で生かす事にした。今夜も死亡したであろう本来の臙条巴とは別の臙条巴として。その役割――解らぬか？」

嘘だ、と巴は叫んだ。

けれどそれは声にならず、彼は、ただ立ち尽くしているだけだった。

魔術師は表情を変えない。目玉だけが嘲笑うように歪んでいる。

「そうだ。これは私にとっては重要性の低い賭けだった。いずれ誘い込むつもりだったが、事は神秘のままで行うのが理想である。私を知らぬおまえ、私とは何ら関連をもたぬ臙条巴が自分から両儀織を連れてくるのなら、それに越した事はない。アテになどしていなかったが、おまえは見事に引きあてた。その報酬として逃がしてやったというのに、もう一度戻ってくるとはな。思い上がりも甚だしい。おまえは自分の意志で両儀織に惹かれたのではない。私が逃げ出したおまえに付け加えた事実はただ一つ。それは『両儀織に関心を持つ』、という無意識下の刷り込みだ」

臙条巴の足元から力が抜けていく。

荒耶の言う事には、反論する術がない。

だってそうだ。今まで他人を本気で好きになった事がない自分が、どうして両儀にだけ、あれほどの関心を持ったのだろうか？ 初めて会った時から、何かが自分に命じていたのだ。あの少女を観察しろ、あの少女と関わりを持って、と。

「理解したか。おまえは何一つ自らの意志で決めたのではない。ただ私の思惑通りに両儀織を連れて来たのみよ。そも、おまえの肉体にあるのは我が世界<sup>ラセン</sup>で行われる一日の記憶だけだ。この一日より以前の記憶も、以後の記憶も存在しない。

おまえの意志は幻想より生じ幻想によって活かされていたにすぎぬ。この世界で最期を迎えた臙条巴は、既にここでしか生きられない。故に、おまえには何もできない。何もできないからこそ、両儀

を呼び出す役として遊ばせた。自らの意志で何も出来ない者ならば、  
——何をしても支障には成り得ぬであろう」

魔術師の発言は、それこそ呪文だった。

巴は急速に思い出す。自分が作られたもの、このマンションで起きた一日分の記憶だけを持って、それを頼りに過去と未来を幻想していただけに過ぎない事を。

両儀織への思いも、死んでしまった両親への思いも、全て——今の自分から捏造されたものに過ぎない。臙条巴という、生まれてから今までを過ごした人間が思ったものではなく。

ただ、その芝居をしていた一日だけの自分が思った、年月のない薄すぎる思いなのだ。

……はたして、それは本物なのだろうか。

自分は初めからあり得ない者だった。この螺旋からも外れた自分には、どこにも居場所というものがない。

「作り物のおまえは、所詮、まがい物でしか有り得ないのだ。引導を渡してやる価値もない。どこへなりと消え去るがよい」

語るべき事を語り、魔術師はこの臙条巴から一切の関心を無くした。

荒耶は巴から目を逸らす。

けれど——全ての意義を破壊された筈の彼は、笑みさえ浮かべて魔術師を見つめていた。

「……なんだ、荒耶<sup>オマエ</sup>、たいした事ないじゃないか」

それは強がりだったけれど——魔術師の鋼の心に罅を入れるぐらい、このうえなく潔い強がりだった。

「……おまえみたいなのを前にして、やっとわかった。俺は今までおまえみたいに弱い部分を認められなかったから、ずっと間違えちまっただ。

けどな、物事に偽物なんてない。本物も偽物も、結局はあとからくるものにすぎないじゃないか。一日だけだっていうけど——この体は臙条巴である以上、きちんとした過去があった臙条巴なんだ。俺には過去がないけど、こんなにも強い思いが巴にはある。なら、それでいいんだよ」

ぎり、と歯を噛み締める音がした。それは彼が鳴らした力、立ち向かおうとする強い意志。

「……俺は、両儀が本当に好きだった。理由なんてしらない。あいっと過ごせて、何も残せなかったけど、それだけで楽しかった。だから——きっかけをくれたのがおまえだっていうなら、感謝ぐらいはしてやるさ」

今、本当の意味で魔術師と対峙して、巴はちえ、と舌を鳴らした。

……好きだった、か。今でもきつと惹かれてる。ずっと、ずっとこ

の先もあいつを思えば荒んだ心が癒されるだろう。

こういうのを愛しているというのかな、と思つて、巴は舌を鳴らしたのだ。

だつて——それでも、こんなにも織を思っているのに、今はあいつが一番じゃないんだから。

ここに來た理由は両儀を助けるためじゃない。

鍵の少年に連れられて、昔の家を見た時に思い出した。自分が知るはずのない過去、臙条巴という魂が忘れ去らない日々の事を。

ここにきた理由は、償いのため。臙条巴が当然のようにしなくてはいけない事を、俺はやらなくちゃいけない——。

「わりいな、両儀。俺は、おまえのために死んでやれねえわ。俺はさ——俺のために、この命を懸けなくちゃいけねえみてえだ」

呟いて、謝つて。

巴は、両儀織という少女の記憶——いや、両儀という姉弟の記憶を、思考から消去した。

「俺は偽物か、アラヤ」

強い意思が込められた言葉に、魔術師は眉を怒らせる。

「——すでに、語るまでもない」

あきらかに侮蔑の念をこめて、魔術師は返答した。

巴はそうかもな、と素直に頷く。

そこに迷いはない。

彼は、明らかに魔術師と対等の存在としてそこにいた。

「……人形風情が悟ったつもりか。そんなものは魔境にすぎぬ。明鏡を得ようと止水に至ろうと、所詮その身が作り物である事実は変わりはない」

「ああ。——それでも、『この心』は本物なんだよ」

静かな言葉は、風に乗って夜に響いた。

魔術師は片手を上げる。目前に片手を突き出すのその姿勢は、荒耶宗連という男が相手を殲滅するべきものと認めたものだ。

巴はそれを見て、かちかりと鳴る歯を必死に押さえ付けた。

……きつと殺される、と巴は思った。

それでも、あの相手に一矢報いなくてはいけない。死ぬ為じゃなくて、とにかく、臙条巴は荒耶宗連に報復をしなくてはいけないのだ。今までないがしろにしていた両親の為に。

今も、この世界で死に続けている誰かの為に。

これは玉碎覚悟の特攻なんかじゃない。死にたくはないけれど、そ

れでも、死ぬとわかっていてもやらなくちゃいけない事も、ある。

——俺は巴<sup>オレ</sup>として、走りだすのだと決めたんだから。

……そう、それがどんなに辛いものでも。

回る時計のように。めぐる季節のように。いつまでも、同じ場所に留まってはられない。

思いが、ちゃんとここにあるから。

それはこの体が見ていた夢だったのか。それとも俺が見ていた夢だったのか。……この体は偽物だけど。臙条巴が持っていた意志。臙条巴に宿っていた意志は本物だ。

その為に——

「俺は——荒耶、おまえを殺す」

ナイフを握りしめ、誰の為でもなく、臙条巴は走りだした。

ssssss

臙条巴の狙いはただ一つ、荒耶宗連の中心だった。

以前織が迷うことなく突き刺した、魔術師の胸の中心。そこにナイフを突き刺せれば、あるいはこの怪物を倒せるかもしれない。

そう信じて巴は走る。

魔術師との距離はあの時の織と同じ、六メートルほど。この距離を全速で走り抜ける。

床を蹴る足に全神経をかたむけて、何度も何度も校庭で繰り返したスプリントよりもっと迅く、魔術師へと肉薄する。

魔術師の周囲に円形の線が浮かび上がる。

臙条巴を侮っている為か、線は一本しか浮かばなかった。織の時のように三重の線ではない。

線は魔術師の目前、一メートルほどの所に布かれていた。

臙条巴は、それを避ける術を知らない。

正面から立ち向かった。

体がかくん、と止まる。地面を蹴る爪先に、力そのものが入らない。

本当に——何もできない。

魔術師は苦悩に満ちた貌のまま、一步前進した。

この結果は判りきっていた、と言いたげな緩慢さで、動けない臙条巴へと近寄っていく。

前に突き出した腕が、ゆつくりと、臙条巴の頭を掴もつと伸ばされた。

やっぱりだめか、と臙条巴は目を瞑る。

けれど――視界が闇になった時、記憶が逆流した。本来なら臙条巴が体験しえなかったこの一ヶ月ばかりの記憶、その体がトモエとしてここに居た確かなものが、炸裂した。

「ここに――」

臙条巴の体が力を込める。

地面に張りついた足に満身の気迫を込める。

足が千切れてもかまわない、と彼は思った。

このままでは終われない。

自分は、無価値ではないんだから。

「居たから――！」

弾けた。

片足が、音をたてて壊れた。

そのおかげで——前のめりに崩れ落ちながら、臙条巴は前に進んだ。

伸ばされた魔術師の腕をかい潜り、荒耶の無防備な胸が手の届く距離になる。

トモエは叫ぶ。

「——そりゃあ、うちの家族はろくな連中じゃなかった。でも、こんなふう<sup>に</sup>に殺されるほど、悪いヤツじゃなかった。こんなふう<sup>に</sup>に死に<sup>じ</sup>まうほど、罪深くはなかったんだ……！」

声は力になって、彼の腕を迸らせた。

ナイフが走る。

銀の軌跡を残して、刃は、深々と魔術師の胸に突き刺さった。

けれど、ただそれだけの話だった。

「戯け」

声と共に魔術師の屈強な腕が伸びる。

臙条巴は頭を、がっしりと鷲掴みにされた。

「——両儀の力は人と、ましてや人形などと同等ではあり得ぬ。上位種だからこそ刃が通る。おまえがいくら足掻こうが、所詮は作り物の人形に荒耶は殺せぬ」

めきり、と魔術師の腕に力がこもる。

臙条巴の腕から、ナイフがかりりと床に落ちた。

「私がおまえを選んだ理由を、まだ語っていなかったな」

臙条巴は答えない。

魔術師の腕に把握された時から、生きる意志というものが根元から奪い尽くされてしまっている。

「よいか。人間には存在の元となった現象がある。前世からの業ではなく、臙条巴という存在となった因。その混沌の衝動を我々は？起源？と呼ぶ。

おまえが母を殺し、自らに絶望した時に私が救ったのは、おまえの起源が実に明確だったからだ」

臙条巴は答えない。

魔術師は彼の体を高々と持ち上げると、あまりにも冷たい声でこう告げた。

「最後に教えよう。おまえは何も成し得ない。

なぜなら——おまえの起源は？無価値？だからだ」

魔術師の腕が振るわれる。

臙条巴という形をした肉体は、その一振りによって完全に消滅した

——筈だった。

「――む」

魔術師は、予想だにしていなかったモノを視界に収めて立ち止まると、いや、立ち止まってしまった。

「や。こんばんは、とでも言えばいいのかな、荒耶サン」

くつくつ、と噛み殺すような笑い方で、ソレは笑っている。

魔術師――荒耶宗蓮は今夜、最も会いたくなかった相手を目の前にして、その貌に刻まれた苦悩の色をより一層、深いものとした。

いつもと何ら変わらない笑みを零して、両儀永がそこに在る。

§§§§§

「あーあ。やってくれるよ。巴サンみたいな存在は貴重だっていうのにさ」

それに姉ちゃんも困ったもんだよ、とどこか困惑したような声音で、両儀永はそう言った。

魔術師は、今夜もつとも会いたくなかった相手を目前にして、その貌に刻まれた苦悩の色をより一層、深いものとした。

「貴様は……そうか、すでに両儀織の事は」

「ああ。勿論、知っているさ。いったい俺を何だと思っているんだ

い？」

両儀永はそれをさも当然とでもいうかのように言って、彼の横に浮いている臙条巴だった残骸に、手を這わせる。永は、臙条巴だった残骸の中から銀色の鍵を取り出すと、それを残骸の中心部へと埋め込んだ。

「いや、聞のは無意味か。だって賣方<sup>アラヤ</sup>は——」

銀の鍵を埋め込まれた残骸は、まるで時計が逆回りしているように動きだす。

異常だった。それは本来、荒耶という男が創り出した異界には居ない筈の存在。

何千何万何億——いや、無限に連なる世界の中でも、ここ以外にはソレは存在していない。

「——ただ、『』（オレ）に至ろうとする事だけに総てを注いだのだからね」

両儀永は修復されていく臙条巴を一瞥すると、魔術師に向かって一歩踏み出した。

「……やはり、私には才能がなかったとみえる」

「はは、そうだね。荒耶サンは『 』 行きのチケットは持っていないよ」

両儀永の言葉には魔術師は瞳を細める。

背骨から蜘蛛が伝うような、さわさわと内蔵に滲みいる寒気がある。

それが吐き気というものだと、彼は数百年ぶりに思い出した。

「そうか」

両儀織を使う、そう決めた瞬間から、いずれ両儀永が荒耶の所に来る事は判っていた。元よりその程度の事、荒耶とて承知の上なのだ。今更臆したりなどしない。

「なんだ、つまらない反応だなあ。あの赤い才兄サンなら、もう少しうたえたりできるから、弄りがいもあっただろうに」

でもいいんだ、と永は言った。

ぶちん、とどこかで線が切れるような音がする。

「な——に？」

魔術師は、自身の肉体の変調を感じ取った。

体が冷え、指先が痺れてくる。

額には発汗。

内臓の一部が、機能を停止して危険を訴えている。

「……なんだ、これは」

両儀永は、やはり愉快そうに笑いながら魔術師の言葉に答えた。い

つもなら無邪気にすら感じられるその笑みは、されど、今この場において是不気味以外の何物でもなかった。

「荒耶サンの魔術回路を切ったのさ。驚いたかい？」

でもさ、こんなの全然大した事じゃあないんだ、永のその言葉と同じに、少年の周りに白い霧のような蛇が現れた。蛇は永に絡みつくように漂っている。

「別に、俺は荒耶サンが姉ちゃんを攫ったからっていう理由で、荒耶サンを終わらせる訳じゃないんだ。誤解しないように言っとくとね、正直俺も、こんな結末になるとは思わなかった。だってそうでしょう？　俺は今まで、巫条霧絵や浅上藤乃が起こした事件——もとい行動を、それぞれ一つの劇として考えていたんだ。といつても巫条サンの劇はあまり面白いといえるシロモノではなかったけれどね。ただの自殺だしね、アレ。

ああ、話が脱線してしまった。そうそう、それでね。俺も劇を見てるうちに、なにかひとつ手を加えたいな、って思ったんだよ。だってさ、少しでも自分が影響を与えた劇を見れるなんて興奮するでしょう？」

両儀永は、そこに今回の劇の終着点に行き着く原因があるという。

その時——少年はまったくの無防備で、魔術師がその気になれば一瞬で殺す事ができそうに見える。だが、魔術師は少年ほどの背丈をしたその異物がゆえに、一歩たりとも動く事ができなかった。

「本当はさ、『荒耶サンが式の才姉サンをギリギリまで追い詰める、しかしそこで賭けの一撃に出た式の才姉サン一発逆転大勝利！』みたいなね、そんな展開を見たかったんだけどね。失敗しちゃ

った」

「失敗……だと？」

魔術師の背筋を冷たいものが伝う。失敗、それはこの数日で起こった様々な事柄に対するには、あまりにも軽い言葉ではないのか。幾人もの血が流れ、そして日を追う毎に濃くなつていく死を内包する結界を片付けるには軽過ぎる言葉。

だが、両儀永にとって死とは、人間の行おうとする業とは、その程度の価値しかないのかもしれない。

「うん。失敗。だって俺が手を加えたおかげで荒耶サンは才姉サンを捕獲するのをやめて、姉ちゃんを捕獲するコトにしました。そしたら、俺も姉ちゃんを獲られない為に劇に登場する必要が出てくる。それでも本当は才姉サンを向かわせればよかったのかもしれないし、黒桐サンに助力を願うのもありだったのかもしれない。」

「だけどね、姉ちゃんは、二人とはできる限り会いたくないって言うのさ。だから、結局は俺が自分で出る必要があった。それでも、修正できないものかなと思ったりもしたんだよ？」

臙条巴に語りかけた時の魔術師の言葉が呪文だとするなら、永の言葉はさながら木霊だ。永が一言魔術師に語りかけるたびに、魔術師にはそれが永の声で聞こえた後、自らもまったく同じ文言を吐いているような錯覚さえ覚える。

「でも結局失敗した劇は元には戻らない——いや、戻るはずもないか。だってそれは不自然で、無理に修正すれば見苦しいだけの三流にすらない塵のような劇にしかないからね。それは俺も面白くない。だから、そんな事になるぐらいだったら強制的に終了させちゃおう、って事にしたのさ。これも中々見苦しいけど、無理に

修正するよりはマシ、ってね」

言い終わると同時に、両儀永の周りを漂っていた蛇の動きに変化が現れた。白い靄のようなそれは、魔術師に向かってゆっくりと近付いてゆく。だがそれはまるで探るような動きであり、事実、蛇の移動速度は老人の歩みより少し速い程度でしかない。

魔術師の反応は素早かった。

「——— 肅！」

魔術師の怒号は、魔を置かずして空間を握りつぶす剛魔の腕だ。彼は永の周囲の空間を睨み、そのまま風景ごと握り潰す。そこに一切の時差はない。

叫び、腕を握り締められた瞬間に、永の敗北は決定的である。

だが。

荒耶は感じた。

自身の叫びが、靄のような蛇に喰われていく異様を。

蛇は魔術師に這い寄るのを止め、永の周囲の空間をぐるりと一周した。それは閃光と見紛うほどの速度。蛇は、空間に生じた圧力を喰っていた。

肅、という叫びは、

寫、という音によって喰された。

永を握り潰すはずの空間の歪みは、彼の目前で、その歪みごと呑み込まれていたのだ。

魔術師は再度腕に力を込める。

再び現れた空間の捻れはしかし、またも蛇によって一息に呑み込まれた。

二度に至る攻撃を受けて、先程までの探るような遅さとは違い、荒耶ですら目で追うのが辛いほどの速さで、蛇も荒耶を獲物ではなく敵と定めて迫る。

？———？

荒耶は声もなく、思考さえ間に合わず、一撃を受け入れた。

蛇が喰らいついた右腕に痛みはない。両儀と会話している時に感じたあの吐き気すらもない。

ただ魔術師に異常があるとすれば、それは蛇の触れた肘の部分が、蛇と同質の物——すなわち白い靄に変化していたという事だった。

肘の無くなった部分から魔術師の右腕が外れ、落ちる。

魔術師は後方に跳び退く。

蛇は、荒耶が立っていた位置から、その眼球のない空洞な眼で彼を見つめていた。

「——何だ、それは」

己の異常には目もくれず、魔術師は前方に佇む相手を睨む。

……今の一撃は、まさに致命傷だったろう。もし蛇が三重の結界から露ほども影響を受けないのであれば、荒耶の体はその全てが靄となっていたに違いない。

魔術師の周囲を守る三重の結界は、蛇が突き抜けるたびに僅かながらにその突進を鈍らせ、魔術師は致命傷を免れたのだ。

「はは。流石、荒耶サンの結界は凄いなあ。人間が作る結界としてはかなりの物だよ、これは」

「……よく喋るものだな、怪物が……！」  
バケモノ

腕の傷口を残った左腕で押さえながら、魔術師は吼える。

黒い外套の少年——永は、これ以上ないほど、心の底から愉快だとでも言うかのように哄笑した。

そのまま彼は再度蛇に突撃を命じた。

その突進を手段を躲す手段を、荒耶は持たない。

だがそれでも——ここは彼の体内なのだ。結界が有効であると判った以上、ここでの敗北は荒耶宗連にはありえない。

たとえこのマンションごと破壊しても、今の両儀永は手に入れなくてはいけないモノだ。

勝機を懸けて、魔術師は前進した。

「——蛇蝎……！」

魔術師の声が響く。

彼は残った左腕で、蛇の頭を捉えた。仏舍利を埋め込んだ彼の左腕は、この体にも健在なのだ。蛇は聖人の腕から逃れようと目論み、そう容易く逃れる事を赦しはしない。

同時に、落とされた右腕がひとりでに跳ね上がる。腕はそれこそ蛇のように床を滑り、両儀永の首元へと飛びかかった。

「——っ！」

万力のような力で、両儀永の首を絞めつける。その僅かな隙に、魔術師はさらに後ろへと退き、左腕を突き出した。

肅、と手の平が空間を圧縮する。

あらゆる方角から全身の骨を砕くかの勢いで、衝撃が両儀永の体に殺到した。

面倒を、という呟きを永が漏らす。

黒い外套の少年が地面へと崩れ落ちた。

いや、落ちようとした。

——両儀永はあっさりと消えた。  
けれど永は、この相手を逃がしたくなかった。

確実に飛んでいるをすぐに取り戻して、黒い姿が跳ね上がる。

彼は、ただ、荒耶を捕まえようとした。

少年の右腕が伸びる。

腕は、魔術師の胸の中心に突き刺さる。

そぶり、と自らの命を吸われていく感覚を、魔術師は嫌悪した。

「——たわけ！」

同時に、荒耶はあろう事が永を蹴りつけた。

永の腹を踵で蹴るという、槍のような中段蹴り。

蹴りは狙いあやまたず腹に突き刺さり、永は苦しげな呻きを漏らした。

手がずぶと抜け、荒耶は悟った。

この相手を止めるには――

「我が異界ごと、殺さねばならぬのか……！」

魔術師の左腕が開かれる。

三度目の空間圧縮。蛇に守られていない永はそれを直に喰らい、起き上がったところで間の抜けた声をだした。

――魔術師の姿が、黒い外套ごと消えていく。

永はそれを止めようとは思わなかった。

彼を止める必要など永にはなく、ただ魔術師が消えていくのをぼんやりと見ている。

逃げるの、と永は誰にでもなく訊く。

「——逃げさないよ」

そのまま、次の瞬間には少年の姿も掻き消えた。

## 空の境界 二次創作 第三十二話

ssssss

——荒耶は、マンションそのものを圧縮する事にした。

両儀永の肉体はそれで潰れるだろうが、勝手に修復されていくに決まっている。ならば、あとは肉体が完全に修復しきる前にその体を奪ってしまえばよい。

片腕を破壊され、胸の中心まで貫かれたこの体とて、数刻と保つまい。根源の渦という、全ての始まりがある場所に到達できれば肉体など不要になるだろう。要はそれまで、自身の魂が保てばよいのだ。

およそ考えられる限り最悪の形となったが、結局やるべき事は同じ。失敗した時の保険がまったく無くなっただけの事。

……どのみち、この方法で至れぬのならば手詰まりなのだ。

荒耶は思う。

失敗を怖れる自身の弱さこそ、最大の敵であったのだ、と。あの子供と戦って初めてそれが理解できた。

ともあれ、これで幕は下りる。

魔術師は自身の体内であるマンションから、体外である庭へと抜け出した。

緑の芝生に囲まれたマンションの庭は、結界の中にあるがマンションという建物の一部ではない。破壊しても、ここだけは影響を受けずに残るだろう。

庭に突如現れた魔術師は、空間転移から休む事なく片腕を突き出した。

夜空を見上げて、円形の塔を握り潰すために手の平を広げる。

瞬間。

彼の体は、その内部から食い破られた。

§§§§§

瞬間、彼の体はその内部から食い破られた。

「両儀——永」

夜空を見上げて、魔術師は呟いた。

「貴——様」

さらさら、砂の零れるような音は彼の体から発せられていた。

蛇に喰われた箇所から流れ出る靄は、風に流されるままに、この世界へと還っていった。

「——まさか、な」

信じられない、と彼は言った。

当然だった。庭に現れた魔術師が手を広げた時、彼の視界にあったのは、魔術師の臓物を食い破って夜空へと駆け上がるあの白い蛇だったのだから。

この相手は——魔術師がマンションから庭に空間を接なげて移動しようとした刹那、魔術師の中にあの白い蛇を潜り込ませたのだ。どんな確信があつての事かは判らない。所詮人の身では、『』の考える事など判ろう筈もない。

ただ、魔術師の体が食い破られたという、その事実のみが残っていた。

予想だにしなかったのだ、まったく、自身の体内からあんな物が現れるなど誰が思おう。

永は目の前で崩壊が始まりつつある魔術師をただ見ていた。

荒耶はやはり苦悩に満ちた表情を変えずに、忌々しげに眉を曇らせる。

「……私は、相手を間違えたという事か。いや、違うな。例えば私が両儀式を捕らえたとしても、やはり貴様は私の邪魔をするだろう。——何という無様さ。永——貴様にとって、私は道化でしかなかったか」

魔術師の呼びかけに、永は違うよ、と答えた。

「……ふん。いつたい、どこまでが本気なのか。だがこれだけは言っておこう。私は——荒耶宗蓮は、敗れない」

それは強がりではなく、混じり気のない彼の本心だった。

胴体は貫かれた空洞から崩壊が始まり、右腕はとうに失われている。

ただ佇むだけの魔術師には、永に対して攻撃を加える術はない。

眼前に佇む彼を眺めて、魔術師は不愉快げに呟く。

「そうしておれば、年相応の童だろうに」

「そうかな？　だといいけど」

魔術師は動かない。

苦悩に満ちた顔が、一層、その色を濃くしていく。

もう目の前にあるというのに、魔術師は動けなかった。

あの一撃。蛇に喰われた穴は、荒耶にとってどうしようもないほどの止めとなった。

胸に空いた空洞は、刻一刻と広がっていく。広がる穴はやがて体を呑み込み、荒耶を滅ぼすだろう――。

「前は相打ちだったが、これではな……」

目的を前にして動かない自身の体と、結局、一度も破壊されることのなかった三重の結界を顧みて、荒耶は一人、呟いた。

「起源を覚醒したものは起源に縛られる、か。  
なるほど――我が衝動は？ 静止？ であつたか」

誰に聞かせるのでもなく、皮肉げに魔術師はそう言った。

§§§§§

月明かりだけが、生きているようだった。

黙したまま月を見上げる黒い影が二つだけの世界。

そこへ、散歩の帰りのような足取りで、もう一人の魔術師が織を連れてやってきた。

「今回も失敗に終わったな、荒耶」

橙子の声に、荒耶は答えない。

「ひどい有様だ。人の死を蒐集し、地獄を作り上げ、彼らの苦しみ

を体験して。そんな事は苦しいだけだろう？ なぜそうまでして自分を追い詰める。なぜおまえは、そこまでしてその少年の力を求めるんだ。まさか本気で、台密の僧だった頃のように人間の救済を夢見ているわけではないだろう？」

「——理由など、とうに忘れた」

答えて、黒い魔術師は自己に埋没した。

遠い昔の嘶だ。人間は救いきれぬ。生きていく以上、どうあっても救われぬ者が出てしまう。全ての人間は幸せになどなれぬ。ならば——救われなかった人間とは何だ。その一生は何をもって報われるのか。

答えはない。無限と有限に等しいのだ救われぬ者がいなければ、救われる者が吐き出されない。ならば——救済など、ただ巡るだけの金貨と同じだ。

人間は救われない。世界に救済などない。

だから死を記録しようと思った。物事の最後までを記録して、世界の終わりまでを記録して、一から最後までを検分する。その上でなら、一体何が幸せだったのか判別がつくだろう。

報われない者も救われない者も、その全てを一から見なおす事ができるのなら——何が幸福と呼ばれるものを判断できる。世界が終わった後、この出来事こそが人間の意味だったと解るのならば——無意味に死んでいった者達にも、総じて意味が与えられるのだ。故に世界が果てれば、人は、人間の価値というものを検分できる。

それだけが——唯一、共通の救いである。

.....。

かちり、と音がした。

橙子が煙草に火をつけた音に、荒耶の意識は引き戻される。

「理由も忘れたのか。おまえの望みは無、そして発端さえもゼロ。じゃあ、一体おまえはなんなんだろうね」

「私は何者でもない。ただ結論が欲しい。この、醜く汚く下衆で蒙昧な人間ども。奴らが死に絶えた後、歴史にそれしか残されないのなら——その醜さこそが人間の価値だったのだと結論できる。醜く、救われない存在こそが人間なのだと、私は安心できるのだ」

二人の魔術師は互いの顔を見ずに語り合う。

荒耶は立ち尽くしたまま。

橙子は星空を見上げたままで。

「——だから根源の渦に触れたがるのか。そこには全ての記録がある。仮になかったにしても、全てを無にする事ができる。おまえはおまえの為に、生き汚い人間をみんな消してしまいたいんだ」

「そうだ。だがあと十歩。あと数歩という所で、今度は世界どころか、根源の渦そのものに邪魔をされた。道を開くのも不可能ならば、もともと道を持つ器を手に入れる事さえ阻止される。なんという」

——なんという、往生際の悪さ。

誰も世界の危機など知らぬくせに、誰もが無意識下で生き残りたいと願う。誰も壊れていく世界を救おうともせず快楽に溺れているというのに、誰もが無意識下で世界に害なすモノを排除しようとする

る。この矛盾をなんという。生きたいと思っ心が、生きようとする祈りを汚すのだ。

その邪念こそが、私の敵だ」

声には深い憎しみが込められていた。

橙子はふう、とため息をつく。

「世界——？ 違っよ、荒耶。今回おまえを阻んだのは霊長の抑止力でも、ましてやそこでさっきから案山子みたいに突っ立って空を見上げてる一両儀永（根源の渦）でもない。おまえは本当にうまくやった。抑止力は働かなかった。荒耶宗蓮を破滅させたのはただ一つ。おまえはさ、臙条巴という、たった一人の人間のくだらない家族愛に負けたんだよ」

荒耶は認めない。

世界全ての、現存している人間全ての意志を敵にまわしても打ち勝つてみせよう、という自分が、あのような若造につまずいたなどと、誰が——。

「仮にそうだとしても。ヤツを後押ししたのは霊長の世を維持しようとする有象無象の下衆どもだ。本来の臙条巴では、あの行動は不可能だ。ヤツを動かしていたのは家族を思っ心などではない。そんな心は人間にはない。ヤツラにあるのは自分が生き残りたいという願望のみだ。ヤツは、その醜い本心を隠す為、家族愛らしき装飾をかぶっていたにすぎぬ。自分が生きていたいから、他人を守る擬態をするのだ」

アラヤの言葉には憎しみしかない。

人間を汚いと罵るこの男を、橙子は正しいとは思わない。どうせなら永みたく、人間とは面白いものだ、と思っていきたい。荒耶宗蓮は長く生きすぎて、もはや一つの概念と化している。思考の方向性が変わらぬものは、すでに人ではない。

無駄と知りつつも、彼女は呪いの続きを口にする。

「——ひとつ、いい事を教えてやろうか荒耶。おまえは知らないだろうけれどね、有名な心理学者が定義した集合的無意識というものがある。全ての人間の意識の最下層はみな同一の湖にいきつくという考え。もと仏僧であるおまえには馴染み深い思想でなくてはいけないものだ。これはつまり、ガイア論的ではない方の抑止力——  
—霊長の無意識下での同一意見だ。」

これをね、宗蓮。一般にはアラヤ識というんだ」

な、に、と息を呑む声がある。

橙子はかまわず続ける。魔術師は以前、彼女の問いにこう答えたのだ。自分の敵は霊長の想念、救いがたい人間の性である、と。

その呪いが——今、ここに一つの形を成す。

「おかしいだろう、荒耶宗蓮。おまえはおまえが生涯の敵とみなすモノと同じ姓を持って生まれた。

だというのにおまえ自身は知らず、おまえの周りにいた全ての人間はその事柄を教える事さえなく、その奇跡めいた偶然を守ったまま己の道を定めた。なんていう意地の悪い世界の罠だろうな。いいか宗蓮。今回矛盾はヤマほどあった——だが、支配者であるおまえそのものが、何より最大の矛盾だったのさ！」

……呪いは凶悪なイメージとなって、アラヤの思考を侵食し、侵攻し、彼の存在を打ちのめした。

魔術師は答えない。

ただ、その目の焦点だけが消えていく。

それでも微動だにせず、彼は苦悩の貌をつかべた。その暗さ、その重さは永遠にとけぬ命題を背負った哲学者のそれか。

否定はせず、呪いだけを受け取って、魔術師は呟いた。

「——この体は、限界だ」

「また一から出直しか。それで何回目だ。おまえは懲りないな」

それこそが螺旋。荒耶は最後まで仏頂面を崩さない。

橙子は明らかな軽蔑の眼差しを向けて、指に挟んだ煙草を投げ捨てた。

軽蔑はするけれど——彼女は、この概念と化した魔術師を嫌悪してはいなかった。一歩間違えれば。一歩間違えなければ、自分とてこのようなモノになっていたに違いない。人間でもなく生物でもなく、ただの現象と成り果てた理論の具現。

それを哀しいと、今の彼女は思えてしまうから。

ふん、と荒耶は息を吐く。

その体が、雲霞となつて消えてゆく。

「予備の体は作つてはおらぬ。再会があるとすれば、次世代か」

「そのころには魔術師なんてモノはいないよ。再会はないだろ。おまえは最期まで独りだ。

それでも——止めないというのか」

「無論。私は敗北など認めない」

橙子はただ瞳を閉じる。

長く別れていた数年を清算する、束の間の問答はここまでだ。

最後に、それまで黙っていた永が声をあげた。

「アラヤ、貴方は消えるね」

「——ああ、消える」

黒い魔術師の腕が、崩れる。

「人間は、汚いかな」

「——汚く、下衆で、蒙昧だ」

外套は散り、半身が風に舞っていく。

それをずっと、三人は見届けていた。

「俺は、貴方<sup>アラヤ</sup>みたいなモノは嫌いではないよ」

——私は、『<sup>きこえ</sup>』が嫌いだ——

消える寸前。

小さく、しかしはっきりと聞こえる声で魔術師はそう呟いた。

風に舞っていく靄から目を逸らさずにいる永に、織はそつと慈しむように頭に手を置いた。

靄は、ありえない蜃気楼のように揺れていた。

空の境界 二次創作 第三十三話

§§§§§

どういうわけだが、俺は街にいた。

今日はとてもいい天気で、見上げた空はどこまでも蒼い。ここまで雲一つない綺麗な空を、俺は久しぶりに見た気がした。

夢みたいに白くて暖かい陽射しのせいだろう。街はなんとなく塵気楼のようにぼやけていて、いつもの大通りはまるで砂漠のようで、いつもこんな風だったらいいだろくに、そう思わせるほどの心地よさだった。十一月になって毎日が曇りだったけど、今日は真夏に戻ったように明るい一日だ。

俺はいつものパーカー姿で、喫茶店に入った。

喫茶店の看板にはドイツ語で、アーネンエルベと書いてあった。

こんな陽射しが強い日は、こんな陰気な所のほうがすごしやすいと思ったのは、どうやら俺だけじゃなかったようだ。

明かりは窓からの陽射しだけ、というこの喫茶店は、今日のように強い陽射しの日は人気がある。

飾り気のない白いテーブルには、大きな窓から差し込む太陽の白。その他の部分は、店が持つ乾いた影の黒。この二つの明暗が教会じみた荘厳さを見せて、待ち合わせに利用する客が後をたたない。

かくいう俺もその一人だ。

テーブルは一つしか空いてなかった。

俺は席に座る。周りにも何人か俺と同じように待ち合わせをしているらしい人がいて、そいつらはしばらくすると、待ち合わせの相手と喫茶店を出て行った。

俺は椅子に座って待ち続ける。

そうしてずっと待っていると、俺はいつの間にかあたりが暗くなり始めている事に気がついた。

太陽はすでに沈みかけ、アーネンエルベの窓からは紅い夕日が流れ込んでくる。

それでも俺が待ち続けていると、ふと、俺は背後に気配を感じた。振り返るとそこには、赤い髪をした、女みたいに華奢な体躯の少年が佇んでいた。

「なあ… あんた、臙条巴… だよな？」

「そうだけど… おまえは誰だ？」

「俺も臙条巴っていうんだ。あんたが、その… 死んだ後に造られた人形だけだ。」

「実はあんたに聞いてもらいたい話があるんだ。聞いてくれるか？」  
「… 聞かせてくれ」

そして、自分の事を臙条巴という名の人形だと言った少年は、自身が出会った出来事の詳細を俺に話してくれた。その中には魔術師や鍵になる少年の話など、およそホラにしても出来の悪い冗談のような

単語がいくつも出てきたけれど、不思議と俺はそれを疑う気にはならなかった。

「…そうか。そんな事が……」

「ああ」

「大変、と言えいいのか。どうもな、混乱するぜ…実際」

誰だってあんな話を聞けば混乱するだろう、人形はそう言ったけれど、俺にはそう言った人形のほうが混乱…いや、困惑しているように見えた。

「大丈夫か？」

「…ああ」

人形は頷くと、俺に手を差し出してきた。俺も同じように手を差し出し、俺達は互いに握手を交わす。

「話を聞いてくれてありがとう。臙条巴」

「ああ。仇をとってくれてありがとう。人形<sup>トモエ</sup>」

「俺は何もできなかったよ。やったのは神様みたいなガキさ」

「それでもさ。俺がやろうとする事さえできなかった事をやろうとした、それだけでいくら感謝してもしたりないぜ」

そして俺達は手を離れた。二人とも、こうして会う事は二度とないだろうと分かっていた。

だからこれは、二人のトモエの間で交わされる、最初で最後の挨拶だ。

「話せて良かった。じゃあな臙条巴」

「ああ、こつちもさ。あとはおまえが好きに楽しみよ人形——いや、臙条巴」

そうして二人のトモエが互いに背を向け歩きだすと、片一方の、人形であった巴は西へ、臙条巴であったモノは東へと、まるで別れ道のようになっている出口へ進んでいく。

——彼らが去った後、テーブルの上には一つ、銀色の鍵が置いてあった。

空の境界 二次創作 第三十二話（後書き）

矛盾螺旋はこれで終わります。

## 空の境界 二次創作 第三十四話

あまり寒くなかった十二月が終わって、わたしは十六回目の新年を迎えた。

新年あけましておめでとうございます、という言葉に代表されるお正月のあったかさは、何度経験しても飽きる事のない愉しみだと思う。

だっていうのに、わたしはお正月を楽しむ事が出来なかった。

ああ、もう、自分でもなんなんだくしょー、と思うぐらい楽めない。むしろお正月に関する記憶だけ切り捨てようか、と真剣に悩んでいる始末だけど、そんなふうには人の心は便利にできていないので問題はちっとも解決しない。

部屋にいてもブルーな気分が晴れるわけでもなく、わたしは枕を投げつけたり枕に踵落としをしたりする不毛な八つ当たりを我慢して、橙子師の事務所に出かける事にした。

うちの家は中流故か、こういう季節限定のイベントにはきっちりかつきり対応する。わたしにだって初詣に着ていくための晴れ着が用意されていたけれど、和服なんて着たくもないのでいつものまま普段着で出かける事にした。

「あら。鮮花ちゃん、お出かけ？」

「はい。お世話になっている方へ挨拶に。夕方までには戻ってきますから」

笑顔で言って、わたしは黒桐家を後にした。

一月一日のお昼すぎ。見上げる空は曇り模様。

それはどこか今の気分を代弁してくれているような気がして、私の足取りはちよっとだけ軽くなった。

そもそも、わたしだってお正月は好きだった。

それが憎むべきものになったのは、忘れもしない三年前の一月一日。九六年を迎えたその日、わたしは田舎にある親戚の家から実家に戻ってきていた。

……わたしこと黒桐鮮花は体が弱い。学校の体育の授業ではA以下の評価を受けたことがないが、とにかく世間さまではそういう事になっている。

わたしには都会の空気は合わない、という理由で田舎にある叔父の家に預けられたのが十歳のころ。それから夏休みや冬休みの数日間だけは帰省していたのだが、それだって本当はしたくなかったのだ。

わたしは自分自身の目的のため、黒桐鮮花を養女にしたいという叔父の提案を受け入れて、本格的に田舎で暮らす事となった。体が弱いという嘘についてまで家を離れた原因は、兄である黒桐幹也にある。

そう、告白するのなら。

わたしは、なぜだかあの冴えない兄が好きだった。困った事に兄妹の好きではなく、人間としての愛情の類であるから始末が悪い。

当時のわたしはまだ小学校中学年のこどもだったけれど、自分でも自分の精神年齢が平均より高い事を意識していた。人並み以上の容姿とか学力とかのせいなのか、それとも生まれついて冷めていたのかはわからない。思えば、そんなものは錯覚だったのかもしれないけど、幹也に対する感情だけは本物だった。

好きだとか、一緒にいたいとか、そういったレベルの感情じゃなかった。自分のものにしたい、できるのなら閉じ込めて誰の目にも触れさせたくない、とまで思い詰めたぐらい本気だった。

ううん、今も本気なんだけど、大人になってみると子供の頃みたいな体当たりが出来なくなってしまうんだ。もともと声に出せる恋慕でもないから、今は大人しく反撃のチャンスをうかがう事にしている。

……反撃。そう、反撃だ。

わたしが田舎に引っ越したのは、ひとえに幹也と離れるためだ。だってあれ以上一緒にいたら、きっとわたしは妹と認識されてしまう。戸籍上の事実なんてどうでもいい。ただ、幹也が無意識下でわたしを妹と決め付けてしまうのだけはまずかった。だから仮病まで使って実家を後にした。あとは幹也が妹としてのわたしを忘れた頃、さっそうと帰ってくればいい。

そうして、わたしはこれ以上ないってぐらいの淑女になろうと日々

を過ごした。やっぱり惚れるよりは惚れさせたい。幹也の好みはちゃんと分かっているんだから、そんなのは割り箸を折るぐらいに簡単だろう。

- - - ほら、計画はやっぱり完璧。

だっていうのに、とんでもない邪魔者が現れやがった。

…… もとい、現れていた。

それは三年前のお正月にまで遡る。

中学生になってようやく愛を語れる年齢になったわたしは、ただの様子見で実家に帰ってきた。その時に、あるうことか、幹也のヤツはうちに高校のクラスメイトを連れてきた。

両儀式、という名前をしたその女と幹也が付き合っているのは明白だった。

とんびにあぶらげっていうのはこういうこと。まさか、こんな飄々とした男と付き合う女がいるなんて、わたしは思ってもいなかった。だってそうでしょう？ そんなの、趣味が悪すぎるってもんなんだから！

ともかく、その日はあまりのショックで目の前が真っ白になって、わたしは放心状態で田舎へと引き返したのだ。

それからどうしようか悩んでいた時、両儀式の悲報が届けられた。彼女は交通事故という不幸に遭い、幹也は一人に戻ったという。

その時は、まあ、少しは式にだって同情したよ。一度だけしか会わなかったけれど、楽しそうに笑っていたのを覚えていたから。

けど、それでわたしは安心した。式みたいな物好きは二度と出てこないだろう。わたしは順調に高校を卒業して、向こうの大学に行けばいい。そうすれば、あとは押しの一手だ。八年近くの年月が経っていれば妹も何もなかるうよ。

……とまあそうして、わたしは満足げに叔父のテラスで紅茶を口にしてほくそ笑んだりしたものだ。

だっていうのに、敵もさるもの。式のやつ、去年の夏に意識を取り戻した。幹也はわざわざ電話でその事を伝えてくれて、わたしは決心した。

もはや高校を卒業するまで、なんて事は言ってられない。わたしは、わたしに素直になるって決めたんだ。そうなると行動は早かった。すぐに都心で名門、それも全寮制の高校を探しだし、転入手続きをとったのだ。

幸い叔父は父とは違って名の売れた画家であり、わたしは成績優秀で非の打ち所のないお嬢様な外見である。入学するには本人の成績より両親の資産が重要、という礼園女学院にもすんなり転入できた。

それから半年が経って、わたしは嫌いになってしまったお正月を迎えている。

今日だって本当は幹也と初詣に行く予定だったのに、昨日の夜に式がやってきて幹也をさらっていつてしまった。

……ほんとうに。

事態は、一刻の猶予もなさげな状況だったりたりするわけなのだ。

ssssss

わたしの魔術の師である蒼崎橙子の工房は、工場地帯の真ん中にある。

一見して作りかけで放置された廃ビルなのだが、中にはきちんとした事務所なんかもかまえているおかしな建物だ。

一階は車庫になっていて、二階と三階は不明、四階が幹也の通う事務所になっている。兄の通う事務所の社長は、転じて、わたしの師でもあるというわけだ。

「新年、あけましておめでとうございます」

「はい、おめでとう」

事務所に入るなり挨拶すると、橙子師は何かを弄りながら相づちをうつてきた。

蒼崎橙子は二十代後半の女性で、凛々しいタイプの美人だった。

所長としての訓示や、職場にいるときは遊びのないスーツ姿で、今日は眼鏡を外しているから余計にキリッとしている。

「なんだ鮮花。今日は黒桐と出かけるんじゃないかったのか」

所長席に座ったまま、橙子師は分かりきった質問を向けてきた。

「式がやってきて、連れていかれました。自分から講義を欠席する  
といって何ですが、予定を戻してかまわないでしょうか？」

「今日はこれからこいつと一緒に遅い昼食でも食べに行こうかって  
話になったから、講義はその後だ。ちょうど鮮花に話すことも出来  
たところだし、一緒にどうぞ？」

こいつ？ という疑問が顔に浮かんでいたらしい、橙子師はほれ、  
といって手に持った物をわたしに放って寄越した。これは…ハムス  
ター？

「橙子さん。これ、ハムスターですよね？」

「そうだろうそうだろう、そう見えるだろう」

珍しくニヤニヤとしながら、橙子師はわたしの手の中にあるハムス  
ターを見つめている。

……？ なぜ橙子師がにやにやしているのかと思ってわたしもハム  
スターに目をやると、ハムスターはわたしの手の上で怯えたように  
震えていた。

「どうしてこの子こんなに怯えてるんです？」

「さあ？ 鮮花が怖いんじゃないのか？」

そう言ってくつつ、と笑いをかみ殺すようにしている彼女に少し  
むっとして、わたしがこのハムスターの顔を覗き込もうとすると、  
そいつはあるうことかわたしの視線から隠れるようにさっと体を丸

めてしまった。橙子師の笑いが段々大きくなっている気がする。わたしはそんなに怖いのだろうか、そうして軽く凹んでいると、ようやく笑いが収まった橙子師がこんな事を言った。

「もういいだろう。その辺にしておいてやれ」

誰かわたしたち以外に他にもこの部屋にいるのか、と思って周りを見まわすと、あの少年の声はわたしの掌から聞こえてきた。いや、正確には掌のハムスターからだけだ。

「ちょ、バラさないで。俺今結構命の危機だからね？ いや、マジで」

しかも命の危機とか、失礼な事言ってるし。

「……橙子さん」

「なんだ」

「このハムスター、捨てていいですか？」

「駄目。今日はそいつに奢ってもらう約束なんだから。鮮花もそうすればいいじゃないか」

「わかりました。そうします」

わたしは仕方なく、この失礼なハムスターから手を離す事にした。手を離れたとたん、ハムスターは逃げ帰るようにして橙子師のもとへ走り去り、そこで元の少年へと姿を戻した。

「橙子サン？ いきなり投げるのはよくないと思うよ。それに、あのバラすタイミングときたら！ あれで俺が妹サンに握りつぶされていたらどうするつもりだったんだい？」

「おまえ死なないだろう」

「イタイけどね。」

……まあ、いいですよ、分かりましたよ。妹サンにも橙子サンにも奢りましょう。それで気が済むのなら」

まるで自分は一切悪くないとでも言うように降参のポーズで、彼は橙子師に向かつてそんな言葉を並べていたが、橙子師はそんなものどこ吹く風という調子で外出の支度を進めている。

「よし、では行こうか。鮮花。おまえも、いつまでもそんなことで煩く言っていると、黒桐に愛想を尽かされてしまうぞ?」

「はい、すみません橙子サン。次からは自重します、たぶん」

支度を済ませて、といつても事務所の奥から小さいバッグを一つ持ってきただけだが、橙子師は事務所の出口まですたすたと進んでいく。

子供は子供で急に態度を変えたかと思ったら、喜んで奢らせていただきます、とか叫んで橙子師に敬礼しちゃってるし。なんなんだろう。

「ああ、もう。煩いぞ。あまりでかい声を出すな」

ホント、変な子供だなあ、とか思いながら、わたしも二人に続いて事務所をあとにした。

??????

場所は変わり、橙子師とわたし、それにあの失礼な子供はドイツ語の看板を掲げている喫茶店へと来ていた。三人ともそこまでお腹が

空いているという訳でもなかったし、それなら何か軽食でも軽くつまめばいいのじゃないかというのがその理由だ。

「それで、さっきはどうしてあんなに怯えていたんですか？ 永は」

聞いて、ジロリと少年に目をやると、少年はあわてふためいて橙子師の方に顔を逸らした。

この少年、名前は永という。苗字は知らない。今年の夏、式が目を覚ましたのとちょうど同じ時期に橙子師の事務所に顔を見せるようになったそうで、どうやら幹也ともそれなりに仲がいらしい。ただ、式とはあまり仲がよくないのか、時たま鬱陶しがられているのを見る事もある。本人には改める意思はまったくないみたいだけど。

正直、わたしにはこの少年をどう扱ったものか、わかりかねている部分があった。いや、この少年が見かけ通りの、ただの少年だったのなら気にする事はないのだろうけれど、どうも橙子師によるとそうではないらしい。歳はもはや何歳かすら不明で、魔術の腕は軽く橙子師を越えるとの事だ。少々どころではなく信じ難い話なのだけれど、それを語っていた師に嘘をついている気配はまったくなかったから、わたしはそれが本当であると信じることにしたわけなのだ（もちろん、その話の全てを鵜呑みにしたわけではない。真実を混ぜた嘘ほど見抜きにくいものはないのだから）。

ただし、今の様子からはとてもそうは見えないのであるけれど。

「さあな。でも少し気になるな、なあ？」

本当は分かっているんだろうに、あえて少年に話をふるあたり、橙子師も中々にいやらしい事をすると思う。

「いや、あの……」

わたしと橙子師の二人から質されて逃げ道はないと悟ったのか、少年は小さくため息をこぼしてぼそつと呟いた。

「……ヤンデレ臭が少し」

「ヤンデレ？」

聞いた事はないけれど、いい意味じゃないのは確かだ。

「聞いた事がないな、なんだそれは。新しい洗剤か何かか？」

絶対に違うと思う。というか違うし。

「え？ う、うん、そう！ 洗剤だよ！」

「わたしはそんな変な洗剤なんか使っていません」

橙子師の言葉に素早く反応して早く話を終わらせようとするあたりも、ますます怪しい。それで誤魔化しきれるとでも思ってるんだろうか？

「そ、そんな事よりもほら！ 橙子サン、妹サンに話があるって言ってたじゃない」

「うん？ ああ。そうだったな。少年があまりにも間の抜けた事を言ったりするから、すっかり忘れていた」

「ひどくない？ それ」

「で、鮮花。ちょうど話することが出来ただけど」

……？ 橙子師からわたし宛てに話があるなんて、珍しい。しかも

誤魔化し成功しちゃってるよ。

「それで、話って何ですか？」

「おまえの学園の事だよ。つと、その前に永、張れ」

「うん」

橙子師が言うがはいか永は軽く指を鳴らした。小気味よい音がたつと同時に、周りの人達からは一切感知できないような類の、認識阻害を目的とした結界をわたし達が今いる席の周りにだけ張り巡らした。師は結界が満足のいくものであることを確かめてよし、とつぶやく。

「おまえの学園の事だよ、鮮花。君は私立礼園女学院の一年生だったな。一年四組の事件について、聞いていないか？」

一年四組？ それは、もしかすると――

「橘佳織さんがいたクラスですね。わたしはAクラスですからDクラスの事は詳しくはありませんけど」

「タチバナ、カオリ？ 誰だそれは。そんな名前はリストにないが」

橙子師は不愉快そうに顔をしかめる。

わたしも同じように首をかしげた。

どうやら、わたしと橙子師の間には大きな齟齬があるようだ。

「……あの、何の話でしょうか？」

「そうか、鮮花は知らないのか。そうだな、クラスが違うのでは話題にならないか。礼園はクラス別に隔離されたシステムらしいから

な。あの話は四組の生徒しか知らないという事になる」

ひとりで納得して、橙子師は事の詳細を語りだした。

事の始まりは二週間前。冬休みを直前にひかえた礼園女学院高等部一年四組の教室で、二人の生徒が口論の末に相手をカッターで切ったというのだ。

「なに？ 最近話題になってるキレる十代？ 怖いねー」

「黙ってなさい、永」

「……はい」

……礼園という、閉鎖されたあの異世界で傷害事件が起こるなんて、にわかには信じられない。

礼園は一度入学すれば、よほどの特権でもないかぎり外には出れない収容所のような学園だ。だから中の空気は嘘のように静かで、止まっている。永が言ってみたように、誰かが誰かに対する怒りで暴力沙汰なんかが発生するなんて考えようのない、病的なまでに洗浄された世界なのに。

「——それで、怪我の具合はどうなんですか」

「怪我自体はたいした事じゃない。問題はもつと別のところだ。二人の生徒は二人とも傷を負った。この意味が分かるか、鮮花」

「……口論の末、ふたりがふたりとも同時に相手に切りつけた、という事ですね。両名の口論に優劣はなく、話は平行線のままふたりとも同じ結論に達した、と」

「そうだ。口論の内容は、また後で話す。問題はまだ続いてね。この事故は、すぐには報告されなかった冬休みにはいつて学長が保健室の記録を調べたところ、怪我をした両名の記録があったから発覚

した事故だ。四組の担任は、その事故を意図的に隠蔽したことになる」

四組——Dクラスの担任は葉山英雄という、礼園に二人いる男性教諭の一人だ。けれど彼は十一月の学生寮の火事の後、責任をとらされて姿を消した。彼の代わりはシスターじゃなくて、たしか……

「玄霧先生は、そういう人ではないと思いますが」

つい、わたしはそんな事を口にしていた。

橙子師はああ、と頷く。

「マザーもそう言っている。一年四組の担任についた玄霧という教師はよほど信頼が厚いんだろうね。マザーが彼を問い詰めたところ、玄霧皐月はその事故を覚えていなかったらしい。マザーに指摘されて、突然に思い出したというんだ。なんとも胡散臭い話だが、マザー曰く芝居でもなんでもなく、本当に玄霧皐月は忘れていたようなんだよ」

……そんな事、ありえるのだろうか。

二週間前の出来事を綺麗さっぱり忘れるなんて事はない。けれど……もしかして、玄霧先生ならそういうのもアリかな、とかわたしは思ってしまった。

「話は戻るんだが、生徒たちの口論の内容だ。二人の生徒は放課後、他の生徒たちがいる中で口論をはじめた。その会話を他の生徒が聞いていたんだが、なんでも自分の秘密をばらされたいらしい。それがまた、特殊な秘密のケースだね。本人が忘れていた秘密をばらされ

た、というんだ」

「——え？」

「だから、本人が忘れていて思い出しもしない子供の頃の秘密を、相手にばらされたというんだよ。話によると彼女には一ヶ月近く、本人でさえ忘れていた出来事が手紙で送られてきていたという。初めは手紙の内容が理解できない。けれど読んでいくうちに、それが自分の事だと思い出してゾツとしたことだ。気味が悪くなって友人を問い詰めたところ、その友人も同じように手紙が送られてきているという。この二人の生徒は幼なじみでね、自分が忘れた事を覚えていたと思ったら、それは子供の頃からの友人である相手しかいないと思つたらしい。二人の生徒は互いが犯人だと思い込んで同時にカッターで切りあつたというワケさ」

わたしはしばし絶句した。

本人さえ忘れている記憶が、手紙になつて送られてくる？ 本人さえ知らないはずの秘密をどこかの誰かが手紙で送りつけてくるというのか。

「新手の脅迫でしょうか、橙子さん」

「いや。手紙には忘れていた過去の出来事しか書かれていないというんだ。別に脅しているわけでもない。ストーカーのように四六時中監視していようと、過去、しかも本人さえ忘れているような出来事を知る事はできない。不気味といえば、まあ、不気味な話だね」  
「あんまり不気味に感じてはいないような口振りだけど、例えば橙子サンだったら、そういった手紙が自分に届いたらどうするんだい？」

「私に？ ふつ。まあ、それは企業秘密というやつだな」

不気味どころの話ではないと思う。

初めは面白がって手紙を読むかもしれないが、それが一ヶ月も続いたとしたらどうだろう。自分の知らない事を自分ではない誰かが知っているのだ。一日一日と正体不明の監視者の手紙を読むたびに、彼女達の精神は追い詰められていたことだろう。

……カッターで切りあう、というのはむしろ軽くすんだ結末なのかもしれない。

「橙子さん。その、手紙の主は——」

「あれでしょ、妖精どもでしょ」

「ああ、そうだ。犯人は妖精だとさ」

永が私の言葉を遮って言った答えに、橙子師ははっきりと肯定する。

わたしは驚きで声をあげかけた。

「——すみません。もう一度お願いします」

「だから妖精だよ。なんだ、この話も鮮花は聞いてないのか。礼園には靈感の強い女が集まるのかな、目撃例も多いという話だ。鮮花の目は霊体に焦点が合わないから見えないだろうが、寮生の間では有名なしいぞ。夜、枕元に妖精が飛んでくる。目覚めると過去数日の記憶がぼっかり抜け落ちているそうだ。記憶を採集するのは妖精の仕事みたいなものだから、おそらく間違いはないだろう。一年四組の事件と妖精の話は繋がっていると考えるのが妥当だな」

橙子師は淡々と語る。わたしは、この人の下で魔術を習っているとこのに、その話をまったく信じられなかった。

「橙子さんは信じているんですか、妖精の話を」

「見てみない事にはなんとも言えんが、礼園なら妖精ぐらいいるだろう。あそこにはそういう雰囲気だけは備わっているからな。あの学園は世上とは隔離され、敷地内には車の音さえ届かない。あそこを支配するのは厳かな校則と物静かなシスター達であり、少年少女を熱狂させる流行りものは侵入できない。敷地内の大部分を占める林は森ほどの深さがあり、迷い込めば半日は外に出れないだろう。空気はどこか飴のような甘さを含み、時計の針は老婆の編み物のようにゆったりと進んでいく。ほら、都心にたたずむ妖精郷そのものじゃないか」

「よくご存知で。まるで学園を知っているような口振りですね、橙子さん」

「そりゃあ知ってるさ。私はあそこのOGなもの」

—— 今度こそ。わたしは、驚きの声をあげた。ふと永に目を向けると、彼はわたし以上に衝撃を受けたらしい、ありえない、いや、本気でそれはない、と愕然とした面持ちでぶつぶつ呟いていた。

「なんだその目は。永、おまえにはあとで事務所に戻ったら話がある。覚えておけよ」

「ごめんなさいもう言いません」

「ふん。いまさら遅い。そもそもマザー・リーズバイフエが部外者に学園の恥部を相談すると思うのか。昨日の夜、学園長から原因の究明をしてほしいと依頼をつけた。私の所は探偵屋ではないが、他ならぬマザーの頼みでは断れない。かといって私が学園に乗り込むのは目立ちすぎる。どうしたものかと思案していたのだが。——  
鮮花」

聞きたくありません、とわたしはそつぽを向く。

橙子師は感情のない瞳でわたしを見据えると、唐突に話題を変えた。

「じゃあ。妖精と聞いて、鮮花は何を連想する？」

「——妖精、ですか。その、小さな女の子に翅がついているとか」

自信なさげに答えると、橙子師は夢があって結構、なんて含み笑いをした。

「妖精といっても種類は様々だから、そういうのもいるかもしれない。ただし、それは魔術師が作り上げた使い魔としての妖精だ。妖精は悪魔などと違ってモノの想念が集まってカタチをなした実像幻想ではなく、れっきとした生物の系統樹に連なるものだ。生物学的に生存が不可能な身体構造はしていない。小鬼とか赤帽子とかが、ある意味純粹な妖精という事になる。ゴブリン レッドキャップ

妖精や龍に代表される幻想種。日本では生粋の鬼がこれに該当するが、彼らはたびたび私達と接触をはかってきた。彼らは悪魔達のような、人間の願いによって生み出される受動的なものではない。あくまで能動的な存在だ。

スコットランドあたりでは妖精の悪戯が今でも行われているという話だが、その悪戯の中に人間に物忘れをさせる、というものがある。

あとは子供を森に引き込んで一週間ほど帰さなかったり、生まれた赤子を妖精の子と取り替えたり、家の玄関に兎の死体をばらまいたり、と実に子供の悪戯のレベルを抜けない微笑ましい物ばかりだな。

まったく統一性のない彼らの悪戯には、けれど共通点が一つだけある。妖精達にはね、損得感情というものがないんだ。彼らは単に楽しいからやっているだけで、その後何かを求めるなんて事はない。だが礼園のケースは違う。奪った記憶を手紙にする、というのはどうにも悪意が感じられるだろう？ くわえて礼園に現れる妖精というのは、鮮花が言ったとおりの可愛らしい外見をしている

るそうだ」

……なるほど。さすがは橙子師、こういう搦め手でくるとは思っていなかった。

くやしいなあ。

わたしは、わたしのプライドのために、その先を自分から口にしてしまうんだ。

「つまり、礼園女学院に現れる妖精というのは作られたモノ、使い魔。悪意がある以上、それを操る魔術師もまた存在する、ということですね」

そうそう、と橙子師は嬉しそうに頷いた。

「使い魔に関しては以前説明したな。魔術師が自らの体の一部を提供してつくりあげた分身としての使い魔と、ほかの生物を前身として作り変える手足としての使い魔。今回は手足として使役される使い魔に違いない。人の記憶を盗むだけの単一性能だ。やる事が子供じみていて、つまらん」

……その、つまらない事の始末を押しつけられるわたしの気持ちも考えずに師は続ける。

「まあ、それも仕方のない事か。妖精の使い方は難しい。術者はいつのまにか彼らに要望を叶えさせるのではなく、彼らの要望を叶えさせられている場合が多いんだ。連中はわがままな注文ばかりするからな。故に、昔から妖精を使い魔にしようなどという魔術師は少ない。いたとしたらそいつは一流の腕前だ。だが今回ののは違う。妖

精に似せた使い魔を使っているだけの未熟者だろうから、修業にはもってこいだ。そういうわけで、鮮花。師として命じる。目的は真相の究明。期間は冬休みが終わるまで。原因の排除までは望まないが、できるのならやってしまえ」

……やっぱりこういう結果になるんだ。

わたしは半ばやけになって、努めて冷静に頷いた。

「——修業の一環なら、仕方ありません」

それじゃあ詳しい資料をあげよう、と橙子師は永に結界を解除するように言って席を立つ。けれどその前に、わたしはただ一つの不安を口にした。

「ですが、橙子さん。わたしは妖精なんて見えません。師のように魔眼なんてもってはいませんし」

わたしの問いに、橙子師はにやりと笑った。

それは今まで感じた事のない、キックを入れてやりたいぐらい不吉な笑みだったと思う。

「ああ、それなら大丈夫だ。目の代わりはしっかり考えてあるさ」

師はくすくすと忍び笑いをして、その内容を語ってはくれなかった。

空の境界 二次創作 第三十五話

「今日は永のヤツ、蒼崎とかいう奴の事務所に行ってるぞ。約束しちまつたんだってさ」

「そんな事、何でおまえが知ってるんだよ。臙条」

「そりゃあ勿論、あいつが俺に伝言していったからに決まってるだろ。いいじゃないか、初詣には行けたんだから」

「おまえもいたけどな」

「はは、俺は結構楽しかったぜ？」

あの日、不思議な夢から醒めた俺に永はおめでとう、今この瞬間から君は人間になった、そう言った。その日から俺は、両儀のアパートで生活する事になった。

「……まあ、オレだってつまらなかったワケじゃないさ」

正直俺には人間になったからといって、自分の体が今までとどう違うのかという事なんて俺には解りはしなかった。判る事といったらせいぜいがああ、歯車の鳴る嫌な音がしなくなったというだけだ。それでも人間になったという事実が、そのまま俺の寿命の延長にも繋がっているのは理解できた。

「……そっか、ならよかった。ところで織、今日はこれからどうするんだ？ まさか永がいないからって一日中部屋で寝てるって訳でもないだろ？」

俺の言葉に両儀はうーん、とかつきり五秒ぐらい悩んだ後、実に渋々といった感じで口を開いた。

「はあ…じゃあ少し出てくる」

言つやいなや、両儀はすつと畳から立ち上がると玄関へと歩いていく。

「お、おい待てよ。行くなら俺も行く」

そう言つて両儀を呼び止めると、両儀はきよとした顔で振り返つた。

「バイトとか言つてなかったか？」

「そりゃ四日からだ。だいたい、一応は人生初つてことになる正月にバイトなんかやるかよ」

妙に納得した面持ちでへえ、と頷いて両儀はドアノブを回した。

§§§§§

俺と両儀。二人とも特にこれといって暇を潰すような場所に行こうとして部屋の外へと出たわけでもなく、むしろ外出そのものが暇潰しの感があつたから必然的に俺達は二人して正月の真昼間つからぶらぶらと、その辺にある何の変哲もない住宅街の近くを歩いていた。

「なんだよ。さっきからオレの顔ずっと見てさ。何か付いてるのか？」

「い、いや」

どうやら両儀に見蕩れていつの間にやら足が止まっていたらしい。なんでもない、咄嗟にそうは言ったものの、両儀は怪訝そうに俺の顔を覗き込んでくる。その仕草は思わずどきつとするほどに可愛い……こういう時、ああ、俺はやっぱりこいつが好きなんだなあ、なんて再確認させられてしまう。

「…………ふうん？」

これ以上黙っているのは流石に少しいたたまれないので何かいい話題はないかと考えていると、両儀はその事柄には関心がなくなっただけというふうにより歩き出した。

……相変わらず切り替えの早いヤツだ。

昼が過ぎて、俺達は観布子駅から電車で十五分ほどいった所にある木理箕駅きりみへとやってきていた。駅の少し寂れた近場の商店街から更に徒歩五分ほど離れると、ほとんどが明るい色を使った壁の住宅群に混じって一軒だけ木造の、ぼろぼろな建物が目に留まった。築五、六十年は優に超えているだろうか。怪しげな店の看板には苔虎堂と書いてある。どうやら骨董品の他に和菓子も扱っているという変わった店らしい。

「へえ、ここって日本刀も売ってるのか」

そして、この変わった少女もこの店の変わった空気の中てられたのか、興味津々といった様子で店の中に入っていた。店内はいかにもといった感じのアンティーク調の品で固められていて、店主も、従業員も、店の中には誰もいない。ただ、古びて年代を感じさせるアクセサリや何に使うかよくわからない物ばかりが棚に並べられていた。

「日本刀なんて物に興味があるのか、織は」

「ああ。あるな」

「どうして？」

「さあ？ どうして興味を持つのか、なんてことはオレには解らないし、たぶん解る必要もないんじゃないか。あえて言うなら、興味を持つから、興味を持つのだ。言葉遊びみたいだけど、それが一番近いのかもしれない… 本当は」

まるで、そんな当たり前の事をなぜ聞くんだ？ とでもいいかげん調子で答えると、織は棚に並べられていた品々の物色に戻っていった。

§§§§§

礼園女学院高等部の職員室を、わたしと彼女らは後にした。

§§§§§

「オレ、前から思ってた。トウコって実はあつたま悪いんじゃないかって」

「あら、そう思ったなら直接言えばよかったじゃないの。私だって好きでこんな格好している訳ではないのよ」

一月四日、月曜日、曇り模様のお昼過ぎ。

私の横で、私の？目の代わり？と一応の？後詰？がそれぞれの言い方で同じ意味の悪態を吐いた。わたしは式が敵である事を柵の上に置いて、嘘偽りのない本心で同意する。

「そうね。よりもよってあんたたちを学園内に潜り込ませるなんて、正気の沙汰とは思えないわ」

「ひどいな。今回の犠牲者は間違いなくオレだぜ、きつと。転校する予定なんてありもしないのに、三学期から転入する芝居までさせられてる」

「姉サン。私も犠牲者じゃあないのかな？」

「おまえは自業自得だろ。トウコから聞いたぞ。それに、その姉さんって言うのをやめろ」

わたし達は高等部校舎の廊下を歩きながら、お互いの顔を見ずに話をする。

……今、わたしの傍らにいるのは両儀式と、両儀詠という名の少女二人だ。…ちなみに、両儀詠っていうのはあの永が姿を女に変えたものらしい。つい先日までは少年の姿をとっていたのに、たかだか三日でここまで変えられるとは、橙子師の話もあながち嘘とは言えないみたいだ。彼女は今回、もしわたしが原因の排除に至らなかった場合はわたしの代わりに原因を排除する役割を押し付けられている。少なくとも、橙子師から聞いた話ではそういう事になっていた。

その為にわざわざ式の妹…なんていう冗談もいいところの設定で転入の手続きまでしたのだし。

礼園女学院の制服は、そのままミサに出れるように尼僧服に近いデザインをしている。黒い礼服に生徒らしい機能性を混ぜ合わせたもので、あまり日本人には似合わない制服だ。

だというのに、両儀式は普段着のように違和感なく着こなしていた。式の黒髪は制服の色より深くて、体を覆う黒に溶け込んでいない。細い肩と首筋がやけに白く見えて、わたしでもどきりと知るほど印象的だ。

式は年上のくせに、なぜだか若々しく映る。

身長だってわたしとあんまり変わらないのに、その姿はしゃんとしていて、立派に物静かなクリスチャンの少女に擬態していた。

……… なんだか、すごくおもしろくない。

そんな式とは打って変わって、詠にはあまり礼園の制服は似合わなかった。理由としては、その浅黒い肌が礼園の制服に合わなかったからだろうか。いや、たぶんその外見よりも、詠がまどつている雰囲気の原因に違いない。なんというか、彼女はおちゃらけているのだ。外見はむしろ式と同じくらい制服と合っているというのに、すごく勿体無い。

「鮮花。あそこの二人組、こっちを見てる」

たった今すれ違った上級生を眺める式。

こちらを観察している生徒が何を話しているか、わたしは容易に想像できた。……礼園は女子校だから、生徒間での好き嫌いに男性という要素は含まれない。それでもやっぱり彼女達は男子像というものに憧れているわけで、中世的な美人は学年を問わず人気がある。

礼園にはそういったタイプの人は少なくて、式なんかが本当に入ってきたら間違いなくアイドルになるだろう。すれ違う生徒達はどうか男性的な凛々しさのある式の横顔を見て、そういう期待でおしゃべりをしているのだと思う。詠を見ている生徒達は、あまり好意的ではない視線で話しているのだが。

「たんに転校生がめずらしいだけよ。今回の事件には関係ないですよ」

「ふうん。冬休みだっていうのに生徒はいるんだ」

「うちは全寮制だから、寮に残りたいっていう生徒はわりと多いの。校舎は図書室のある一階と四階だけ開放してるけど、寮のもので代用が利くから校舎まで来る人は少ないわ。校則違反でシスターに呼びつけられるなら話は別だけど」

そのシスターの呼びつけも三度続けば退学だ。

実をいえば、わたしも数回にわたってシスターの呼びつけを受けている。

どのような理由があろうとも、この学園では外に出る事は許されない。両親に会いに行く、という理由でさえ認められないのだ。礼園に入学するという事はそういう事で、保護者達もその徹底した管理体制を期待して入学させる。

わたしや、友人である藤乃あたりが何度も外出届けを出しても退学にならないのはそれぞれの事情がある。

藤乃は、お父さまがこの学園の寄付金の三割をしめるといってお金持ちなので退学にはならない。というか、させてくれないらしい。

わたしは……まあ、画家という叔父のネームバリューもあるのだろうけれど、ひとえに礼園の進学率稼ぎのために雇われた傭兵みたいなものなので、外出を大目に見てもらっていた。礼園だって学校である事には変わりはなく、卒業生の中に有名大学に進学した生徒がいるにこした事はない。わたしは初めからT大学を受験し、合格する事を前提にして入学を許されたようなものだ。

……たしかに、勉強だけは神様に祈ってどうこうなる問題でもない。礼園の経営陣の考えは俗物的だけど、わたしにはあまり不満はなかった。そのおかげで例外的に外出が許されているわけなのだし。

そうやって一人で物思いに耽っていると、傍らの詠は、彼女にしては珍しくさして興味なさげな瞳で校舎を観察していた。それもすぐにやめて、胸にさげられた十字架の飾りをいじったりする。

「ヘンな場所。深い森、皆一様に物静かで同じ服装をして、そのうえ礼拝堂みたいな建物であるなんて。ここって本当に一色で染め上げられているのね。この分だと、安息日に生徒はあそこに集まったりするのかしら？ 天にまします我らの神よ、なんて」

素朴な質問を、詠はしてくる。

それにしても詠がお祈りの言葉を知っているなんて驚きだ。誰かに習ったりしたのだろうか。

「——礼拝儀式は朝夕にあります。ミサは日曜に一度行われるけど、生徒の参加が義務づけられているのは礼拝儀式だけでミサは自由参加。わたしみたいに高校から礼園に転入した人達はクリスチャンじゃないから、ミサに出た事はないわ。シスターへの印象は変わるけど、信仰は自由だから一応強制はされません。礼園は古くから

あるミッシヨンスクールだけど、数年前から良家のお嬢様育成学校になつてゐるから基督教に興味を持たない娘も多いの。どんなに素行の悪い子でも礼園を卒業すれば縁談は引く手数多になる。それが目的で入学させる親が大半なんだろうね。つまるところ、本当に神様を信じて入学する子は減つてきているんです。今の日本では生徒の両親だつて基督教を学ばせる為に入学はさせないでしょう。……それでも、中には真正のクリスチャンもいるようですけど」

「神様、か。いるところにはいるのかもな、そういうの。例えばおまえみたいな奴を除いて、だけど」

……なんか、すごい違和感がある。

式の男口調には慣れた気でいたけど、可憐な修道女としか見えない今の姿で言われると戸惑つてしまう。

「神様は不明だけど、他のものはどう？ 見つかった？」

歩きながら、わたしはさりげなく訊いてみる。

式はいや、と首を横に振つた。

「ぜんぜん。夜まで待つしかないかもな、この分じゃ」

眠たげな眼差しで、式はそんな事を言う。

……この女は、普通の人間には見えないモノを見る力がある。幽霊とかは言うにおよばず、物の壊れやすい部分を見る事もできるそうだ。くわえて運動神経は抜群で、根が凶暴ときている。

はつきり言つて、幹也とは正反対すぎる？ 特別？ な人間だ。わたし

は他のどんな相手より、幹也が式というのは嫌。

そう、わたしが橙子師に師事するようになったのは、元はと言えばこいつが原因なのだ。幹也の相手が並みの女なら一日で再起不能にしてやるのに、両儀式は並どころの騒ぎじゃなかった。

素のままじゃ太刀打ちできない、と判断したわたしは自分の常識を質屋に預けて、魔術師である蒼崎橙子に弟子入りした。……残念ながらまだ実力では式には敵わないので、今はこうして修行の日々を過ごしている。

だっていうのに、わたしは少しフクザツな気持ちだ。

なぜなら、それは――

「夜は鮮花の部屋で過ごすんだろ。……まあ、おまえのところなら我慢するか」

式は仕方なげにため息を漏らして言う。

幹也の話では、式は自分が寝床と定めた場所以外では腰を下ろしもしないのだそうだ。なのに、まだ見てもいないわたしの部屋に泊まる事を我慢する、と言う。

フクザツな理由はこれで、ようするに式はわたしを嫌っていないのだ。わたしは式が嫌いなのに、これじゃあどこかちぐはぐで、やりにくい。

わたしだって――幹也のことがなければ、両儀式の人となりは好きな部類に入ると思うんだけどなあ。

今度はわたしがため息を漏らす。

と、式がじろりとわたしを見つめてきた。

「鮮花。どこに向かつてるんだ。寮に行くんじゃないのか」

「寮に用はないでしょう。とりあえず四組の担任に話を聞くから、ついてきて。あんたはわたしの目なんだから、会う人全部を識別してもらわよ」

「——担任って、葉山ってヤツか」

「違うわ。その教師はもう外された——というより、クビになったらしいの。今の担任はたしか——」

「そう、玄霧皐月先生って人が担任をしてる。ふたりとも我が校じや数少ない男性教員よ」

「女子校に男の教師か。他のところなら珍しくないけど、この学園で男ってというのは異常だな」

式の言う事はもつともだ。

卒業までに生徒を非の打ち所のない女性に仕上げるこの礼園において、男の教員なんていうのは邪魔者でしかありえない。せつかく不純異性交遊を防ぐため外出を禁じて、敵が内側にいるのではトロイの木馬もいいところなのだから。

「……そうね。けど、その辺は込み入った事情があるのよ。葉山英雄っていうのは、学園でも嫌われものだった。教員免許を持っているかどうかさえ怪しい人で、実際に生徒に手を出した事もあるみたい。けどシスターはおるかマザーでさえ強く注意できなかった。どうしてかっていうと、うちの理事長は今でこそ黄路って名字だけど、婿に入る前は葉山っていう名字だったのよ」

「理事長の出来の悪い弟ってコトか。で、そいつはどうして辞めたんだ」

「十一月、わたしが橙子さんの事務所にいたの、覚えてる？ あの時も言っただけど、高等部の寮が火事にあつたの。一年生と二年生のＣクラス以下の宿舎である東館がほぼ全焼してね。礼園の寮は学年ごとに分かれているんだけど、さらに細かくクラスごとに管理されていて、火が出たのは一年四組のブロックだったのよ。葉山先生がさ、何を思ったのか放火したの。理事長もさすがにクビにしたけど、その頃には葉山は学園から消えていたわ」

逃げたんでしょね、とわたしは付け足す。

あの火事の情報は外に漏れていない。消火にやってきた消防士の口も、礼園に在学する生徒の父兄たちが協力して押さえ込んだという話だ。……大切な娘がいる学校で不祥事は出てほしくないという考えだろう。

……人が。一人、死んでしまったというのに。

「——それはそれは。で？ 玄霧先生っていうのは？」

「玄霧先生は葉山とは別、というより、正反対の人よ。礼園の生徒であの人を嫌ってる生徒はいないと思う。」

玄霧先生は去年の夏からの勤務で、葉山のように後ろ盾はないって話。マザーのお墨つきがあるだけよ。うち、元をただせばイギリスにあつたどこだかの名門の姉妹校なんだって。イギリスの本校はなくなっちゃったけど、姉妹校である礼園はまだ残っている。マザーとしては教員は全員英国の人にしたいんですけど、日本語ができる生粋のイギリス人教諭なんてそういないのよ。その点、玄霧先生は外国育ちで発音も完璧。汚らしい米国なまりがないって、シスター達も喜んでるわ」

「じゃあ、玄霧っていうのは英語の教師か」

むむ、と式は眉をひそめて呟く。……もしかすると。和風びいきなこいつは、英語というものがまったくダメなのかもしれない。

「英語だけじゃないわ。たしかドイツ語とフランス語の教員免許も持ってるって。中国語もいくつかマスターしてるらしいし、南米の一部族のものまで知ってるっていう……まあ、言語オタクって影で呼ばれてるヘンな人よ。……黒桐鮮花と両儀式にとっては、違う意味で特殊な人。わたしは、その先生がすごく苦手です」

貴女にとってはどう、と詠に尋ねると詠は少しだけ口を歪めてほとんど聞き取れないくらい小さな笑い声を漏らした。

「まあ、それは秘密ってコトで」

……まさか、秘密なんていう答えを詠が返してくるとは思わなかった。詠の事だからいつも通り、面白い人だとか返してくると思ったのに——意外だった。

そして私達は目的の場所の扉前で立ち止まった。

一階にある英語の準備室。礼園では職員室は事務を執る場所であって、各教科の準備室は教師ごとに一部屋設けられている。

玄霧先生が使用しているのは葉山英雄が使っていた準備室だ。

わたしは後ろの二人に気付かれないように小さく深呼吸して、準備室の扉をノックした。

空の境界 二次創作 第三十六話

結局、巴達は幾つかの和菓子と一振りの刀を買って荅虎堂を出た。

「——いいなあこれ。とてもいい」

織は買ったばかりの刀が入っている長い包みを抱えながら子供のようにはしゃいでいた。笑み崩れたその顔を見て巴は思った。織をそうさせている原因が刀などという物騒なシロモノでさえなければ素直に微笑ましい光景だろうに。そう考えて、すぐに思い直す。いや、そうでもないか、今のこの光景だって俺からしてみれば十二分に魅力的なのだから。

「それ、そんなに良いモノなのか」

巴がそう尋ねると織はやや呆れたような顔をした。

「ああ。なんたって——」

駅員の不審そうな視線を気にも留めず、織は刀の包装を解いて巴に刀身を見せようとする。

巴はそれを慌てて押しとどめた。

「待て待て、落ち着けつて。あとでいくらでも見せれるだろ？ それに、こんな所でそんなもん出したら確実に俺らは警察に世話になる事になるだろうが」

「……まあ、それもそうか。それに、見せるなら永もいた方がいいな」

織は納得して、それでもまだ残念そうな表情をしていたが、それも電車に乗り込む時までには綺麗さっぱり消えていた。

「——うん。やっぱりそっちの方がいい」

そうはにかむ様に笑って、織は電車に揺られた。

§§§§§

玄霧皐月はわたし達に背を見せて机に向かっていた。

彼の机は窓際にあり、灰色の日差しが部屋を照らしている。準備室はその名に反して研究室のように散らかっていた。

「玄霧先生。1-Aの黒桐鮮花です。マザーからのお話は届いているでしょうか」

わたしの声にはい、と頷いて彼は振り返る。

椅子がくるり、と回って玄霧皐月はわたし達と向かい合った。

「——」

式の息を呑む気配がわかる。

わたしだって初めてこの教師と向かい合った時、目眩を覚えたほどなんだから。

……ただ不可思議なことに、玄霧先生は詠を見た瞬間、本当に一瞬だけ、心底驚いたような表情を気がした。

「ああ、君が黒桐君か。うん、聞いたとおりの子みたいだね。とりあえず座って。話、長くなるんだろう？」

やんわりと言って、玄霧先生は微笑む。

年齢は二十五歳ほどで、礼園の教師の中では一番若い。いかにも文系といった細い体付きと黒ぶちの眼鏡が、この人を無害な人物だと教えてくれる。

「一年四組の話かな」

「……はい。カッターで切りあつたという生徒の話です」

わたしの返答に、玄霧先生は申し訳なさそうに目を細めた。それは見ているこつちが悲しくなるような、寂しそうな顔だった。

「力になれなくてすまないけれど、私自身、その件に関しては記憶が曖昧なんだ。詳しく覚えていないし、彼女達を止める事もできなかった。たしかに自分は現場にいたのにね。私は何もできなかった」

自分の無力さより、傷ついた生徒達を思つて玄霧皐月は目を閉じる。

……この人は、一緒だ。誰かの悲劇を深く考えて、しよい込む必要のない重荷を背負っている。決して他人を傷つけない、棘のない優しいすぎる人間――。

「先生は、その、彼女達が口論した原因をご存知ですか？」

わたしは念のために聞いてみる。

玄霧皇月は、静かに首を横にふった。

「……他の生徒達の話では、私が二人を止めたという話です。けれど私にはあの日の記憶がない。うん、物忘れしやすい質だとよく言われてきたけど、ほんとうに記憶が抜け落ちるなんていうのは初めてだ。なにか大事な事を聞いていたとしたら、取り返しがつかないいや、それ以前に原因は私かもしれない。私はあの日、彼女達と同じ教室にいた。それだでも、責任を追求されるべきだ」

思い詰めた表情で先生は言う。

そこで、わたしはようやく気がついた。忘れた秘密を手紙にして送られている、というDクラスの生徒達の焦燥は酷いものだろう。けれど見えない不安に責められているのは彼女達だけじゃない。問題が起こり、その場にいたにもかかわらず何も覚えていないという玄霧先生の状態だって、危ういバランスを保っている筈なのだ。

もしわたしが彼の立場でも、きっと同じ不安を抱いただろう。記憶がない、という事はそれだけで不安になる。その間に何を手に入れたのか、何を失ったのか。確実に行った自分の行動が分からない、というのは底のない落とし穴だ。

悪く思えば思うほど、穴は深く暗くなっていく。そんな事はない、と否定する材料さえ忘れているのだ。先生が自分が原因だと思うのは、無理のない事だろう。

「——ですが先生。1・Dの生徒達は事のなりゆきを終始見てい

ます。先生は止めに入っただけだという話ですが」

「違うよ黒桐君。覚えておきたまえ、自分の記憶を確認する際には、他人の記憶はアテにはならない。過去を決定するのは、やはり思い出という自身の秤だけなんだ。……だから私は、やはり私が悪かったという可能性を考慮するべきだと思う。」

——いや、すまない。こんな話は無意味だったね。こんな状態の私では頼りないだろうが、質問を続けてくれないか」

無理をして微笑む彼に、わたしは頷く事で応える。

「……わかりました。では、Dクラスそのものに何か異状はありませんか？ 例えば生徒全員が課題を忘れてくる、とか」

「そういう事はないよ。ただ、たしかにうちの教室は張り詰めている、とシスター達がもらしていたな。……私自身、以前の彼女達を知らないから断言はできないが、たしかに四組の教室は静かすぎると思う」

「それは、何かに怯えているような雰囲気でしょうか？」

予想通りの展開にわたしは確認をとる。

カッターで切りあった、という二人の生徒。彼女達の周囲にいた他の生徒達は、どうしてそこまで白熱した口論を止めなかったのか。

興味などなかったから？ いや、それなら会話の内容なんて聞いているはずがない。至極当然な流れだけど、おそらく忘却した記憶を記した手紙は、一年四組の生徒全員に送られていたのだ。だから生徒達は言い争う二人を止めなかった。それで、少なくとも二人のうちどちらが手紙の差出人かはつきりするから。

……けれど、玄霧先生の答えはわたしの推理を裏付けてはくれなか

った。

「……そうだな。怯えている様子とは、違うと思うよ」

「——怯えてはいなかったんですか、みんな？」

「ああ。怯えていたというより、むしろ監視しあっていた、というのが正しい。それが何の為なのかは分からないが」

監視しあっていた——か。

ニュアンスがズレてしまったけど、発想自体に間違いはないと思う。

ようするに彼女達は敵が外ではなく内側、つまり教室の誰かだと確信している、という事なんだから。

「先生。Dクラスの生徒達と連絡はとれますか？」

とにかく、事を忘れていない当事者達に話を聞くしかない。妖精の話も、噂している本人達に聞く分にはおかしく思われないだろうし。

「連絡をとる必要はないよ。うちのクラスの生徒達は全員寮に残っているから、すぐに話はできると思う」

玄霧先生の返答は、わたしを驚かせてばかりだ。

一年四組の生徒が全員、学校に残っている？ そんな偶然は必然と同じだ。

「失礼しました。またお話を伺いにあがるかもしれませんから、その時はよろしくお願いします。式、行きましょう。詠、あなたも」

わたしは傍らで無言だった二人を促して立ち上がる。

その時——玄霧皐月は、きょとした目でわたしを見つめた。

「あの……先生、なにか？」

先生は答えない。

かわりに、式が初めて声をあげた。

「式というのは私の事です、先生」

式は女性の口調でそう言った。

先生はああ、と明るい声をあげる。

「そうか、さつきから君は居たね。そちらの娘も見ない顔だけど、新入生かな」

「さあ、どうでしょう。校舎を見てまわって、面白ければ本当に転入してもいいと思っています」

「似たようなものです。まあ、冬休みは少なくともね」

玄霧皐月は、そうか、と嬉しそうに頷いて、式をじっと見つめだした。まるで憧れのモデルを前にした画家のように、細かな特徴を観察する。

わたしはそれを見ているしかない。

その時。準備室の扉がノックされた。

「失礼します」と、綺麗な声がする。

準備室に入ってきたのは、髪の長い上級生だった。

凛とした切れ長の目と、背中まで伸ばされた黒い髪。

美形の多い礼園の中でも、一際目立つその美人を、わたしは知っている。

というか、去年まで生徒会の会長をしていた上級生を知らないわけではない。

人を見下すような瞳と、細く長い眉毛は美貌であるより以前に、とにかく迫力がある。なんだかお城のお姫様みたいな上級生は、たしか――

「おや、黄路君。もうそんな時間になったのかな」

玄霧先生が入ってきた黄路美沙夜に声をかける。

黄路先輩はええ、と自身ありげに答えた。

「皐月先生、約束の時間を過ぎています。午後一時に生徒会室にいらしていただかなくては。時間は永遠ではないのですから、有効に使っていただかないと困ります」

堂々と胸をはって、黄路先輩は玄霧先生を非難する。

堂に入った威厳は本物で、彼女は生徒会時代から暴君で通っていたらしい。わたしが転入した頃に生徒会の引き継ぎがあったからよくは知らないけれど、藤乃の話ではシスター達でさえ黄路先輩には意見できなかったそうだ。

話によると、今の理事長も彼女には意見できないでいるらしい。

それも当然で、婿養子である現理事長と、正当な黄路家の次女である黄路美沙夜とでは発言力が違いすぎる。

……黄路の家の子供はみんな養子だという話だが、それを引け目に感じる程度の精神力では黄路財閥の跡継ぎにはなれない。逆に養子であっても誰よりも黄路の者らしく振る舞える心の強さを求める為に、黄路家は将来有望な子供を養子にとるといふ。……ようするに、黄路先輩はそういう鉄の女なのだ。

ただ救いなのは、黄路美沙夜は正義の人らしい。校則を破る生徒には容赦がないが、規則を守っている生徒には面倒見のいい先輩なのだそうだ。本人も敬虔なクリスチャンで、日曜の昼ミサには毎回参加しているというし。

「黄路さんは厳しいですね。エイエンなんて、また、難しいことを」にこりと微笑んで、玄霧先生は椅子から立ち上がる。それを黄路美沙夜は苛立たしげに眺めていた。……たしかに、彼女のように規律に従って生きる人には、玄霧先生のようにゆったりとした人は癪に障るのだろう。

黄路先輩は視線だけで、貴女達は？ という敵意を向けてくる。これ以上ここには何かと面倒そうなので、さっさと退散しようと

式の腕を引っ張った。

「さ、次に行こう」

わたし達は準備室の出口へ歩く。

と、その扉を玄霧先生が開けてくれた。それは客人を見送る執事みたいな自然さで、わたしはすみません、とお辞儀してしまう。

「いえ、私のほうこそ役にたてなくてすみません。三人とも、いい休日を」

やっぱり柔らかく微笑んで、先生はさよならを告げる。

どこか淋しい、空気のような笑顔だった。

「——先生って実は笑ったコト、ないでしょう？」

いきなり、詠がそんな事を言った。

先生は意外そうに目を開くと、へえと頷いて、

「うん。たしかに笑った事はないよ。——一度もね」

淡い笑みを浮かべて、玄霧先生はそう答えた。

## 空の境界 二次創作 第三十七話

——今回のつて正直行きたくないんだよなあ。姉ちゃんや巴サンと一緒に過ごす約束もしてるし……仕方ない、代わりを作ろうか——

一月三日の夜。そう言って、永は詠カレワタシを作った。

礼園女学院で起こった事件の原因の排除をやれ、と橙子サンから押しつけられた永は、それをこなすために（そしてただ面白半分で）詠という人格と、詠という体を作成した。

目が覚めて初め、永に私の役目を伝えられた時、私には妖精使いの事も、礼園女学院だとかいう所で起こっている事件もどうでもいいものだったから、正直あまり気乗りはしなかった。

だって、たとえ永が橙子から仕事を押しつけられたからって、それは私がやる必要なんてない筈だ。永がやったって、式がやったって、橙子がやったっていい。

なんていう無駄な存在だろう。わざわざ、こんなくだらない事の為にだけに生み出されたなんて。冗談にしてもひどいのに、冗談じゃないっていうんだから尚更だ。

けれど、どうせ最初からそれ以外に私にはする事などないのだ。だったら、反対しようとするのに意味なんてない。

私は私の為すべき事を聞いて、永の代わりとして礼園女学院に赴く事になった。もちろん、さも私が永であるかのように振る舞って。

ssssss

準備室を後にして、私達はひとまず寮に戻る事になった。

私はもう少し学院をまわってみようかと考えていたから、それを鮮花に言ったのだけれど、鮮花は私が一人で学園内を動き回る事を酷く嫌がって、結局は私も彼女達と寮に戻る事になった。理由としては、勝手に動かれて変な事をされたらたまったものじゃありません、だそうだ。

その時は少しひどくはないだろうかと思って反論しかけたけど、まあ仕様がなかと考え直した。鮮花は私の事を全くと言って良いほど知らないのだ。私が永とは違って面白いとか、面白くないとかをそこまで重要視する訳でもない事だって知らないだろう。

「——教えてないのだから、当たり前か」

そうだ。当たり前なのだろう。だって、人は知らされなければ分からない事ばかりの生き物だ。

「何か言ったかしら、詠？」

「なにも」

一階の廊下を抜けた二人の後に続いて、中庭に出る。

廊下を歩いた時に、やはりというかなんというか、この学園はそこかしこから妖精の気配が伝わってきた。妖精の大半は小人。橙子師

の言つとおり、翅の生えたメルヘンチックな妖精なんていうのはいない。いや、いるにしても、それは魔術師の使い魔だけだ。

高等部の校舎から学生寮までの道のりは長い。鮮花によると、この学院はその敷地の広さをいかすためか、初等部から高等部までの校舎や体育館、学生寮はどれもこれも互いに離れているらしい。

学生寮に向かう途中、マラソンコースにもなっているらしい林の中を抜けるのだそうだが、上履きのまま寮まで行けるようにだろう、渡り廊下が設けられていた。

ぎしぎしと音の鳴る板張りの廊下を、私達は歩いていく。

「玄霧先生が幹也に似ていたから驚いたんでしょう、式」

前を歩く二人の会話が耳に入ってくる。

ああ、と式は素直に頷いた。

「でしょう？ 幹也より先生のほうがハンサムだけどね」

「そうだな、玄霧のほうが顔の造形に隙がない」

台詞だけが違って、彼女達の言っている事は同じだった。彼は幹也に似ている。だけど玄霧のほうが顔の造形はいい。

そう、あの玄霧皇月という人間は黒桐幹也にとってもよく似ている。それこそ同じ人間だといってもいいほどに。

でもきつと、永にとっては違うのだ。どこまでいっても玄霧皇月はやはり――

そうして歩いていくと、式は急に足を止めて、林を睨むように木々の奥をじい、と見つめた。

「鮮花。あの奥に何かあるだろ。木造の建物みたいだけど」

「ああ、アレは旧校舎。使われなくなつた初等部の校舎で、冬休み中に取り壊す予定だけど、それが？」

「ちよつと見てくる。鮮花と詠は先に戻つてろ」

黒い礼服のスカートを翻して、式は早足で林の中へと消えていった。式が消えていった方向をよく見ると、淡い光の粒みたいなモノがふらふらと飛んでいるのが見てとれた。妖精だ。

「ちよつと、式！ 待ちなさい、独りで勝手に動き回らないって約束でしょう！」

鮮花には妖精が見えない。だから、彼女には式が興味本位に行動してるようにしか思えないのだろう。

叫んで式の後を追っていく。

私もそれに続こうとして――。

「貴女たちは……」

私は、背後から聞こえた声に足を止めた。

ssssss

『式、新しい仕事だ』

と、トウコは電話越しに言った。

一月二日の夜、橙子は今までとは毛色の違った仕事を私に押しつけた。

鮮花の通う礼園女学院におかしな事件が起きたから調査に行つてほしい、という内容に、私は心弾まなかった。

私——両儀式が蒼崎橙子に協力しているのは殺人ができるからなのに、今回の仕事はただ原因の究明をするだけときている。それでは私の虚ろな心持ちは渴いたまままで満たされない。

そもそも、トウコの仕事で何かを殺すコトはあつても人間という物を殺したコトは一度もなかった。たいていは訳のわからない化け物の始末で、夏に一度そういう機会があつたけれど、結局、私は『物を視るだけで曲げる』という相手を殺すまでには至らなかった。……正確に言うのなら、その仕事の最中に式がどうして殺人行為に執着するかが分かつてしまつて、私は殺し合いなら誰とでもかまわない、という妥協を結んでしまっている。

それはとりあえずお腹は膨れるけれど、味に満足できないという状況だ。

そんな生活に不満を感じはじめている最中、今度は事件の首謀者を発見するだけでいい、という曖昧な仕事がやってきた。

私は乗り気ではなかった。けれど他にやる事もないのだ。部屋で眠っているか、礼園女学院にいつて眠るかの違いなら、断る理由が見当たらない。

私は詳しい事情を聞いて、妖精が見えない鮮花の目として礼園女学院に赴く事になった。三学期から編入予定として偽装して、冬休みだけの転入生として。

§§§§§

林の中を歩く。

鮮花と詠は付いてこない。

私は木々のカーテンの奥に見える、木造の校舎を目指していた。

曇った天候のせいか、林の中は霧がかかっているように灰色だ。

礼園女学院の敷地は広く、校舎と校舎の間に植えられた木々は、すでに学校で所有する林の域を逸脱している。

礼園の敷地の大半は、木々に埋め尽くされた森だった。学園の中に森があるのではなく、森の中に学園がある。

腐葉土の地面を歩きながら、私はぼんやりと空気の匂いをかいだ。

滾々と湧き出る水のように、空気には薰りがあり、色がある。木々の葉のにおいと虫の音が混ざりあって、心が霞に酔ってしまう。

熟れた果実みたいな甘ったるい空気。時間がゆったりと進ませていく風景たち。――たしかに。外界と遮断されたこの学園は一つの異界だった。

ほどなくして林を抜けた。

初等部の校舎だったという建物は四階建ての古めかしい木造だ。

森の中、木々を円形に伐り取った広場に、校舎は呼吸さえなく佇んでいる。

広場には枯れ草が広がっていて、なんだか草原みたいだ。

校舎は朽ち果てる時を待つ、臨終前の老人によく似ていた。

草を踏みしめて校舎の中に入ると、中は外観ほどくたびれてはいなかった。

初等部のものであるからか、校舎はどこともなく小さい気がする。板張りの廊下は、歩くたびにきいきいと音がした。

きい、きい。きい、きい。

……虫の音は校舎の中にも聴こえてくる。

私は無人の廊下の真ん中で歩くのをやめた。

「玄霧、皐月」

さっきの教師の事を考える。

鮮花は、アレが黒桐幹也に似ていると言った。似ているというのなら、似ている。

人間はみんな同じ顔つきだから、誰だってそっくりだ。けれど、アレは外見だけが似ているんじゃない。まとっている空気さえ同じなのだ。

「……似ているんじゃない。アレはそのままだ」

けれど、何かが決定的に違う。

なにが？

答えは出ない。

喉まで出かかっているのに、あと一歩で思い出せない。

識っているのに分からないなんて、私も随分と人間らしくなったものだ。

半年前——目覚めたばかりの頃は、分からない事なんてなかった。分からない事は両儀式が識らない事だから、考える必要なんてない。でも今は、両儀式が識らなかった出来事を、私は知識として経験している。事故の前の両儀式と事故から回復した私との間にあった絶望的なまでの断絶の壁は、段々と薄れていくように思える。

それはきつと、私としての感情を持たなかった私が、こうやって未知の出来事と遭遇する事によって『私の記憶』を重ねているからだ。

私は——胸に空いている穴を、くだらない現実や瑣末事にすぎないささやかな感情で埋めていく。依然として生きているという確かな実感はないが、目が覚めたばかりの頃ほどの虚無感はなくなっている。

なら——いつか、この胸の空がなくなれば、私は人並みのユメなんていうものを観れるようになるのかもしれない。

「淡い希望だね、織」

私は私に囁いた。答えはないと分かっていた。

『いや、それはつたない希望です』

——なのに、応える声があった。

キイ。キイ。キイ。

虫の音がする。

首の後ろに、ちくり、と何かが触れた。

「——あ」

意識が遠退いて、ここにいたという記憶が白くなっていく。

今見ている景色が、消しゴムをかけられたようにザーザーと無くなっていく。

……なんて、無様。ここがムシ達の巣だと判っていたからやってきたというのに、私は——

「いの」

不愉快になって腕を動かす。

自分のうなじあたりに手を伸ばして、私はたしかに何かを掴んだ。

掌より少しだけ大きい人型をしている、というのは掴んだ感触で判る。

驚掴みにしたソレを、私はそのまま握り潰した。

キイ、と一際たかい音。

それで遠くなっていく意識は元に戻った。

首の後ろにやった手を戻して、じっと見つめる。

手の平には白い液体しかなかった。どろり、とした粘着性の液体が床にばたばたとこぼれていく。

潰した途端、ソレはこうなってしまったようだ。

私は妖精なんて見た事がない。

だからこれが鮮花が言っていた妖精像と同じなのはてんで判別がつかなかった。

「……気色悪い」

ぶん、と手を振るって液体を払う。粘着性のくせに肌に張りつかない、という不可思議な液体はキレイにとれた。

虫の音はもう聴こえない。

……あまりの不愉快さに勢い妖精を潰してしまったが、それはやっぱり失敗だったみたいだ。

あれほど群れていた妖精らしき気配は、もう一匹だってありはしない。

仲間を殺されて逃げ出したのか、私が妖精を手にとれるのを見て妖

精の持ち主が撤退したのか。

どちらにしても、この廃校舎から手がかりはなくなったようだ。

私は来た道をたどって、渡り廊下に戻る事にした。

§§§§§

林の中の渡り廊下を戻ると、律儀な事に鮮花と詠が待っていた。

黒桐鮮花は私よりいくぶん小柄で、髪が長い。

さっきの黄路とかいう女はお城のお妃みたいなヤツだったが、鮮花はお城のお姫さまという表現がぴったりする。ただ、その前に『勝気な』という単語が付けられるのだろうけれど。

私は無言で鮮花の傍らへと歩いていく。

「あれ？ 式、行かないの？」

……いきなり、鮮花は妙な事を口走った。

「行かないって、どこに？」

「だから——あそこに」

……話はまったく要領を得ない。

——なるほど。私は鮮花の後ろにいる詠に訊いてみる事にした。

「詠」

「そうね。考えている通りよ」

「鮮花。今何時だかわかる？」

私は鮮花に向き直って訊ねた。

「午後二時をまわったところだけど――」

鮮花は愕然と言葉を切った。時刻はすでに三時を回っている。

「一時間も立ち尽くしていたなんて余裕だな。何をしたか覚えているのなら、問題はないけどさ」

鮮花は無言で、かすかに腕をふるわせながら自らの唇に指をあてた。

彼女は驚きを隠せない様子で中空を見つめている。

おそらく。彼女は私が戻ってくるまでの間に、何をしていたか記憶にないのだ。

「式、わたし、まさか」

信じられない、と鮮花は身を震わせて呟く。

それは怖れからくるものではなく、純粹に怒りからくるものだろう。自尊心の塊みたいな鮮花にとって、自分も知らぬまにやられていた、なんてことは屈辱以外の何物でもないだろうから。

「……詠。あんたも、あんたも奪われた？」

鮮花はわなわなと震える声で詠に訊ねた。

いいえ、と詠は首を横に振った。

「私は奪われていないわ。ただ私は、鮮花と同じように阿呆みたく突っ立って、あの魔術師が去るのを待っていただけ」

「……何故？」

「何故？ 私はまだ鮮花からバトンを受け取っていないもの。鮮花と式は事件の調査、私はその後の排除を受け持つ。最初にそう決めた筈だけど、それすら忘れた？」

とたん、鮮花はカッと顔を赤らめる。

それは自らの未熟さと屈辱が入り混じったもので、恥ずかしいんだか悔しいんだか。鮮花はいつだって冷静なくせに、こうやって感情を率直に表してしまう。それはとてもアンバランスで、周りからして見れば可愛らしい事に違いない。

ただ、私はそれよりも、詠の口調に違和感を覚えた。いつもの――少なくとも私が知っている永が姿を変えてコイツになっているというのなら、こんな言動はしない。それくらいは判る。あいつはたしかに人を苛立たせる事をよくやるかもしれないが、あそこまであからさまに人を馬鹿にするような事はしない。

だとしたら――

「――寮に戻ります。方針、改めなくちゃいけないみたいだから」  
拗ねるように言って、鮮花はつかつかと歩き出す。

その後ろで、私はたった今感じたこの違和感を確かめようと詠に訊いていた。

「今日のおまえ、少しヘンだぜ」

前を歩く鮮花には聴き取れないような声で、詠は答えた。

「変ではないよ、式。私は詠。<sup>アナタ</sup>式が式であるように、詠は詠である<sup>ワタシ</sup>というだけのコト」

「——つまり、おまえは」

私も、鮮花に聞こえないように声を落とす。

詠は、軽く首を振って微笑んだ。どうやら、そこから先は言わなくていいという事らしい。私たちは、まるで先ほどまでの会話などなかったかのように、互いの顔も見ずに無言で鮮花の後に続いた。

……ふと前を見れば、もうすぐ鮮花の住む高等部の学生寮が見えてくるところだった。

空の境界 二次創作 第三十七話（後書き）

詠はこの章だけの使い捨てキャラにしようかと思ってるんですが、  
どうですかね？

記憶だけは永にフィードバックされる感じにしようかと思うのですが……

## 空の境界 二次創作 第三十八話

寮に戻って一年四組の生徒の何人かと話をし終わった頃、空はもう暗くなるところだった。

学校が休みといっても寮の規律は生きているとの事で、私たちは鮮花の寮室へと移動した。

ここでは午後六時以降、寮内を行き来する事さえ禁止されてしまう。トイレは別問題として、一階にある学習室を利用する時のみ部屋から出る事を許されるのだそうだ。

高等部から入った生徒はその不自由さに慣れず、たびたび友人の部屋に遊びに行つては見回りのシスターに見見されるらしい。初等部から過ごしている生徒は慣れたもので、無闇に外出はせず、するにしてもシスターの見回りルートを知りつくしているので見つかる事はないのだとか。

……そんな話を、鮮花は丁寧に聞かせてくれた。

だからなんなのだ、とも思う。こんなのは私にまったく関係のない話であるし、そもそも事件にすら関係のない話ではないか——どうせ愚痴だろう。まあ、今日の成果を考える限り、愚痴の一つや二つこぼしたくなるものかもしれないが。

鮮花は自分の椅子に座っている。

一年生の部屋は相部屋で、鮮花のルームメイトは帰省していた。

部屋には壁と一体化した机が二つと、二段ベッドが一つ。私は眠る必要がないから、ベッドを使うのは式のほうだ。

他には個人の持ち物であろうカラーボックスやら本棚やらが壁際にあって、部屋自体は細長い造りになっていた。

やはり、こういう場所の空気は落ち着く。学院の敷地や建物からは歴史が感じられるし、なによりもこうした場所特有の静けさが私には好ましく思えた。

鮮花は部屋に帰るなり制服を脱いで、パジャマに着替えていた。式も私も、着替えなんて持ってきていなかったのも、この暑苦しい制服を脱ぐ訳にもいかなかった。

仕方なく、制服のまま床に腰をおろして鮮花の話聞いていた。

「……というわけで、寮内での行動はできませんので今日はもうお休みです。起床は五時ですが、冬休み中、朝の礼拝はないから六時あたりまで眠っていても平気です。……いい？ 他の生徒やシスター達はわたし達が一年四組の事件を調べているって知らないから、目立つ行動は極力裂けること。あんた達と違ってわたしはこのあと二年間もここで暮らすんだから、騒ぎだけは起こさないでよね」

「いったい、何が心配だというんだろう。」

式にはもともとやる気なんていうものは存在しないし、私はそもそも鮮花達が失敗した時の為にいるのだ。騒ぎを起こしたくないのなら、もともとから失敗しなければいいだけの話。

「安心しろ。オレの役目は視る事だけだから、刃物は持ってきてな

いぜ。まだ妖精使いとやらに個人的な恨みも持っていないから、平和なもんだよ。感情にまかせて突っ走るっていうのなら、おまえの方が心配だね」

「わたしは冷静です。目的は真相の解明であって原因の排除じゃありません。調べるだけ調べたら、さつさと詠にバトンタッチしますから」

すんなりと受け流しているけれど、鮮花の目はちっとも大人しくなれない。けどそれでいい。そうすれば、少なくとも私にお鉢がまわってくる可能性は減るんだから。

…だけど。もしそうなれば、あちらへ帰った私はさつさと永に記憶を渡して、それで消え去るんだろうか。自分の価値も、意味も判らずに？ どうなんだろう。判らない。

「そうだな。そう出来ればとてもいい、鮮花」

鮮花はじとりと式に視線を向ける。

「……人を馬鹿にしてませんか、貴女」

「冤罪だよ、それ」

困ったように非難する鮮花を見て何か思うところがあったのか、式は笑みをこぼした。

「——いいです。わたしは間違っても問題は起こさないから、式に心配してもらう筋合いはありません。さて、話を戻すけど。今日会った人の中でおかしな人はいた、式？」

カチ、と鮮花は話題を切り替えた。

「おかしなヤツっていったら、会った連中全部だぞ。一年四組のやつらはみんな首元にアレがついてたし」

「アレって、式が潰したっていう妖精の血液？」

鮮花は眉をひそめる。考えてる事は判らなくもない。式はひどい奴だ、とか、とにかくそんなところだろう。

「血とは違う。蝶とかの翅とかについてる鱗粉みたいな物だ。体液だったら連中も気がつくだろう。それと、玄霧って教師にもあったぜ。あの時はなんだか判らなかったけど、思い返してみれば首元に残ってた」

「——そっか。ねえ式、記憶を奪っていく理由ってなんだと思う？」

「知らない。オレがやってるわけじゃないから」

「ええ、ええ、そうでしょうとも。あんたに意見を訊くなんて、私も随分と弱気になったもんだわ。詠、あんたはどう？」

「さあ？ 私に訊いてどうなるものでもないよ。そういうのは、自分で見つけるものだから」

私が言った事は見事に鮮花の神経を逆撫でしたらしい。クツションを叩きつける様な勢いでこちらに投げつけると——もちろん避けたが——鮮花は一人で思案しだした。

「……十二月からDクラスの生徒達に送られていた手紙。手紙の内容は『本人も忘れている秘密』だった。同時期、学園内で妖精の噂が流れている。この妖精は枕元にやってきて記憶を奪っていくらしい。」

冬休み前のDクラスの教室で、ふたりの生徒が口論のすえカッターで切りあった。喧嘩の原因はやっぱり手紙。一月もの間、自らも

知らない自分の記録を配達され続けたDクラスの生徒達はクラスメイトの言い争いを傍観してしまうほど、精神的に麻痺している。自殺者ぐらい出てもおかしくない状況だっていうのは、四組の生徒達と話して実感できた」

ぶつぶつと鮮花は今までのあらましを整理している。

「式は実際に妖精に遭遇したし、わたしも一時間ばかり記憶に空白がある。……何をしていたんだろう。一時間あればたいいていの事は出来るっていうのに」

記憶の空白は鮮花みたいな人間でも気になってしまふものらしい。

……もし、もし私が今の鮮花と同じ立場だったら——いや、やめよう。そんな問いには何の意味もない。私は何の痕跡も残さずに消えるのだし。

ならば式はどうなのだろうか。これもまた意味のない問いであるのは疑いの余地もない事であるけど、まあいいか。

四年前……式が高校一年の頃。あの時はまだ、シキは二つに分かれてはいなかった。式には、常に織が居た。

けれど今、シキの中に織は居ない。彼の持っていた記憶は永遠にシキには帰らない。それはどんな気持ちだろう。自分の半身を奪われるのは、いったいどんな気持ちなんだろう。

……けどやっぱり、私にはそんな気持ちは判らない。きつと半身か——それと同じくらいには大切なモノができなければ、判る事はないだろう。

「――あれ」

ふと見ると、式が何かに気付いたように顔をあげていた。

「なあ鮮花。本人さえ忘れている記憶は、どうやって調べられるんだろう」

「そうね……催眠状態にして脳の深部からひきだすんじゃないかしら。記憶の四大機能って知ってる、式？」

「銘記、保存、再生、再認だろ。ビデオテープと同じ。録画した映像にラベルを貼って《銘記》する。それを大事にしまって《保存》する。見る時はデッキにいれて《再生》する。再生した内容が以前と同じか《再認》する。どれか一つでも故障すれば、脳は正常に働いてくれない」

「そう。本人が忘れていても、脳そのものが故障していなければ記憶はどこに残されているのよ。脳は絶対に銘記した物は忘れないから。妖精はそれを奪っていくとしか思えない」

本人が忘却して、もはや結晶化してしまった記憶を奪い去っていく。それについて、私は思った事がある。

結晶化してしまった記憶というのは、忘却、失われた記憶だ。それをわざわざ見つけて取り出し、手紙にしてまた元の持ち主に返すという行為を自分の存在意義にしているあの魔術師は、なんてつまらない事を延々繰り返しているのだろうと。

あなたはこういう出来事を忘れていますよ、今度は失くさないようにしてくださいね、そんなもの、結局は偽善でしかないのだから止めてしまっても誰も気にも留めないというのに。

「記憶を奪うのは何かの証拠を隠滅する為かもしれない。けど、忘れていた記憶を見せつける、っていうのはどういう意味合いなんだろう」

不意に、式がそんな言葉をもらした。

鮮花はそうね、と椅子に背を預ける。

「やっぱり罪の告発なんじゃないかな。おまえは昔、こついう罪をおかしているって報せるための」

「一カ月も、延々と違う罪を見せるのか。それは告発じゃなくてただの嫌がらせだ。子供じみてる」

私はそれを聞いて、子供じみてるというよりも、ひょっとして相手を精神的に追い込む為の手段じゃなかつたかとも思った。少なくとも、下手人はそれを狙ってやっているに相違ない。

私はそこまで考えて、その続きを破棄した。

考えて、潰すべき対象を見定めるのは鮮花の仕事だ。私は、ただ黙ってそれと定められた相手を消せばいい。

とにかく、話は終わった。

私は立ち上がると、鮮花に絶対に見つからないからという断りをいれて寮室から出た。

「ね、式。一つ教えてほしいんだけど」

閉じたドアから、微かに鮮花の声が聞こえた。

「その、妖精の見付け方って、どうやるの？」

……どうやら、昼間の妖精の件がよっぽど悔しかったらしい。鮮花らしいといえば、らしいのかもしれない。

私はその質問に答える声が響くより先に、学院の森へ向かって歩き出していた。

空の境界 二次創作 第三十九話

一月五日、火曜日。

私は朝になつて学院の森から出た。夜の森はなにやら怪しげな雰囲気  
気に満ちた場所だったのだけど、夜が明けると一転して静謐な雰  
囲気を醸し出していた。

時刻は…もうすぐ七時になるところだった。私がさして迷うこと  
もなく鮮花の寮室へと辿り着くと、そこでちょうど部屋から出てきた  
鮮花と鉢合わせた。

「おはよう、鮮花」

「……お、おはよう、詠。」

まったく…驚かさないでよね」

いきなり鉢合わせた事に面食らつてか、それとも私が鮮花に挨拶し  
た事に面食らつてか、とにかく彼女はそう言つと続いて、わたしは  
これから大切な話がありますから、と片手だけあげてさっさと行っ  
てしまった。

見送ってから数秒間、風のように去つていった鮮花の消えた方角に  
目を向けてから、私は寮室の扉を開けた。

§§§§§

ソレは言った。

？貴方達は、何が知りたいのか？

そいつは言った。

「思い出を記憶のように記録できるというのに、なぜ忘れる事ができるのか」

私は答える。

「記憶はみんな、勝手に忘れてしまうもの」

そいつは言った。

「それは思い出さないだけのこと。あなたはきっと覚えている。記録ができない私と違って、人々の記憶は失われる事はない」

私は答える。

「思い出せないのなら、それは失われたということ」

そいつは言った。

「忘れるという事は劣化させるという事です。思い出は失われるのではなく色褪せていく廃棄物。もったいないとは思いませんか。みんな、永遠であるものを錆びつかせてしまう。永遠であるものを、自らの手で沈殿するだけの塵にしてしまう」

私は答えない。

？——永遠でないということとは、永遠であるということ——  
貴方は、そう思うのか？

ソレは言った。

「ええ。永遠は還さないといけない。その嘆きを再生する。たとえば君が忘れ却ろうとも。記憶は、たしかに君に録音されているのだから」

私は言った。

「永遠なんて、誰が決める」

そいつは答えた。

「わからない。だから、それをずっと探している」

——そうして思った。

考える事さえできないそいつにとって、解答とは導き出す物ではなく、他人から探し当てるしかないものなのだと。

？永遠なんて、とても簡単な事だというのにね？

最後にちいさく、そんな声が響いた。

ssssss

こんこん、というノックの音で私は目を覚ました。

窓の外は灰色の空模様で、今が朝なのか昼なのか判別がつかない。

時計を見ると、時刻は正午をまわっていた。

「黒桐さん、おられますか」

部屋の外からそんな呼び声が聞こえてくる。

はい、と詠が椅子から立ち上がってドアを開けた。鮮花の机の上には、いくつかの本が開かれたまま置かれている。どうやら私が起きるまで、詠は鮮花かそのルームメイトの本棚から何冊か取り出して時間を潰していたらしい。

詠が出るなら、私が起きる必要もないだろうという事でまたベッドに潜り込もうすると、気になる会話の内容に体の動きが止まった。

廊下に立っていたのはどうやらシスターの一人で、彼女は詠を見て戸惑いの色を浮かべるのが気配で分かった。見慣れない生徒である詠を見て困惑しているようだった。

「両儀詠です。あちらにいるのが姉の両儀式。三学期から転入の予定ですが」

そついうとシスターはああ、と頷いて用件を告げた。

黒桐の家から電話がかかってきているので、鮮花を呼び出しにきたらしい。

今日に限って鮮花の家族から電話があるなんて、相手はただの一人しかないだろう。

「なんでしたら私が代わりに電話をとりますようか。黒桐さんのご家族とは親しくしていますから」

「ああ、両儀さんと黒桐さんはご親戚でしたね。それならば問題はないでしょう。電話はロビーの電話機に移してありますので、お早く出てさしあげなさい」

では、という声とともにシスターが去っていった。詠がそれに続いて部屋を後にする音を聞きながら、私はシスターとの応対を詠に任せた事を少し後悔した。まったく詠のやつ、幹也の家族と親しくしているなんて大嘘もいいところだ、とも思った。

でも、そうして暫く頂垂れていたら唐突に寮室の扉が開いた。誰かと思っ て入り口の方へいくと、詠が私に手招きしていた。

「なんだよ。幹也からの電話に出てたんじゃないのか、おまえ」  
「そうね。そう、そうだね。でも式、来てくれると有り難いのだけど。どうやら彼は、電話口に出た相手が鮮花でも貴女でもなかった事が気に食わなかったみたい」

詠は何かを探るように私を見つめると、電話はまだ繋がっているけれど、どうせそんなに長くは待ってくれないのだから早くしたほうがいい、そう言っ て彼女は部屋に入り、鮮花の机の上に開かれたまま置き放しにされていた本を再び読みはじめた。

早くしたほうがいい、そう言われたからという訳でもないのだけど、私は鮮花の寝巻きから礼園の制服にできるだけ早く着替えて部屋を後にした。

寮のロビーとは玄関口の事だと思う。

昨日、この寮にやってくる時にダイヤルのない電話機がロビーのソファアの前にあるのを見ている。鮮花の話によると、外からの電話はシスター達が控える寮監室繋がり、電話の相手が生徒に関わりのある親族でなければ切られてしまう仕組みになっているそうだ。

シスターが電話の相手を？害なし？と判断した場合にのみ電話はロビーに切り替えられ、生徒は一応プライバシーを守って会話ができるというシステムらしい。

人気のないロビーまで歩いて、私は詠が置いておいた受話器を手にとった。

「もしもし、鮮花？」

もう聞き馴染んでしまった男の声がしてくる。

電話の相手はやっぱり黒桐幹也だった。

「鮮花は留守だぜ。新年早々電話するなんて、妹思いなんだな、おまえって」

なぜだか、私はわざと冷たい声でそんな事を言っていた。

電話の向こうの幹也は、う、と言葉を呑み込んでいる。

「……式、なんで君が電話に出るのさ」

「鮮花がいないからだって言ったろ。詠からもそれは聞いている筈

だし、わざわざ二度も確かめる必要なんてないじゃないか。

あいつ、朝から張り切ってるみたいだから。早くカタをつけて家に帰りたいみたいだぜ」

「……そうかな。鮮花はあんまり家にいても楽しそうじゃないよ。寮のほうが気楽だって言ってるし」

「気楽だからって満足してるってワケでもないだろ、あいつの場合」

私の言葉の意味も解らず、幹也は首をかしげているようだ。……まあ、解らないのならいい。

「それで、用件はなに、幹也」

「別に——の筈だったんだけど。式、さっきのエイっていうのは、まさかとは思うけど永君なのかな。たしかに、橙子さんは永君が礼園の調査に協力してくれてるっていうのは聞いてはいたんだけど」

……協力っていうのはトウコの心にもない嘘に決まっているのに、幹也はそれをどうやら頭から信じているらしい。まあ、いつもの永ならこういうコトには首を突っ込みたがるから、解らなくもないけど。

だから私も、トウコに口裏を合わせる事にした。

「ああ。そうだよ。詠はたしかに礼園（レイエン）にいる。用件がそれだけならもう切るよ。じゃあな」

「じゃあな、ってちょっと待った、まだ一分も話してないじゃないか、式！」

慌てる幹也の声が受話器から耳に響く。

ふとガラスに映った自分の姿を見ると、私は受話器を手に持ったま

ま、かすかに顔をしかめていた。

……なぜだか、すごく怒っているような顔つきだ。

「これは鮮花充ての電話だろ。オレと話をするコトなんてないじゃないか」

「そんなのあります。本当は式が何してるか心配でかけたんだから、もう少し話をしよう。そもそもね、礼園に電話をかけるには鮮花充てにするしかないんだ。そこらへんの話、鮮花から聞いてない？」

……聞いてはいたけど、私は応えなかった。

「いい。オレ、電話ってよく分からないから、話をするのイヤなんだ」

「……そっか。そういえばそうだね。なら仕方ない、今日はこれでさよならだ。礼園って一日に一回しか電話を取り次いでくれないから」

残念そうに幹也は言う。

……そっか、今日はさよならなのか。

「待て幹也。暇なら一つ、頼み事をしてやる。ここじゃ判らないだろうから、外で調べてみてくれないか。葉山英雄っていうもと礼園の教師と、玄霧皇月っていう教師の事だ。ここに勤める前の経歴とか、遡れるか？」

「——どうだろう。やってみない事にはなんとも」

それは幹也なりの承諾の表現だ。

「別にそう重要な事じゃないから、判らなくてもいい。言っておくけど無理はするなよ。じゃあ、一人で歩き回ってる鮮花を捜さないといけないから、切るよ」

「ああ、待って。こっちからも一つ頼み事があるんだ。礼園の生徒に橘佳織って子がいたと思うんだけど、その子の成績を調べておいてくれないかな。体育の出席率とか、そのヘン。礼園って資料を書類だけでまとめるから、外からじゃ入手しようがなくて困ってたんだ」

……？ 思いもしなかった事を幹也は口にする。

わけが解らなかったけれど、何か意味があるのだろう。

「わかった。余裕があつたらやつとくよ」

言って、私はがちやりと受話器を置いた。

§§§

因みに。

寮室に戻って幹也が電話した理由を詠が聞いてきたから教えた。するとあいつは声を出して笑った後、腕白息子を心配する母親じゃあるまいし、いや、式のことだからそんなじょそこいらの腕白より余程たちが悪いか、なんて言ってきた。

## 空の境界 二次創作 第四十話

式が黒桐幹也からの電話を終えて寮室に戻り開口一番、私は彼女に鮮花を捜せと言われた。

どうにも式自身には鮮花を捜す気がまったく無いらしい。

別に捜せと言われたのが不満だというわけではなかった。それはまあ、捜せと式が言うのだったらいやはない。でも、まだ一人で捜すと決まった訳ではないのもう一度訊ねてみる事にする。

ま、もしかしくなくても理不尽な事を言われるだろうなという予感があったけれども。

「もう一度言ってくれる？」

「鮮花を捜してくれないか、って言ったんだ」

「一人で？」

「ああ」

どうやら、私の聞き間違いではなかったみたいだ。

しかし、この学院の広大な敷地を、私一人で捜しまわれというのは少し酷じゃないだろうか。まあ、それはこの体にある二本の足で歩きまわって捜した場合なのだけだ。

「貴方達の言う魔術が何かを使つて？ 私か？」

式はああ、と頷くと同時に思い出したかのように訊ねてきた。

「おまえ、それぐらいの力はあるんだよな？」

今度は私が頷く番だ。私だって仮にもあの『が？自分の代わりに？と造り出したモノなのだ。？世界？の情報を視るという点では私が』と同じ権限を持っていたてもなんら不思議な事はない。

一応、式に捜しているのだという事を示す為に私は目を閉じた。……  
……もっとも、次の瞬間には目を開けていたから、式には私が瞬きした程度にしか思わなかっただろうが。

鮮花はすぐに見つかった。彼女は、どういつわけか十一月に燃えてしまったという東の学生寮に向かっていた。その足取りからおそらく目的はないのだろうけど、目的地である学生寮内には鮮花を待っている人間がいた。

「……見つけた。鮮花は東の学生寮に向かっている。早く行ったほうが良いんじゃない？ 目は主を離れたりしないでしょ」

言って私が寮室の扉を開けると、式は無言のまま部屋から歩き去っていく。

……その後姿を追いかけて、私はついさっき遇ったユメを思った。

——永遠。それをなによりも求める哀れな男を、彼女は果たしてどうするつもりなのだろう。やはり、今まで藤乃や巫条に対してやったように殺そうとするのだろうか。それとも、今回だけは言葉で解決？

いや。頭の中に浮かんできたを否定した。やっぱり、今回も彼女は

殺そうとするんでしょうね。それが成功するか失敗するかは——それこそ、『のみぞ知るといふヤツでしょうけれど。』

§§§§§

お眠りなさい黒桐さん

虚ろな眠りの中で、貴女の嘆きを再生してあげるから——。

そう、黄路美沙夜が耳元で囁く。

わたしは夢とも眠りともつかない曖昧な微睡みにいて、瞳を閉じたまま何かを見つめていた。

ゆめのようなユメの途中、わたしは、ずっと永遠を見つめている——。

§§§§§

私達がその場に到着した時、鮮花は床に倒れていた。

どうやらあの黄路美沙夜とかいう女は私達がここに向かっていると知った途端に撤退を決め込んだらしい。その証拠に、今の鮮花は倒れてはいるが今度は記憶を奪われていない。そのかわり、自分の幼少期に関する夢を見ていたみたいだけど。

「起きろ鮮花。風邪ひくぞ」

式は床に倒れている鮮花に近づくと、まるで男性の様なイントネーションで言って彼女を抱き起した。

鮮花は抱き起された後、式には聞き取れないほど小さな声で礼を言った彼女は、今回の事件の首謀者は黄路美沙夜だという事を告げた。

「黄路美沙夜って、昨日の背の高い女？」

「そう。ついさっきまでやりあってたけど、あんた達が来たから逃げ出したみたい」

そっか、と式は頷く。そして彼女は指を口元にあてて、しっくりいかない、とでもいうような様子だ。

「式、何か気になる点でも？」

「だって、あいつ自身も忘れてるのに」

……どうも式が時々妙というか、奇異の目で見られるのは、こんなふうに思った事がそのままの形で現出しているせいじゃないかと思う。現に鮮花は訳がわからないといった目で式を見ているし、そう外的外れな事だというわけでもあるまい。

「ま、いいか。人間なら物忘れの一つや二つはあるさ。それより鮮花。幹也から電話があつた。なんでも橘佳織とかいう女の成績を調べてみるってさ」

「——え？」

そのまま、鮮花は思考停止して固まってしまった。

数秒して、急に何かを悟ったかのような顔つきになったかと思っただけの事を睨むという忙しい変化を見せてくれる。

「……そっか。考えるまでもなかった。元凶はいつだってあんただものね、式」

「なんだよ。居ないおまえが悪いんだ。あの様子じゃ明日もかけてくるだろうから、昼すぎは自分の部屋で待ってればいいだろ。」

それに、最近の元凶はオレじゃなくなつて永だ。これだけは言わせてもらつぜ」

そついう事じゃない、というように鮮花の目がより厳しくなつて、そして今度はその眼はこちらへと移つた。まったく、濡れ衣もいところだ。

「私は関係ないでしょう。それよりも、黒桐幹也が言うには体育の出席率が重要らしいわよ。どう？ 鮮花」

「体育の出席率？」

式が、なんでそんな事をおまえが知ってるんだみたいな視線をこちらに向けてきたが、まあ気にしない事にしようと思う。

鮮花は聡い少女だ。橘佳織がなぜ死んだのか、きっと解るに相違ない。彼女が火事に巻き込まれて死んだのではなく自殺であつた事も、もうあの黄路美沙夜から聞いているのだ。そこに今の情報、となれば自ずと行き着く結論は見えてくるだろう。そう、つまりは――

「……自殺の、理由」

口にして、鮮花は駆け出していた。隣で私と同じく置いてけぼりをくった式に目を遣る。

「追う？」

「当たり前だろ」

今度は捜す必要はなかった。行くべき場所が決まっているからだ。

生徒の健康状態を調べる為には、それらの情報が集まっている保健室に行くしかないのだから。

そうして、鮮花は橘佳織の健康診断書と、保健室の使用記録を発見した。

鮮花が言うには、九月から体育はすべて見学。十月からは欠席が目立ち、あの火事が起きる一週間前からは一度も登校していない。

念の為に保健のシスターに鮮花が尋ねてみれば、案の定彼女はある相談をしていたという。本当ならこれでやっと私にお鉢が回ってくるんだろっけれど、きっと鮮花はやる気満々なんだろうな。式は…  
…まあ、言わずもがな、だ。

空の境界 二次創作 第四十話（後書き）

お待たせした上に短いというんでもない事をやってしまいました  
……ごめんなさいm（――）m  
で、でも、こちら辺がちょうど区切りが良かったからいいかな  
なんて（汗

うーん、次は長くできればいいなあ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4201m/>

---

空の境界 二次創作

2011年9月27日21時12分発行